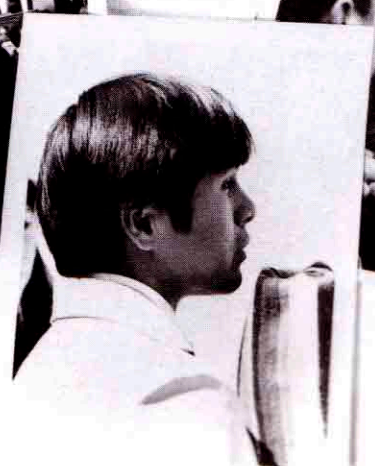


聖徒の道

9 1981



大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー
ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト
ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア
レックス・D・ピネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー
F・エンツィオ・ブッシェ

国際機関誌

編集主幹：

ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：

キャロル・モーゼス

子供の頁編集：

ハイディ・ホルフェルツ

デザイナー：

ロジャー・ギリング

聖徒の道 9月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30

印刷所 株式会社 精興社

配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19

定 価 年間予約2,200円 1部350円
海外予約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA061AJA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

教会役員の支持.....	マリオン・G・ロムニー.....	3
私の管理の職の報告.....	スペンサー・W・キンボール.....	4
個人の尊厳.....	ジェームズ・E・ファウスト.....	8
私たちは光を広めるために 召されている.....	ジェイコブ・ティエガー.....	13
結婚.....	ボイド・K・パッカー.....	17
受け継ぎの地へ、 イスラエルの復帰.....	マリオン・G・ロムニー.....	22
教会監査報告.....		26
1980年度統計報告.....		27
ジョセフ・スミス三世に関わる... 記録と王国の鍵.....	ゴードン・B・ヒンクレー.....	29
人は自分が愛するものに仕える... マービン・J・アシュトン.....		34
信仰へのかけ橋.....	ローレン・C・ダン.....	40
「グラシアス」.....	アンゲル・アブレア.....	45
光明と真理.....	セオドア・M・バートン.....	47
予言者の召し.....	リグランド・リチャーズ.....	51
「父たる者に 大いなる事求めらるる」.....	エズラ・タフト・ベンソン.....	56
断食献金——隣人に対する 私たちの責任を果たすこと.....	ビクター・L・ブラウン.....	61
アロン神権者の責任.....	デビッド・B・ヘイト.....	66
福音の聖約.....	マリオン・G・ロムニー.....	72
人々に奉仕する.....	スペンサー・W・キンボール.....	75
長い孤独の境遇.....	トーマス・S・モンソン.....	78
神はそこにおられる.....	N・エルドン・タナー.....	83
大いなる試しの場である人生.....	フランクリン・D・リチャーズ.....	85
互いに愛し合いなさい.....	ジェームズ・M・パラモア.....	90
神の子らに手を差し伸べなさい... ジャック・H・ゴーズリンド.....		94
自立がもたらす祝福.....	マーク・E・ピーターセン.....	99
だれも書き加えたり、 取り除いたりしてはならない.....	ハワード・W・ハンター.....	105
貞節とその報い.....	ロイデン・G・テリック.....	108
従順——完全な従順.....	ティエー・E・ブルーアートン.....	112
人の救い、自分の救い.....	F・バートン・ハワード.....	117
心を向ける.....	ハートマン・レクター・ジュニア.....	121
「この岩の上に」.....	ブルース・R・マッコンキー.....	124
「主の用向きを有てる者」.....	スペンサー・W・キンボール.....	128
基本に従う.....	スペンサー・W・キンボール.....	130
自分の家族を扶養する責任.....	H・パーク・ピーターソン.....	132
星を見上げる.....	バーバラ・B・スミス.....	137
上手な家計管理の3つの鍵.....	M・ラッセル・バラード.....	141
個人と家族の 備えについて教える.....	L・トム・ペリー.....	145
教会福祉の基本原則.....	マリオン・G・ロムニー.....	149
ローカル・ニュース.....		153

末日聖徒イエス・キリスト教会 第150回年次総大会報告

1981年4月4日、5日の両日、ユタ州ソルトレーク・シティー、テンブルスクウェアのタバナクルにおいて催された大会の説教とその模様

「見よ、これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらしなり。」(モーセ1:39)

この完全な霊に係わる仕事に努力を傾ける教会の指導者や会員たちについて、スペンサー・W・キンボール大管長は4月の総大会の説教において次のように語った。

「私たち大管長会と十二使徒会は末日における主の偉大なみ業について心に深く考え、祈り、教会の使命が次にあげる3つの局面を持ったものであることを強く感じるに至りました。

1.. 主イエス・キリストの永遠の福音をあらゆる国民、血族、国語の民、人々に宣言する。

2. 福音の儀式を受ける備えをさせることにより、また昇栄を得るに必要な指導と訓練を行なうことにより、聖徒たちを完き者とする。

3. この世を去った人々のための身代わりの儀式を行なうことにより、死者を贖う。」

キンボール大管長は、指導者や会員に対して、今後「これら神聖な原則」に照らし合わせて自らの優先順位や働きについて考えてみるよう促している。

大会は、4月4日(土)に4部会、4月5日(日)に2部会と2日間にわたって行なわれた。大会のすべての部会はスペンサー・W・キンボール大管長が管理し、司会はキンボール大管長とマリオン・G・ロムニー第二副管長が行なった。

教会幹部は、本大会で新たに七十人第一定員会に任命された兄弟を含めて64名全員が出席した。その兄弟はプエノスアイレスのアンゲル・アブレア兄弟であるが、南アメリカ人で教会幹部に支持されたのは彼が

初めてである。また、これで新しく七十人に召された兄弟は41人となった。現在アルゼンチン、ロザリオ伝道部長であるアブレア長老は、さらに間近にプエノスアイレスに建設される神殿も管理するという発表がなされた。

総大会が始まる数日前、キンボール大管長は、合衆国、ラテンアメリカ、アジア、アフリカ、そしてヨーロッパにさらに9つの神殿が建設されるという計画を発表した。キンボール大管長は、大会において神殿の建設に関して次のように述べている。

「このみ業が進展するにつれて、世界中にさらに多くの神殿が建設されるでしょう。」

大会の多くの部会において、「苦難と試練に満ちた」今の時代について語られているが、キンボール大管長の話の中にも幾つか出ている。大管長はこのように述べている。

「人々が経済的に必要としている基本的な事柄に目を向ける時、私たちはまず基本原則に立ち返る必要があります。」

「必要な物資を蓄え、私たちの主の民の経済的な負担を軽くするという勧告が出されました。」

「教会員に過度の負担をかけることのないようにしなければなりません。このような視点から、大管長会は昨日一通の手紙を皆さんに送付致しました。……その手紙と共に、ワード部、ステーキ部、伝道部の指導者がその指示に従う上で参考になる指針も同封致しました。」

会員を自立させその負担を少なくすることは、4月3日(金)の地区代表セミナーと同じ夜のタバナクルでの集会において、広範にわたって強調された。

教会役員の支持

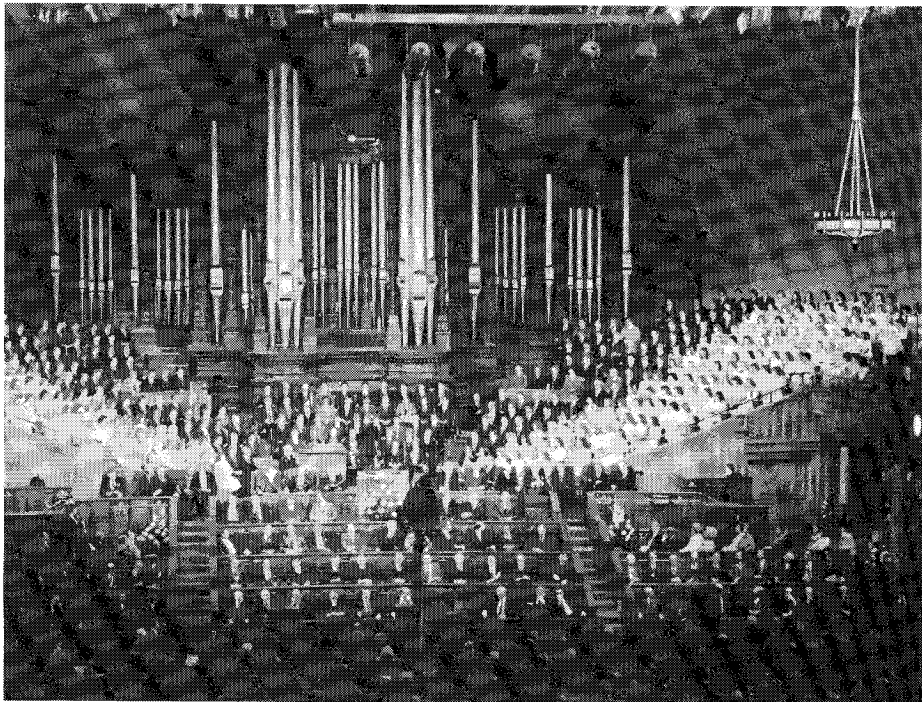
第二副管長

マリオン・G・ロムニー

私たちは新たに、アンゲル・アブレア兄弟を七十人第一定員会会員として支持して下さるよう提議致します。この提議に賛成の方はその意を表わして下さい。もし反対の方があれば、同じようにその意を表わして下さい。

ただ今支持されたアブレア兄弟を除いて、

前回の総大会から役員の変動がありませんので、教会幹部、その他管理役員を現状のまま支持して下さいよう提議致します。この提議に賛成の方はその意を表わして下さい。もし反対の方があれば、同じようにその意を表わして下さい。



私の管理の職の報告



大管長
スペンサー・W・キンボール

兄 弟姉妹、このようにして再び皆さんと共に総大会に集う機会がありますことをうれしく思っております。いろいろなことを考えますと、昨年10月の大会はまるでのうのこのようです。しかし同時に、たくさんの出来事の中で多忙な日々を送ってきたことを思うと、まるで6ヵ月どころか6年も過ぎたかのような気が致します。

前回この歴史的なタバナクルで皆様とお会いして以来、ふたつの新しい神殿が献堂され、4つの神殿の鋳入れ式が行なわれました。また1980年内の当教会への改宗者は210,777人という大きな数字となり、1981年はさらにこれを上回ることでしょう。それに主のみ業が、カリブ海諸島の素晴らしい民の間で奇跡的な進展を見せています。確かに主は私たちを豊かに祝福して下さっています。

兄弟姉妹の皆さん、私たち大管長会と十二使徒会は末日における主の偉大なみ業について心に深く考え、祈り、教会の使命が次あげる3つの局面を持ったものであることを強く感じるに至りました。

1. 主イエス・キリストの永遠の福音をあらゆる国民、血族、国語の民、人々に宣言する。

2. 福音の儀式を受ける備えをさせることにより、また昇栄を得るに必要な指導と訓練を行なうことにより、聖徒たちを完き者とする。

3. この世を去った人々のための身代わりの儀式を行なうことにより、死者を贖う。

この3つはすべてひとつの偉大な業の一部となるものです。その業とはすなわち、人に不死不滅と永遠の生命とをもたらしという壮大な栄光あふれる目的を持ちたもう父なる神とイエス・キリストを補佐するということとす。

私たちはこの、福音を宣言する、聖徒たちを完き者とする、死者を贖うという聖なる原則を胸に抱きながら、過去半年間、合衆国内外の聖徒たちの間で私たちの責任を果たしてきました。そこで私は、昨年10月大会から現在までの私の管理の職について、簡単な報告をしたいと思えます。

10月大会から10日後、マリオン・G・ロムニー副管長と私は、他の大勢の方々と共に、地域大会の管理のため東洋に向かいました。最初の集会は10月18、19の両日フィリピンのマニラで開かれ、会場のアラネタ・コロシアムには2万人の聖徒たちが集いました。また先程発表のあった神殿の建設用地も訪問し、さらにフェルディナンド・E・マルコス大統領とも会談をしました。大統領は土曜日の午前の時間をすべてあけて家族全員で私たちを官邸に迎えて下さいました。

それから私たちは香港に向かいました。香港は恐らく世界で最も人口密度の高い市ではないでしょうか。1平方キロの土地に

15万7千の人々が住んでいます。私たちは香港の立派なステーキ部センターで、10月20、21の両日にわたって大会を開催しました。翌日は台湾の台北に飛び、22、23日と、壮麗な孫文会館で集会を開きました。ホテルでの朝食会には蒋介石の子息である蔣経国総統、孫運璿行政委員長という中華民国政府の二大指導者が出席して下さいました。また昼食会は林洋港台湾省主席の主催で行なわれました。その後私たちは「朝なごの国」韓国に移り、25、26の2日間、ソウルにある韓国ソウル伝道部の中庭で大会を行ないましたが、一晩のうちに天候が急変し、6千人以上の教会員が氷点下の中で話を耳を傾けました。また昼食会は韓国の元副首相の主催で行なわれました。

韓国での大会を終えて東京に到着したのは、10月26日、日曜日の夜でした。そして27日の月曜日に、ロムニー副管長と私で東京神殿の定礎式を行ない、午後3時に日の光栄の部屋で第1回の献堂のセッションが開かれました。会の模様はカラーテレビで神殿の各部屋に中継されました。そして28、29の両日に合わせて6回の献堂のセッションが行なわれました。東京地域大会は献堂式に続く10月30、31日、世界に名高い日本武道館で開かれました。私たちは訪問の先で宣教師のための特別大会を開いていますが、東京では1,500人の宣教師が一堂に会しました。実に感動的な光景でした。次いで11月1日、土曜日には、大阪地域大会が午前と午後の部に分けて行なわれました。こうして私たちは東洋の地を後にし、ハワイ神殿のシーラーの任命のためにハワイに3時間立ち寄った後、ソルトレーク・シティーに戻りました。

また11月14日には、ジェフリー・R・ホ

ランド長老をブリガム・ヤング大学の第9代学長に任命しました。ホランド長老は、ユタ州最高裁判所判事に任命されたダリン・H・オックス学長を後継したわけです。

それから3日後、大管長会はワシントン州シアトルを訪れ、新装成ったワシントン神殿を献堂しました。献堂式は11月17日から21日にかけて13回開かれましたが、どの会も出席者が多く、合衆国北西部から合計して4万3千人の教会員が集いました。

続いては、感謝祭とクリスマスですが、大変に忙しい日々をソルトレーク・シティーで過ごしました。

年が明けて2月11日、水曜日、キンボール姉妹と私は南太平洋に向かいました。最初はタヒチのパペーテでの神殿の鋳入れ式と宣教師大会でした。また私たちは官邸で、タヒチの高等弁務官代理と会談しました。

また2月14日の土曜日には、ニュージーランドに向かう途中でラロトンガに立ち寄り、飛行場の格納庫の中で聖徒たちと集会を開きました。私はそこで、教会の大管長がその島を訪問するのは今回が初めてだということを知りました。

ニュージーランドに到着した私たちは、まずオークランド空港で、数千人の聖徒たちの出席のもとに集会を開きました。次いで神殿とチャーチカレッジ・オブ・ニュージーランドで大会を行ない、宣教師との特別大会も開きました。それから18日の水曜日にはトンガに飛び、ヌクアロハの美しいやしの木の森の中で神殿の鋳入れ式を行ないました。その日の式典には、トンガ王国の国王夫妻その他重臣の方々の臨席を全プログラムにわたってたまわりました。このトンガで会った宣教師は全部で247名ですが、そのうち地元出身が235名、アメリカ

からの宣教師はわずか12名でした。

次いで12日、木曜日、私たちは場所をサモアに移し、アピアで新しい神殿の鍍入れ式を行ないました。あいにくの激しいスコールの中でしたが、数千名に及ぶ参加者は決して席を立とうとしませんでした。またその式典には、西サモア国の大統領、首相ならびに国会議員が数名参列しました。

翌朝、私たちは西サモアの教会が経営する学校を訪問しましたが、そこで実に素晴らしい経験をしました。学校で一番大きな建物である体育館に入ると、そこには1,700人の子供たちが身動きできないほどぎっしりとフロアにすわっていました。4歳、5歳の幼稚園児から十代の高校生まで、前から順に並んで腰をおろしているのです。そ

の青と金色の制服に身を包んだ子供たちが『私は神の子』を歌いました。何と愛らしい、感動的な光景だったことでしょうか。そして、黒い髪と茶色のつぶらな瞳の子供たちが、美しい少年少女を描いた絵をプレゼントしてくれました。それは、あっと驚くような素晴らしい作品でした。私たちは、あふれ出る涙をどうすることもできませんでした。私は話の最後で、残りの時間を大会を記念して休校にしますと発表しました。拍手の大きさからして、少なくともその日だけは、私は英雄になったようです。閉会后、私たちはサモアの別れの歌『トファ・マイ・ファレニ』の流れる中、会場を後にしました。あの別れの歌のメロディーはいつまでも胸にこだまし、私たちの心を



熱くしてくれました。

その夜私たちはハワイに向けて発ち、2月21日(土)の朝に到着しました。日中BYUハワイキャンパスとポリネシア文化センターを訪れ、あくる日曜日は、午前中オアフステーク部大会に出席、次いでゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン、ボイド・K・パッカー各長老と共にハワイ神殿で集会を開きました。それから改装成った訪問者センターを訪れ、宣教師大会を開きました。こうして教会本部に戻ったのは1981年の2月23日でした。

家とオフィスで4日間過ごしたキンボール姉妹と私は、2月28日の土曜日、フロリダに向けて出発しました。教会員や実業界指導者との1週間に及ぶ数々の集会に出席するためです。次いで3月7日(土)はジョージア州に建てられるアトランタ神殿の鉄入れ式でした。式典にはジョージア州知事夫妻、州議会議員数名、ジェイク・ガン、ポーラ・ホーキンス両上院議員をはじめ、1万人の人々が出席しました。この式典を終えてすぐに、今度はプエルトリコのサンファンに飛び、翌日の3月8日、日曜日、プエルトリコ内のステーク部、伝道部に集う2,600人の聖徒たちと大会を開きました。それから月曜日には、ドミニカ共和国のサントドミンゴで大会を開きました。2年前ドミニカにはわずか2家族の末日聖徒しかいませんでした。しかしその会には1,500人以上の教会員が出席しました。翌3月10(火)にドミニカを発った私たちは、フロリダに移り、オーランド近郊にある教会のデゼレト牧場訪問者センターの献堂を行ないました。

木曜日にはワシントンD.C.訪問者センターを訪れ、次いでワシントン神殿の神殿

長会と会見、何人かのシーラーの方の任命を行ないました。翌3月13日の朝は、ゴードン・B・ヒンクレイ長老と共にホワイトハウスを訪れ、ロナルド・レーガン大統領と会談をしました。そして大統領に、彼の母方の先祖の系図を贈呈しました。それからレーガン夫人ともお会いしましたが、おふたり共私たちを温かく迎えて下さり、系図記録をととも感謝しておられました。

それから私たち夫婦は直接アリゾナに飛び、留守の間他界した姉のアリスの葬儀に参列しました。こうして3月15日の日曜日にソルトレーク・シティに戻り、この大会の準備を始めたわけです。

この6カ月間は、多忙ながらも喜びあふれる、実り多い時間でした。私たちはこの間、5万マイル(8万キロ)の空の旅をしたこととなります。私たちは主が祝福をお与え下さり、教会が世界各地で力強く発展する様子をつぶさに見る機会をお与え下さったことを心から感謝致しております。訪問する先々で、私たちは教会員の愛と献身に心を打たれ、謙虚な気持ちにさせられました。

けさこの大会を始めるにあたり、私は東洋、南太平洋、そしてカリブ海諸島の聖徒たちの愛とあいさつの言葉を皆さんにお伝えし、それに加えて私の愛と祝福もお伝え致したいと思います。

私は神が生きてましまし、御子イエス・キリストもまた生きてもうことを証します。御子は私たちの救い主、贖い主、御父との間を取りもつ仲保者です。願わくはこの偉大な大会の期間中、主が私たちを祝福したまいますように、へりくだり、イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン。

個人の尊厳



十二使徒定員会会員
ジェームズ・E・ファウスト

「感謝を神にささげん 予言者の導き」
けさこれから私が申し上げることが特に若人の皆さんにとって何らかの助けとなり、心に深く考える機会となればと願っています。私は話す私への神聖なみたまの助けと私の話を聴いて下さる皆さんの理解の心が共に必要であることを今ほど強く感じたことはありません。私がこれから申し上げることが誤解なく皆さんの心に伝わって欲しいと心から願っております。

予言者ジョセフ・スミスが当時の十二使徒に関して驚くべき示現を受けたことを述べて私の話を始めたいと思います。このことは私にとって非常に重大な意味を持っています。ヒーバー・C・キンボールはその時の模様を次のように述べています。

「次の示現は彼〔ジョセフ・スミス〕に与えられたものを私ができる限り記憶に忠実に記したものである。

彼は十二使徒が出て行くのを見た。遙かなたの地のようにであった。しばらくして、彼らは偶然に顔を合わせた。苦難に遭っていたのであろう。服はぼろぼろに裂け、膝

や足はうずいていた。彼らは輪を作り、地面を見つめてじっと立っていた。するとその只中に救い主が現われた。救い主は涙を流しておられた。御自身を彼らに示したかったのである。しかし十二使徒たちは、救い主を見ることができなかった。」（オルソン・F・ホイットニー、*Life of Heber C. Kimball* 「ヒーバー・C・キンボールの生涯」p.93）

この話の言わんとするところは、十二使徒たちが非常に艱難辛苦に遭い、また忍耐も極限に達し、正義の戦いの旗頭となることにも疲れ果て、首をうなだれて顔を上げることがなかったということです。ただ頭を上げさえすれば、主イエスを拝することができたはずです。その時イエスは彼らを見て共に心を痛み、彼らのために涙を流しておられました。御自分の姿を見てもらいたいと思い、彼らの中に立っておられたのです。

数カ月前、私たちはこの地上最古の町のひとつを訪れました。そこはこの世の科学の粋を一点に集約したような所でした。と同時に犯罪と不品行、貧困と汚れの巢窟でもありました。ところが私たちの案内人は、私たちが大勢の人混みの中を、荷物を一杯積んだらばや汚物、悪臭をかき分けるようにして進んでいた時に、親切にもこう言ってくれたのです。「ほんの少し顔を上げて、地上から30センチ以上の所を見るようにしたら、こんなに美しい町はないですよ」

昨今、石油や金、その他の貴重な鉱物資源の価格が大幅に上昇しています。このような産物は皆、下を見ることによって得られるものです。天然資源は人々にとって有益なものであり、必要なものです。しかし物質的な富にしか過ぎません。では、顔を

上げ、視線を上に移すことによって得られる宝にはどのようなものがあるでしょうか。清さを追求することから得られる目に見えない富とは何でしょうか。ステパノは天を見上げ、「聖霊に満たされて、天を見つめていると、神の栄光が現れ、イエスが神の右に立っておられるのが見えた」(使徒7:55)と述べています。

私が今一番心にかけ、心配していることは若人の問題です。彼らはこれまでになかったほどの暗闇と不道徳という濃い霧の中を生き抜いていかなければなりません。私たちが住んでいるのは、成功がおもに財産によって測られる世界です。どうすれば世の物と関係のない財産を得ることができるでしょうか。正直、誠実、純潔、清さなどの徳はしばしば物質的な富よりも低く見られています。若人の皆さんは上を見るように教えられているでしょうか。それとも下を見るようにいざなわれているでしょうか。

お金をもうけたい、芸能界で人気者になりたいといった欲望は人類の諸悪を生み出す最たるものです。この最も忌むべき行為や性の倒錯は姿、形を変え、人間の行動の邪悪な部分を一見魅力的に見せかけることによって未熟な若人の心に取り入ろうとしています。良心は熱い鉄で打たれ、霊の殻は固く閉じられてしまっているようです。人生は空しく、無意味なものであるという考えがますます広まっています。思いを清く保ち、人生の目的を高く掲げることの価値を教え、強調することも、決して十分になされているとは言えません。

今、泥棒が考える「どうしたら捕まらないですむだろうか」ということが、すでに多くの人々の考え方の基準になっています。そこには高潔さが行動の規範となるといっ

たパターンは見られません。安っぽく価値のないものを弄することさえ許さなかったあの自尊心や個人の尊厳はどこへ行ってしまったのでしょうか。ひとつの例が世界の商業を動かしている信用貸し、いわゆるクレジットというシステムです。自分にクレジット販売をしてくれることは、取りも直さず自分に対する信頼と信用を表わしていることを、私たちはしばしば忘れることがあります。その前提には私たちが高潔であるということが含まれています。ある時父が、彼の尊敬するひとりの人物の話をしてくれました。たまたま父が弁護士としてその人の会社の倒産処理をしたのですが、この人は自分を信頼してくれた債権者に対して、法的には弁済の義務はなかったのですが、一定期間内にすべての借金を返済しました。高潔は個人の価値を決める大切な要因のひとつなのです。

どのようにすればクリスチャンとしての信条、徳性をもっと完璧な状態で行動に変化していくのでしょうか。なぜ私たちの決意がまだ神に自らを捧げるところまで行っていないのでしょうか。疑い深いトマスは信じたいと望んでいました。しかし、その信じ方は中途半端なものでした。私が今信じて疑わないのは、悪をことごとく捨て去るだけの自尊心を培うためには、神から授かった神権の権能の下で救いの原則と福音の儀式に身を捧げる必要があるということです。換言すれば、クリスチャンとしてとるべき簡潔で基本的な原則、つまり自己と他人に対して正直であること、無私の気持ちをもち、思いと行ないにおいて誠実であることなどを神が定めたもうた神聖な原則として献身的に実行に移す必要があります。回復された福音の原則は簡潔明瞭で、

愛にあふれ、麗わしさと偽りのない愛に満ちあふれています。そして救い主御自身の姿をはっきりと私たちの胸に刻み込んでくれるのです。

次に必要なことは、人生のチャレンジ、特に誘惑を伴ったチャレンジに直面し、それを克服することです。大勢の人々が人生の問題に正直に取り組もうとせずに、苦難をうまく切り抜け、幸福の基である偉大な真理から離れることを合理化しようとしています。一見論理的ではあっても実は貧弱でしかも不当な理由によって、神聖な約束や決意までも捨てることを正当化しようとしているのです。

もし私たちがまだ今述べた標準に達していなかったとしたら、私はどうしても次のような疑問を持たざるを得ません。私たちは、清さを身につけようとする過程において、あまりにも不十分な、しかも価値のない規準で自分を測ってきたのではないだろうか。私たちは、ただ集会に出席し、良心を慰める程度の最低限の参画だけで心に過大な慰めを得てきたのではないだろうか。与えられた指針を土台ではなく目標にしてしまっているのではないだろうか。

南アメリカでの生活を終えて帰った時、私は、多くの人々の服装に見られる自尊心の欠如に大きな驚きを覚えました。人々の注意を引くために、また着心地の良さとかインフォーマルの楽しさなどという名のもとに、大勢の人が単に慎みがないという状態にとどまらず、不潔という言葉で表現しなければならないような姿にまで下落しています。このような人は、自分の利己心とは裏腹に、自らを最も劣悪な方法で人に示していることになるのです。

社会は慎みという偉大な原則を捨てるに

あたって、もっと重要な原則である純潔の律法を破るという代価を払ってきました。関係を持った男女の品位を落とし、非人間的にしてしまう無責任な性関係を唱導する人々は全くの偽善者であり、前世で神が与えて下さった神聖な賜の目的をことごとく無視しているのです。

結婚前の純潔と結婚後の貞節は、夫婦の間に神聖な愛の花を咲かせるために欠かすことのできないものです。私たちは、純潔を保つことによって自尊心を養い、自己のイメージの崩壊から身を守ることができます。

今日の社会問題の根源のひとつはこの自尊心の欠如ではないでしょうか。

いつも他人の標準に身を任せ、ただ仲間の圧力に屈しているようでは自分に対して浅薄なイメージしか持つことができません。若人は自分よりも他人のイメージに頼っていることがしばしばあります。



不安や自己に対するイメージの不確かさは自尊心の欠如とも関係しています。私たちは自分で感心できないこと、ましてや自分が他人に非難しているようなことを行なっていて、自分自身を尊敬できるでしょうか。人間の価値と威厳を高める特效薬は、罪を悔い改め、弱点を捨てることなのです。

美德や信仰といったものは、この世の中では取るに足らないつまらないものであると考えられています。したがって自分の気まぐれとか好みに合ったように生活すればいいと考えている人も大勢います。道徳律や社会規範に束縛されない、価値観の多様化した時代にあって、大勢の人々が自分の価値、自尊心、威厳に無関心で勝手気ままな生活を送っています。英国のノッチングム市の標語にはこう明記されています。「美德は死後も生き続ける。(Vivet post funera virtus.)」老若を問わず、この言葉を心に刻み込まなければならない人が大勢いるのではないのでしょうか。

人間の価値を学問的に分析していった場合、神に対する信仰、徳ある行ないなどは量的に測ったり、明確に示したりすることができません。そのために大勢の人々は、信仰や徳といったものを全く価値のないものとして相手にしようとしません。それはまさに失敗に通じる道です。知ることはできるが測ることのできない、人の主観に頼らなければならないものの重要性を考慮しないからです。たとえば、私は妻を愛し、家族を愛しています。また妻や子供たちも私を愛していると思っています。しかし私たちが互いにどれほど愛し合っているか皆さんにはわかりません。それでも実際に私たちの間には愛があるのです。苦痛も同じように測ることはできませんが、実際

に存在するものです。神に対する信仰についても同じことが言えます。量として測ることはできませんが、信仰が実在することはわかっています。パウロはこう述べています。「御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかして下さる。」(ローマ8:16)

清さを求め続ける人々が心の中で決心することに限界があるとすれば、それはどういう限界でしょうか。幸いにもこれは、私たち一人一人が決定すべき問題ですが、私たちが完成に到達できるのは、できるすべてのことを行なおうという気持ちを抱きながら多くの事柄に取り組むことによつてなのです。

これは私の考えですが、創造主は男と女を創造された時、彼らを利己心や自己満足のとりにこになるような存在としてはお考えにならなかったと思います。すなわち「神のかたち^にに創造し、男と女とに創造された」(創世1:27)のでした。

詩篇の作者は尋ねました。「人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか。……ただ少しく人を神よりも低く造って、栄えと誉とをこうむらせ、これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれました」(詩篇8:4-6)

清さの標準はどういうものでしょうか。聖典にこう記されています。「だれがあなたのように、聖にして栄えあるもの……であろうか」(出エジプト15:11)

ステパノのように清くなろうとする者は神の栄光を見るでしょう。(使徒7:55)清くなろうとする時にもたらされる祝福のひとつを、主は次のように描いておられます。「誠に、主はかくの如く言う。その罪を捨ててわれに來り、わが名を呼び、わが声に従

い、わが誠命を守るあらゆる人々は、わが面を見てわれ在るを知ることあらん。(教義と聖約93:1)

この話の冒頭で、私は予言者ジョセフ・スミスが当時の十二使徒に関して受けた示現について述べました。十二使徒たちはうなだれてじっと立っていたために救い主を見ることができませんでした。しかしそこから、十二使徒たちの働きが十分でなかったと考えるのは早計だと思います。十二使徒たちはひとつの組織として揺らぐことなく、力強く伝道のみ業を推し進めていました。彼らが落胆したのはほんの一時的なものでした。彼らの働きには目を見張るものがあり、その行動は大胆で勇気にあふれていました。予言者ジョセフ・スミスは予言の最後で十二使徒のみ業が完成するのを見ました。ヒーバー・C・キンボールはその時の模様を次のように記しています。「彼(ジョセフ)は十二使徒たちがみ業を完成し、日の光栄の市の門のところによって来るのを見た。そこには父祖アダムが待っていて門を開けた。十二使徒たちが中に入ると、アダムは一人一人の肩を抱き、口付けをした。それから彼〔アダム〕は彼らを神の王座に案内した。そこで救い主は彼らを抱いて、一人一人に口付けをされた。そして神のみ前で一人一人に栄光の冠を授けたもうた。……ジョセフ兄弟は、この示現から受けた印象があまりにも強烈であったので、このことを人に語る時はどうしてもあふれる涙を止めることができなかつた」(ホイットニー、*Life of Heber C. Kimball*「ヒーバー・C・キンボールの生涯」pp.93-94)

自己の尊厳は清くなりたいという望みをもって天を仰ぎ見ることによって高められます。私たちは大木のように光に向かって

まっすぐに進んで行かなければなりません。私たちが知り得る最も重要な光の源は聖霊の賜です。それはまた、心に力と平安をもたらす源でもあるのです。

このような人間の尊厳とか自己の価値といったものが正式な教育を受けた裕福な人々だけでなく、貧しく卑しい人々の生活の中にも見事に生きていることを、私はよく目にしてきました。生活の中で清さを求めた結果、それが威厳、自尊心、自己の価値を認識するといった形で明らかになってくるのです。シェークスピアはポロニヤスの言葉を通してこう述べています。

「いちばん大事なことは、おのれに誠実なれ、ということだ。さすればかならず、夜が昼につぐごとくにじゃな、他人に対しても誠実ならざるを得ん。」(ハムレット、1幕3場、78-80行、三神黙訳)

自尊心は、熱心に働き、儉約し、できるだけ自立しようと努力することによって築かれることが多いものです。

願わくは私たち一人一人が、神の子であることを知ることによって生まれる個人の価値と尊厳を自覚し、清くならうと努力することによってさらに強められますように。また私たちが天を見上げる時、絶えず神からもたらされる靈感を受けるにふさわしくあるように祈っています。そのようにして神からもたらされた靈感は神聖なものであり、また実際に存在し、しかもしばしば個人的なものとして与えられます。

私はこれらのことが神聖な心の中のささやきから来るものであることを固く信じています。またイエスが生きておられ、この教会の頭であることを私は知っています。これらのことを救い主イエス・キリストのみ名によって証します。アーメン。

私たちは光を広める ために召されている



七十人第一定員会会員
ジェイコブ・ディエガー

愛する兄弟姉妹の皆さん、今からちょうど31年前、1950年の4月4日に、私は3年間の会社の仕事で東南アジアに行くためにオランダを後にしました。

この仕事で私は、辺地の電化の計画と普及をお手伝いするために、この地域のいくつかの遠隔の島々まで足を伸ばす機会がありました。

また、このことによって私は、この地域の人々が第2次世界大戦後いかに急速な発展を遂げたかを目のあたりに見ることができました。

島々に電気が引かれるにつれて、家庭ではヤシ油と灯心の簡単なランプが電灯と違って変わり、多くの人々にとって夜が昼に変わりました。そして日没の後の時間を個人の勉強やレクリエーションに使うといった新たな可能性も出てきました。このことを可能にするためには発電所を建てなければなりません。すべての家庭に電気を引くために、変電所を設置し、その間を高圧線で結ばなければなりません。

彼らの村の村長さんが初めて電灯のスイ

ッチを入れた時の若者たちの幸せそうな顔と目の輝き、そして年とった人々の喜びの涙を思い出します。音楽や歌やダンスなどの祝典が計画され、日没から次の朝の日の出まで続きました。

人々の喜びようは大変なものでした。

26年後の同じ4月4日、主は私を神の永遠のみ業のために世界に出て行くようにと召されました。そしてその後間もなく、今度は教会の七十人第一定員会会員として、私は再び東南アジアへ向かいましたが、今度は別の光、すなわち福音の光を広めるためでした。こうして多くの人々の生活の中に、第二の驚くべき変化が訪れたのです。

この光を広めたのは、自らを捧げて、受け入れてくれるすべての家庭に福音の光をもたらすという責任を受けた若い男性と女性の団でした。彼らの発電所は、東南アジアの伝道本部であり、彼らの送電線は神権の権能です。このシステムは、神権の権能がなければ決して役目を果たさないので

す。これらの宣教師たちは、改宗者の生活の中に永遠の光の最初のきらめきをもたらされ、新しい会員たちが家庭の夕べで「家庭の中に愛あらば、見るものすべて美しく」（『家庭の中に』讃美歌39番）と自分たちの言葉で歌うのを聞く時に、喜びと感謝の気持ちで一杯になると証しています。

新しい伝道部が開設されたり、教会の支部が設立されたり、あるいは、シオンのステーキ部が組織されたりする時はいつも、明るい光が輝き始め、讃美歌の言葉にもある希望がもたらされるのです。

夜あけだ 朝あけだ
シオンの旗掲げよ

あかるい夜あけだ
おごそかにあまねく
朝日は昇りゆく

(『夜あけだ、朝あけだ』讃美歌189番)

兄弟姉妹の皆さん、すべての国家に光が広がって行くことは、ひとつの奇跡ではないでしょうか。

私たちのはらからに光と愛と幸福をもたらすという、あらゆる家庭に課せられたこの責任は、ひとつの神聖な義務ではないでしょうか。とりわけ、「誠にわれ汝らすべてに告ぐ、汝ら起ちて己が光を輝かせ、これ汝らの光よるずの国民のはたじるしとならんため」(教義と聖約115:5)という救い主の言葉を読む時、私たちはそう感じるのです。

さて、きょうはまさに1981年4月4日ですが、きょうの時点で「汝らすべて」とはだれのことでしょうか。

伝道管理部で毎日受け取る宣教師推薦状を見る限りでは、長老は19歳、姉妹は21歳の人々がまだ大多数ですが、彼らはこれまで培われてきた伝統にそい、フルタイムの宣教師として働くために自ら進んで来ています。

年のいった信仰の篤い姉妹たちもいますが、彼女たちは、伝道に召されると必ずといって良い程傑出した宣教師になります。

そして最後に、わずかな数ながら定年退職した年代の、結婚した夫婦の方もいます。わずかな数と申しましたが、なぜなら、伝道に出て良く働ける60歳から70歳までの健康な夫婦が、もっともっとたくさんいるからです。

み業が地球上の多くの国家に広がり続けるにつれ、フルタイム宣教師として働く夫

婦はもっと必要になってくるでしょう。福音を教えるという基礎的な仕事につけ加えて、特別な役目を果たすように求められるかも知れません。

例えば、良く訓練された指導者がまだいない伝道部においては、夫婦の宣教師は、指導者を訓練するために働くことができます。

教会の年長の会員たちの中には、事務職の仕事の経験を持つ退職者や簿記、公認会計士をしていた人もいます。これらの資格を持った夫婦は、伝道本部で、伝道部の書記、記録係、会計書記などとして働くことができます。さらに、年配の夫婦の中には、系図に関して偉大な専門的知識を得ている人人がいます。彼らは、特別にそのように召されるならば、ワード部や支部において系図探求の技術を会員たちに教えるために、知識と経験を役立てることができるでしょう。

また訪問者センターで、あるいは現在伝道されていない地域においてみ業が開始された時に、福音を教えることによって、神の王国の建設のために忠実な奉仕をすることもできるのです。

しかしながら、多くの夫婦がまだ、伝道の業は改宗させることだけだという間違った考えを抱えています。私が今述べて来たことにより、今やより深い洞察力を得て、奉仕の可能性をもう一度考え直していただけるのではないかと考えております。特に、神の王国における他の召しと違い、夫婦は自発的に、6カ月、12カ月あるいは18カ月の間伝道したいという意志を表示することができるのです。

しかし、多くの人が、「ディエガー長老、孫のそばを離れるのはつらいですよ」と言

います。自分自身の息子や娘のそばからしばらくの間離れるのは問題ないらしいのですが、小さなビリーやかわいいスージーちゃんのもとを離れるのは彼らにとって本当に困難なことらしいのです。

私はこれまでに、伝道に出た夫婦の本当に素晴らしい経験を聞いています。

ラルフ・ランバート夫妻は、オクラホマのタルサ伝道部で18カ月間働きました。小さな支部で働いている時、毎週日曜日に十代の初めの息子を連れてくるひとりの姉妹と知り合いになりました。その家族の父親は記録上は会員でしたが、教会にやってくることはありませんでした。

オクラホマで退職する前、彼はユタに住んでいました。若い頃執事だった時、彼は内気で、お祈りを頼まれたり、責任が割り当てられたりするのを恐れたため教会に出席しなかったのです。

時々彼は教会について話してくれる若い宣教師に会いましたが、彼らによって教会に活発に戻るようにはならなかったのです。しかしながら、ランバート兄弟姉妹は同じ年代で経験も豊富だったので、彼と本当によく親しくなることができました。

彼は妻と息子と共に教会に来始めましたが、何も強制されることはありませんでした。しばらくたってから、彼は支部予算にいくら払ったら良いかと聞き始めました。愛をもって説明された時、彼は初めて献金しました。

約1カ月後に、断食日曜日が近づいた時、彼は、什分の一を納めるのに現在ほどのような手続きをすれば良いのかと聞いてきました。それは、彼がユタに住んでいた時以来、50年間も変わっていません、と説明されました。そして彼は、神の王国へのその



ジェイコブ・ディエガー長老

自発的な献金を払い始めたのです。

それから少し後で、彼は、その小さい支部で与えられるいかなる召しも受け入れたいと言いました。彼は祭司に聖任され、それにより、末の息子をアロン神権祭司の職に聖任することができました。

彼は後に副支部長となり、昨年長老に召され、家族全員がソルトレーク神殿で結び固めを受けました。

私は、ランバート兄弟姉妹や、過去、現在を問わず奉仕して来られた多くの忠実な夫婦の皆さんが、天の父なる神からの豊かな祝福をお受けになるであろうこと、また、彼らは次の聖句の真の意味を正しく理解していらっしゃることを証申し上げます。

「而して汝らもし生涯今の世の人々に向けて悔改めを叫ぶことに力を尽し、唯一人の人たりともわれに導かば、わが御父の国に於て彼と共に汝らの悦び如何ばかりぞや。」
(教義と聖約18:15)

最後にもうひとつ、おもしろい経験をお話したいと思います。エドウィン・Q・キャノン・ジュニア夫妻が西アフリカで伝道

された時のことです。

この話は、 Sampson・Davis という名前の、立派な黒人の末日聖徒の家族についてです。彼らはガーナのアクラに住んでいます。

1963年に Sampson・Davis 兄弟はイギリスのオックスフォード大学の電子工学科を卒業しました。そしてオランダのアイントホーヘンのフィリップス電子工学株式会社に勤めました。Sampson・Davis 姉妹はこのオランダの町に夫と共に住むためにアフリカからやって来ました。そしてある日、モルモンの宣教師と会ってモルモン経を受け取り、彼女の住んでいた下宿屋で最初の集会が開かれました。

ところが下宿屋のオランダ人の女主人は、恥ずかしい話ですが、彼女にはっきりと、モルモンとはもうこれ以上会わないようにと申し渡したのです。

Sampson・Davis 家族は結局ガーナ

に戻り、15年後の1978年に再び教会と連絡を取り、日曜日の集会に忠実に集うようになりました。家族は家庭集会で福音を教わり、強い証を得ました。そして、テッド・キャンノン兄弟が、アクラの水泳プールで、母親とふたりの息子にバプテスマを施しました。

お兄さんのクロスビー・Sampson・Davis は伝道に出る準備を始め、その結果今年早々に召しをいただくことになりました。Sampson・Davis 長老は、ちょうど2週間前に宣教師訓練センターを後にしイギリスのマンチェスター伝道部に向かいました。興味深いことですが、父親は、息子が伝道に出る1カ月前に教会に加わりました。それで、家族全員が現在信仰において結ばれています。

キャンノン兄弟姉妹はまさに彼らの働きの実を見ているのです。彼らは、アフリカにおける天のお父様の子供たちと共に過ごす思い出の時を選ばれたのです。

私は今、これら2組の夫婦の経験をお話致しましたが、皆さんは年配の夫婦として伝道の業に働くことの重要性和、主のみ業に従うすべての者に来る祝福の数々を感じていただけでしょうか。

私はこの教会への改宗者として、あらゆる国家、血族、国語の民、民族に福音をたずさえて行く業に専心すること以上に大きな喜びを知りません。

私は、私たちが進み行く時に伝道のみたまがいつも共にあらんことを、また私たちが自身が、再臨に先だつてこの地上に王国が打ち立てられる時に主のみ手の道具とならんことを、へりくだり、イエス・キリストのみ名によってお祈り申し上げます。アーメン。



結 婚



十二使徒定員会会員
ボイド・K・パッカー

モ ルモン経の予言者ヤコブは、民が減びる原因はごく当たり前の事柄に盲目になるからであると予見し、盲目となるのは「思い違いをしたため」（ヤコブ4：14）であると述べています。

私たちにはよく、追い求めても見いだせないというものがありますが、そのようなことはえてして、簡単に手の届くところにあり、しかもだれの目にも明らかなく当たり前のものである場合が多いのです。

ここでは、そのごく当たり前のだれもがよく耳にしているひとつの言葉についてお話したいと思います。私はこの数カ月、その言葉の意味を正しく伝える、あっと驚くような提示の方法はないものかと考えていました。

それは「結婚」という言葉です。

できることなら、皆さんの前に美しい彫刻を施した宝石箱を差し出し、それにスポットライトを当て、その中で丁重に掛け金をはずし、敬虔な思いで「結婚」という言葉にかけられたカバーを取り除きたいものだと思っていました。

そのようにすれば、結婚がどれほど貴重なものであるか、おわかりいただけるでしょう。

今述べたような形で皆さんに提示することはできませんが、それになるべく近づけるよう身近な言葉でお話したいと思います。

私はあくまで結婚を支持し、奨励し、擁護する者です。

今日では、結婚をそれほど価値のないもの、中には全く無意味なものと考えている人もいます。

皆さんもお気づきのことと思いますが、私たちの周囲にある信号機はどれも、結婚は時代遅れの面倒くさいものであるという考えに行き着くように配置されているようです。

同棲という偽りの結婚が関心を集め、広く流行しているのが現実です。そういった人々は、責任の伴わない結婚生活というものを楽しもうとしているのです。実に誤った考え方です。

しかし実際には、このような関係に入ることによって得られると期待しているものよりもはるかに多くのものを失っているのです。正式な結婚をしていないふたりが一緒に生活すれば、互いの心の中にある何かがち壊されてしまいます。すなわち、純潔、自尊心、洗練された人格などが失われていくのです。

そんなことはないと言ったところでそのような損失を食い止めることはできません。これらの諸徳は一度失うとそう簡単には回復できないものです。

ある日、ふたりが平然とこれまでの生活習慣を変え同棲を始めたとします。ふたりはすぐに自分の意見を主張するようになるでしょう。ふたりは必ず結婚をばかげたこ

とと考えるようになるに違いありません。

やがていつの日か、われに返ったふたりは、失望を刈り取ることになるのです。

結婚を無意味なものとする人は、少年、少女、男らしさ、女らしさ、夫、妻、父親、母親、赤ちゃん、子供、家族、家庭といった言葉も同じように軽視する人です。

そのような時、自分を捨てて人のために尽くす、犠牲などという言葉はどこかに行ってしまうでしょう。自尊心は消え失せ、愛さえもそのようなところにはとどまりたくはないでしょう。

こうした関係に入ろうかと思っている人や結婚せずに生活を共にしている人がいれば、今すぐやめなさい！ そういった関係を断ち切りなさい！ だらだらと続けてはなりません。できることなら、そうした関係を断ち切って今すぐ正式な結婚をしなさい。

あぶなっかしそうに見える結婚でも、ふたりが頑張って努力する限り、良い方向に向かうものです。

警告したいと思います。結婚制度を破壊する人は、やがてきわめて大きな責任をその身に受けることになるでしょう。それほど結婚は神聖なものなのです。

意図的に結婚を破壊することは、それが自分自身の結婚であれ他の人の結婚であれ、神のみこころに背くものです。全能者の審判の時にも見過ごしにされることはないでしょうし、永遠の計画の中にあっても簡単に忘れ去られることはないでしょう。

結婚を危険にさらし、打ち壊すことのないようにしなさい。結婚相手から解放されたいという気持ちや相手以外の人に引かれたことを、結婚を壊すことになる何らかの行ないの言い訳としてはなりません。

この大きな罪はしばしば小さな子供たちにまで重荷を負わせることになります。子供たちには、小さな子供を犠牲にしてまでも、自分たちの欲求を満たそうとする哀れな大人たちの自分勝手な欲望を理解することができません。

神の命じられたところによれば、肉体による愛情の表現、生命を生む力を持つ男女の結びつき、これは結婚という絆の中でのみ認められるものです。

結婚は家族を創造するためのとりでと言えるでしょう。結婚を軽々しく扱う社会は風を蒔いてつむじ風を刈り取ることになります。すなわち、悔い改めなければ大破壊がもたらされるのです。

人々の中には、結婚はどれも離婚や不幸な結末に終わり、夢や希望は砕けて粉々になると思っている人がいます。

確かに中には歪んだ結婚もあり、破れた結婚もあります。だからと言って、結婚に対する確信を失ったり、敬遠したりしてよいのでしょうか。

すべての結婚が失敗に終わるわけではないのです。

もめ事は人の注意を引きつけやすいものです。高速道路を走っているとしましょう。何千台という車がそれぞれの方向に走っていますが、だれも他の車にはあまり関心を示しません。ところが、ひとたび交通事故が起こるや、人々の目はいっせいにそちらに集まるのです。

しかもそのような事故がもう一件でもあろうものなら、この道を安全に走り抜けられる人はだれもいないのではないかと誤った考えを持ってしまいます。

交通事故の記事なら新聞の第一面に載ることもあります。幾百万台もの車が安全

に走ったことは特筆に値することではないと見なされているのです。

作家たちは、幸福で安定した結婚では小説や芝居、映画の題材にはならない、人の注意を引きつけられないと考えています。そのような訳で私たちの耳に入ってくることと言えば崩壊した家庭の話ばかりということになってしまいます。こうして私たちは将来への希望を次第に失っていくのです。

私は結婚の素晴らしさを信じています。結婚こそ、人間生活の理想の形であると信じています。結婚は神の定めたもうたものです。そして結婚に伴う制約は、私たちの幸福を守るために計画されたものなのです。

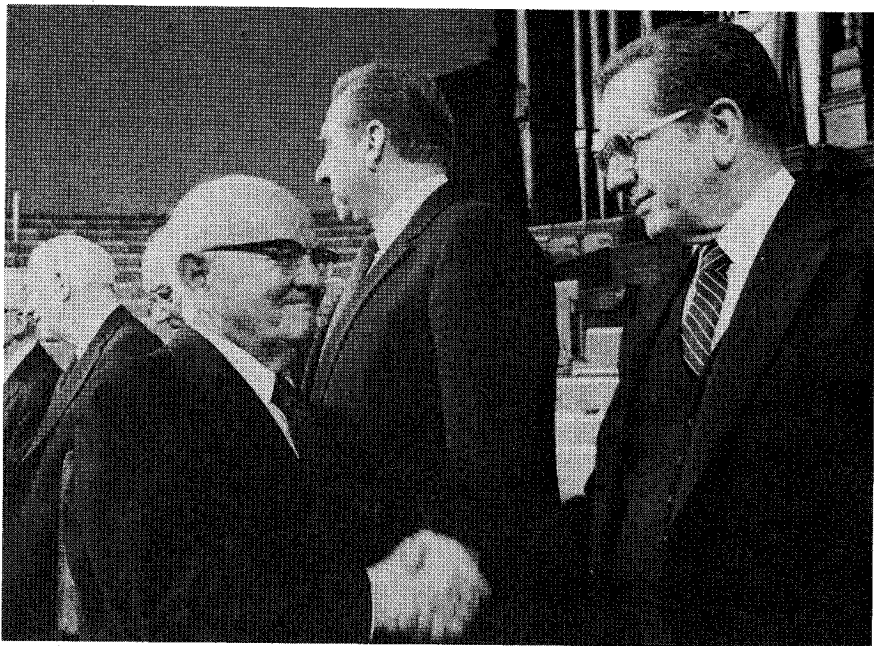
世界のどの歴史を取ってみても、成年に達し、備えをし、互いに愛し合っている若いふたりが結婚について考える時ほど素晴らしい時は私は知りません。それはあなた

にしか与えられない特別な時間だからです。

今の時代が非常に問題の多い時代であることはよくわかります。こういった問題のうちでもこと結婚に関する問題はきわめて深刻なものです。

結婚に対する確信を失わないようにして下さい。たとえあなたが不幸にして離婚することになっても、また周囲に不幸な結末を招いた結婚がいくつもあろうと、確信を失わないようにして下さい。

あなたは結婚の誓約を尊んでいるのに、相手がそうでないといった場合もあります。そんな時でも神がいつも私たちを見守って下さっていることを忘れないで下さい。いつか終わりの日に、報いがあるはず。道徳的に正しく生活し、誓約に忠実であった人々は、幸せになり、そうでなかった人は不幸を味わうことになるでしょう。



結婚の中には、どちらか一方が何とか持ちこたえようと最善を尽くしているにもかかわらず、破綻をきたすものもあります。このような場合、双方に落度があるとは言いながら、結婚の危機を乗り越えたいと努力した人を、私は責める気にはなれません。

声を大にして申し上げます。結婚に対する確信を失わないようにして下さい。失望によって心に苦々しい思いを感じたり、歪んだ考えを持つことがないように、また人にあるまじき行ないを正当化することがないようにしていただきたいと思います。

結婚の機会に恵まれない人でも、また伴侶に先立たれた人でも、結婚への確信を持ち続けて下さい。

数年前のことですが、私の友人が最愛の妻を失いました。彼女は長わずらいの末世を去ったのですが、医師にも見放されたことを知った友人は、自分の無力さを感じてつらい思いで彼女を見つめていました。

死が間近に迫っていることを感じたのでしょうか、ある日彼女は夫に向かってこう言ったのです。「私が死んだら、だれかともう一度結婚して下さい。なるべく早めに。」夫はそんなことはできないと反対しました。子供たちは独り立ちできる年齢だし、彼はひとりで生きていこうと考えていた矢先だったからです。

彼女は顔を伏せて泣きながら言いました。「もう結婚はこりごりだと思っただけで、私はあなたのいい伴侶ではなかったのですか。その程度の妻だったのですか。」

やがて二度目の妻が迎えられ、共に生活することによって彼は結婚の素晴らしさへの確信をさらに強めていったのです。思うに、彼の先の妻は、自分が埋めることのできなかった部分を満たしてくれた二度目の

妻に、心から感謝しているに違いありません。

このように結婚は安らぎであり、それには満たされた心地よいものがあり、喜びと愛があります。人としてふさわしい望みを持って行なわれた結婚では、肉体的、情緒的、靈的にすべてが満たされるのです。

結婚にはどんな試練もないというわけではありません。様々な試しが付いてまいります。これらの試しは私たちの徳を高め、強さを増してくれまします。結婚や家庭生活を通して男性も女性も強められ、昇栄を受けるにふさわしい人格を築いていくのです。

神の定めたもうたところによると、幼い命は結婚という安全な避難所の中で芽ばえなければなりません。神がよしとされる愛情の表現によって子供を宿し、犠牲を惜しむことのない深い愛の中で子供を育てなければならぬのです。

結婚は一生を通して、あらゆる面で満ち足りた気持ちを感じさせてくれます。若い時の恋愛、結婚式、新婚旅行、子供の誕生、育児など、それぞれの時にあって満たされた思いに浸ることでしょう。やがて子供たちが成長して家を出、自分たちの家を構えるという人生の最良の時期を迎えるのです。このような移り変わりは親から子へ、子から孫へと途切れることなく続きます。神はそのように命じてこられました。

私たちが教会で教えられている結婚にはもうひとつの考え方があります。結婚は啓示によって与えられたものだということです。この崇高で輝かしい真理が、結婚は永遠のものであることを教えているのです。

私たちは、望みを持ち、そしてふさわしければ結婚の誓約を交わすことができます。これによって結婚は死後も変わることなく

存続するのです。

主はこう言われました。「見よ、これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ1:39)

教会におけるすべての活動の究極の目的は、家族が幸福な生活を送り、その幸福が永遠に続くようにすることです。キリストの教えはすべて、個人と家族、家庭を守るためにあるのです。

次の詩は、人の永遠進歩の法則の中にあつて結婚がどのような位置にあるかを述べたものです。

燃える炎の中にあるのは光をともし種火
命の聖なる火
誤って燃やせば
くすぶるだけ
そして、悲しみと苦しみの厚い雲
おきて
律法にかなって燃やすなら
そこにもたらされるのは
命、家族、幸福

暗闇の王国からの誘惑者たちは
この火を誤って燃やそうといざなう
邪悪でむなしい行ないへ
やがて来る裁きと報いの日
苦い涙のしずくが
生命を生むはずであった炎を消す

この炎は鍵となり得るもの
神の御計画の大切な鍵と
人に永遠の生命と不死不滅をもたらす鍵
結婚はるつば
そこで命が組み立てられ
命の宮がつくられる
神の御計画に基づいて

それから、神の霊の子供が
この世に誕生する
選びをなし、試しを受けるために
これこそ地上に行く目的
そこには決定の自由があり
善悪の選びをする
義なる道を選んだ者は
悪魔から離れて、神のみもとに帰る

神よりの贈り物
偉大な御計画により人に与えられた
貴い神の力
愛し合い、子供を育てる
人のかたちをし、神にかたどって創造された幼な子
この聖なる力をどう考えるか
それが私たちの将来、行く末を決める

永遠の愛、永遠の結婚、永遠の繁栄！この考え方は多くの人にとって耳新しいものかもしれませんが、深く考えてみると、この考え方が結婚を堅固で安全なとりでとするのです。結婚の誓約に基づく関係ほど人を昇栄へ導く可能性を持っているものではありません。社会の責任であれ教会の責任であれ、これに取って代わるほど重要なものはないと言えるでしょう。

神が結婚を定めて下さったことを感謝しています。神殿が与えられていること、素晴らしい結び固めの権能を下さったことを感謝しています。この力は私たちが授かったすべてにまさる権能であり、この力によって私たちの結婚が永遠のものとなります。この聖なる祝福にあずかれるようにふさわしくなれますことを、イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン。

受け継ぎの地へ、 イスラエルの復帰



第二副管長
マリオン・G・ロムニー

愛する兄弟姉妹の皆さん、だれもがはっきりと自覚していると思いますが、私たちは時満ちたる神権時代、すなわち救い主の再臨を間近に控えた時代に生きています。

主の再臨に先立って様々なしるしが現われます。そのひとつは、イエス・キリストの教会が回復されることです。私たちはすでにこの予言が成就したことを目にしました。次に、アメリカにシオンが建てられます。そして第3に、イスラエルの子孫が受け継ぎの地に復帰します。

この3番目の予言の成就に、大きな関心が寄せられています。というのは、最近になってエルサレムのオルソン・ハイド記念公園で奉獻の祈りが捧げられましたし、聖地をめぐる様々な国々が外交政策に乗り出してきたからです。

このような状況とは無関係に、私はモルモン経に記されている、イスラエルの子孫の受け継ぎの地への復帰と主の再臨に関する予言に深い関心を払ってきました。これは私たちすべてにとって興味深く、しかも

ためになることであると思います。

リーハイの一団が約束の地に到着して間もない頃（紀元前約580年）、ニーファイはキリストの誕生と使命、そして十字架におかかりになることを記録し、さらに次のように記しています。

「エルサレムにある人々と言えば、これはイスラエルの神を十字架につけ、自分たちの心をそむけてしるしも奇蹟もまたイスラエルの神の能力と光栄をも顧みないから、世の人すべてに苦しめられる。

またその心を背けてイスラエルの聖者をないがしろにするために、肉体でさまよい歩いて亡び失せ、万国の民の口の端にかかり笑いぐさとなり憎まれる。

さりながら、かれらがイスラエルの聖者にもはや心を背けて逆らわない日になれば、その時には神はかれらの先祖と結びたもうた誓約を忘れたまわらない。

まことにその時に神は海の島々を忘れたまわらない。まことに主は、予言者ゼノスの言葉に應じてイスラエルの家に属する民をことごとく地の四方より集めようと仰せになる。」（1ニーファイ19：13-16）

大海を渡る前のことですが、ニーファイは兄たちに「末の日にユダヤ人がもとの状態に帰ることについて」話をしました。

「そしてユダヤ人、すなわちイスラエルの家がもとの状態に帰ることについて語ったイザヤの言葉を兄弟たちにとって聞かせたが、その言葉はイスラエルの家がもとの状態に帰ってからは、もうあわてふためくこともなければまた散らされることもないと言うのであった。」（1ニーファイ15：19-20）

約束の地に到着してからおよそ25年後に、ニーファイの弟ヤコブは、エルサレムの住

民について次のように語っています。

「主は……イスラエルの聖者である主なる神が肉体でかれらに現われたもうことと、主が現われたもうた後、私に話した天使の言葉通りにかれらは主を鞭^{むちう}って十字架にかけられることを私にお示しになった。

さてかれらユダヤ人はイスラエルの聖者に対してその心をかたくなにしその首筋を堅くした後に、必ずイスラエルの聖者の裁きを受ける。また打たれて苦しむ日が必ずくる。

それであるから、かれらがここかしこに追われてから、多くの者が天使の言葉のように肉体に苦しみを受けるが、忠実な者たちの祈りによって主はかれらを死なせたまわず、やがてかれらは散り乱れ打ち苦しめられ憎み嫌われる。けれども主がかれらを憐みたもうので、かれらとその贖い主を知るようになる時には、再びその受け嗣ぎの地へ集められる。」(II ニーファイ 6：9—11)

ニーファイの弟ヤコブは、さらに次のように付け加えています。

「さて、愛する兄弟たちよ。私がこれらのごことを読む目的は、主の誓約についてあなたたちに知らせるためであって、その誓約とは主がイスラエルの全家と結びたもうたものであり、またそれは、ユダヤ人が神の真の教会と羊の群に再び復^{かえ}され、その受け嗣ぎの地に帰して集められそのすべての約束の地に住む日がくるまで、主が世の始めから代々聖い予言者たちの口によってユダヤ人に語りたもうていることであるのをご知らせるためである。」(II ニーファイ 9：1—2)

「しかしごらん、主なる神が仰せになるには、かれらがわれをキリストであると信

ずる日がくる時には、肉体があるこの世のうちはその受け嗣ぎの地へ復される。これはわれがかれらの先祖と誓約をしたことである。

その時には、かれらは永く散り散りになっていた海の島々と世界の四方から集まってくる。また異邦人から成る諸々の国民は、これをその受け嗣ぎの地へつれ戻す業によってわが目に大いなる者となるのであると、これは神の仰せになる言葉である。」(II ニーファイ 10：7—8)

ニーファイは自分の死期が近づいたことを知ると、ユダヤ人の将来を予言して次のように言いました。

イエスの死と復活に続き、「ユダヤ人は万国の民の中に散りバビロンもまた亡びる。従って、ユダヤ人はバビロン以外の国民にも追い散らされる。〔キリストの誕生以前にユダヤ人を散らしたのはバビロンです〕

そしてユダヤ人がこのように散らされ何代かたって、主なる神は神の御子キリストとその万民のためになしたもうた限りない身代りの贖罪とを信じなくてはならぬことを、ついに得心するまでたえずユダヤ人を他国の民によって悩ましたもう。しかしユダヤ人がキリストを信じ、その御名によって汚れのない心と清い手によって天の御父を拝し、もうほかのメシヤを待ち受けないようになるならば、その時にはかれらが私の今ここに書いたことを信じなくてはならぬ日もくるであろう。

その日がくると、主は墮落して迷っている有様から、またまたその民を救い出す御業を始めたもう。」(II ニーファイ 25：15—17)

ニーファイ第三書の20章を開けてみましょう。復活されたイエスは、福音が異邦人

の中に回復される時代、すなわち私たちの時代について述べておられます。

「かれら〔異邦人〕がわが完全なる福音を受けてより、もしわれに対してその心を頑なにする時あらば……『その時われはかつてわが民に立てたる誓約を果すべし。その誓約はわが心にかなう時にわが民を集めて、その先祖の所有せし土地、すなわち永遠にかれらに約束したる地なるエルサレムの地をかれらの受け嗣ぎの地としてかれらに返すと言うことなり』と言う御父の言葉は成就すべし。

而してイスラエルの家の人々にわが福音を完全なるまま宣べ伝うる時将来にあり。

その時かれらはわれを信じ、われが神の

子、イエス・キリストなることを認め、わが名によりて御父に祈るに至るべし。

その時、かれらの番人らは心を一にし、声をそろえて高らかに歌わん。

またその時御父は再びかれらを集め受け嗣ぎの地としてエルサレムをかれらに与えたもう。

その時来らばかれらは喜びを押うる能わず。エルサレムの荒れすたれたるところよ。御父がその民をなぐさめ、エルサレムを贖いてこれを回復したまいし故に共に歌を唱え。……

まことに、まことに汝らに告ぐ、これらのことはみな御父がわれに命じたまいしごとくに成就す。かくて御父がその民に立て



たまいし誓約は果されて、エルサレムは再びわが民の住むところとなり、かれらの受けつぐ地となるべし。」(Ⅲニーファイ20：28—34, 46)

救い主はニーファイの民にさらに次のように告げています。

「まことに汝らに告ぐ、これらのことの成就せんとするとき……を汝らに知らしめんために、われは汝らにしるしを示さん。……

その時、すなわちこの民の残りの子孫に福音を伝え始むる時を以て御父の事業は始る。われまことに汝らに告ぐ、その日來らば散らされたるわが民の中にも、また御父がエルサレムよりほかの所へ導きたもうたる行方の知れざる支族の中にも御父の事業始るべし。

言い換うれば、散らされたるわが民をわがもとに立ち帰らせ、わが名によりて御父に祈る道を備えしむるための事業は、散らされたるわが民の所にて御父が始めたもう。

さてまた御父の民に受け嗣ぎの地へ集らしむる道を備うる事業は、万国の民の中に御父が始めたもう。」(Ⅲニーファイ21：1, 26—28)

モルモンは、キリストがニーファイ人の間で行なわれたみ業の記録を抄録し終えてから、次のように記しています。

「ごらん、あなたたちによく言っておく。主がその言葉のようにこの記録を異邦人にわたしたもう時に、御父がイスラエル人が受け嗣ぎの地へ集められることについてかれらに立てたもうた誓約は、すでに事実となり始めたと言うことをあなたたちは知るであろう。

また聖い予言者たちが宣べた主の御言葉はみな必ず事実になると言うことも知るであろう。その時あなたたちは、主がイスラ

エル人に来ることを延したもうていると言えるわけがない。……

またその時は、もはやユダヤ人やイスラエルの家のどの残りの子孫もあざけったり、侮ったりしてはならない。主はこれらの者に立てたもうた誓約を忘れずに、すべてかれらに誓いたもうたことを成し遂げたもうからである。」(Ⅲニーファイ29：1—3, 8)

モロナイはこれらの記録をクモラの丘に埋め、それから1400年後にジョセフ・スミスが記録を取り出します。モルモンは最後に次のように記しました。

「また、ヤコブの家の残りの子孫にもこれらのことを書き伝える。……私はこのように記録を作って、主のみこころにかなうときにこの記録が世に出るようこれを隠して主の御手に託さなくてはならない。……

世に出てからは、ユダヤ人の信仰のない者たちに伝わって行くが、その理由は三つある。第一は、イエスがキリストである、生ける神の御子であると言うことをユダヤ人に信じさせるため、第二はユダヤ人、むしろイスラエルの全家がことごとく自分たちの神である主が与えたもうた受け嗣ぎの地へ、再び元通り集められる事業に関する御父の偉大な永遠のみこころが、その最も愛したもう御子によって成しとげられ、その結果御父の誓約が果されるためである。」

(モルモン5：12, 14)

モルモン経の予言者が残したこれらの予言から明らかなように、イスラエルの家が受け継ぎの地へ復帰することは、イエス・キリストを贖い主として受け入れるしるしなのです。これらのことをイエス・キリストのみ名により証します。アーメン。

教会監査報告

委員長

ウイルフォード・G・エドリング

私 たちは、1980年12月31日現在の教会の年次財政報告書、ならびに年間の業務状況を検査致しました。当委員会は、教会の中央基金およびその他関連組織の基金、教会財務部の保持する報告書等、すべての財政報告書と運用状況を検査致しました。また、予算編成、会計、監査の手続き、ならびに基金の受領方法と支払いの処理方法についても調べました。その結果、教会の中央基金の支出が大管長会の承認の下に、予算手続きを踏んで行なわれていると判断致します。予算編成は、大管長会ならびに十二使徒評議員会、管理監督会より構成された什分の一配分評議会で承認されています。そして、予算承認委員会が毎週開かれる会合において、その予算の下で基金の支出を管理運営しています。

現在、教会の急速な発展に立ち遅れることのないよう、財政部やその他の部門に最新の会計技術と設備を導入して、資料の処理を的確に行なっています。また財務部と法務部は、連邦政府ならびに州政府、諸外国の政府による課税問題を共同で適切に処理しています。

監査部は、他のあらゆる部門から独立しており、財政監査、運営監査、教会が利用しているコンピューターシステムの監査と

いう3つの監査を実施しています。また監査は、教会の全部門、および教会財務部が報告書を保持するその他の教会関連組織、ならびに伝道部、財務センター、合衆国外教会部門についても実施します。教会の発展と活動の拡大に伴って、教会の資産を保護する監査部の運営規模も大きくなっています。ワード部とステーク部の基金の監査は、ステーク部監査委員に割り当てられています。また、教会が所有あるいは管理している法人組織の事業については、財務部がその報告書を保管せずに、公認の会計検査員が監査を行なっています。

当委員会は、年次財政報告書、その他の会計資料、ならびに財政業務の管理の基となる会計および監査方法を検討し、さらに財務部、監査部、法務部の職員と会合を持って調べました。その結果、1980年度の教会中央基金の収支は適切に会計処理されていました。

教会監査委員会

ウイルフォード・G・エドリング

デビッド・M・ケネディー

ウォーレン・E・ピュー

メルル・J・ベイトマン

テッド・E・デービス

1980年度統計報告

大管長会秘書
フランシス・M・ギボンズ

大管長会は、1980年12月31日現在の教会員に関する統計記録を以下のように発表しました。(会員数は大会までに提出された1980年度報告書に基づく概算による)

教会ユニット

シオンのステーク部数	1,218
伝道部数	188
ワード部数	7,868
ステーク部内の独立支部数	2,456
伝道部内の支部数	2,267

(1980年度内に、1,105のワード部と支部が増加したことになる)
ワード部または支部の
組織されている国 83

教会員数

教会員総数 4,638,000

(1980年度末の人数。ステーク部、伝道部、ならびに教会事務局からの報告による)

1980年内の会員数の増加

幼児の祝福数	103,000
子供のバプテスマ数	65,000
改宗者のバプテスマ数	211,000

(改宗者のバプテスマ数は、大会までに教会本部に届いた1980年度報告書に基づく

概算による)

一般統計

出生率(1000人当り)	28.2
結婚率(1000人当り)	12.2
死亡率(1000人当り)	3.9

系図

神殿儀式のために
処理した名前の数 5,414,600

神殿

1980年度内に執行された
エンゲウメント数

生者	52,000
死者	3,962,000
儀式を行なっている神殿	19
建築中、または計画中の神殿	8
(エンゲウメント数は、1979年よりも 89,100増加している)	

神権者

執事	156,000
教師	122,000
祭司	236,000
長老	382,000
七十人	30,000

大祭司	157,000
(1980年度内に、42,000人の神権者が増えたことになる)	
専任宣教師	29,953

教会教育制度

1979～80年、在籍者数：	
セミナー、インスティテュート (特別プログラムを含む)	309,000
教会経営の学校、大学、生涯教育	75,000

福祉活動

現金または日用品 の援助を受けた人	160,600
末日聖徒社会福祉機関の 援助を受けた人	51,600
有給の職業に就いた人	26,400
労働奉仕日数累計	527,900
倉庫からの支給日用品(ポンド)	35,441,200

H・ベネット長老、ニュージーランド・ギスボーンステーキ部ウィリアム・パキマラ・タウリマ部長、ユタ州ロアステーキ部トーマス・リー・チャップル部長、カリフォルニア州東バーナーディノステーキ部ドナルド・レオン・ハンセン部長、ヘンリー・D・モイル元第一副管長夫人クララ・アルバータ・ライト・モイル、ジョージ・F・リチャーズ元十二使徒定員会会長夫人ベツツイ・ホーリングズ・リチャーズ、36年間合衆国関税委員としてその職を果たしたエドガー・B・ブロッサード、米国健康および体育レクリエーション協会会長、元米国オリンピック委員、国際オリンピックアカデミー代表レオナ・ホルブルック、元教会系図協会会長ジュニアス・M・ジャクソン、40年以上の間大管長会および十二使徒定員会会員の書記を務め、同時に元YWMIA中央管理会員であったパール・B・ジョンソン。

死亡者

七十人第一定員会名誉会員ウィリアム・



ジョセフ・スミス三世に 関わる記録と王国の鍵



十二使徒定員会会員
ゴードン・B・ヒンクレー

皆様に代わって、アンゲル・アブレア兄弟を歓迎したいと思います。アブレア兄弟は忠実かつ献身的で、偉大な指導者として長年、アルゼンチンの教会で働いてこられ、その感化力は母国のみならず南米全域に及んでおります。

さて私はこの午後の大会で、先頃発見されたある祝福の筆記録のことについて少しお話ししたいと思います。その祝福文は1844年1月17日に、予言者ジョセフ・スミスが11歳の息子に授けた祝福を記したものです。そのことは先日、報道機関によって広く伝えられた通りです。その筆記録が予言者ジョセフ・スミスの書記を務めたトーマス・バロック兄弟の手になるものであることは明らかです。

当教会の歴史部は、教会初期の歴史に関連のある種々の資料を入手する作業の中でその記録を手に入れました。教会の史実にあまり通じていない批評家がこの筆記録を取り上げて、当教会の権能の系統に不備があると主張するのは想像に難くないところですが、私たちはあえてこの度の発見を公

表することにしました。

さらに、このことは極めて重要なことでありますが、私たちはこの文書に記された言葉はジョセフ・スミスが父親として授けた祝福であると認めました。これは、予言者ジョセフ・スミスの直系子孫が大管長を務めている復元イエス・キリスト教会にとって非常に大きな価値を有するものであります。そこで当教会の大管長会と十二使徒評議員会は、これを復元イエス・キリスト教会に提供することにしました。

復元教会の幹部はこの申し出を喜んで応諾し、返礼として今ひとつの価値ある品物を私たちの教会に提供して下さることになりました。そしてその交換が、去る3月19日に行なわれました。

私は過去の議論をむしろ返したいとは思いません。しかし、教会の管理権は十二使徒評議員会を通じて移譲されるという原則にその記録が暗雲をもたらすのではないかとお考えの方々のために、その記録と、それに関する歴史について簡潔に若干の事実を紹介し、次いで事実から引き出される所見を述べてまとめにしたいと思います。

まず第一に、その記録は祝福の筆記録であるということをはっきりさせておかなければなりません。それは、職への聖任の記録ではありません。事実、その祝福を受けた当人であるジョセフ・スミス三世自身、1893年に、カンサス・シティでの巡回裁判の席上、次のように証言しています。「私は父から聖任を受けたとは申しませんでした。そのような声明は出しておりません。後継者として父から聖任を受けたことはありません。『聖任』という言葉について私が理解している限りでは、私は聖任されていません。ただし、父より祝福は受け、特別

に指名されたことは事実です。」

さらに注目すべきことには、予言者ジョセフ・スミスは様々な折に、幾人かの人々やグループに、彼らが予言者を後継する可能性のあることを告げています。その対象となったのが、兄ハイラム・スミス、シドニー・リグドン、オリヴァ・カウドリ、デビッド・ホイットマー、息子のジョセフ・スミス三世、さらにはまだ生まれていなかった息子のデビッドです。特に重要なのが、たびたびその対象となった十二使徒評議員会です。

父親がこの種の祝福を息子に授けることは珍しいことではありません。実際、オルソン・プラットも自分の息子に、将来指導者になるであろうとの希望に満ちた同様の祝福を授けています。ブリガム・ヤングやその他の人々も、自分の息子に同じような祝福を授けています。

私たち教会員は、神様の権能の下に授けられたあらゆる祝福が現実となるかどうかは、次のふたつの要件が満たされるかどうかにかかっていると考えています。そのひとつは、祝福を授けられた当人がふさわしくかつ忠実に生活していること、また今ひとつは、神が深いみこころと知恵によってそのことを認めておられることです。

当教会の歴史を研究しておられる方は皆御存じのように、私たちは、神権の鍵と権能、すなわちイエス・キリストの真の教会に必須の権能は教会の初期の時代に十二使徒評議員会に授けられたとする立場をとり、その立場を守っております。従って、大管長の死亡に際しても、その権能はなお存続し、教会が続く限り合法的かつ正当に継承されるのです。

例えば、1835年3月28日に下され、記録

されて、現在教義と聖約第107章として知られている神権に関する偉大な啓示の中で、主は主の教会の管理系統のことを語っておられます。そして、大管長会について述べた後、十二使徒会についてこう告げておられます。「この十二人は、前記の三人の管理大祭司（すなわち大管長会）と権威と権能とを同じくせる定員会を構成す。」（教義と聖約107：24）

また2年後の1837年7月23日に、この原則は啓示によって再確認されています。「汝らすなわち十二使徒会、および汝らと共に汝らの助言者および指導者として任命を受けたる者たち、すなわち大管長会員にこの神権の権能末の世にこれを最後に附与せらる。」（教義と聖約112：30）

さらに1840年1月19日にも、主は予言者ジョセフ・スミスを通じて次のように言われました。「われ汝らにわが僕ブリガム・ヤングを与え、十二使徒巡回評議員会の会長たらしむ。この『十二人』はこの世の^な四極にわが王国の権能を開き、その後一切の生くる者にわが言を及ぼす鍵を保つなり。」（教義と聖約124：127-28）

1841年8月16日にノーヴーで開かれた特別大会の記録には、次のようにあります。「十二使徒会が召されて大管長会の次位に立ち、……王国を支えて諸国に対する勝利を得るのを補佐すべき時はすでに訪れた。

十二使徒会に関するスミス大管長の指示を承認し、十二使徒会が自らの職に伴う義務を履行するようにとの動議が出され、支持された。」（『大会議事録』 *Times and Seasons* 「タイムズ・アンド・シーズンズ」 2：521-22）

主がブリガム・ヤングを会長とする十二使徒評議員会を予言者ジョセフ・スミスの

次位に置き、予言者の存命中に彼の指示の下に教会の発展を図り、また予言者の死後教会を治めることができるよう、必要な諸鍵と権能が十二使徒会に与えられたことはまったく明らかです。

私がかつて今お読みした啓示、ならびにノーヴーでの集会の議事録は、私たちが今話題にしている祝福が授けられた日より3年ないし9年前に記録されたものです。

1843年から1844年にかけての冬は、ノーヴーに非常に緊張がみなぎっていた時期でした。敵対者たちが教会の壊滅をねらっていました。そこでジョセフ・スミスは、その冬の間は何度も、ノーヴーのウォータ一街にあったレンガ造りの店の2階に十二使徒会を招集しました。当教会の記録保管庫には、これらの集会に関する記録が数多く収められており、それを見ればそこで何が行なわれていたかがわかります。その集会に出席していた人が残した記録から引用してみたいと思います。数々記した中でジョセフ・スミスについてこう書いています。

「偉大かつすぐれた人格のこの人物は、死



を意識し、十二使徒たちを集めては、神の王国や儀式、政体に関するあらゆることを彼らに教えた。彼はよく言っていた。自分は土台を築いたが、建物を完成させるのは十二使徒に任せられていると。さらにこう言葉を続けている。『理由は分からないが、何らかのわけがあって、私は備えを急がされている。十二使徒たちに、儀式や鍵、誓約、エンダウメント、神権の結び固めの儀式を授ける備えをしなければならない。……主はあなた方の肩に重荷を置こうとしておられる。そして私にしばしの休息を与えて下さる。私が暴徒たちに殺されようとも、神の王国は出で行く、私は今や課せられた務めを終えた。次はあなた方が、天よりの示現に従い、天から私に示された様式に則って、王国の建設を進めるのである。』（パーレー・P・ブラット、*Millennial Star*「ミレニアル・スター」1845年5月、p.151）

皆様御存じのように、ジョセフ・スミスは1844年6月27日に、カーセージで暴徒の手によって殺されました。その後8月8日に、数千名に及ぶ教会員がノーヴーに相会しました。その時、かつてジョセフ・スミスの副管長を務めていたシドニー・リグドンは、自分こそ教会の後見人になるはずの者であると、1時間半にわたって説いたのです。しかし、だれからも賛同を得られませんでした。その日の午後、ブリガム・ヤングは使徒たちを代表して話しました。その場にいた多くの人々は、彼の容貌、声ともに、まるで殉教した予言者のようであったと証言しています。ブリガム・ヤングの話の後、すでにジョセフ・スミスから諸々の鍵を与えられていた十二使徒会が教会を導くという動議が提出され、全員が喜んでそれを支持しました。

その後の教会歴史を知る人は、だれひとりとして十二使徒会の指導力の強さに疑いをはさむことはないでしょう。神殿の業をはじめとする様々な方面で主のみ業は進展しました。さらに1846年2月には、ミシシッピ河岸のノーヴーからミズーリ州のウインタークオーターズへ、また続いてこのグレートソルトトレークの盆地へと、他に比肩するものない移動が開始されたのでした。何万もの聖徒たちの信仰は篤く、彼らの証は非常に強く、多くの人々が福音を恥じることなくむしろ自分の命を捧げることを選んだのでした。彼らの指導者が正当な権利を持っていたことをこれ程力強く証するものが他にあるでしょうか。彼らは、当時会長を務め、後に大管長になったブリガム・ヤングの指導の下にある十二使徒会の要請に応じて、ノーヴーの家を後にし、山あいの盆地に住まいを移すという行動を起こしたのでした。

私たちが今話題にしている記録を自らの手をもって記したトーマス・バロックという人物について取り上げてみましょう。彼はその祝福を筆記したのであれば、それについて知っていたことになります。彼の死後に残された記録からそれをうかがい知ることができます。

トーマス・バロックは1841年11月に英国で教会に加入し、1843年にノーヴーへ移民してきました。そして、ジョセフ・スミスの書記を務めました。また彼と家族は、1846年の秋に、最後のグループとしてノーヴーを発っています。重い病気をやんでいた彼に、暴徒たちはライフル銃や銃剣をつきつけ、20分以内に市から出て行かなければ発砲すると言っておどしたのでした。そこで彼は、どちらにしてももうすぐ死ぬのだから

ら射つ方がいいと、暴徒たちに言い返しました。すると暴徒のリーダーが言いました。「モルモンの教えを捨てるなら、ここにいってもよい。俺たちはお前を守ってやる。」それに対してバロック兄弟は、自分の家は合法的に自分の所有物であり、違法行為はまったくしていないと答えました。「だが、私はモルモンだ。だから命のある限り、十二使徒会に従う」と。その後、彼は重病人のひとりとしてノーヴーの市を無事に出ています。そして、旅を同じくする聖徒たちと共に、アイオワの野営地でうずらの群れの訪れを受け、奇跡的に命を長らえたのでした。

1847年の早春に聖徒たちがウインタークオーターズを発つ時、バロック兄弟は最初の隊の書記に選ばれました。そして、その長旅の間、価値ある記録を書き綴ったのでした。彼はその後東部へ旅をし、1848年に再び盆地に戻ってきました。さらに、1856年から1858年にかけて、英国で伝道の業に従事しています。

そこで当然のことながら、次のような問いかけが起こってきます。

もしも彼が、ヤング会長が教会の正当な導き手であることに疑いを抱いていたとしたら、またこの権限が、自らの手をもって書き留め、所有してきた祝福の言葉によりヤング会長以外の人に属することが決まるものであったとしたら、バロック兄弟は、教会員であるということでも要求されたかくも大きな犠牲に喜んで身をゆだね、またブリガム・ヤングよりの召しに応じて宣教師として教会の発展のためにそれ程の苦しみを味わうことを潔しとしたであろうか。

兄弟姉妹の皆様、ジョセフ・スミスが自らの血をもって証を結び固めた1844年6月

27日のあの悲劇の時以来、またその後のノーヴーで集まりを持った数千名の聖徒たちの心に確信がもたらされた8月8日のあの出来事以来、末日聖徒イエス・キリスト教会は着実に前進を続けており、一步も後退してはおりません。ジョセフ・スミスが有していたと同じ権能、また管理権として神より託された権限そのものである同じ鍵と權威が、彼によって、ブリガム・ヤングを長とする十二使徒会に授けられたのです。その時以来、すべての大管長は、十二使徒評議員会を経て、その最も気高く神聖な職に就いてきました。これらの人々はいずれも、いと高き所より啓示のみたまと力を与えられてきました。また、予言者ジョセフ・スミスからスペンサー・W・キンボール大管長まで、歴代大管長は途切れることなく一本の鎖として結ばれているのです。そのことを、私はきょう、皆様に厳肅に証申し上げます。この教会は予言と啓示の確か

な言葉の上に築かれています。それは、パウロがエペソ人に次のように書き送っている通りです。「あなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。」(エペソ2:20)

私たちは、愛する息子に授けられた父親の祝福の言葉が記された記録を復元イエス・キリスト教会の兄弟たちに差し上げることができて喜んでおります。それは貴重な資料であると共に、ジョセフ・スミスの家族にとっては特にこの上ない価値のあるものです。しかし、教会の管理権が十二使徒評議員会を通じて正当に継承されていることについては何ら重大な問題を引き起こすものではありません。この評議員会は予言者ジョセフ・スミスによって組織され、神の啓示の下に運営されているからです。私はこのことを、イエス・キリストのみ名によって証します。アーメン。



人は自分が 愛するものに仕える



十二使徒定員会会員
マービン・J・アシュトン

数週間前のある日、間もなく朝も6時になろうという頃に、オーストラリアからソルトレーク・シティーへの旅の最後のひと走りをするため、私は妻と一緒に1台のタクシーに乗り込みました。そのタクシーの運転手は朝の3時から仕事をしていたとのことでしたが、何かとでも、その日の最初の客である私たちと話をしたいという風でした。彼の話によると、彼の両親はメキシコ・シティーからちよつとはずれた所で生まれたのですが、後にシカゴに移り、そこで彼が生まれたということでした。それから彼の家族は、さらにニューメキシコへ移りました。そして20年前、その私たちの友人は短期滞在のつもりで、サンフランシスコへ来ました。しかし、結局そのままそこに腰を落ち着けてしまいました。空港までの車中、彼は幾つかのことを話しましたが、それを聞いて、大切な真理について強く再認識させられるところがありました。

彼の両親はニューメキシコに残ったものの、彼と彼の兄弟の所を訪ねるのが何とも楽しみで、余裕があるとそうしていました。

両親にとっては、子供や孫のそばにいるのが喜びだったのです。ニューメキシコでの母親の健康状態はあまり芳しいものではありませんでした。ところが、サンフランシスコに来ている時はいつでも、はるかに具合が良さそうなのです。それで察しの良い息子は、兄弟に話しました。「母さんに必要なのが何か、よくわかったよ。」

その後の話はこうです。「大きなトラックを1台見つけてきて、兄弟でニューメキシコへ行ったんです。そして荷物を全部積み込んで、両親を連れて来ました。自分のことを本当に気にかけてくれる人のそばで暮らすのが一番ですからね。それで母の体具合も目に見えて良くなってきましたよ。」それから彼はこう言い足しました。「思いやりというのは、その示し方ひとつで随分大きな力になるものなんですね。」

この謙遜で、しかも賢明な人が次に話したことは、今話してきたことと同様に大切なことでした。「子供たちには皆、働くように教えているんですよ。教育は受けて欲しいと思います。でもそのためには、働くことを覚えなくちゃいけませんからね。16歳になる息子がいるんですが、ついこの間、ある銀行のアルバイトの口を世話してやったんです。学校の勉強の傍らの、1日たった2時間の仕事ですけど、それでも、働くということがどうということか、わかりかけてきている様子ですよ。息子も、私が責任を果たしているということで、父親が自分のことを心にかけてくれていると思ってるんですね。私の方の仕事の時間が不規則で、いつも銀行まで送ってやるというわけにはいかないんですが、帰りはいつも迎えに行くようにしてるんです。息子はそれを楽しみにしてるんです。まあ、私もそうな

んですがね。」

この面白い運転手の話で、もうひとつ大切なことがあります。彼の話によると、運転手仲間はまだ独身の人たちがよくお金に困って、彼のところに借りに来ることがあるというのです。そんな時でも、彼は大抵の場合、融通してやることができるそうです。自分ひとりの生活ですら大変な仲間たちから、どうして彼の給料で家族を養うことができるのかと聞かれた時、彼はこう答えたといいます。「私はかけ事や酒、タバコに金をつぎこんだりはしないし、食事も家内の手作りで、レストランの高い料理で散財することもないですよ。」そして笑いながら、こう付け加えました。「うちではみんな一緒に、家族パーティーをすることにしてるんです。」この運転手は家族を中心に物事を考え、ギャンブル、飲酒、金ばかりかかるつかの間の娯楽などの愚かしさを知っていました。

この幸福そうな運転手は経験を通して、自分の心を傾けるべき大切な領域をはっきりと理解していました。また、愛を育てるということがとりも直さず病を癒すことであり、教えることであるということを知っていたのです。それには犠牲が求められます。そして人というのは自分が愛するものに、一身をささげて尽くすものです。彼は幾つかの大切な原則を、説得力のある実例によって示してくれました。正直言って、彼の話はとても面白く、空港に着くのがあと1時間少々遅ればよいのにとさえ思ったくらいでした。

この運転手は自分の愛をどこに向けるべきかを理解していました。私たちも何に向けて自分をささげるべきかを選ぶ必要があります。それは、私たちの愛は、私たちが

仕えるものの中にあるからです。生涯を通して、自分の心をどこに向けるべきかということは、正しい見地に立って決めなければなりません。

子供の頃、私たちは自転車、スケート、スキーの乗り方、滑り方、それにバランスの取り方を覚えようと一生懸命頑張ったものです。そしてそういった動き、スピード、バランスなどが生活の中のひとつの楽しみとなりました。しかし、おとなになり、ほかの事柄に専念し、それに力を注ぐようになると、心に向ける対象も変わってきます。農業をする人であれば自分の土地を、学者であれば自分の著作を、そして実業家であれば自分の会社を愛するようになります。私たちは皆子供に対する両親の愛、ワード部内の会員に対する監督の愛、新しい自動車への若人の愛着、特別な人から受け取ったばかりの指輪に対する婚約中の若い女性の思いなどを知っています。

同様に、今日の世の中で、目に見えて明らかかなことがあります。それは悪に対する執着です。私たちの健康や進歩につながらないことに心を奪われ、それに没頭するなら、私たちは自分の将来を危うくすることになります。今日多くの人はこの世的なものに心を奪われ、それらが名誉、成功、人気をもたらしてくれるものと思い込んでいます。彼らもその正しからざる思いに対する報いを受けます。これらの場合にもまた、彼らは自ら愛するものに仕えているのです。成功するか否かは、私たちが何を愛するようになるかにかかっています。

お金、麻薬、アルコールへの執着は、盗み、殺人、あるいは社会からの落伍へと人を駆り立てる力を持っています。それらの人々はまず、こういう類の悪の影響力に心

を引かれ、次に命、健康、自由などすべてのものを、自分たちの目には宝と映るもののために犠牲にしてしまうのです。肉欲、麻薬、偽りを好む心は、人の心を引きつけるこれらのサタンの領域に仕える時に、ますます大きなものとなっていきます。愛するものとの結び付きは、私たちがそれに仕えれば仕えるほど、強固なものとなっていきます。偽りを好むようになる人は生涯不正直な働きをします。事実一般的に、うそをつく人よりも、麻薬常習者の方がより短時間の内に矯正できるのです。

サタンのこの終わりの日における最大の収穫のひとつは、人々の心を破壊的で、移ろい易く、かつこの世的なものに向けさせることに成功したという点です。世の人々は最良のものを求めて計画するというよりも、ますますその自己中心癖を強くしています。私たちは様々な集団の指導者が至る所で「我々の権利」「我々の要求」と語るのを耳にします。多くの若人が、愛には相手に対して要求できる「権利」が伴うと信

じています。例えばこのように言う若人がよくいます。「もし君がぼくのことを愛しているなら、ぼくの言うことを聞いてくれないでもいいじゃないか。」このような人は高い道徳の水準を守るところか、自分が言っていることを当然の権利だと思っているのです。そのような申し出が愛と無縁のものであることは言うまでもありません。日々の行ないというものは、その善悪を問わず、さほど重要には思えないことがあるかも知れません。しかし、それらの行ないによって、その人と、その人の心をひきつけるものとのつながりは強められ、容易なことでは打ち砕くことができなくなります。私たちは的確な見通しに基づいて、自分の心をどこに向けるべきかを決めなければなりません。もし意義あるものなら、それは、必ず私たちの永遠の進歩に役立つものとなり、妨げになるようなことはありません。

心に愛を持つ人は責任ということを理解し、意識しています。コリント人への第一の手紙の中でパウロは、愛は恨みをいだか



ず、自分の利益を求めず、寛容で、情深いと言っています。(Iコリント13:4-5) 神殿結婚に備えている男女の愛を見る時、近視眼的な利己心ではなく、お互いのためを思う犠牲と奉仕の基となっている様々な要素に気がつきます。コートシップ、また結婚生活の中の真の愛や幸福は、正直、自尊心、犠牲、思いやり、純潔、優しさ、そして「自分」ではなく、「自分たち」を優先させることの上に成り立っています。私たちの徳や純潔を危うくし、夫婦以外の性的な関係に対する欲情を駆り立てるような人は、友でもなければ、家庭を中心にものを考えるということなど全く無縁の人なので、そのような人は利己的、あるいは愚かな人の部類に入れて、何の差し支えもありません。肉欲に従う人は決して、愛や純潔が結ぶ数々の実を理解することはできません。

最近教会に改宗したひとりの人がこのような話をしてくれました。「私の十代はほとんど窮屈な生活の繰り返しでした。でも食べ物はかなり良かったし、たいがいのことも認められていて、まんざら悪い生活でもありませんでした。しかしやはり退屈な生活で、漫画、雑誌など何か本を持っている人がいると、食べ物と引き換えに、それを貸してもらおうようなことをよくしました。ある日、私は1冊のきれいな分厚い本を持っている人を見かけました。かなり読みごたえのありそうな本で、私は肉やじゃがいも、それに1週間の食糧のほとんどを代償に、その本を借りたいと言いました。彼はそれを承知し、本を貸してくれました。私はそれを読むにつれ、自分が読んでいるのは非常に大切な、真実のものであるということがわかりました。私が食べ物を犠牲に

したその本の名は、モルモン経といいました。私は機会を見つけて宣教師に会い、自分の生活習慣を変え、今では新しい人生の道を見いだしました。私は食べ物と引き換えにしたその本が大好きです。」

これは報いのある結果を受けた、並々ならぬ、しかも価値ある犠牲の例です。この改宗者はこの本を読めば読むほど、その中に記された真理を愛する気持ちが大きくなると言っていました。

家族への愛とは、殉教者の持っている愛とは違います。先に話した運転手の、体験に即した言葉を思い起こしてみましょう。

「子供たちには働くことを教えています。ただ、それだけではなく、私が子供たちのことを心にとめ、自分の責任も果たしているということをわかってもらえるようにもしてるんです。」自分の時間を割くこと、よく話を聞くこと、相手の気持ちをくみとること、そして無条件の愛、また時には機会を与えることなども愛する人に仕えるための方法となります。しかし、もし私たちが家族に働くことを学ぶ機会を与えず、それぞれの行ないに対する責任を回避するように教え、自分の野心を伸ばすために家族を利用しているとしたら、彼らによく仕え、愛していると言うことはできません。家庭の中で働いたり奉仕したりする機会を子供に与えて下さい。そうすれば子供たちの家族に対する愛が強められるでしょう。勉強に関することであれ、音楽、演劇、スポーツ、あるいは指導に関することであれ、それが何かを問わず、自分の才能を伸ばすために時間をささげ、犠牲を払うように励ましを受けるにつれ、子供は自分に成功をもたらしてくれるものへの愛を深めていくことでしょう。子供たちは、私たちがある特

定の才能に対して時間と労力をつぎ込むように励ますと、それを愛するようになります。

大人の私たちがいつも、より多くの、そしてより高価な財産を手に入れることに優先順位を置いていたとしたら、さほどの時間を経ずとも、そういった物への執着心が高じてくるでしょう。もっと大きな家、もっといい自動車、もっと高価なボートを買うために、内面的なものを犠牲にし、それらの成功と喜びの象徴に愚かな執着心を募らせている人もいます。人は自分の仕えるものを愛するようになり、自分の愛するものに仕えるものです。

自分のためにならないものへの執着心を取り除くにはどうしたらよいでしょうか。私たちは自分の生活を吟味しなければなりません。何に仕え、何に犠牲を払っているかを確認し、そういった方面への時間と労力の浪費をやめるようにしようではありませんか。もしそうすることができるなら、執着心は影を潜め、やがては消えていくことでしょう。私たちの愛は永遠という規準に照らしたところへ向けなければなりません。もし私たちが励ましを与え、自分を犠牲にして努力を続けさせるなら、隣人や家族も私たちの愛に答えてくれるでしょう。真実の愛は、命そのものと同じように永遠のものです。教会の召しや責任の中には、時には大して意味も重要性もないと思えるものがあるかも知れません。しかし、一つ一つの責任を積極的に果たしていくなら、主を愛する気持ち次第に強くなっていきます。私たちは神に仕え、神を知るにつれて、神を愛するようになります。

新しく改宗した人々が福音を愛することできるように手助けをするにはどうした

らよいでしょうか。奉仕をし、犠牲を払う機会を与えることです。私たちは自分が愛し、時間をささげている真理を絶えず強調するようにしなければなりません。それは福音であり、神であるかも知れません。場合によると金かも知れません。私たちはよく、イエスの教えを含め、聖典を愛する人人の言葉を聞くことがあります。真理を学び、応用実践する人は、だれよりもよくそれを理解するだけでなく、生涯の指針として、それらを生かしていくように励ましを受けます。什分の一を納める機会に最も感謝しているのは、犠牲を払い、その律法に従順であることによって得られる喜びや祝福を実際に味わった人々です。福音とその教えに対する感謝の念や愛情は、いついかなる場合も福音に対する奉仕と決意にかかっているのです。

皆さん御承知と思いますが、すべての人に与えられる、最も気高い愛の模範について、ヨハネによる福音書に次のように書かれています。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。」(ヨハネ 3:16) 神はほかの何ものよりも崇高な愛の行ないと完全無比の犠牲をもって、模範を示して下さいました。神はその愛が無条件のものであり、すべての人をひとりも残さず包み込むものであることを教えて下さったのです。

イエスはこの地上におられる間に、正しい愛の実践法を教えて下さいました。律法学者やパリサイ人たちが、救い主のみ前に、姦淫の場を捕えられた女を引き出してきた時のことが思い浮かんできます。彼らの目的はその女と救い主に愛を示すことではありませんでした。イエスを窮地に陥れ、計略にはめることだったのです。彼らは「姦

淫する者は石で打ち殺さなければならない」というモーセの律法を持ち出し、主にこう言いました。「あなたはどう思いますか。」しかし、イエスが罪のない者がまず石を投げなさいと言った時、その告発者たちはひとり、またひとりとその場を去って行ったのです。イエスはその女に言われた言葉を皆さんも覚えていることと思います。「女よ、みんなはどこにいるか。あなたを罰する者はなかったのか。」女は答えました。「主よ、だれもございませぬ。」イエスは言われた、「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように。」(ヨハネ 8：1—11参照)

イエスは姦淫の罪に目をつむられたのではありません。道徳的な正しい行ないということに関してイエスの態度には何のあいまいなところもありません。イエスはその女にとって最も良いことをしてやる必要性和、はかりごとや人を傷つけたりすることの有害な影響とを、律法学者やパリサイ人に示すために、愛をもって教えるという方法をとられたのです。

イエスが私たちに教えられたのは、どのような場合でも、愛を示す正しい方法があるということです。

先に話した運転手は賢明に「思いやりというのは、その示し方ひとつで、随分大きな力になるものなんですね」と言いましたが、それは彼が生活の中に、同じキリスト教徒としての原則を実践していたからなのです。救い主がなされたことからして、当然考えられることは、愛というものは、それが正しい事柄に向けられ、生活の中で適切な優先順位を与えられていく時に善しとされるということです。

私たちは複雑な世界に住んでいます。「私

たちの方に心を向けなさい」と声を挙げる集団が数多くあります。自分が何に仕え、何を愛していくかを選択する際の指針を決める上での確実な方法は、次のヨシュアの勧告に従うことです。「わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」(ヨシュア 24：15)

自分自身の生活に目を向けましょう。私たちは自分の愛するものに仕えるのです。もし私たちが、天父が私たちに望んでおられることに犠牲を払い、愛をささげるなら、それは永遠の生命に至る道を進む足取りを確かなものとする助けとなります。もう一度まとめてみたいと思います。人は自分が仕えるものを愛するようになります。また、自分が愛するものに時間をささげ、時間をささげるものを、愛するのです。

私たちが正義、真理、そして報いのある、永遠の奉仕と言えるものを愛そうとする時に、神が助けを与えたもうのように。イエス・キリストのみ名によってお祈りします。アーメン。



信仰へのかけ橋



七十人第一定員会会員
ローレン・C・ダン

美しいコーラスを聴いて、私は心が高められるのを感じました。皆さんも同じような気持ちを味わわれたことでしょう。私は今、この会の最初に歌われた讃美歌の「われら受けし 信仰持ち」という言葉を思い返しています。(讃美歌150番「シオンの若者真理を守り」参照)これから、この信仰ということについてお話したいと思います。

私たちは信仰を持つ民として知られています。確かに個人の信仰は福音を支える礎石であり、個人にとって最も重要な特質であります。

ジョセフ・スミスはこのように述べています。「信仰とは、目に見えないものの存在に対して人が抱く確信であり、知力を有するすべての者の中にある行動の原則である。……これが人を支配する第一の原則である。」(*Lectures on Faith* 「信仰講話」 pp. 7, 10)

ヤコブは次のように教えています。「神はすべての人に向かって、汝らはイスラエルの聖者を全く信仰……(せ)よ。さもなければ

神の王国には救われないと仰せになる。」

(II ニーファイ 9 : 23)

このように私たち個人の信仰は、力と行動の原則として、また救いの鍵として、絶対に必要なものなのです。

パウロは次のように勧めています。「言葉にも、行状にも、愛にも、信仰にも、純潔にも、信者の模範になりなさい。」(I テモテ 4 : 12)

アルマは次のように述べています。「たとえ信じようとする望みを起すだけでもよい。しかし、私の言葉の一部分でも受け入れるほどの信仰ができるようになるまで、この望みを育ててゆけ。」(アルマ 32 : 27)

モロナイは次のように記しています。「あなたたちは自分がまだ見ていないからと言って疑ってはならない。信仰の度を試してからでないと証が得られないからである。」(イテル 12 : 6)

信仰という賜と力とを伸ばすには、様々なステップがあります。これから少しの間、その中の6つのステップについてお話したいと思います。

第1に信仰とは、主を全能なる御方、すべての祝福を与えて下さる御方と認める力です。

ベンジャミン王は言いました。「神を信ぜよ、神がましますことと、神が天地の間の万物を造りたもうたことと、天でも地でも全知全能であることとを信ぜよ。また、人間は主の悟りたもうことをことごとくは悟れないことを信ぜよ。」(モーサヤ 4 : 9)

私たちは物事を別個に考え矛盾した行動をとることがあります。あることについては神に祈りながら、別のことについては心で悩ませています。主といえども生活のあらゆる面にまで助けを与えることなどできな

いと思ってしまうのです。

ジョン・A・ウィットソー長老は次のように述べています。「数年の間、私は同僚たちと一緒に連邦政府の資金援助を受けて、土壌の水分に関する何千ものデータを集めた。しかし、それらの資料から何ら一貫性のある原則を引き出すことができなかった。そして最後にはあきらめてしまった。私は妻を連れて神殿へ行き、この失敗を忘れようとした。ところがエンダウメントの3番目の部屋にいた時、目に見えないところから問題の解法が示されたのである。この解法は出版され、以来ずっと一般に用いられている。」(In *A Sunlit Land: the Autobiography of John A. Widtsoe* 「太陽に照らされた地にて：ジョン・A・ウィットソー自叙伝」 p.177) つまり、主が万事において、私たちを助けて下さるという実感、それが信仰なのです。

第2に、信仰とは何かをするように心に感じた時、それを実行に移す力です。

数年前にシドニー伝道部を管理していた時のことです、私は主からの祝福を熱心に求めています。順調に発展を続けていた伝道部が、一時的に停滞してしまったのです。何とかもう一度前進させたいと思っていました。

ある日私は断食して、さらに高い水準に到達できるように導きを求めて祈りました。祈っていると、息子のところに行って祝福を与えなさいという思いが鮮明に浮かんできたのです。私は心に感じたままに息子を捜しました。息子は家において、高校の勉強をしていたので、私はこう尋ねました。

「調子はどうだい？」

すると十代の子供によく見られるような答えが返ってきました。「なぜ……」

ほかに何と書いていいかわからなかったので、私は「祝福して欲しくないかい？」と尋ねました。

息子は目を丸くして私の方を見ました。驚きのあまり、何も言えないようです。そして、ようやくこう答えました。「うん。」

その祝福の時に与えられた靈感によって、私と息子は互いにとても大切な存在であることがわかりました。これはふたりにとって決して忘れることのできない経験です。

しかしあの時、伝道部のために祝福を求めているのになぜ私の第一の責任である家族に目を向けるように言われるのだろうか、考えてばかりいたならば、このような経験をする事もなかったでしょう。

第3に、信仰とは神の律法に従って生活する力です。私たちに必要な祝福はその律法によって統御されています。祝福を受けることだけを目的として戒めを守るべきではありませんが、それでもやはり、祝福は与えられるのです。

ハロルド・B・リー大管長は、どうしても必要な物質的な祝福を求めて一生懸命に祈った時の話をしています。リー大管長はある日この祝福を求めて祈っていました。すると、最近得た収入でまだ什分の一を納めていないものがあったことを思い出しました。「あなたは祝福が欲しいと言う。しかしあなたは、その祝福の基となる律法に従っていない。」と、まるで主の声が、自分を叱責しているように感じたそうです。

そこで、その収入の什分の一を納めてから、もう一度祝福を求めて祈ったということです。

第4に、信仰とは勧告されたことが現実を起こるものとして行動する力です。

パウロは次のように教えています。

「信仰によって、ノアはまだ見ていない事
からについて御告げを受け……その家族を
救うために箱舟を造……った。」(ヘブル11
：7)

キンボール大管長は、ノアと箱舟につい
て次のように考察しています。

「雨や洪水の兆候はまるで見られなかつた
ので……主の警告は不合理に思われた。……
いつものように太陽は輝き、あらゆる生命
が育っているのに、乾いた大地の上に箱舟
を造るとは、何と愚かに見えたことだろう。
しかし、時は満ちた。……大洪水が起こつ
たのである。不従順な者は……水に吞まれ
てしまった。箱舟の奇跡は箱舟を造るとい
う信仰の表われがあって初めて起こつたの
である。」(*Faith Precedes the Miracle*

「奇跡に先駆ける信仰」 pp. 5—6)

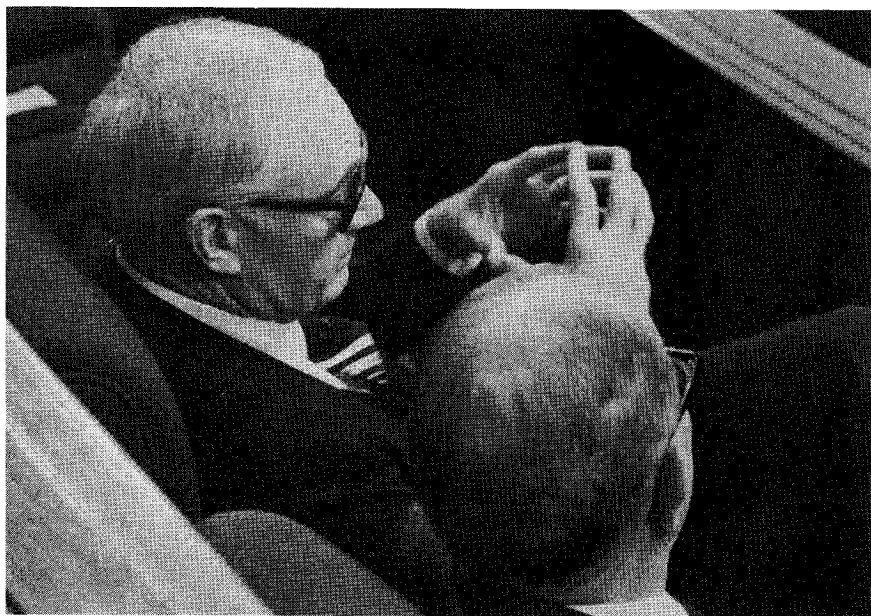
何年も前になりますが、第二次世界大戦
のあの陰うつな時代に、オーストラリア伝

道部のエルボン・W・オーム伝道部長は、
主に忠実なある未亡人から土曜日の夕食に
招待されました。その当時は配給制度が実
施されており、良質の食料品は、ほとんど
店先から姿を消してしまいました。

伝道部長は彼女の家を訪れ、食卓に並べ
られているご馳走の山を見て驚きました。
物が不足している時代でしたので、このよ
うな食事には何か月もお目にかかっていま
せん。

「これはいただくわけにはまいりません。」
伝道部長は未亡人の口から生活の糧を奪つ
てしまうことが耐え難かったのです。する
と彼女は言いました。

「でも、どうしても食べていただきます
わ。私は教会幹部の方々のお話を数年前か
ら聴かせていただいて、1年分の食料を貯
えてまいりました。これは貯蔵品のほんの
一部なんですよ。」



彼女は、いつの日か食料不足になる時が来ることを信じて、食糧貯蔵に励みました。そしてこの信仰が、困窮した時代に奇跡をもたらしたのです。

現代の予言者の勧告に対して信仰を表わし、家族の備えという箱舟を造って、各自に襲いかかる洪水に耐えられる人が、末日聖徒の中に何人いるのでしょうか。

第5に、信仰とは人々に愛と信頼を示す力です。

世の救い主は、この愛の最も優れた模範を示して下さいました。人々から拒まれ、さげすまれながら、主は自分を十字架につけた人のために天父に祈られました。「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」(ルカ 23：34)

ジョセフ・スミスも同じ模範を示しています。その生涯を試練と背信に悩まされながら、最後にカーセージへ向かう時に、ジョセフは次のように言いました。

「われは、今ほふり場に引かるる子羊の如く行く。されど……わが良心は……すべての人に対しいささかの咎めもなし。」(教義と聖約135：4)

私がかたいへん尊敬している友人も、この特質を備えています。ある時、町から来た乞食が彼の家の玄関先に現われて、お金を請いました。すると友人はこう言いました。「古い納屋のペンキを塗り替えなければならぬのだが、もしこの仕事を引き受けてくれるのなら、お金を払うよ。」ふたりは外に出て納屋を見ました。それから男はペンキ屋へ行って必要なペンキを持って来ました。友人があらかじめ連絡しておいたので、自由に持って来ることができました。

塗り替えが終わると、男はお金をもらっ

て町を去りました。しばらくして、ペンキ屋の主人が友人のところへ電話をかけてきて、あの男は余計にペンキを持って行ったと言いました。結局、友人はだまされたわけです。

しかし、友人はこの機会をとらえて、息子たちをこうさとしたのです。

「もし父さんがあの男のしたことを知っていたら、止めただろう。でも、我が家の納屋はきれいになり、ペンキを塗った男は、どんな問題にぶつかっても、自分を喜んで信頼してくれた人がいたことを決して忘れないだろう。」

いつも皮肉を口にし、疑い深く、人を救おうとしない人、信仰はそのような人のかたくなな心には育ちません。

他人の良い点が見えない人は、自分の信仰を失うだけでなく、根本的に不幸な人間になってしまいます。

第6に、信仰とは自分自身が神権に従おうとする力です。

パウロは大切な真理を説いています。

「そして彼〔主〕は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。」これらの神権指導者が聖徒たちに与えられた理由が、次に記されています。「わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、満ちみちたキリストの徳の高さにまで至るためである。」(エペソ 4：11, 13)

神権指導者、すなわち啓示により神権者の按手を通して召された指導者が私たちに与えられているのは、私たちが信仰の一致と救い主を知る知識の一致に到達し、「神のみ姿を自分の身に受け」(アルマ5：14)



て神のようになり、すべての人々が「主なる神すなわち世の救い主の名によりて語らなため」(教義と聖約1:20)なのです。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、十二使徒定員会の会員の時に、あるステーキ部大会に出席しました。そのステーキ部長は召されたばかりでした。すると、ひとりの兄弟がスミス長老のところへ何度もやって来ては、個人的な問題について相談にのって欲しいとしきりに頼みました。ついに、スミス大管長は、ステーキ部長が同席することを条件に会うことにしました。その兄弟が自分の置かれている状況を説明していくと、ステーキ部長の心には彼がしなければならぬ事柄が浮かんできました。しかし、スミス大管長は話を聴き終わると、驚いたことにこう言ったのです。「あなたに申し上げることは何もありません。」その兄弟は思いかげない言葉にびっくりし、その場を立ち去りました。彼がいなくなると、スミス長老はステーキ部長の方を向いて言いました。「あの兄弟にどのような勧告を与えればいいのか、それは分かっています。しかし、彼がその勧告に逆ら

うことになるかと心に感じたのです。ですから、神権の勧告に背いて罪に定められるよりは、何も知らない方が良くと思ったのです。」

この話から分かるように、神が私たちに導くために召された人々に、指導を求めるだけでは十分ではありません。靈感を受けた指導者の勧告に進んで従い、信仰を育てていかなければならないのです。

末日聖徒は信仰を持つ必要があります。また、自分自身の生活や隣人の生活の中で、あらゆる機会をとらえてその信仰を育まなければなりません。

信仰は私たちが生まれながらに受け継いでいるものです。イエス・キリストの福音を喜んで受け入れる人は、イスラエルの血統に属し、信じる力を持っていることはイスラエル家の特色です。ある人はこれを「信仰の血統」と呼んでいます。

私にとって信仰は、かがり火であるとともに礎石でもあります。それはみたまによって生まれ、多くの祈りとみたまの導きによって豊かになっていきます。また信仰は私の身と霊を高揚させ、私の心を開いて喜びと平安をもたらしてくれます。私の知識を増し、確信を強めてくれます。私の信仰とはこれです。神は生きておられます。イエスも生きておられます。イエスはキリストであられ、ジョセフ・スミスは真の予言者です。私たちは今この場に使徒と予言者をいただいています。これが私の信仰です。

主が私たちに祝福して下さいますように、そして私たちが信仰を持って日々の生活を送ることができるよう、イエス・キリストのみ名を通してお祈りします。アーメン。

「グラシアス」



七十人第一定員会会員
アンゲル・アブレア

数 日前、私はアルゼンチンのロザリオにある伝道本部でキンボール大管長から電話を受け取り、この召しについて知らされました。妻も私も深い感動を覚えました。責任のあまりの重さに圧倒されてしまいました。しかし同時に、ひとつの思いとひとつの言葉が私の内に広がっていったのです。それは、感謝という思いとグラシアス、つまりありがとうという言葉です。

38年前に福音の良きおとずれを携えて私の家を訪問して下さい、ふたりの姉妹宣教師に感謝しています。また、私を初等協会や教会の集会に連れて行ってくれた母に感謝しています。母は、私が初めてモルモン経を読んだ時に傍らで一緒に読んでくれました。母は現在も、数々の行ないや教会における忠実な働きを通して、私が見習うべき良き模範を示してくれます。

幕の向こう側で福音の言葉とバプテスマを受け入れてくれた父に感謝しています。ある日曜日の朝、父は私と一緒に私のベッドに腰をおろし、当時11歳の私に向かってこのように言いました。「アンゲル、教会

員になったら求められることはどんなことでも受け入れなければならないんだよ。お前は誓約を受け入れたのだからそれを守らなければならない。」

愛する妻に感謝しています。彼女は、いついかなる時でも福音に対する完全な愛と信仰を持って、私を支え助けてくれました。また、私の人生に絶えず靈感を与えてくれます。

また、3人の娘たちにも感謝しています。3人の教会に対する愛と献身は、私の人生に誇りと喜びと幸福をもたらすものです。

そして、恵まれない環境に置かれながら自分の責任を完うしてこられた教師や指導者の方々に感謝しています。南アメリカの国々における教会の発展に貢献して下さいた多くの宣教師に感謝しています。特に、そうした宣教師の御両親には感謝の気持ちでいっぱいです。見知らぬ土地へお子さんを送り出されて、不安と恐れを感じられたことでしょう。しかし、御両親の皆さんはそれが主のみこころであることを確信しておいでです。

最後に、私は自分の証に感謝しています。私は、天父が偉大な贖いのみ業を成し遂げるためにその生みたまえる独り子をこの世に送って下さったことを確かに知っています。また、イエス・キリストは復活され、今日も生きておられます。ジョセフ・スミスは神聖な使命を受けその使命を完うしました。ジョセフ・スミスの働きによって私たちは救い主イエス・キリストに関する真実の知識に到達できます。私はこれらの証を持てることに感謝しています。末日聖徒イエス・キリスト教会は真実の教会であり、地上における神の王国です。また私が少年時代から影響を受けてきた現代の予言者ス



ペンサー・W・キンホール大管長によってこの教会は管理され導かれています。私は、このことを知っていることに本当に感謝したいと思います。

この証、これこそが聖霊を通して得た私の確信であり、私の岩であり、私の支えです。私は今限りない感謝で満たされています。

自分の召された責任に対してあらゆる才能と時間、労力、そして持てるものすべてを捧げる決意しております。それによってこの感謝を表わすことができればうれしく思います。グラシアス。私は、これらすべてのことを、私たちの主イエス・キリストのみ名によりお話し上げます。

光明と真理



七十人第一定員会会員
セオドア・M・バートン

教会では、しばしば光明と真理について話されることがありますが、これらの言葉には一体どのような意味が含まれているのでしょうか。私はまだ科学者として日が浅かった頃、絶対零度という概念に関心を持っていました。絶対零度では、理論的に熱エネルギーが全く存在しないのです。このような温度は一体どの位冷たいのか見当もつきません。しかし、気温が氷点に近づけば近づくほど不快になるのはだれもが知っていることです。水は摂氏100度で沸騰し、摂氏0度で凍ります。しかし、絶対零度はそれよりもおよそ273度も低いのです。このような温度は、宇宙に行けばどのようなものか多少なりとも分かるでしょう。

少年時代、私は父と一緒にネバダにある鉱山の調査に行ったことがあります。私たちはそれぞれ懐中電燈を持っていきましたが、あまり長くいるつもりはなかったので予備の乾電池を用意していきませんでした。しかし、抗道は思ったよりも長く、冷たく、そして深かったです。鉱床のある所まで行き着かないうちに、父が電池を節

約するために私の懐中電燈を消すように言いました。鉱床の調査を終える頃には、父の懐中電燈が薄暗くなってきたので、私たちは引き返すことにしました。間もなくして父の懐中電燈が完全に消えてしまいました。再び私の懐中電燈をつけるまで、私たちは寒くて真っ暗な闇の中に置かれていました。その時の恐ろしさは今も忘れることができません。私の懐中電燈も鉱山の入口へ戻るまではもたなかったため、私たちは抗道の口から漏れてくるかすかな光をたよりに進んで行きました。入口に近づくにつれてだんだん明るさが増してきて、とうとうさんさんと輝く太陽の暖かい光の下に立つことができました。その時の安堵感は、どう表現していいかわからないほどでした。

それ以来、私は一体だれが好き好んで暗くて寒い所に住むだろうかと思うようになりました。光や暖かさよりも闇や悲しみを愛する人がいるのでしょうか。しかし、自ら知りながら主を拒んでいる多くの人々は、まさにそういった暗闇や寒さ、悲しみを選んでいることになるのです。ヨハネは、「神は光であって、神には少しの暗いところもない」(Ⅰヨハネ1:5)と記しています。

ここで、サタンの暗黒の世界と比較しながら神の光の世界について話してみたいと思います。サタンに従う人々は、外の暗闇に捨てられ「其所にて泣き悲しみ切齒する」(教義と聖約133:73)のです。暗くて凍るような場所に住まなければならないとしたら、どんなに惨めなことでしょう。これは通常私たちが想像する「地獄の燃える炎」とは全く別のものです。燃える炎というのは、キリストの光よりもサタンの暗闇の方を選択した人が感じる絶え間ない悔恨の念

のことです。

現代の啓示を通じて、私たちは「神の栄光は英智なり。すなわち、光明と真理なり」と教えられています。このような光と真理は、悪魔を決して寄せつけません。(教義と聖約93：36—37参照)

また、もし私たちが誠心誠意で神の栄光を表わそうとするならば、全身が光明に満たされて私たちの中に暗闇がなくなり、その光明に満ちた体はすべてのことを理解すると教えられています。(教義と聖約88：67参照)

さらに神の光について調べてみると、次のように書かれています。「その光は暗黒に輝くに暗黒はこれを覚らざりき。さりながら、汝らついにすなわち神を知るの日来らん。而して、汝ら神に生かされ神に依りて生かされん。

その時汝らはわれを見たることを、われ在ることを、またわれは汝らの中にある真の光にして汝らわが中にあることを覚らん。然らざれば汝ら充ち満つること能わざらん。」(教義と聖約88：49—50)

真理の光を探す者にとって、この言葉は大いなる約束です。

また、神の光が及ぶのは靈的な事柄に関してのみかという、そうではありません。聖典にはこのようになります。「而して今輝きて汝らを照らすその光は、汝らの眼を明るくする彼によりて来り。而もまた汝らの理解を生かす光と同じ光なり。

而してこの光は、神の前よりさし出でて広大なる宇宙に満ち充てり。

すなわち、この光はすべての物の中に在る光なり。これはすべてのものに生命を与え、而もすべてのものを支配する律法にして、すなわちすべてのものの中に在り、永

遠の内に在り、自らの王座の上に在る神の力なり。」(教義と聖約88：11—13)

神の光は、私たちを暖かくまた心地よく包んでくれる物質的な光でもあり、さらに万物を見通し、覆い尽くす力でもあるのです。言葉を換えて言えば、あらゆる種類の光は英智と真理に結びついているということです。

これは、イエス・キリストについてさらに深く語っている現代の啓示によって実証されています。「すなわち、キリストはいと高き所に昇れり、また同じくよろずの物の下にまで身を落せり、それにて彼はすべての物を含み以てすべての物の中に在りて、すべての物を貫き真理の光となる。

而してその真理は輝けり、こはキリストの光なり。また同じく彼は日輪の中に在り、而して日輪の光にしてまた日輪を造りしその力なり。

また同じく月輪の中に在り、月輪の光にしてまた月輪を造りしその力なり。

また同じく星の光にして、また星を造りしその力なり。

またすなわち汝らの立てる地を造りしその力なり。」(教義と聖約88：6—10)

このようにキリストの光は靈的な光だけでなく物理的な光をもその中に包み込んでいます。そして、私たちがいたる所で目にする光に象徴されるエネルギーがどのように形成されているかを理解する手がかりとなっているのです。

サタンは人の子らの間に入り込んで、人々の不従順や先祖の言い伝えを利用して光と真理を奪い去ってしまう悪の張本人です。しかし、主は子供たちを光明と真理の中で育てなさいと戒めておられます。(教義と聖約93：39—40) 光と対照をなすものは闇

であり、真理に反するものは偽りです。

今、私たちは予言者モロナイが声を大にして警告したことに耳を傾ける必要があります。「慎んで悪いものを神から出たと思っ
てはならない。また善いもので神から出たものを悪魔から出たと思っ
てはならない。

私の兄弟たちよ。あなたたちは善悪を判断する自由と権利を与えられているばかりでなく、その判断の方法は真昼と暗夜とを区別するように、過りなく完全に知れるほど明らかである。

すべての人々はみな善悪の区別を弁えるためにキリストの『みたま』を授かる。さて今私は判断の方法をあなたたちに教えよう。善を行えとすすめ、またキリストを信ぜよとすすめるものはみなキリストの権能によってその賜として来るのであるから、それが神から出たことは何の疑いもなく充分確に知ることができる。

これに反して悪をせよと説きすすめ、またキリストを信ぜずこれを否定し神に事えるなど説きすすめるものは何でもみな悪魔から出たと言うことは、何の疑いもなく充分確に知ることができる。なぜならば、悪魔とその使たちまた自分から悪魔に従う者たちは、このように働いて誰一人にも決して善いことをせよとすすめないからである。」(モロナイ 7 : 14—17)

人の内に宿る霊は永遠ですが、肉体はこの世だけで朽ちてしまうものです。従って霊は肉体よりも大きな力を持っているわけで、肉体を支配することができます。

私たちには、具合が悪いと感じることもあれば気分が良いと思う時もあります。しかし私たちの行動を肉体あるいは肉体の欲望に左右されるままにしておく必要はありません。私たちの内に宿っている霊は肉体

よりも強く、その霊を使って私たちは正しい行ないをするように自らを義務づけることができるのです。また、肉体と肉体的欲望を制御することができます。人間は自ら制することのできない生来の性癖と欲望とを持つ被造物だと考えるのは誤りです。また、持って生まれた欲望や熱情が非常に強いので自らを抑制できないというのも全くの間違いです。もし神が人を、自らを管理することのできないような仕組みにお造りになったとすれば、神は公正な御方とは言えません。

私たちの中には、普通の人よりも強い欲望を持っている人もいます。しかし、義なる神が私たちに理性と意志とを与えて下さったので、私たちは望みさえすれば、そういった欲望や情熱を抑制し制限することができます。私たちがこの自制力をサタンに与えない限り、サタンが私たちを支配することはありません。

救い主を除いて、いかなる人も己れの欲望や情熱を完全に抑えることはできません。しかし、神の助けがあれば制御することはできるのです。正しいことを行ない、神に近づくよう努力するにつれて、だんだんサタンの誘惑に打ち勝ち、イエス・キリストから放たれる光明と真理に従った生活ができるようになるのです。

私はひとつの聖句についてずっと考えてきたのですが、最近やっとその意味がわかりかけてきました。その聖句を読んでみましょう。「この故に、われ誠に汝らに告ぐ。われにかかわるすべては霊のことなり。われは何時たりとも、いまだ嘗て俗世の事にかかわる津法を与えたることなし。如何なる人にも、人の子らにも、わが造りし汝らの先祖アダムにも与たえることなし。

見よ、われはアダムに自ら自由意志を行うことを許したり。われは彼に誠命を与えしが、俗世にかかわる誠命を与えたることなし。わが誠命は霊に関わるものなればなり。わが誠命は肉体のものにも俗世のものにもあらず、また肉欲のものにも情欲のものにもあらず。」(教義と聖約29:34—35)

この聖句を理解するようになってから、物質的な存在や肉体に対する私の考え方が変わってきました。

什分の一や献金を納めることを例にとって考えてみましょう。私たちがこの地上で捧げるもので献金ほど物質的なものはないでしょう。しかし、神がこれを戒めとして与えておられるのですから、そこには霊的な根拠、あるいは什分の一や献金を納めることを裏づける永遠の見地に立った論拠があるはずです。神は私たちに、天の窓を開かれるかどうか試してみなさいと言われました。(マラキ3:10参照) その時神は、何を指してそう言われたのでしょうか。神は単に地上での祝福、あるいはこの戒めを守ればこの世で報いを受けられるという約束を表わしておられるのでしょうか。それとも私が考えるように、真理と英知に関する啓示といったような永遠性を秘めた霊的なものを指しておられるのでしょうか。そうした事柄が開かれた天の窓から注がれれば、私たちはを通して神と交わり、万物について理解することができるのです。

また、知恵の言葉についてはどうでしょうか。神は、その戒めに従順である人々に単に健康や耐久力というこの世限りの祝福だけを与えようとしておられるのでしょうか。ここで、神が知識の「秘れたる宝」についても触れておられることを忘れてはなりません。私が考えるに、この「秘れたる宝」

とは永遠の宝につながるものであって、これを用いることによって私たちは神の光とぬくもりの中に立ち返ることができるのです。外の暗闇の寒くてみじめな状態にいる人々には、このような平安は味わうことができません。

さて、もう一度話を絶対零度に戻すことにしましょう。そこには、理論的に熱というものが全く存在していません。私には、サタンと彼に従う人々が自ら受けていた真理と光から離れて喜びも幸福も一切存在しない冷たい闇の世界へと向かってとぼとぼと道を進んで行くのが見えるようです。

今まで話してきた事柄をまとめてみると、真理と光明とはすなわち全くの英知であるということになります。

ところで、世の中にはこの教会が多くの教会の中の単なるひとつにすぎないと考えている人々がいます。教会員の中にも、回復された福音が数ある宗教哲学のひとつであるとしか考えていない人がいるのです。私は特別な証し人のひとりとして、この教会が神によって基を据えられたことを心をこめて証申し上げます。この教会は普通の教会とは異なります。この教会はイエス・キリストの教会なのです。教会が教える福音の教義は、聖なる神の言葉です。また、光明であり、真理であります。これをないがしろにしたり他の宗教哲学と同様に考えたりする人は、人間にとって最大の誤ちを犯しているのです。この教義こそ私の証を支えてくれる真理であり光明であることをイエス・キリストのみ名により証致します。アーメン。

予言者の召し



十二使徒定員会会員
リブランド・リチャーズ

私はこの教会にあって、これまで4度、伝道の召しを果たす特権に恵まれましたが、その中で、予言者ジョセフ・スミスを仲立ちとする、福音の回復を通して与えられたこの教会の教えと、数多くの他の教会の教えを比較する機会がありました。私は自分がこの教会の会員であることに、心から感謝しています。

さて、その教えの中から少し例を挙げてみたいと思います。予言者ジョセフへの天父と御子の訪れという出来事から知ることのできる、天父と御子は別々の御方であるという事実、また墓からよみがえられた時のイエスと同じで、御二方が実在の御方であるという事柄について考えてみましょう。予言者ジョセフがこの素晴らしい示現を受けた当時、このような神を信じていた教会は、この世にひとつもありませんでした。

また私たちは、結婚を永遠のものとすることができるということ、そしてそれが主の御計画であるということを知っています。何と喜ばしい原則ではないでしょうか。この原則は、私に先立ってすでに永遠の世界

の人となつたといひ妻と、いつか再会する時が来るという確信を与えてくれます。前にも話したことがあります、私は主が与えて下さった素晴らしい家族や妻と自分を結ぶ愛の絆がないままに、来るべき永遠の時を過ごさなければならないと考えるくらいなら、死は霊と肉体のふたつが完全に滅び失せることだと信じるほうが、よほどましだと思っています。

私たちが回復を通して学んだ、もうひとつの偉大な真理に、幼な子にはバプテスマの必要がないという教えがあります。幼な子供もバプテスマを受けなければならないというのは、人間の誤った考えです。イエスは幼な子たちを抱き上げて祝福を授けられたくらいであり、主の教えのどこを探しても、そのような教えは見当たりません。

私たちが信じている素晴らしい教えの幾つかについて、他の教会の人々と話したことがあります、その多くの人がこう言うのです。「あなたの教えは受け入れることができるのですが、ジョセフ・スミスが予言者だというのは信じられません。」私はそれについて随分と考えました。「神は天にあるもの地にあるものを、ことごとく、キリストにあって一つに帰せしめようとした」(エペソ1:10)とパウロが言っているのは時満ちたる神権時代のことですが、その神権時代を開くために、神がひとりの14歳の少年を選ばれたことを、それは神の知恵に反したことだと考えるのは、まったく理屈に合わないことではないでしょうか。

この教えは他の素晴らしい原則へと、知識の門戸を開け放ってくれています。それは、霊が前世において存在したという原則、すなわち、私たちは文字通り天父なる神の子供であり、この地上に来る前に、神と共に

にいたいという原則です。

使徒パウロの言葉を読んでみましょう。
主は「ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。」(使徒17:26) また、パウロは次のようにも述べています。「肉親の父はわたしたちを訓練するのに、なお彼をうやまうとすれば、なおさら、わたしたちは、たましいの父に服従して、真に生きるべきではないか。」(ヘブル12:9) 私は神が自分の父親であるという教えを愛しています。イエスは祈りの時に、「天にいますわが父よ」とは祈らずに、「天にいますわれらの父よ」と祈られました。(マタイ6:9) これはとても素晴らしいことです。プライマリーの子供たちが「神の子です。わたしやあなた」と歌うのは、このためです。

主は主御自身のなさり方で予言者を召します。主は彼らをこの世に生まれる前から御存じでした。アブラハムの書の中には、主が霊のただ中にお立ちになり、その霊の中には、高貴で偉大な者があったと書かれています。しかし、その霊たちにしても、自分を高貴で偉大な者たらしめることをしていなければ、そうはなれなかったことでしょう。主は彼らについて、こう言っています。「これらの者をわが統治者となさん。……アブラハムよ、汝はこれらの者の一人なり。汝は生れざる前に選ばれたり。」(アブラハム3:22-23) 何と素晴らしい教えではないでしょうか。主はこれらの霊の真ん中に立っておられました。そしてその中にはこの現世において、神の予言者となった人々が幾人かいたのです。

エレミヤが予言者に召された時のことについて、皆さんは御存じのことと思います。

エレミヤは理解できませんでした。それに対して主はこう言われました。「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、あなたを知り、あなたがまだ生まれないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の預言者とした」(エレミヤ1:5) もしエレミヤが前世で存在していなかったとしたら、主は彼を聖任できなかつたはずで、また、エレミヤがこの地上における主の代弁者のひとりとなるにふさわしく、自分自身を備えさせるために、霊界でそれなりのことをしていなかったとしたら、生まれる前に、神から聖任されることもなかったでしょう。まったく同じことが、予言者ジョセフについても言えます。その時のことにさかのぼってみたいと思います。

かつて天で戦いがあったということ、私たちは教えられています。戦いの様子がこう書いてあります。「ミカエルとその御使^{ツバキ}たちが、龍と戦ったのである。」しかし、龍(すなわちサタン)は地に投げ落とされてしまいました。その時、次のような大きな声が聞こえました。「地と海よ、おまえたちはわざわいである。悪魔が…激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである。」(黙示12:7-9, 12) そして、悪魔は「食いつくすべきものを求めて歩き回」り、(1ペテロ5:8) 今までもずっとそれをし続けてきたのです。サタンは天の群れの3分の1を味方につけましたが(黙示12:4参照)、天を追われた時に、彼らは霊界で得ていた知識を携えて来ました。一方、私たちはこの地上に生まれて来る時に、一時的に知識を取り上げられることになったのです。

使徒パウロはこう書いています。「なぜなら、わたしたちの知るところは一部分で



あり、預言するところも一部分にすぎない。
全きものが来る時には、部分的なもの
はすたれる。……

わたしたちは、今は、鏡に映して見る
ようにおぼろげに見ている。しかしその時
には、顔と顔を合わせて、見るであろう。
わたしの知るところは、今は一部分に
すぎない。しかしその時には、わたしが
完全に知られているように、完全に
知るであろう。」
(I コリント 13 : 9-10, 12)

これは、私たちがこの地上に来る前、
すなわち霊界にいた時に知っていた
すべてのことが、いつか完全に回復
される時が来るということでは
ないでしょうか。

私たちがどうして知識を失ったかという
ことについての最も良い説明は、救い主の
生涯の中に見ることができます。ヨハネに
よる福音書の第1章にはこう書かれていま
す。「初めに言^{was}があった。言は神と共にあ
った。言は神であった。

すべてのものは、これによってできた。
できたもののうち、一つとしてこれによら
ないものはなかった。

この言葉に命があった。そしてこの命は
人の光であった。」(ヨハネ 1 : 1, 3, 4)

さらに、その後の方にはこう書かれていま
す。「そして言は肉体となり、わたした
ちのうちに宿った。わたしたちはその栄光
を見た。それは父のひとり子としての栄光
であって、めぐみとまことに満ちていた。」
(ヨハネ 1 : 14)

この聖句から、イエスが万物を創造され
たということがわかります。しかし、それ
にもかかわらず、イエスはこの地上に生を
受けて来られた時、ほかの子供たちと同じ
ように、歩くこと、話すことを学んでい
かなければなりません。イエスは12歳
の時神殿で学問のある人々と論じ合うほど
でした。後にイエスはこう言っています。
「子は父のなさることを見てする以外に、
自分から何事もすることができない。」(ヨ
ハネ 5 : 19)

サタンは霊界でのことを覚えており、天
上の戦いの時にだれと戦ったかを知って
いました。それで神の予言者を殺すことに躍
起になってきたのです。イエスがオリブ山
からエルサレムの町を眺めて次のように言
われたのは、そういうことがあったからで
す。

「ああ、エルサレム、エルサレム、預言
者たちを殺し、お前につかわされた人たち

を石で打ち殺す者よ。ちょうど、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに、おまえたちは応じようとしなかった。

見よ、お前たちの家は見捨てられてしまふ。

…『主の御名（みな）によってきたる者に、祝福あれ』とおまえたちが言う時までには、今後ふたたび、わたしに会うことはないであろう。」（マタイ23：37-39）

今、私たちがこの世に生を受けているのは、パウロが言っているように、主のみ名によって遣わされているからなのです。

「したがって、信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである。

……宣べ伝える者がいなくては、どうして聞くことがあろうか。

つかわされなくては、どうして宣べ伝えることがあろうか。」（ローマ10：17、14-15）

私たちは遣わされた者なのです。

私皆さんに何を言おうとしているのか、例を挙げて説明してみたいと思います。モーセが生まれた時、悪魔はパロの心に、イスラエルの男の子を皆殺しにせよとささやきました。その前に生まれていた子供は数多くいたのですが、サタンはモーセに対して、前もって手を打っておかなければならなくなる時が来るということを察知していました。皆さん御存じのように、モーセの母親は葦で作ったかごにモーセを入れて川に置き、その命を救いました。そしてパロの娘がモーセを拾い上げ、養い育てたわけです。

イエスの誕生の時も、サタンはヘロデの

心の中に、ベツレヘムとその周辺の、2歳以下の子供を皆殺しにするようにという考えを吹き込みました。それ以前に生まれていた子供は何人もいましたが、サタンは救い主に対して、前もって手を打っておかなければならなくなる時が来るということを察知していたのです。救い主も、サタンと3分の1の霊が追い払われた、あの天上の戦いに加わっておられました。

わずかに14歳の少年ジョセフ・スミスが祈るために森に入って行った時、闇の力が彼の上ののしかかり、ジョセフは破滅してしまふのではないかと思いました。しかし最後には、その祈りがかなえられて、光の柱が天降り、サタンの力から解き放たれたのです。サタンはそのジョセフ・スミスという人間を、前もって始末しておかなければならなくなる時が来るということを承知していたのです。なぜなら、ジョセフも、神がわが統治者となさんと言いたもうた、高貴にして偉大なる者のひとりであったからです。

モルモン経を読むと、リーハイは荒野にいた時息子のヨセフに、主がエジプトに売られたヨセフに対して、終わりの日に彼の子孫の中から、モーセのようなひとりの予言者を起こすと約束したもうたということを話したとあります。（IIニーファイ3：6-9参照）そして聖典の中では、モーセのように神と共に歩き、話した予言者はイスラエルの中に起こらなかったと書かれています。（申命34：10参照）これはジョセフ・スミスが生まれる3,000年も前に、主がその子孫の中から起こすと、エジプトのヨセフに約束された予言者なのです。神はその予言者の名前はヨセフと唱えられ、その父の名もまたヨセフと呼ばれるということ、

また、その予言者は「わが言葉を…宣べ伝える権能をこれに授けん」と言われました。

(Ⅱニーフアイ 3 : 11, 15)

予言者ジョセフ・スミスは私たちに、モルモン経、教義と聖約、高価なる真珠、そして、ほかにも数多くの記録を伝えてくれました。私たちが手にしている記録から見る限り、かつて地上に生を受けた予言者で、ジョセフ・スミスほど啓示された真理を、私たちにもたらしてくれた予言者はいません。主は次のように言われました。「しかして、ただわが言葉を宣べ伝えるのみならず、またすでに汝の子孫の中に伝わりたるわが言葉をかれらに証明する能力をもこれに与えん。」(Ⅱニーフアイ 3 : 11) これはどういう意味でしょうか。それは、聖典の解釈について一致できないというところから今なお増えつつある、数多くの人間の教会の中であって、主はこの新たな予言者に、すでに人々に与えられている聖典を理解する力を授けられるということです。

そして神は、彼は「わが民を救う」(Ⅱニーフアイ 3 : 15) とつけ加えられました。なぜでしょうか。それは彼が、人に救いをもたらすための福音の儀式を執行する権能、すなわち神権を受けるとのことなのです。また、次のようにも書かれています。「しかして、われは……わが目の前に於て彼を大いなる者となさん。」(Ⅱニーフアイ 3 : 8) 世の人々が予言者ジョセフ・スミスをどう思おうと、神の目の前に大いなる者になるという、主御自身の言葉があるのです。

ここで私自身のささやかな経験を話してみたいと思います。それは私が伝道中に経験したことです。予言者は神のみ言葉を宣べ伝えるだけでなく、すでに人々に与えられている神のみ言葉を民に証明する能力を

授けられるということを書きましたが、私のこの経験は、それを説明するものです。

オランダにいた時のことです。私はある実業家たちの聖書研究会に出て、話をするようにとの招きを受けました。ひとりの有名な家具商の家で開かれたその会の出席者は20人ほどで、めいめいに聖書を持っていました。そして、その中に紅一点、その家の主人の娘も顔を見せていました。彼らは私に1時間半の時間を与え、教会が進めている死者のためのみ業、霊界での伝道、死者の身代わりのバプテスマなどを含め、万人の救いについて話すように言いました。私は聖句を挙げ、彼らに自分の聖書からその箇所を読んでもらうようにしました。そして、それを終えてから、私は聖書を閉じ、反応を待ちました。

最初に口を開いたのは、その家の娘でした。彼女はこう言うのです。「お父さん、どうもよくわからないわ。お父さんはこういう聖書研究会では、どんなことについても結論的なことを言ってきたでしょう。それが今晚は何も言わずに、黙りこくってしまって、今までこんなことはなかったわよ。」

その父親はそれにうなずいて、こう言いました。「確かに、何も話すことがない。この人は私たちが今まで耳にもしなかったことを、しかも私たちが使っている聖書から教えてくれたんだよ。」

これと似たような話は幾らでもあります。神が皆さんを祝福したもうように。私は神が予言者ジョセフ・スミスを通して福音を回復して下さったことに感謝しております。私の証を主イエス・キリストのみ名によって皆さんにお伝えします。アーメン。

「父たる者に 大いなる事求めらるる」



十二使徒定員会会長
エズラ・タフト・ベンソン

主はこう宣言しておられます。「サタンは、幼き小兒ら成長してわが前に責任を知り始むる年までこれを試むる能力なければなり。」そして子供たちに責任を取る能力のない幼児期を与えたのは、「その父たる者に大いなる事求めらるる故」であることを明らかにされたのでした。(教義と聖約29:47-48参照)

そうです。今、父たる者には大いなることが求められています。主は父親に何と大きな信頼を寄せ、何と大きな責任を課しておられることでしょうか。今日ほど父親にこの大いなることが求められている時はありません。

父親の務めについて思いをはせる時、私は、その子孫に正義の道を忠実に教えた全人類の父アダムのことを忘れてできません。また父祖アブラハムについて考える時、この地上でアブラハムに比肩し得るほどの信仰を持った父親はいなかったと思います。ヤコブすなわちイスラエルの勤勉さと堅忍については、敬虔にも似た尊敬の念を抱いています。さらにリーハイがその息

子たちに示した模範に対して、リーハイという名前を心から尊敬しています。

この神権時代においては、予言者である息子の証を信じたジョセフ・スミス・シニアのことをまず第一に思い浮かべます。また教会の6代目の大管長であり、10代目の大管長の父であるジョセフ・F・スミスの気高い模範も忘れることができません。

私がいこれらの高潔な人々に畏敬の念を抱くのは、彼らが偉大な予言者であったというよりも、偉大な父親であったからです。つまり彼らは主が求めておられることを理解し、その期待に応えるよう生活していたからです。

この場を借りて特に父親の皆さんに、主が私たちに求めておられる3つの特別な事柄についてお話したいと思います。これらはどのような父親であっても、ごく普通に勤勉に努力すれば十分実行できる事柄です。この3つのことを実行するならば、家庭は平安で満たされ、私たちの名前は後世に語り継がれ、永遠に続く家族の交わりを維持することができるでしょう。

父親の皆さん、主が私たち父親に求めておられる大いなる事柄とは何でしょうか。

第1に、家庭を主の愛とみたまが宿る所とすることです。子供たちは純粹無垢であり、悪を知りません。かと言って地球に送られて来る時、善も悪も何ら影響を及ぼさない環境の中に送られて来るわけではありません。家庭という、自分の将来を決める考えや思い、標準などに良かれ悪しかれ多大の影響を与える場所に送られて来るのです。

主が私たち一人一人に求めておられる偉大なこととは、善意が育まれるように、積極的に楽しく生きることを教える家庭を創

ることです。やがて皆さんの中では家具の値打ちとか、浴室の数ではなく、子供たちが家庭で愛を感じ、受け入れられているかどうかといったことが問題となってくるでしょう。大切なのは、幸せで笑い声の絶えない家庭がいいのか、あるいは口論や論争の絶えない家庭がいいのかということです。

子供たちが両親から良い影響を受けるには、まずその前に両親が愛と尊敬を表わす必要があります。ジョセフ・F・スミス大管長は次のように述べています。

「父親の皆さん、もしあなたが子供を福音の原則のうちに教えたいと思うならば、……さらにあなたに従順であって一致して欲しいと思うならば、子供を愛しなさい。そしてあらゆる言葉と行ないによって、あなたが愛していることを証明しなさい。あなたのために、あなたと息子たちの間になくてはならない愛のために、たとえ息子たちがわがままであっても、彼らに話す時、怒ってはならない。命令調で荒々しく話してはならない。やさしく話しなさい。もし必要ならばひざまずかせ、共に泣きなさい。できれば共に涙を流しなさい。息子の心を和ませなさい。あなたに対してやさしい気持ちを抱かせなさい。むちや暴力を用いず、説教と偽らざる愛をもって論理的に話し合いなさい。このようにして子供たちを治めることができないとすれば、……子供を治める方法は世の中に全くなくなるであろう。」(ジョセフ・F・スミス「福音の教義」pp. 305-306)

家庭を心のよりどころ、幸福の場にするために私たちにできること、私たちがしなければならないことはいろいろあります。しかし何が期待されているかを人に告げる方が、その責任をどう果たすかをこと細か

に描いて見せるよりもっと大切であると、私は考えています。

あなたがひとたび自分の人生最大の目標は妻子が幸福になるよう見守ることであるという決心をしたならば、最善を尽くしてそれを行なえばよいのです。私は単に物質的な欲望を満足させることについて述べているではありません。感謝すること、ほめること、慰めること、励ますこと、耳を傾けること、愛することなど、人間にとって最も必要なことを満足させることについて話しているのです。

あなたの子供のしぐさを見て
喜びを感じるならば
子供を慈しみ、愛しているならば
それを子供に伝えなさい

人が話し出すまで
感謝の言葉を隠しておかないで
ほめられることをしたならば
そのことを話しなさい

大切なのは名声でもお金でもない
明るい笑顔
心から温かく認めること
それが子供に喜びを与える
ほめるべき時だと感じたら
すぐに実行に移しなさい
あなたからの愛ある言葉で
心と心の絆を固く結びなさい
(パートン・ブレイリー、*Do It Now*「今行ないなさい」より転載)

皆さんのこの世における最大の責任は父親としての務めを果たすことです、次の言葉はデビッド・O・マッケイ大管長が父親

に宛てた言葉です。

「家庭よりも、仕事あるいは娯楽、または副収入に心を向けると、その瞬間から、人は下落の道をたどる。家庭よりも社交クラブの方に魅力を感じるようになったら、直ちに赤面して告白すべきである。私は人生で最も大切な機会を捕えられず、真の男らしさを吟味する最終試験に落第しました」と。

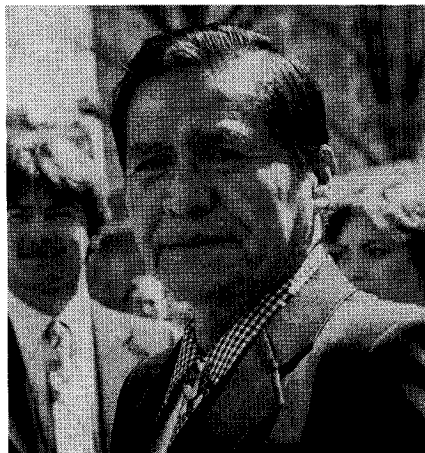
いかに見すばらしい丸太小屋であろうとも、家族がひとつになり愛がみなぎっている家庭は、最も神の目にかなう、しかも人類の未来を担う家庭である。いかに財産を持つといえども、これに及ぶ人はいない。そのような家庭にこそ、神は奇跡を行なうことができ、またそうされるのである。清い家庭に住む心の清い人々は、常に天よりのささやきを聞くことのできる距離にいるのである。」

(デビッド・O・マッケイ, *Church News* 「チャーチ・ニュース」1968年9月7日付, p. 4)

父親の皆さん、皆さんの家庭の雰囲気はどうでしょうか。

第2に、子供たちに真理の原則を教える理解させることです。主は予言者ジョセフ・スミスに与えた啓示の中で、「小児たちを光明と真理の中に導き来れ」と父親に命じられました。主はそれを怠っていた人々を叱責しておられます。私たちは皆、ジョセフ・スミス・ジュニア、フレデリック・G・ウィリヤムス、シドニー・リグドン、ニューエル・K・ホイットニーに与えられた第93章の原則について十分知り尽くしていると思います。

この啓示の中で、主はサタンが「来りて、不従順により、また先祖の言伝えによりて、人の子らにより光明と真理を取り去りぬ」



(教義と聖約93:39)と述べられておられます。言うまでもなく、「先祖の言伝え」とは父親の悪い模範と教えです。

繰り返すまでもないことですが、この世は星の光栄の世界です。子供たちはそのような環境の中で成長しています。人生における最も野卑で邪悪な面を描くテレビの番組や映画に毎日のようにさらされているのです。また、霊性を失う行動に駆り立てるように巧みに計画されたスローガンや広告の雨の中にいるのです。さらには、公立の学校で使っている教科書や教材の中にも、単なる理論や、あげくのはてには偽りを真理と称して提示されていることがしばしばあるのです。

父親の中には、子供の考えや標準を形成する責任を、単に母親とか学校に転嫁してしまっている人がいます。また、テレビや映画で映し出されることが子供たちの価値観を形成していることもしばしばです。

私たちは家庭で子供たちに善悪の判断の規準を教えますが、学校がいつもそれを援助してくれるとは考えるべきではありません。

現代の学校制度においては人間が下等動物から進化したものであるという理論に関して、誤った概念を導入しているところが多く見受けられます。また、絶対的な道徳的価値の存在を否定し、信仰を超自然的なものとして排斥しています。さらに不道徳な行為、同性愛やその他の性的倒錯行為を「新しいライフ・スタイル」として認め、性の解放を容認しているのです。

このような教えは若者の信仰や道徳観を弱めるだけでなく、絶対的な律法を授ける神の存在、ひいてはイエス・キリストが神の御子であることを否定するものです。確かに、絶滅の危機に瀕している動物の保護を訴えながら、一方で胎内に宿っている人間の子の墮胎を認めようとしている人々に、倫理的な矛盾を感じないわけにはいきません。

解決策はあります。そしてその解決策こそ、主がイスラエルの父親に期待しておられる大いなる事柄なのです。父親の皆さんは時間を取って子供たちが習っていることを調べ、誤った教えと知識を一つ一つ訂正していかねばなりません。

子供たちが学校で何を学んでいるか、またその中で訂正すべきことはないか直接確かめるために、毎晩子供たちに質問をしている父親を私は知っています。また彼らは、必要であれば主が啓示されたことを子供たちに伝えるのです。これは「光明と真理はかの悪魔を棄つ」（教義と聖約93：37）の原則の応用です。

新しい日曜日の集会統合スケジュールの実施によって、父親は、安息日に今までよりも多くの時間を取って子供たちを教えることができるようになりました。この時間は家族が聖典を勉強し、子供たちが両親か

ら教えを受ける最高の機会です。安息日に絶えず子供たちを教えている家庭には大きな祝福があるでしょう。

それでは安息日にどのようなことを教えたらよいでしょうか。主は両親が教えるべき具体的なカリキュラムを明らかにされました。「汝らの子らに教えよ、すなわちすべての人は何所にあるもことごとく悔い改めざるべからず。然らざれば彼ら決して神の王国を嗣ぐこと能わず。汚れたる者は王国に住むこと能わず、すなわち神の御前に住むこと能わざればなり。」（モーセ6：57）

この啓示の中で明らかにされているように、墮落の教義、キリストの使命と贖い、さらにはキリストに対する信仰、悔い改め、罪の赦しを受けるためのバプテスマ、聖められた生活を送るための手段となる聖霊の賜などの福音の第一原則と儀式について教えることができます。（モーセ6：58-59参照）

兄弟の皆さん、私たちは教会の基本的な教義について教える時、子供たちが理解できる方法で教えなければなりません。父親は教えているのですが、子供たちは何も理解していないといったことがよく見受けられます。このことから、福音を学び、研究するのは父親の責任であることがわかったと思います。

永遠の祝福を受けている義しい子供たちは単に肉体を父親から受け継ぐだけではありません。父親の教えと模範によって新たな霊の命を吹き込まれるのです。

偉大な父親は子供たちをキリストに導く人です。

第3に、自分の家を整えることです。これは初期の教会の父親たちに主が与えられた勧告ですが、これはまさに今日の人々に

も当てはまることです。

自分の家を整えるには、神の戒めを守らなければなりません。そうすれば家庭にあってあなたと妻、あなたと子供たちの間に愛と一致を育むことができます。また毎日家族の祈りをする事です。そして家族がイエス・キリストの福音を理解できるように教える事です。家族一人一人が神の戒めに従うことも大切です。また両親が神殿の推薦状を受けられるようにふさわしく生活をし、家族が皆昇栄の儀式を受けて、共に永遠に結び固められることです。さらに多額の借金を避け、家族が什分の一と捧げ物を正直に納めることです。

父親の皆さん、皆さんの家庭は整っているでしょうか。

主はジョン・テイラーに与えた啓示の中で、神権者に次のようなメッセージを述べておられます。「私は家族の長たる者に神の律法に従って家を治めるように求める。そして神の前に清くなるよう教え、家庭の中から邪悪を追放せよ。私はあなた方を祝福し、あなた方と共にいると主は言われる。あなた方は聖所に共に集り、私を呼び求めて正しいことを尋ね求めよ。私はあなた方の祈りに答える。そして私のみたまと権能はあなた方と共にあり、私の祝福はあなた方とその家族、住居、家庭、あなた方の鳥の群れ、家畜の群れ、畑、果樹園、ぶどう園、そしてあなた方が所有するものすべてに注がれる。あなた方は私の民であり、私はあなた方の神である。……なぜなら私の言葉は出て行って、私の業は達成せられ、私のシオンは確立されるからである。」

(1882年10月13日、ソルトレーク・シティーにて大管長ジョン・テイラーを通じて与えられた啓示、教会歴史部保管庫所蔵タイプ

原稿 pp.2 - 3)

確かに今日は父親に大いなることが求められている時です。しかも主御自身がそれを求めておられるのです。すなわち、次の3つの条件を満たすことです。主の愛とみたまが宿る家庭を創ること、子供を光明と真理の中で育てること、家庭を整えることです。

「お父さん」という聖なる称号は全能の神が与えて下さったものです。教会では人は召され、解任されます。しかしこの世の父親という召しは解任されることがあるでしょう。

私は全世界の教会を旅行し、忠実な家族の皆さんを見るたびに、「神よ、両親の模範に感謝します」と祈ります。また忠実な若人を見、彼らの働きを誇りに思う時、「神よ、熱心な両親に感謝します」と述べます。

父親と呼ばれる人は、単に地位や富を求める人ではありません。自分の家族が昇栄して日の光栄の王国に行くことを望み、そう努力し、そう心に決める人です。その報いがなければ、何もかも空しいものになってしまうのです。

家族とその子孫の全員が、ひとりも欠けることなく日の光栄の王国の天の家にとどり着くことを目標にしている家族を、私は知っています。彼らは家族の集まりがあるたびにそのことを検討し、そのほかにもしばしば会ってはそのことについて話し合っています。神の祝福がイスラエルのすべてで父親の上であって、家族という囲いの中で行なうみ業を十分に果たすことができるように、私たちが主の助けを得てこの最も大切な責任を成し遂げることができるようにイエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

断食献金—隣人に対する 私たちの責任を果たすこと



管理監督
ビクター・L・ブラウン

今宵、この非常に大勢の神権者の皆様にお話するにあたり、謙遜に、心の中で祈りつつお話致したいと思います。割り当てとしていただいたふたつのテーマについて述べるつもりであります。初めてのテーマを御紹介するにあたり、旧約聖書の中で予言者イザヤの語った言葉から読んでみましょう。

「わたしが選ぶところの断食は、悪のなわをほどき、くびきのひもを解き、しえたげられる者を放ち去らせ、すべてのくびきを折るなどの事ではないか。

また飢えた者にあなたのパンを分け与え、さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ、裸の者を見て、これに着せ、自分の骨肉に身を隠さないなどの事ではないか。

そうすれば、あなたの光が暁のようにあらわれ出て、あなたは、すみやかにいやされ、あなたの義はあなたの前に行き、主の栄光はあなたのしんがりとなる。

また、あなたが呼ぶとき、主は答えられ、あなたが叫ぶとき、『わたしはここにおる』と言われる。

飢えた者にあなたのパンを施し、苦しむ

者の願いを満ち足らせるならば、あなたの光は暗きに輝き、あなたのやみは真昼のようになる。

主は常にあなたを導き、良き物をもってあなたの願いを満ち足らせ、あなたの骨を強くされる。あなたは潤った園のように、水の絶えない泉のようになる。』（イザヤ58：6-11）

この聖句に注目して、ハロルド・B・リ一大管長はこうに言っておられます。

「断食をすることによって受ける素晴らしい祝福については、各々の神権時代にはっきりと述べられています。…イザヤ書58章を調べてみると、主がなぜ私たちに断食献金を納めるように望んでおられるのか、なぜ断食をするように望んでおられるのか、はっきりとわかるはずで。それは、この様にふさわしくなることによって、私たちが呼び求める時に主がいつでも「わたしはここにいる」と言われるためなのです。皆さんは、呼んでも主が答えられないような状態になりたいと思ったことがあるでしょうか。私たちが嘆きの時に呼ばれる時、主が私たちと共におられないでしょうか。私は今、これらの原則について考えてみる必要があると思います。なぜなら、私たちが主の祝福をもっともっと必要とする日が、また、主の裁きが何の手心も加えられずに、全地球上に注がれる時が間もなくやって来るからです。（『聞いて従え』福祉農業集會での話から、1971年4月3日、p.14）

J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長はこうに言っています。

「教会のすべての救済事業の基本原則は、それが、断食献金や他の自発的な寄付や献金によって進められなければならないということである。これは主によって定められ

た様式である。什分の一はもともとこの目的で計画されたものではない。したがって、最後の窮境においてしか用いてはならない。」

(マリオン・G・ロムニー『私達の第一の目的』同上、p.8)

断食献金は、貧しい人々を祝福するために与えられた財政的な律法です。長い間、断食献金は、食べなかった2食の食事代に相当する額を納めるべきだというふうに理解されてきました。この認識は、初期の頃会員たちは一般に、断食によって食べなかった食物そのものを差し出すよう求められていたことによるのです。状態があまりにもひどく、お金はほとんど価値がなかったのでしょう。後に、ひとりにつき1ドルで十分だろうというようになってきたようです。

しかしながら、近年、キンボール大管長は断食献金について言っておられます。「私は、断食した2食分の金額ではなく、できる状態であればもっと多く、10倍以上の金額を惜しみなく納めるべきであると考えている。」(「大会報告」1974年4月、p.184)

ここで知っておかなければならない重要なことは、断食献金は自由意志による捧げ物であり、その額については個人に決める責任があるということです。什分の一についてはそうではありません。什分の一はその年の収入の10%です。断食献金の額については個人に任されていますが、生ける予言者は、私たちがもっと惜しみなく納めるべきだと言っています。私たちがこの勧告に忠実に従うことにより、断食献金ですべての倉庫制度を十分運用できるとしたら、素晴らしいことではないでしょうか。

どれだけ惜しみなく献金すべきかについては、おそらく次の聖句が何らかの指針に

なるでしょう。初めは、教義と聖約42:30からです。これは奉獻の律法に関して予言者ジョセフ・スミスに与えられた啓示です。

「見よ、汝ら貧しき者のことを思い起し、彼らに与えざるべからざる扶助のために、破るべからざる誓約と証文とを以て己が財物を神に奉獻せよ。また汝らの財物を貧しき者に分ち与うれば汝らこれをわれに為すなり。汝らこれらの財物を、わが教会の監督とその副監督……の前に捧げよ。

この故に、すべての余りはこれをわが倉庫に貯え置きて、教会の高等評議員会および監督とその評議員会らの命ずるところにより、貧しき人々および乏しき人々に給与し……。」(教義と聖約42:30-31, 34)

主はこの原則を、何度も繰り返して述べておられますが、教義と聖約70:7にもこのようにあります。

「さりながら、彼らの必要なる物に対する必要以上に利益を受けたらば、須らくこれをわが倉庫に納むべし。」(教義と聖約70:7)

さらに皆さんは、ある役人がイエスに、何をしたら永遠の生命を受けられるでしょうかと尋ねた時のことを覚えておられるでしょう。救い主は言われました。

「『いましめはあなたの知っているとおりで、』『姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証を立てるな、父と母とを敬え』すると彼は言った、『それらのことはみな、小さい時から守っております。』イエスはこれを聞いて言われた。『あなたのする事がまだ一つ残っている。持っているものをみな売り払って、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして私に従ってきなさい。』彼はこの言葉を聞いて非常に悲しんだ。大金持であった

からである。イエスは彼の様子を見て言われた、『財産のある者が神の国にはいるのはなんとむずかしいことであろう。富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい。』

(ルカ18：20-25)

再び教義と聖約から見てみましょう。「それは、わが生きる者の為^{ため}に造りて備えたるこの世の幸福を掌^{つかさど}る者として、すべての人をしてその責に任せしむるは主なるわれ必要とするところなればなり。

主なるわれは諸々の天をあげ、わが手づから創れるもの、すなわちこの地を築きたり。されば、その中にあるよろずのものはわがものなり。

されどその事たるや、必ずわが道に適い^あて行われざるべからず。見よ、この道は主なるわれ、わが聖徒らを扶養するため命を下したるところにして、貧しき者は高くせられ、それにて富める者は低くせられんことこれなり。地は物に満ち足りて余りあり。然り、われよろずの物を備えて人の子らにこれを与え、人各々を自由意志によりて動く者となす。

この故に、もし何人たりともわが造りし多くの物の中より取り、わが福音の律法に従いてこれを貧しき者乏しき者に自己の取前をわかつことをせざる時は、悪人と共に地獄に落ちて苦悩を受け目を挙げて望み視ん。」(教義と聖約104：13-14, 16-18)

数年前に、ジョン・H・グローバーク長老からいただいた手紙の一部を引用して断食献金についての私の見解をしめくりたいと思います。グローバーク長老は、その時トンガの伝道部長でした。

「余剰の断食献金として1,000ドルの小切手を同封します。普通ならこの手紙はこ

れで終わりなのでしょうが、私が最近経験したことをもう少しつけ加えたいと思います。

お気づきかどうかわかりませんが、トンガは財政的には世界の中でも最も貧しい国のひとつです。平均賃金は、運よく仕事につけたとしても1時間あたりたった12セントぐらいです。

先日、行くだけでとても大変な、この遠くの島を訪れました。そして夕方近くに、善良なひとりの未亡人の姉妹が住んでいる家に行きました。

初めて彼女の小屋に近づいた時は、太陽もまだかなり明るかったので、彼女の環境が大変貧しいことに気がつかないわけにはいきませんでした。初めのうちは、雨が降っていました。泥と、物の腐った臭いと、干し魚のこびりついた臭いがむっと鼻をつきました。しかし数年も離れていた教会員と共に集う楽しさと、長い間待っていた訪問への感謝の涙のおかげで、すぐに環境の不快さは、一時的にどこかへ行ってしまいました。

私たちは、彼女の国の言葉でお話をしましたが、彼女が、教会に対する愛と信仰と、受けているすべての祝福について話している間、私は彼女の、見たところ明らかに貧しい暮らし向きについて考えないわけにはいきませんでした。……あらゆる種類の考えが、私の頭の中をよぎり、あれこれと思ひめぐらさなければなりません。そして突然、祝福と貧困と奉仕について書いてある場所に気づきました。ふと見ると、彼女は小屋の中に入って行ったのが、今やふろしき包みを持って来たところでした。

突然一筋の光が射し込んできたような感じがしました。そして、断食献金という言葉が水がせきを切って流れてくるように、

私の心の中に押し寄せてきたのです。私は、あまりにも突然に、しかもはっきりと彼女を断食献金で援助しなければならないという啓示が与えられたことに我を忘れていました。ですから、彼女がふろしきから3ペンス硬貨(約3セントにあたる硬貨)を取り出して、静かに、「これは私の断食献金です。…貧しい人を助けるための」と言った時に、私がどんなに驚き、不意をつかれたか、想像に難くないでしょう。

私は、断食献金は、彼女を助けるためのものでこそあれ、彼女が他のだれかを助けるためのものでないということを説明したい思いにかられました。しかし、その言葉はとうとう口から出てきませんでした。というのは、涙にかすんだ目を通して、初めに3ペンス硬貨に、次に善良なその姉妹に目を移した時、すべての背景が変わっていたからです。

そのあばら屋は輝く大邸宅になり、泥は金でした。……そして、その世界は、しばしの間そのままのように思われました。すべての自然が静止して天からの声に耳を傾け、全宇宙に慰めの言葉が満ちているようでした。

『こころの貧しい人たちは、さいわいである……天国は彼らのものである。』(マタイ5:3)

沈みゆく太陽が一日の終わりを告げた時、それは、彼女の美しい奉仕の生活に別れを告げる時でもありました。

私は3ペンス硬貨を受け取りました。そして、この小切手を書いている間中すべての経験が再び私の心を満たし、『一体3ペンス硬貨が何個あれば1,000ドルになるのだろうかと考えています。』

私は、今晚出席しているすべての監督の

皆さんに、断食の律法を教える時や、これらの神聖な献金を、賢明に、思慮深く使って貧しい人々を助ける時に、この素晴らしいトンガの未亡人を思い出していただきたいと思います。

この素晴らしい経験の余韻が残っているうちに、今度は、ステーキ部とワード部の予算についてお話したいと思います。私たちは、多くの教会員が財政的の圧迫のもとで努力して下さっていることについて大変心配しています。監督は特に、プログラムがあまりにも出費のかさむものとなり、そのために会員に金銭的な負担が生じることのないようにする責任があります。指導者はともすると、自分に出せるお金はほかの人人も出せると考えがちです。最近受け取ったある母親からの手紙を引用して説明しましょう。

「9月には、青少年はバレーボールのユニフォームを買うお金をつくるために、週のうち3晩と土曜日の朝にピザを作って売りました。また、クラス・パーティー、若い女性新入歓迎会、指導者会、それにワード部奉仕会がありました。

10月と11月には、週に3晩バレーボールの練習と試合があり、ワード部食事会、ハロウィーン・パーティー、ステーキ部のミッドウィークファイアサイド・バーンダンスが行われました。

1月にはバスケットボールのゲームがあり、週に3日、ロードショーのリハーサルが行われ、スキーパーティー、スノーパーティー、ステーキ部キャンプ集会、150周年記念プロジェクトのための仕事会が少なくとも月の22日を費やして行なわれました。

これ以上、このワード部の状況を続ける必要はないと思いますが、知っておいてい

ただきたいことがまだあります。スレーブ・オークション、車洗い、ドーナツ販売、シンキングテレグラムプロジェクト、夏までに土曜の朝ごとに芝刈りをする、これらが、アイダホでの特別活動の資金獲得のために行われることになっています。また5月には、アロン神権の少年少女の遠足、スカウトのキャンプが2回、ビーハイブのキャンプが1回あります。

ゴードン・B・ヒンクレイ長老も昨晚、地区代表とステーク部長との特別合同集会でこのテーマについて話されましたが、私たちは、こうした事柄について憂慮しています。ヒンクレイ長老の言葉の中から引用させていただきますと思います。「私は、犠牲は、それが必要とされる場にあるは、福音の重要な一面であると申し上げたいと思います。犠牲は、真の礼拝の本質です。しかし、必要のない犠牲、つまりぜいたくや管理のまずさからくる犠牲は、悪です。」監督の皆さんは、ステーク部予算とワード部予算について、大会から帰ったらすぐにステーク部長の面接を受けることでしょうか。ステーク部予算は、当然ワード部予算に対して重大な影響を及ぼします。特に注意しなければならない分野として、以上のものがあげられます。

1. 光熱費：冷暖房装置は、絶対に必要でない限り、また特に建物や部屋を使用していない時には使うべきではありません。

2. 管理維持費：この仕事は、教会内外の基本的な清掃はワード部の会員が交替で行なうということで再検討すべきです。このようにすれば、教会維持を専門職の人に頼む必要がなくなり、その分、機械や他の複雑なシステムの維持に集中させることができます。この特別な項目については、文

書による指示が追って出る予定です。

3. 福祉計画：どのプロジェクトも日用品生産予算を援助するという形で行なうようにし、この予算を得るために会員に献金を求めることをできるだけなくしていくようにしなければなりません。

4. 活動：現在の方針では、年間予算はすべてのワード部とステーク部の活動資金を含んでいます。したがって、この予算につけ加えていかなる資金も集められることはありません。ユースコンファレンスや活動で出費のかさむもの、また大規模な旅行を必要とするようなものは避けるべきです。

以上は、会員の方々の財政的な負担を軽減するほんの一例です。

私たちが、より高い律法すなわち奉獻の律法が再び教会の財政的な律法となり、それを通して、貧しい人を適切に世話できるようになる日のために準備をしていることは明らかです。その時まで余剰分を、貧しい人を助けるために惜しみなく与えることは私たちの責任であり、祝福です。さらに言うならば、これは誓約なのです。

私たちは、福祉活動の第一原則として、個人と家族の備えを強調しています。したがって監督やステーク部長の責任は、各家族の経済状態を脅かし、必需品を購入することもままならなくなるような要求を家族に対して行なわないようにするということです。

主が皆さんを祝福され、皆さんが私たちの教えと指導を受けて人々を助ける時に、賢明で正しい管理者となられますよう、イエス・キリストのみ名によりお祈り申し上げます。アーメン。

アロン神権者の責任



十二使徒定員会会員
デビッド・B・ヘイト

スコット・ホールは変わった男の子です。お父さんのガースは、ブリガム・ヤング大学のフットボールチームのアシスタントコーチです。

最近スコットは、お母さんに白いシャツを買ってくれるように頼みました。

「でもあなたは、きれいなカラーシャツをたくさん持っているでしょう。どうして白いシャツが欲しいの？」

「白いシャツがいるんだよ。」スコットはなかなか答えません。

「でも、どうして？」とお母さんは尋ねました。

スコットは言いました。「白いシャツがないと宣教師になれないんだよ。」

スコットは2歳です。

末日聖徒イエス・キリスト教会の発展の物語は、単なる奇跡ではなく、「あたかも人手によらず山より切り出されたる石の転がり出でて、ついに全世界に充ち満つるが如し」（教義と聖約65：2）です。

最近、休暇を利用してユタ州のセント・ジョージを通過してドライブしたあるカリフ

ォルニアの家族が、セント・ジョージ神殿の変った建物にとても引きつけられました。その家族は建物のまわりを歩いてみて、建物の美しさに感動しました。

少しの時間をさいて、両親はインフォメーションセンターに入って行き、ふたりの小さな子供は私たちの教会の集会所の近くの木陰にすわろうと通りを横切って行きました。

集会所では、ひとりの教師がプライマリーのため、子供たちを集めていましたが、ふたりの幼い訪問者を見ると言いました。「プライマリーにいらっしやい。」彼らは入って行きました。

両親はインフォメーションセンターから出て来て子供たちを捜し始めました。1時間近く捜した後で、彼らは子供たちが礼拝堂から出て来るのを見つけました。

お父さんは言いました。「そこいら中捜し回ったんだよ。一体どこに行っていたんだい。」

彼らは答えました。「プライマリーに行ってたの。」

「プライマリー？プライマリーって何だい。」

「プライマリーはイエスキヤミについて勉強するところだよ。それでね、パパ、タバコを吸っちゃいけないんだよ。」

お父さんは危うくタバコを飲みこんでしまうところでした。お父さんは言いました。「さあ、行こう。予定より遅れてしまった。」

すると子供たちは言いました。「僕たち行かない。」

「行かないって！どうして行かないの？」

「僕たちは劇をやっているんだ。」

「劇？」とお父さんは聞きました。

「そう」と彼らは答えて、「それで、劇

は来週だから、それまで1週間ここにいて、けいこをしなくちゃいけないだよ。」

そしてとうとう、この家族はセント・ジョージに1週間滞在しました。子供たちは劇のけいこをし、両親は福音の教えを聞きました。そして家族全員でバプテスマを受けました。

私たちの真理のメッセージ、すなわち心があらかじめ準備されている人々に対するその霊的な力は、世界中の人々を善へと導いています。

アメリカ合衆国海軍兵学校の上級生ケビン・スコットは、10人の新入生の正餐^{ディナー}の席上で主人役をつとめるようにと頼まれました。アナポリスの海軍兵学校生では、上級生たちは、新入生の訓練を、兵法だけでなく、礼儀や規律の面でも手伝うのです。ディナーの間、スコットは、一人一人の新入生に名前と州と出身地を言うようにと求めました。

ひとりの新入生が答えました。

「海軍兵学校生、エルンスト・ウォード・サックスです。ユタ州ソルトレーク・シティから来ました。」

スコットは言いました。

「あなたはモルモンですか。」

「はい。」

「ということは、タバコもお酒もコーヒーも飲まないんだね。」

「はい。」

「モルモン経を持っていますか。」

「はい。」

「それを読みましたか？」

「はい。」

「私に貸して给我ませんか。」

「はい。」

こうして、ソルトレーク・シティの若

い海軍兵学校生サックスからノースカロライナの上級生スコットに本やパンフレットが渡され、一風変わった友好関係が進展したのです。

アナポリスの卒業生ケビン・スコットは現在、海軍中尉として、フロリダで飛行訓練に参加しています。新会員としての彼は、ワード部の伝道リーダーで、ワード部の伝道に、「スパーク・プラグ」のように、刺激を与える役目を担っています。彼は今や他の人に福音の回復について証し、このメッセージを広めるために、会員たちを熱心に力づけています。

海軍兵学校生ウォード・サックスは、アナポリスで今や2年生ですが、彼は良きモルモンの家族の息子で、神権の責任を尊んでいます。

世界地図を見て、その広さ、何億という人々、そして主が若いアロン神権者に課せられた責任について深く考える時、主は、皆さん一人一人を、この何と特別な時代に、家庭に、また特別な環境に置かれたことかと驚きの念を抱きます。

アメリカや世界の各国は、真理、正直、清さ、高い道德標準、生ける神への信仰を持っている若い人々を必要としています。

主は私たちに、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、すべて添えて与えられるであろう」と勧告しておられます。

皆さんが聖典を研究する時、学んだことが理解できるようにと祈り、靈感あふれる教えに自分自身を調和させるように生活するならば、知恵と力を受けて成長することでしょう。

皆さんは、聖なる神権の鍵と権能と責任を持っています。混乱に満ちた世界の人々

は、皆さんから福音を聞こうと待っています。皆さんは何を述べるのでしょうか。また、どのような方法で述べるのでしょうか。世の人々は皆さんを見て、人生をどう歩めばいいかよく知っている人だなと感じるでしょうか。

パウロは若い友人であるテモテにこう教えました。「というのは、神がわたしたちに下さったのは、應ずる霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである。」(Ⅱテモテ1:7)

主は、すべてのことを行ない、福音を教え、人々が結び固めを受けて永遠の生命に入るように(教義と聖約131:5参照)私たちの手に救いの儀式を執り行なう神聖な力と権能とを授けて下さったのです。皆さんは、世の人々とは異なっているのです。

ジョセフ・スミスは、筆記者オリヴァ・カウドリと共にモルモン経を翻訳している時、主にバプテスマについて祈り尋ねるために森に入って行きました。その時の様子がこう記されています。「1人の天からの使者が光の雲に包まれて天降り、私たちの

頭上に両手を抜き、次のように言って私たちに神権を授けたもうた。

『汝ら、われと同じ業に働く僕らよ。救世主の御名によりて、われ汝らにアロンの神権を授く。こは天使の導きと恵み、悔改めの福音、罪を赦すために水に沈むるバプテスマなどの鍵を握る神権にして、まことにレビの子孫が主の御前に再び義しきに適いて捧物を捧ぐる時まで、この世より決して再び取り去らるることなし。』(ジョセフ・スミス2:68-69)

ジョセフ・スミスは、オリヴァ・カウドリにバプテスマを施し、オリヴァがジョセフにバプテスマを施すよう指示を受けました。それからお互いにアロン神権を授けました。

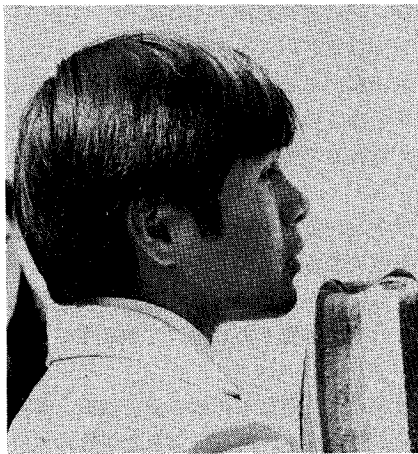
天のみ使いは、「バプテスマのヨハネ…であると言ひ、自らはメルケゼデク神権の鍵を握るペテロ、ヤコブおよびヨハネの指示によって働く者である。このメルケゼデク神権も時たらば」ジョセフとオリヴァに授けられると言いたもうたのです。(ジョセフ・スミス2:72参照)

皆さんは、悔い改めを叫び、バプテスマを施し、聖餐を管理し、監督を助け、特別な励ましを必要とする人々に関心を持つ、この同じ聖なる権能を持っているのです。

主は皆さんの年代の若人を、数多くの不思議な方法で使っておられます。

イエスはわずか12歳の時に宮の中で教えを説き、教師たちを驚かせました。

ダビデは羊飼いの少年でしたが、主に對する完全な信仰を持ち、戦場でペリシテ人の巨人ゴリアテと戦いました。心の中で祈りながら、恐れずに、ダビデは袋からひとつの石を取り、石投げ器で投げてゴリアテの額を撃ったので、石はその額に深く突き



刺さりゴリアテは地に倒れました。少年の
勇気と神への信仰がイスラエルを救ったの
です。(サムエル上17章参照)

ジョセフ・スミスは14歳の時、ヤコブ書
の中から「あなたがたのうち、知恵に不足
している者があれば、…神に願い求めるが
よい。そうすれば与えられるであろう」(ヤ
コブ1：5)という言葉を読みました。後
にジョセフはこう言っています。

「どの聖句にもまさって、この時ほどこの
言葉が私の心に真に力強く迫って来たこと
はない。それは私の心の底と言う底を大き
な力で貫き通すような気がした。

私は森の中へ人を避けて入り込んだ。

(私は)自分の心の願いを神に祈り始めた。」
(ジョセフ・スミス2：12, 14-15)

父なる神と御子が少年ジョセフに現われ
たまい、イエス・キリストの教会を回復に
導いた大いなる出来事が、このようにして
始まったのです。

愛する若人の皆さん、私たちの未来の多
くが皆さんにかかっています。皆さんは、
弱者でなく、強い者となるよう求められ
ています。皆さんが生ける神について証す
る時、暗闇の世界にかがり火を高くかけ
ることができるのです。

皆さんに愛と励ましを与えたいと思いま
す。私たちは皆さんを信頼しています。皆
さんと皆さんの直面するチャレンジに決し
て無関心ではありません。私たちは、皆
さんと同じ経験をしてきているのです。私
たちは若い頃、愛らしい少女たちとデートを
しました。そして、そうした交際が、健全
な意気を高め、美しい経験となるものであ
ることを知っています。

皆さんの思い出が、皆さんのこれからの
生涯に祝福をもたらすような、そんな生き

方をして下さい。永遠の幸福と喜びのため
に聖なる神殿に参入する栄えある日を待ち
望んで生活して下さい。マリファナやお酒
を用いて皆さんを迷わせようとする人々の
誘惑と圧力に打ち勝って下さい。それらが、
あなたの身も霊も死に至らせるものである
ということは、皆さんもよく知っているは
ずです。屈服してはなりません。皆さんは
世の人々とは異なっているのです。ポルノ
グラフィ、汚らわしい書物や映画、下品
な言葉、扇情的な音楽を生活の中に持ち込
まないようにしましょう。それらはあなた
を破壊してしまうものだからです。

娯楽や刺激、物質、また即座の満足感を
求め、刹那的な傾向に走る世の中で、皆
さんは練られていくのです。真の満足感を
得るまで待つことのできる強さを養って下
さい。すべてのことには時と季節があり、神
の永遠の計画の一部として成熟の過程があ
るのだということを理解していただきたい
と思います。

価値と真理とは、「義務、真理、正義、
慈悲」と同様に、時を越えて永遠に存在す
るものであるということを思い出して下さ
い。それらは「決断の時のものさしとなり
ます。まっすぐで正しい道は最も短く、確
実なのです。」(ウォルター・リップマン『偉
大なるものの魅力』*New York Herald
Tribune*「ニューヨーク・ヘラルド・トリ
ビューン」1943年9月7日付)

今年、ブリガム・ヤング大学バスケット
ボールチームがノートルダム大に対して素晴
らしい勝利を取めた後で、ダニー・エンジ
のお父さんは、バスケットボールのチーム
から良い契約条件が示されたらプロ野球の
契約を破棄しますかと尋ねられました。

彼はこう答えました。「ダニーはプロ野

球と契約を交わしています。契約に対して誠実であることの方がお金よりもっと大切です。」

イエスは、「人が全世界をももうけても、自分の命を損じたら、なんの得になろうか」と教えました。

あなたの人格を築くことができるのはあなただけです。また、あなた以外にあなたの人格を傷つけることのできる人がいないということも事実です。

人生は、他の人とはではなく、自分自身との競争です。私たちはより強く、より良く、より真実に生きるよう、日々求めるべきです。毎日、昨日の弱さを克服し、毎日、間違いを直し、毎日、自分自身をしのぐようにしなければなりません。

ハワード・W・ハンター長老のお孫さんが少し前に自分の父親から什分の一の面接を受けました。監督であるお父さんは、小さな少年が什分の一を完全に払おうとするのはうれしいことだと述べ、福音は真実だと思うかどうか尋ねました。この7歳の少年は、完全な什分の一である14セントを払っていましたが、「福音は真実だと思います。でも、たくさんお金がかかります」と言ったということです。

私たちは、教会の青少年が正直に什分の一を納めていることを知っています。主は、私たちがかせいだお金の什分の一を要求しておられます。もしあなたがスーパーマーケットで袋詰めをして働くとしたら、車に運ぶ10番目ごとの食料品の袋に対してあなたに支払われるお金は、主の物なのです。あなたの什分の一を、給料が支給されるごとに、月ごとあるいは週ごとに支払って下さい。主に負債を作ってはなりません。霊的な祝福とこの世での祝福は、あなたがこ

の戒めに注意深く従った時に、あなたのものであるでしょう。

かなり前のこと、フットボールが私たちのいなか町に入ってきました。教育委員会には、設備費もありませんし、コーチもいませんでした。しかし、私たちにとって偉大な日がやってきました。私たちの高校の校長が、靴底にすべり止めのついた高価なフットボールシューズを除いて、12組の安いフットボール用品をそろえてくれたのです。(靴は自分のバスケットシューズを用いました)そしてコーチは、教職員の中から新しく補充しました。理由は、この人しかフットボールゲームを見たことのある人がいなかったからです。

私たちは、タックルの仕方—私たちは、そう思っていました—が—など簡単なプレーをいくつか教わりました。そして、前年度のアイダホ州チャンピオンのトウィン・フォールズとの最初の試合が始まりました。

私たちはユニホームに着がえ、フィールドに出て準備運動をしました。敵の学校のバンドが演奏を始めました。(バンドの学生は、私たちの高校の全人数より多いのでした)そして相手のチームが門をくぐって入って来ました。私たち12人(選手11人と万能補欠ひとり)は、彼らが門を通過して入ってくるのを驚きの目で眺めていました。39人全員がちゃんとユニフォームをつけていたのです。

ゲームは非常におもしろいものでした。それは私たちにとって良い経験だったと言う方が寛大な言い方かもしれません。ふたつのプレーの後で、私たちはボールを持ちたいなどと思わなくなりました。ですから私たちがボールをけると、彼らは得点しました。トリックプレーをして得点をするの

です。私たちの課題はボールから遠ざかることでした。その方がけがをしないうすむからです。

試合の最後の何分かに、彼らは少し乱れてきました。そして、ワイルド・パスがクリフォード・リーの両腕の中に落ちました。彼は私と一緒にハーフバックをやっていましたが、どうしたらよいかわからなかったのです、ただびっくりしてしまいました。後ろからプロ並みの体格を持った敵の選手たちが走って来るのを見るまでは。彼は一目散に走り出しました。その速さと言ったらもう大変なものでした。点数のために走ったわけではありません。命が惜しかったからなのです。クリフォードはタッチダウンしました。スコアボードの私たちの方に6点入りました。最終的なスコアは106対6でした。本当は6点をもらう価値などなかったのですが、シャツと靴下を破られ、体中をあざだらけにしながら、ともかくも得点したのです。

その試合は良い経験になったのでしょうか。もちろんです。個人でもチームでも、準備をしなければならぬのです。すべてのことにおいて、勝利は、前もって準備するかどうかにかかっています。

私の父は監督でしたが、私が神権を受ける前に死にました。私は執事に聖任された時のことをはっきり覚えています。その時は、新しい世界が私の前に開かれたように思いました。より高い霊的レベルに到達したという気持ちでした。人々が「あなたは神権を持っている」と言うのを聞いても、そのことについて完全に理解するのは容易なことではありませんでした。しかし、謙遜な教師たちと共に、私は執事として、神聖な事柄を行う権能と祝福を与えられてい

ることを知るようになりました。

定員会役員として、私たちは、定員会の会員の世話をしたり、みんなが教会に来れるようにいろいろ手配したりしました。一緒に集まって活動することが楽しかったのです。お年寄りや未亡人のためにまきを割り、教会の大箱に石炭を満たし、毎週土曜の午後に集会場をきれいにし、階段を掃除し、前庭のじやりをならし、聖餐のトレイとクロスをきれいにしました。そして、自分たちがきれいにした小さな礼拝堂を本当に誇りに思ったものでした。

私たちは教会の一部であり、教会は私たちの一部でした。私たちはそのことを知っていました。いえ、そう感じていたのです。私たちは神の神権を持っていたのです。理解ある教師たちは私たちに、青少年として視野を広め、常に進歩するように、いろいろな面で助けてくれました。しかしその中でも最も大切なことは、よく準備して若い時に救い主の僕として召されるよう助けてくれたことでしょう。主は、神権を持つあなた方若人の一人一人を必要としておられます。私はこのみ業が真実であることを、へりくだり、イエス・キリストの聖なるみ名により証申し上げます。アーメン。



福音の誓約



第一副管長

マリオン・G・ロムニー

愛する兄弟の皆さん。私たちは昨年10月に開かれた大会の神権会において「神権に属ける誓詞と誓約」について考えました。（「聖徒の道」1981年4月号、pp.81-85）
今晚私は、すべての神権者が従うべき、幾つかの特別な原則について話したいと、心に強く感じています。

「汝は人の子らに遣わされたるわが完全なる福音、すなわちわが永遠の誓約を受け入れるために幸福なり。」（教義と聖約66：2）という、ウィリアム・E・ムレリンに向けられたみ言葉の中で、主は福音を崇高な、またすべてを包括する聖約として述べておられます。事実、神は地球が創造される前の天上の大会議において、御自分の霊の子である私たちに、福音をそのようなものとして示したもうたのです。前世に開かれたその会議において、主は私たちの中にお立ちになり、共にいた私たちに向かってこう言われました。「われら降り行かん。…而してこれらの材料をとりて、これらの者の住まうべき地を造らん。

而して、これによりて彼らを試し、何に

でもあれ、主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。

而して、最初の位を保つ者は更に付け加えられ、最初の位を保たざる者は、最初の位を保つ者と同じ王国にて栄を得ることなからん。而して、第二の位を保つ者は、とこしえに栄光をその頭に付け加えられん。」（アブラハム3：24-26）

その会議で、3分の1の霊が福音の誓約を拒みました。

「第二の位を保つ者は、とこしえに栄光をその頭に付け加えられん」という、約束された報いを得るには、だれであっても、福音の誓約を受け入れ、それに従わなければなりません。

主はアブラハムと特別な誓約を交わされた時に、次のように言われました。

「われを汝大いなる国民となし、汝を限りなく恵み、汝の名をすべての国民の中に大いならしめ、汝は汝の末の子孫にとり祝福の基となりて、汝の子孫は万国の民にこの導きと教えを施す職と神権とを携えて行かん。

われ万国の民を汝の名によりて祝福せん。この福音を受くる者は皆汝の名によりて呼ばれ、汝のすえに教えられ、立ち上りて汝をその父として祝福すればなり。

われは汝を祝する者を祝し、汝を咀う者を咀わん。また汝……により、汝のすえ……に[りて]……世界の眷族ことごとく祝福を得ん。すなわち福音の祝福にして救いの祝福、すなわち永遠の生命の祝福を得んと言う約束を汝に与うればなり。」（アブラハム2：9-11）

アブラハムの子孫は、イサクとヤコブを通して、これらの誓約が更新されて以来、「誓約の子」として、福音を理解する人々に知られてきました。

私たち死すべき人間がまず初めに神と交わす誓約は、バプテスマの誓約です。アルマはアビナダイの教えを信ずる人々と共に荒野へ逃れ、「モルモンという所」へ行った時、この誓約がどのようなものかを、次のように説明しました。

「そこでアルマは言った『ごらん、ここにモルモンの泉がある……。あなたたちは神の羊の群に入って神の民と言われること、互いに苦難を軽くするために喜んで助け合うこと、

悲しむ者を思いやって共に悲しむこと、慰めが要る者を慰めること、また神に贖われ……永遠の生命を得るよう、いついかなる時でも、どのような所に居ても、どんなことについても、死に至るまでも神の証し人になりたいと心から思っている。

…あなたたちは主からますます豊にその「みたま」を賜るよう、主に仕えてその命令を守ると言う誓約を主に立てた証拠として、主の御名によってバプテスマを受けるのに何のさしつかえがあらうか」と。(モーサヤ18：7-10)

主はこの神権時代に、教義と聖約20章37節の中で、バプテスマの意義を次のように述べておられます。

「また、神の誠命としてバプテスマの仕方に就きて教会員に下されたところ次の如し。およそ神の御前に自ら低くへりくだりてバプテスマを受けんと心に願い、真にへりくだる心と悔いる精神とを以て進み出で、真に自己の罪をすべて悔い改めたることを教会員の前に証明し、進んでイエス・キリストの御名をその身に引き受け、而して終りまでキリストに仕えんと決心し、キリストの『みたま』によりて罪の赦しを受けたることをその行いによりて真に明らか

にする者は、すべてみなバプテスマによりてキリストの教会に受け入るべし。」

主はまた次のようにも教えておられます。「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。」(教義と聖約59：9)

主御自身が定めたまうた聖餐の祈りの言葉は、私たちに自分が神と交わした福音の誓約を絶えず思い起こさせてくれます。そのふたつの祈りは互によく似たものです。パンの場合は次のように定められています。

「永遠の父なる神よ、われら御子イエス・キリストの御名によりて願い奉る。ここにこのパンをいただくすべての人々が、御子のからだの記念にこれをいただくよう、また喜びて御子の御名を受け、御子を常に忘れず、またその下したまえる誠命を守ることを永遠の父なる神の御前に証明し、かくして御子の『みたま』常に一同と共にましますよう、このパンを祝いきよめたまえ。アーメン。」(教義と聖約20：77)

主の戒めの多くは、特別な祝福を約束した誓約という形を取っています。什分の一を例に挙げてみましょう。「見よ、人の子の来るまで今より後を『今日』と称えらる。誠に『今日』は犠牲の日、わが民の『什分の一』を捧ぐる日なり。この『什分の一』を納めたる者は人の子の来る時火に焼かるることなし。」(教義と聖約64：23)

「われ汝らに告ぐ、もしわが民にしてこの律法を守りて清く保たず、またこの律法によりてシオンの地をわれに聖くして以てわが律令と審判とをそこに保ち、その地を最も聖きものとなさずんば、見よ、誠にわれ汝らに告ぐ、そは汝らにとりてシオンの地にあらざるべしと。」(教義と聖約119：6)

これらのみ言葉は、人は什分の一の誓約

を守らなければ、大きな祝福を逃すことになるということを明確にしています。逆に言うと、それを守るなら、大きな祝福が与えられるということです。

「わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。

わたしは食い減ぼす者を、あなたがたのためにおさえて、あなたがたの地の産物を、減ぼさないようにしよう。また、あなたがたのぶどうの木が、その熟する前に、その実を畑に落すことのないようにしようと、万軍の主は言われる。」(マラキ3:10-11)

もうひとつ、知恵の言葉について考えてみましょう。これも特別な祝福を約束しています。

「見よ、誠に主はかくの如く汝らに告げたまう。すなわち、末の世に於て悪しきを企つる人々の心中に現在存し、また将来在らんとする悪と企図とのために、われ啓示によりてこの知恵の言葉を与えて今や汝らを警め、また汝らを預め警むるものなり。

すなわち、汝らの中に葡萄酒または強き飲料を飲む者あらば、見よ、それは宣しからず。また汝らの御父の目にも適わざるなり。ただ汝ら集りて御父の前に聖餐を捧ぐる時にのみ用うべし。

また言う、強き飲料は腹のためにならず。ただ汝らの体を洗い清むるためなり。

また言う。タバコは体のためにならずまた腹のためにもならざれば、人間のために良きものにあらずして、熟練と判断力とを以て用うべき、打身とすべての病める家畜に利く一種の薬草なり。

また言う。熱き飲料は体や腹のためにならず。

およそこれらの言葉を憶えて守り且つ行い、この誠命に従って歩むすべての聖徒らは、そのへそに健康を受けその骨に髓を受けん。

また知恵と知識の大なる宝まことに秘れたる宝を見出さん。

而して走れども疲れず、歩けども気を失うことなからん。

主なるわれ彼らに一つの約束を与う。すなわち、さつりくの天使はイスラエルの小児たちが如く、彼らを過ぎ越して屠ることなかるべし。」(教義と聖約89:4-5, 7-9, 18-21)

皆さんは、イスラエルを去らせるようにバロの心を変えるには、この聖句に言われているさつりくの天使が、エジプト中の人間と動物の初子を死に至らしめる必要があったということを感じておられることと思います。

さつりくの天使については、近代の聖典にも何度か述べられています。知恵の言葉の約束が与えられる2年前、主は次のように言われました。「天の使たちは世の毒麦を集めてこれを焼捨てんために世を刈り取る大命を待ちつつあり。」(教義と聖約38:12)

主と交わした福音の誓約を守るなら、私たちは神殿に参入し、そこで新しくかつ永遠の誓約、すなわち日の光栄の結婚を初め、救いに必要な儀式と誓約を受ける資格ありと認められます。

私たちがすべての誓約と自分に課せられた義務に忠実であることを証明する時、主が私たちすべてに、神権の召しを全力を尽くして遂行するための助けを下さるるように、へりくだり、イエス・キリストのみ名を通して祈るものです。アーメン。

人々に奉仕する



大管長
スペンサー・W・キンボール

愛する兄弟の皆さん、このソルトレーク・シティのタバナクルおよび全世界の数百の会場に集っている皆さんに心から歓迎の意を表したいと思います。私たちは教会の神権者たちがあらゆるレベルで秀れた指導力を発揮していることを嬉しく思っています。神権の召しを全力を尽くして遂行する時、教会は家族を助けるものであることを決して忘れないようにしていただきたいと思います。教会は家族に代わるものでも、また代わるように求められるものでもありません。教会は義しい人間の育成と同時に、義しい家族を創り、育てるように手助けをする組織です。

したがって、兄弟の皆さんは自分たちの必要な事柄に気を配り、貴重な時間を妻や子供たちのために割くように願っています。また教会のみ業の中で共に働く人々にも配慮し、不必要な時間をとることのないようにしていただきたいのです。

安息日に幾つも集会を開き、教会員を集めることは避けるようにして下さい。定例の集会を開く時も可能な限り霊的で効率の

よいものにしていただきたいと思います。集会はあわただしく開く必要はありません。なぜなら統合スケジュールのもとでも、集会の持つ神聖な目的を無理なく達成できるように計画できるはずだからです。

集会統合スケジュールが実施されたのは概して安息日の時間をもっと多く家族のために振り分けることができるようにするためです。この時間を使って家族が共に集い、聖典を勉強し、友達や親戚、病人、ひとり暮らしの人々を訪問するようにして下さい。また日曜日は、日記をつけ、系図作成を行なうのに最適な時間でもあります。

現在離れて生活しているお年寄りにも思いやりを示しましょう。彼らは特別な援助を必要としている特別な人々です。彼らを皆さんの輪の中から、そしてワード部、支部の活動から離れさせて孤独な気持ちを味わわせることのないようにして下さい。

愛する兄弟の皆さん、特にステーキ部、ワード部、支部を管理している人々に1980年10月の神権会で私がお願いしたことをここで再び繰り返して述べたいと思います。

教会での福音の教え方の質の向上に特別の関心を払って下さい。救い主は私たちに羊を養うように命じられました。(ヨハネ21：15—17参照)時折、私は多くの会員たちが教会に来て、教室や集会場の席に着きながら、結局何も得られずに帰っていくことを心配しています。それが、もし苦難で誘惑、あるいは個人や家族の危機の最中のことだとしたらもっと不幸です。私たちはだれでもみたまによって心を動かされ、慰めを得る必要があります。このようなみたまの導きを与える最も大切な方法のひとつが、効果的に教えることなのです。私たちはいつも教会員を連れ戻すためにエンリストメ

ントや活発化を熱心に行ないますが、その反面彼らが教会に来た時何を受けるかを見逃ごしにしていることがしばしばあります。

すでに御承知のように、けさの話の中で私は最近訪問したカリブ海諸島のことに触れ、この島に福音の門戸が開かれてからこの2年間にある兄弟たちが七十人の兄弟たちと行なった素晴らしい伝道活動について述べました。しかし時間の関係でサント・ドミンゴで起こった出来事について触れることができませんでしたので、ここでそのことを述べたいと思います。

私たちはドミニカ共和国の首都サント・ドミンゴで夕べの集いを開きました。約1,600名の教会員が出席しました。この国でこれほど多くの教会員がいることを私たちは知りませんでした。

ところが集会が終わって1時間もたつてからでしょうか。プエルト・プラタ支部から100名余りの会員を乗せた1台のバスが会場に到着しました。バスが故障し、集会に間に合わなかったのです。何もなければ4時間で来るところを、彼らが到着した時にはすでに午後10時を回っていました。会場は真っ暗で人影ひとつありません。がっかりして泣き出す人も出てきました。彼らは全員改宗者で、数カ月前に改宗した人が何人かいて、残りは皆数週間、数日前に改宗したばかりの人でした。

私とキンボール姉妹は疲れた身を横たえ、すでにベッドについていました。ところが私の秘書はこの忠実な会員たちの状況を知り、ホテルの部屋のドアをたたいて私たちを起こしに来たのです。秘書は私たちを起こしたことを詫言いました。しかし彼は、大会に連れて来た会員たちのことを私に知らせ、できれば私のメッセージを書き写し

て彼らに渡せればと考えたのです。私はメッセージを託すだけでは十分でない、これほど苦勞して遠方から来た人々にあまりに不公平なことだと思いました。100名もの会員が1台のバスにすし詰め状態で、しかもバスは故障し、途中でストップしてしまったと言うではありませんか。私は起きて身仕度を整えると、これほどつらい思いをして大会に来ながら、エンジンの故障で間に合わず、意気消沈している会員たちに会うために下に降りて行きました。会場に入ると、聖徒たちはまだむせび泣いていました。私はそこで1時間以上も彼らと話をしたのでした。

それから彼らは安心し、満足した様子でバスに戻ると再び長い家路についたのでした。翌朝は仕事や学校が待っています。この善良な聖徒たちがほんのわずかの間でも私たちと過ごせたことを心から感謝している姿を見て、私たちは彼らを失意の状態に帰してはならないと強く感じました。私はその晩、心に平安と満足を得て眠りにつきました。

兄弟の皆さん、私たちはだれでも人々に奉仕をする機会を持っています。人々に奉仕をすることは私たちに課せられた召しであり、特権です。人々の必要に応える時、救い主の次の言葉を忘れることができません。「あなたがたによく言うておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」(マタイ25:40)

兄弟の皆さん、現在私たちが直面しているもうひとつの問題について述べておきたいと思います。私たちが什分の一や断食献金による捧げ物を会員たちに求める時、戒めを守り、義務を果たすことによってもた

らされる祝福のことをこれまでも増して強調して述べるようにしていただきたいと思います。時折、教会員に対してなされる財政的な要求について、不当な圧力ではないかとの報告を耳にすることがあるからです。

これはことのほか重大な問題です。今日のようなインフレと情緒的、政治的に不安定な時代にあって、教会員は至る所で困難と試練に遭遇しています。分別と知恵を用いるようにと勧告するだけでなく、資源を増やし、管理を上手に行なうように具体的な方法を示すことです。教会員に過度の負担をかけることのないようにしなければなりません。このような視点から、大管長会は昨日一通の手紙を皆さんに送付致しまし



た。その中には、大管長会ならびに十二使徒定員会が什分の一と断食献金のほかに教会員に対する財政的な負担が急増していることを深く憂慮していることが記されています。その手紙と共に、ワード部、ステーク部、伝道部の指導者がその指示に従う上で参考になる指針も同封致しました。地区代表の方々には早急にこの件に注意を払い、何らかの対処をするよう指示しています。

個人、家族だけでなく、ワード部、ステーク部も収入の範囲内で生活するようにしようではありませんか。この収入の範囲内で生活するという原則の中には力と救いが秘められています。ある人は、私たちはそのようにしなくてもやっつけていけるほど十分お金があるのではないかと言うかもしれませんが。家族として教会として私たちは教会員が最も必要としているものを提供しなければなりませんし、またそうすることも可能です。しかし最低限必要なものを越えたり、家族の福利と教会の基本的な使命と直接に関係のない目的のために与え過ぎることのないように注意しなければなりません。

兄弟の皆さん、老若を問わず私は皆さんを愛しています。皆さんが正義と主のみ業のために忠実に、そして献身的に働いて下さいますことを心から感謝しています。私は皆さんに私の愛を伝え、祝福があるようにと願っています。また天父が皆さんと皆さんの家族、家庭、仕事を祝福されますように祈っています。願わくは神の祝福があって、平安が皆さんの上にあるように。イエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

長い孤独の境遇



十二使徒定員会会長
トーマス・S・モンソン

きょう私は説教や型どおりのメッセージをお伝えするつもりはありません。それよりもむしろ、私の心の奥底にある思いを皆さんにお話したいだけ思っています。デビッド・O・マッケイ大管長は「心の花びら」について触れましたが、私は皆さんに私の心の窓を開きましょう。

聖書の中でもヤコブの手紙は、長い間人人に愛読されてきました。簡潔で心暖まる生気に満ちた手紙です。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」(ヤコブ1:5) このよく知られた聖句はだれもが引用できるでしょう。しかし、私たちの中でどれだけの人が、ヤコブが説いている信仰の定義を覚えているのでしょうか。ヤコブは、「父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まずに、身を清く保つことにほかならない。」(ヤコブ1:27)と述べています。

Widow (やもめ) という言葉は、主にとってきわめて重要な意味があったように思われます。長い衣を着け、長い祈りをして正しいふりをし、その実はやもめたちの家を食い倒している律法学者の例をあげて、主は弟子たちに気をつけるようにと警告しています。(マルコ12:38, 40参照)

ニーファイ人にも直接このように警告しています。「われは裁判をなすために汝らに近づき、……やもめ……をしいたげ……る者々に対してきびしくまた速に証を立つ…。」(III ニーファイ24:5)

また予言者ジョセフ・スミスに対して、主はこのように命じておられます。「この倉庫は教会員の捧物によりて支えられ、寡婦孤児および貧者も同じくこれより給与を受くべし。」(教義と聖約83:6)

こうした教えはその当時に初めて与えられたものではありませんでした。それは今日でも同じです。イエス・キリストは御自身がやもめを気にかけておられたことを、模範によって一貫して教えておられます。ひとり息子を失って嘆き悲しんでいたナインのやもめに対して、キリストは自ら近寄って死んでいた息子の生命をよみがえらせ、驚くやもめにお渡しになりました。また息子とふたり、餓死を目前にしていたザレパテのやもめには、予言者エリヤを送って食物をお与えになり、さらに信仰についてもお教えになりました。

でもそれは遠い遠い昔のことだと思う人がいるかも知れません。そのような人に対して私はこうお尋ねしたいと思います。「あなたの家の近くにザレパテという町はありませんか。ナインという町はありませんか」と。私たちはコロンバスやコールビル、デトロイトやデンバーといった都会は知って

いるかも知れません。しかしその名前が何であれ、どの町にも伴侶や、時には子供を失ったやもめが住んでいるものです。そして同じように困っています。現実には悩み悲しんでいるのです。

やもめの家というのは普通、大きくもなければ飾りたててもいません。たいていは質素な住まいです。またアパートの階段を昇りつめた部屋とか、廊下のつきあたりの部屋に、彼女たちは暮らしています。それもたったひと間の部屋で。そのような家に、キリストは皆さんや私を遣わされるのです。

彼女たちは実際に食物や着るものがなくて困っているかも知れません。住む家さえもままならないかも知れません。しかし、そうした必要は満たすことができます。飢えている者に食を与えよというメッセージには、ほとんどいつの場合にでも何かしら私たちにできる部分が残されているものなのです。

寄るべない人、孤独な人のもとを訪れ
涙にくれる人、疲れた人を慰めよう
そして、親切な行ないを道にまき
世界をもっと明るくしよう

特別な助けを必要とする人々は、日々その数を増しています。新聞の死亡通知欄を見て下さい。そこには人生のドラマが展開されています。死はだれにでも訪れます。それは足もとのおぼつかない老人のもとを訪れ、その招きの声はまだ中年にも達しない人の耳に響き、そしてしばしば、幼い子供たちの陽気な笑い声をかき消してしまうのです。

棺を飾った花が色あせ、友人たちの慰めの言葉が思い出となり、捧げられた祈りや

語られた言葉が心の回廊の彼方に次第に消え去っていった後で、その悲しみに打ちひしがれた人々は、私が「長い孤独の境遇」と呼ぶ大勢の人々の群れに加わります。失ったものは、幼い子供の笑い声でしょうか。十代の子供のあの活気に満ちた姿でしょうか。それとも、あなたを残して逝った伴侶の、愛に満ちたやさしい思いやりでしょうか。時計のセコンドの音はこの外大きく、時の過ぎるのはゆっくりで、壁に囲まれた部屋は、まるで留置場のように思えてくるのです。

願わくは、私たちすべてが救い主の次の言葉を再び胸に響かせることができますように。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」(マタイ25:40)

さて、問題を抱えている人々に対してさらに熱心に助けの手を差し伸べるにあたり、この学びの場に子供たちも加えましょう。

私も子供の頃の思い出には事欠きませんが、日曜日の夕食が待ち遠しくて仕方がなかったのもそのひとつです。死ぬほどおなかがかすいて家に帰ると、ローストビーフの何とも言えない香りが家中に漂っています。急いで食卓に着いて食事が出るのを待っていると、母親がよくこう言ったものでした。「トミー、食べる前にひとつ走りボブおじさんの所に行ってこれを届けてくれない?」

私には、なぜ先に食事をすませてから届けないのか、まったくわかりませんでした。でもそれを口に出して言うことはせず、急いでボブおじさんの家にかけて行きました。そして彼が弱った足をひきずりながらドアのところに出て来るのをやきもきしながら待っていたものです。私が持って行った食事を手渡すと、ボブおじさんは代わりに先週

の食事のお皿を返してくれました。そして私に、届けてくれたお礼にと行って10セント玉を差し出すのです。私の答えは決まってこうでした。「いいえ、受け取れません。お母さんに叱られるから。」するとボブはしわだらけの手で私のブロンドの髪をなで、「いいお母さんだね。ありがとうって言うてくれ」と言いました。

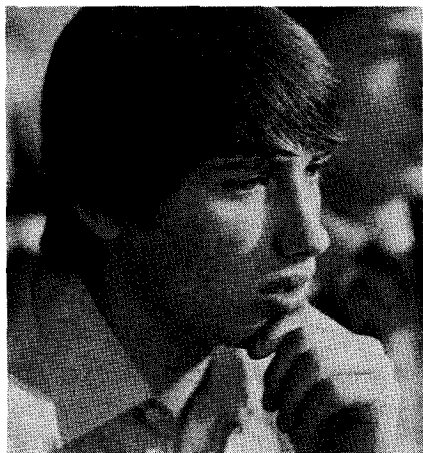
でも、私は母には何も言いませんでした。ボブおじさんの感謝の気持ちは何も言わなくても母にちゃんと伝わっていると思ったのです。もうひとつ私の心に残っているのは、ボブおじさんのところに行った後で食べた夕食が、いつもと比べて少しおいしかったことです。

このボブおじさんは、ひょんなことから私たちの家族と関わりを持つようになりました。彼は奥さんを亡くした後ひとりで暮らしていましたが、80歳を越えた頃に、借りていた家を取り壊されることになりました。私はボブが祖父に窮状を説明するのを、一緒にポーチのブランコに乗りながら聞いていました。ボブは祖父に、寂しげな声で

こう言いました。「コンディーさん、もうどうしようもないんですよ。私は身寄りもないしどこにも行くあてがない。先立つものもありませんしね。」私は祖父がどう答えるのか見当がつきませんでした。ゆっくりと、祖父はポケットに手を入れて、皮の財布を取り出しました。私がお金が欲しいと言うと、いつも中から1セント玉や5セント玉を取り出して私にくれたあの財布でした。でも今回は違いました。祖父は鍵を1本取り出して、それをボブの手に握らせ、やさしくこう言ったのです。「ボブ、これは隣にある私の家の鍵だ。自分の荷物をみんな持って来て好きなだけいていいよ。家賃もいらぬし、追い出す人もだれもないから。」

ボブおじさんの目には涙があふれ、やがてそれは頬をつたって白いあごひげに落ちました。祖父の目もうるんでいました。私は何も言いませんでしたが、その時ほど祖父が偉大に見えたことはありませんでした。私は自分の名前がこの祖父の名を取ってつけられたことを誇りに思っています。私はその時まで子供でしたが、祖父のこの模範は、それからの私の人生に影響を与えることとなったのです。

私たち一人一人は、それぞれ独特の思い出を持っています。監督をしていた頃、クリスマスに独り暮らしの老人のもとを訪れるのは大きな喜びでした。そのような人は今は9人しかいませんが、当時は87人もいました。そうした家々を訪れる時には、どのようなことが起こるのかまったく予測がつきませんでした。ひとつだけわかることがありました。それは、どの家を訪問しても、そこにはクリスマスの真の精神、すなわちキリストのみたまがあるということ



です。

私と一緒に1, 2軒訪問してみましょう。ウエスト・テンプルには老人ホームがあり、未亡人が4人暮らしています。皆さんはそこに通じる細い道をまだ一度も通ったことがないでしょう。でも窓のカーテンのすき間からは、友の来訪を待ちわびている彼女たちの顔が見えます。何という温かな歓迎でしょう。なつかしい昔話に花が咲き、プレゼントが渡され、祝福が施されます。しかし時は過ぎ、別れの時間がやって来ます。でも、もうすぐ100歳を迎えるというこの姉妹の頼みに応えないでは、とてもその家を後にすることはできません。彼女は目が見えませんでした、よくこう言ったものでした。「監督、私の葬式の時には必ず話をして下さいよ。そしてテニスの『この海原のかなたに』を暗誦するんです。さあ、今やってみて。」私は従います。

宵の明星があかね色の空に一筋の光を投げかけ

私を呼ぶ声があたりにこだまする

この海原のかなたに旅立つ私

そこには微塵の悲しみもない

暮れなずむ浜辺に鐘の音が響き

やがて漆黒の夜が訪れる

別れを告げる私

そこには寂しさはない

時と場所の境を越え

うねりにまかせて旅立つ今

願うはこの海原のかなたで

かの水先案内人のみ顔を拝さんことを

(G・B・ハリソン編, *Major British Writers* 「英国主要作家選」 2:466)

彼女の目はすぐに涙で一杯になりました。

でもすぐに笑顔になってこう言いました。

「トミー、なかなかいいわね。でもお葬式の時にはもっと上手にできるでしょう。」彼女の頼みに応じなければならない日が来たのは、それからしばらくしてからのことでした。

数年前のことですが、ファーストサウスの老人ホームでプロフットボールのゲームを見たことがあります。部屋に入ると、美しい身なりをしたふたりのやさしそうな姉妹がテレビの前にすわり、ゲームに熱中している様子でした。私は聞きました。「どっちが勝ってます？」姉妹たちは答えました。「どこがやっているかもわからないんだけど、ふたりでこうしていると楽しいのよ。」そこで私はこのふたりの天使の間にすわり、フットボールのゲームの解説をしました。その時のゲームほどおもしろいゲームはありませんでした。このために集会には出られなかったかも知れません。でも貴重な思い出となりました。

今度は急いでレッドウッド・ロードに行ってみましょう。未亡人がたくさん住んでいる大きな老人ホームがあるのです。行ってみると、明るい電燈の光に照らされた居間では、大勢の姉妹たちが談笑していました。でも、私たちが訪れる姉妹は、自分の寝室でひとり寂しく暮らしているのです。彼女は数年前に脳いっ血で倒れ、以来口がきけなくなりました。でも、彼女がその耳を通して何が聞こえるかを、知っている人はいるでしょうか。案の定、付添いの人は、彼女が何年も一言も口をきかないのことを御存じですね、と念を押してきました。でも、それは関係のないことです。私は彼女との一方通行の会話を楽しんだだけでなく、神とも交わることができたのです。

最近のことですが、敬愛するキンボール大管長が貧民を抱えている国から来た人々とお会いになりました。その時、大管長の口を通して出た言葉は、単なる統計上の言葉ではありませんでした。「皆さん方は食べる物は十分あるのですか。独り暮らしの老人の方々の面倒はよく見られていますか。」これが大管長の思いやりなのです。

ジョージ・アルバート・スミス大管長の時、私たちのワード部に成人した病弱の娘を3人も抱えた未亡人の姉妹がいました。娘たちは、身体は大きいのですが何ひとつ自分ですることができません。その上財産もなく、他に頼る人もいません。そして、そのような彼女に追い打ちをかける事態が起きました。借りていた家が売りに出されたのです。どうすればよいのでしょうか。彼女はどこへ行けばいいと言うのでしょうか。当時の監督は教会本部に出向いて、教会がその家を購入できないものかと尋ねました。非常に小さな家で、値段も手頃でした。しかし、その申請は一応は考慮されたものの、結局却下されました。

気落ちした監督は、足よりも重く教会本部の玄関を出ようとしたのですが、そこにちょうどジョージ・アルバート・スミス大管長が通りかかりました。あいさつを交わした後で、スミス大管長がこう尋ねました。「なぜ教会本部にいらっしゃったのですか。」大管長は監督の説明を一つ一つ注意深く聞くと、何も言わず、すぐ戻るのだと言ってその場を辞しました。しばらくして、大管長は満面に笑みをたたえて戻って来ました。そしてこう言ったのです。「4階に行ってください。小切手ができています。すぐに家を買ってください。」

「でも申請は却下されたはずですが。」

その言葉に、大管長はもう一度にっこりしてこう言いました。「ちょうど今再検討されて承認されたのです。」こうして家は購入され、その未亡人の姉妹は3人の娘が全員亡くなるまで世話をし続け、やがて彼女も神の家に、天の報いへと旅立って行きました。

教会の指導者は、伴侶を亡くした人々や独り暮らしの人々に心を配る必要があります。私たちは、このような人々を心にかけていることはできないのです。エマソンはこうさとしています。「指輪と宝石は贈り物ではない。贈り物の代用品だ。たったひとつの本当の贈り物、それはあなた自身を捧げること。」

時の絶頂の時代、夜空にひときわ輝くひとつの星が現われました。そして、その星に従った博士たちは、みどり児イエスにまみえました。今日の時代も変わりはありません。博士たち、賢者と呼ばれる人たちは、天を見上げてひときわ輝くひとつの星を見えています。その星は私たちをいろいろな所へ連れて行ってくれます。そうして人々の重荷は軽くされ、飢えた者の泣き声はやみ、寄るべない者たちの心は慰められます。そして、あなた方と彼らと私の魂に救いがもたらされるのです。

どうぞ心から耳を傾けて下さい。きっとはるか彼方からこのように語りかける声が聞こえてくるでしょう。「良い忠実な僕よ、よくやった。」(マタイ25:21)

願わくは私たちがこの特別な星を見いだし、はるか彼方からの声を聞くことができるように、へりくだり、イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン。

神はそこにおられる



第一副管長
N・エルドン・タナー

こうして皆さんと一緒にこの場に出席し、美しいコーラスと兄弟たちの説教を聞くことができ、うれしく思います。私が健康を回復するように祈って下さった皆さんに心から感謝します。おかげさまで、大会に出席することができました。

私はこのところ、信仰箇条の第1条と第3条について思いをめぐらしています。「われらは、永遠の父なる神と、その御子イエス・キリストと聖霊とを信ず。」そして、「われらは、キリストの贖罪により、すべての人類は、福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得ると信ず。」このふたつです。

信仰箇条の第1条について考えながら、こう思いました。私たちは神と、御子イエス・キリストと聖霊とを本当に信じているだろうか。生活の中で御三方の影響力をどの程度受けているだろうか。

私たちは、キリストの贖罪によって全人類が救われ得ると信じています。このことについて考えた時、私は皆さんに父なる神と御子イエス・キリストがいかに私を生涯

にわたって見守って下さったかを知っていただきたいと思うのです。

私が生まれた時に、母は神に感謝したことでしょう。それは、霊の子供をこの世に送り出す業に神と共に携わることができたからです。母はそういう女性でした。御子イエス・キリストを通して神に感謝を捧げたに違いありません。

私の家庭では、いろいろな機会をとらえては祈りを捧げていました。私は祈りについて教えられ、イエス・キリストのみ名により、聖霊のみたまを通して、実際に神と話をするようになりました。やがて8歳になり、父からバプテスマを受けました。私がお教えられてきたことは、自分が神の息子、神の子供であること、神は私のことを心にかけて下さり、私についてよく知っておられること、そして私にとって最善のものを御存じであるということです。食事の祈り、朝の祈り、夕べの祈りが習慣になり、私たちが語りかけるのは、ほかでもない天父であることも学びました。

私たちは神の霊の子供です。何人の方がそのことを知っているでしょうか。私たちが祈る時、それが食事の祝福や開閉会の祈りであれ、バプテスマや確認の祈りであれ、あるいは聖餐のパンと水を祝福する祈りであれ、その時私たちは神に語りかけているのです。神はそこにおられ、私たちの祈りを聞いて、祝福を与えて下さいます。

私が深い感銘を受けたのは、森の中でジョセフ・スミスが捧げた祈りです。ジョセフは聖典を読みました。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に願ひ求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」(ヤコブ1：

5) 皆さんの中で知恵に不足している方がいたら、神に願い求めて下さい。そうすれば、答えを受けるでしょう。疑わないで、信仰を持って願い求めて下さい。「疑う人は風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。」(ヤコブ1:6)

ジョセフは、天父と御子イエス・キリストの訪れを受けました。実際に御二方がみ姿を現わされたのです。そして、なすべき業をお告げになりました。ジョセフは神に語りかけ、神はその祈りを聞いて答えて下さいました。皆さんに証したいと思います。私が話してきたことは、すべて真実です。この教会は敬愛する神の予言者を通して与えられるキリスト御自身の導きによって進

む教会です。

私はこの場におられない皆さんをも心から愛しています。神に祈りを捧げる時、私たちは神に語りかけているのです。神は私たちの幸福のために心をくだいて下さる御方です。私たちは自分自身が何者であるかを知り、それにふさわしい行ないをして、世の人々の模範となりましょう。このことを私たち一人一人が自覚できるように、へりくだって祈ります。この教会はイエス・キリストの教会です。神はすべての人の願いに耳を傾けて下さり、自分自身が何者で、なぜこの地上にいるのか理解できるように助けて下さいます。すべてイエス・キリストのみ名を通して申し上げます。アーメン。



大いなる試しの 場である人生



七十人第一定員会会員
フランクリン・D・リチャーズ

キンボール大管長、私は世界に広がるこの教会の人々の気持ちを最初にお伝えしたいと思います。私たちはキンボール大管長、タナー副管長、ロムニー副管長を愛しています。また、大管長会が神の王国を築くという大いなる業を続けて遂行できるように、主が大管長会の方々に奇跡を行なって下さったことを感謝しています。

さて私たちは注目すべき時代一時満ちたる神権時代に生きていますが、現代はまた困難な時代でもあります。偽りの教えや、墮落した道徳観、争い、論争、迫害の中に悪の力をはっきりと見ることができます。多くの人々の心は恐れに満ちています。

男性、女性を問わず世界中の人々の心にある共通した問いは、「人生の目的は何か」ということです。

そして、この質問に答えることができるのが回復されたイエス・キリストの福音なのです。現代の啓示の中で主は私たちに、「もし汝わが誠命を守り終りまで忍ぶなら永遠の生命を得ん。これ神のあらゆる賜の中最大なるものなり」（教義と聖約14—

7）と言っておられます。

つまり、人生の目的は本質的には神の最大の賜である永遠の生命を得るために自らを備えることにあるのです。

回復された福音は、私たちがこの活動の場に生まれる前、霊の存在として実在していたこと、つまり天父の霊の子供であることを教えています。私たちは、私たちの霊が骨肉の体を得て様々な経験をし、それによって試され、聖典にあるように「何にてもあれ、主……の命じたまわんすべてのことを……為すや否やを」（アブラハム3：25）見られるために、この地上にやってきました。

末日聖徒イエス・キリスト教会は、永遠に進歩することの重要性を教えています。私たちは前世において進歩しましたが、現世にあってもまた永遠にわたっても進歩する機会が与えられています。私たちにはそれぞれに天与の能力や才能があり、勉強と祈りと常に正しい働きをすることによって、また自分に与えられている才能と能力を使うことによって永遠の目的を果たすことができるのです。

特に聖典の研究は大切な要因を成しています。私たちは、「正に研究と信仰とによりて学問を求むべし」（教義と聖約88：118）と勧告されています。永遠に進歩するには絶え間ない勉強を必要とします。主は「神の栄光は英智なり。すなわち、光明と真理なり」（教義と聖約93：36）と言われました。

また、次のようにも言っておられます。「およそ、われらのこの世に於て達する英智の一切は、何にてもよみがえりの時われらと共によみがえるべし。」

さればもしある人ありて、精励従順によ

りこの世に於て他の人よりも一層勝れたる知識と英智とを得ば、未来の世に於てそれだけ利を得べし。」(教義と聖約 130 : 18—19)

スペンサー・W・キンボール大管長もこのように勧告しています。「聖典を読み、その中に記されている原則と靈感にあふれた勧告を理解し活用するようにしようではないか。もしそのようにするならば、自らの正しい行ないが直接の啓示すなわち靈感を必要な時にもたらしてくれることがわかるであろう。」(Ensign「エンサイン」1975年9月号, p.4)

現代の啓示の多くは末日の聖典に載せられています。そしてこの末日の聖典は、今日のチャレンジにどう対処すればよいかを詳しく教えてくれます。聖典を学んで得た知識は、私たちが人生のあらゆる局面において正しい決定をする助けとなり、また神を知り神のみこころを理解するのに役立ちます。

さて、永遠の目的を成就する上で祈りが果たす役割について、救い主は弟子たちに「絶えず……祈っていないさい」(ルカ21:36)と教え、「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう」(ルカ11:9)と言っておられます。

予言者ジョセフ・スミスは次のように述べています。「神の属性を確かに知り、私たちが人が人と語るように神と語り得ることを知るの、福音の第一原則である。」(History of the Church「教会歴史」6:305)

ブリガム・ヤングも、彼らしい率直な語り口でこう言っています。「自分にできる

ことは自分がするという気がなければ主に願ひ事は一切しないというのが、私たちの信仰と宗教のひとつの特色であることは、あなた方も御存じであろう。主が私たちの力の及ばないところを助けて下さるのはその後のことである。」(Discourses of Brigham Young「ブリガム・ヤング説教集」p.43, ジョン・A・ウイツォー編)

「主よ、どうか私が自分でできるようにお助け下さい。」個人の力が強められることを求めるこの祈りは、神が答えて下さる祈りであると私は確信しています。私たちは神の助けによって自分の問題を解決できるようになります。

ある改宗者が私にこのように話してくれました。「いつもというわけではありませんが、教会に入る前から、祈ることは祈っていました。私は、いつの日か主人ともっと強い絆で結ばれるようにと祈っていました。それがまさか実現しようとは思っていませんでしたが、教会が私の祈りへの答えでした。私たちはお祈りの力を知りました。私は教会に心から感謝しています。」

そうです。祈りは私たちが永遠に進歩する上で重要な役割を果たすのです。

さて次は、労働という重要な永遠の原則について考えてみましょう。救い主はこの世での務めを果たしておられた時、労働の必要性を説いた素晴らしいたとえ話をなさいました。

タラントのたとえ話です。ある人が長い旅に出ることになりました。そこで彼はその僕たちを呼んで、自分の財産を預けました。それぞれの能力に応じて、ある者には5タラント、ある者には2タラント、ある者には1タラントを与えました。

主人が旅に出ている間、5タラントを渡

された者は、それを利用してさらに5タラントをもうけました。2タラントの者も同様にして、ほかに2タラントをもうけました。しかし、1タラントを渡された者は、その金を地の中に隠しておきました。

主人は帰ってくると、計算をするように言いました。

そして、タラントを増やした僕たちに対してこのように言います。「良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。」(マタイ25:23)

それから主人は、タラントを隠して増やさなかった僕を怠惰な僕と呼び、1タラントを取り上げて、10タラントを持っている僕にあげてしまいました。

働くということについての、この福音の教えは何と素晴らしいものではないでしょうか。

現行の教会福祉プログラムが確立された時、大管長会はこのように説明しています。「私たちの第一の目的は、……いまわしい怠惰や施しのもたらす悪弊を除去し、独立心、勤勉、儉約、自尊心を再び私たちの間に確立する態勢を築くことである。教会の目的は、人々の自立を助けることにある。勤労が再び教会員の生活を貫く原則にならなければならない。」(Conference Report 「大会報告」1936年10月, p. 3)

これらは永遠の原則です。したがって与えられた当時と同様、今日の私たちにも適用されます。

教会は組織されて以来ずっと教会員に儉約を奨励し、経済的自立を確立し維持するようにと勧めてきました。

私たちの仕事が主として頭脳労働であれ、肉体労働であれ、あるいはその両方の合わ

さったものであれ、私たちは仕事を立派に果たすという心構えを身につけなければなりません。この労働についての教えは理にかなったものであり、私たちを永遠の生命へと導くイエス・キリストの福音の重要な要素です。

救い主は、隣り人を愛しなさい、これを捨てて犠牲を捧げなさいという教えを絶えず強調されました。したがって私も、私たちの同胞への奉仕と、自分の時間や才能や財産を犠牲にすることを求める仕事に携わるのは、望ましいことであると申し上げたいと思います。

ベンジャミン王の言葉を思い出して下さい。彼はこのように言っています。「お前



たちが同胞のために務めるのは、ただお前たちの神のために務めるのである……。」
(モーサヤ2：17)

私たちはまた、才能は使うことによって伸びるものだということがつかない限りはなりません。才能は使わなければ伸びも増えもしないのです。この原則は救い主のたとえ話の中ではっきりと教えられています。

才能は、教えること、伝道、芸術、慈善奉仕など、様々の分野で育み伸ばすことができます。

このように話してくれた改宗者がいます。「この教会で私が好きなのは、教会の中に絶えず学び発展成長する力があるという点です。私は教会で働く機会があることを感謝しています。それは、絶え間ない触れ合いを通して、福音の面でもその他生活のどのような面においても進歩し成長できるからです。」

私は皆さんに、与えられたあらゆる機会を重荷と思わず大きな祝福だと思って受け入れ、御自分の才能を伸ばされるように、また熱心に分かち合われるようにお勧めします。そのようにするならば、主は皆さんが、自分に求められている務めを果たせるように助けて下さるでしょう。

男女を問わず、自分の目的を達成した人の話というのは、不利な条件をどう克服したかというのがほとんどです。それは、障害を克服することによってしか学び得ない教訓がそこにあるからです。

1838年から39年にかけての冬は、教会歴史の中でも最も陰うつな時期でした。聖徒たちは迫害され、略奪され、殺されました。また予言者ジョセフ・スミスと彼の同僚たちは、裏切りによってリバティーの獄に捕ら

われていました。

そしてその陰うつな時期から立ち上がったのは、試練の時も目を見張る発展を遂げた時も教会を導いたこの人たちだったので、リバティーの獄に捕われていた時、主は予言者ジョセフ・スミスに注目すべき啓示をお与えになりましたが、それはこうした暗い時代でのことでした。苦難のただ中から、予言者ジョセフ・スミスは神に慰めを求めました。

その嘆願に対して神はこのように答えておられます。「わが子よ、汝心安かれ。汝の不幸汝の困苦はただこれ束の間なり。

然り而して、もし汝よくこれを耐え忍ばば、神は汝を高きに挙げたまわん。」(教義と聖約127：7—8)

リバティーの牢獄での経験は、投獄されていた人々にとってまさに金をふきかける者の火であったわけです。一方、私たちは彼らが遭った苦難から、予言者ジョセフ・スミスをはじめとする初期の教会指導者たちの偉大さについて、一層の理解と認識を深めることができます。

私たちはリバティーの獄の経験から何を学ぶことができるでしょうか。次のふたつの真理が心に深く響くのは、疑うべくもなく明らかです。

第1は、主イエス・キリストを信じる信仰と、指導者ならびに教会に対する忠誠心の大切さ。

第2は、私たちは幾つの困難を乗り越えなければならぬかは別として、終わりまで耐え忍ぶことの必要性です。

私たちは終わりまで耐え忍ぼうとする時に、主に慰めを求める必要があるかも知れませんが、そしてその時、予言者ジョセフ・スミスのように、「わが子よ、汝心安かれ」



(教義と聖約121：7) という声を聞くことができるでしょう。

私たちの主、救い主イエス・キリストは平和の君と呼ばれています。そしてそのメッセージは個人に対し、また世界に対して向けられたものです。私たちに現世の生活を楽しませてくれるのも、試練に耐えさせてくれるのもその平和です。末日聖徒イエス・キリスト教会の目的のひとつは、人々の心にまた家庭の中にこの平和を確立することなのです。

そうです。回復された福音は、「人生の目的は何か」という問いに対してはっきりと答えています。つまり私たちはどこから来たのか、なぜここにいるのか、死後どこへ行くのかについて教えているのです。

ですから回復された福音の計画が示してくれる見方をもってすれば、人生の意義と目的が理解できるのです。

アリゾナに住むある改宗者はこのように語っています。「私の人生を一番変えたのは、人生の目的を知って、それまでには感じたことのなかった確かな心の平安を得たことです。」

またシアトルの改宗者は、「教会はあなたに何をしてくれましたか」と尋ねられて、こう答えました。「すべてです。今私の人生には目的があります。ところで私は主に對して何ができるでしょうか。私は主にすべてを負っているのですが。」

私個人としてはシアトルの改宗者と同じ気持ちを感じています。自分は主にすべてを負っていると思っています。

証を申し上げたいと思います。私は神が生きておられ、イエスがキリストであり、私たちの贖い主、救い主であることを知っています。

またジョセフ・スミスが主のみ手の器として福音を完全に回復し、神のみ名によって行なう権能を回復したこと、またこの地上にイエス・キリストの教会を再び設立したことを知っています。

またスペンサー・W・キンボール大管長は神の予言者であり、神の導きのもとに今日の地上における神の王国の業を果たしておられることを証致します。主がキンボール大管長を祝福し、支えて下さいますように。

私たちが人生の目的を理解し、自分の生活を永遠の福音の原則に従わせ、平和と幸福を味わい、成長して、神の最大の賜である永遠の生命を受けることができるように、心からイエス・キリストのみ名によってお祈り致します。アーメン。

互いに愛し合いなさい



七十人第一定員会会員

ジェームズ・A・バラモア

愛する兄弟姉妹、そして友人の皆さん、私は、各地の聖歌隊の美しい演奏をお聞きする機会によく恵まれますが、大会の時には自分もタバナクル合唱団と共に歌っておりますと折に触れて申し上げることにしています。私が合唱団の一員でないことは周知の事実ですが、あの美しい演奏に触れる度に、私は秘やかにでも合唱団と共に歌わずにはいられないのです。教会員に愛唱されている歌の中に、「あなた方を愛したように、互いに愛しなさい」という歌詞があります。そこできょうこのことについて、すなわち神の愛と互いに愛し合うということについて少しお話してみたいと思います。

先立って、イタリアで伝道しているひとりの宣教師から、ひとつの話を聞きました。それはまさしく、きょう私がお話ししたいと思っている事柄を見事に描き出した話でした。

その宣教師の話によると、ある朝、人通りの多い通りの一角で、ひとりの少年が道行く人に物乞いをしていたのだそうです。

ぼろぼろの衣服を身にまとい、ひどくすり切れたくつをはいたその小さな少年は、不自由な片足をひきずりながら物を乞うていたのですが、振り向く人はだれもいませんでした。ところが、その様子を遠くからずっと見ていた男の人がいました。その人は、見るに見かねた様子でその少年の所にやって来たかと思うと、その少年を抱き上げて、しっかりと抱き締めたのです。その上何も聞かずにその少年を受け入れ、自分の持てる物を投じてその少年の面倒をみた、ということです。

その光景を見た人は皆、心打たれたに違いありません。そしてそれは、天父が私たちに生涯をかけて学んで欲しいと思っておられる愛の力の表われにほかなりません。神の愛する独り子イエスは、この世を祝福するべく、次のようなみ言葉を繰り返し強調しておられます。「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える。互いに愛し合いなさい。」(ヨハネ14:34)

この神の愛について振り返り、よくよく考えてみる時、その深遠さに圧倒されずにはいられません。そして、そのただ中には、隔てなく神の子らを愛する文字通りの天父が実在されるのです。神は、すべての真理、権能、知恵、徳、そして愛を、御自ら創造し地上に送られた子供たちと分かち合いたいと願っておられます。神は、私たちが日々励み、神を御父とみなすことができるように望んでおられます。また、御自身が私たちにとって友であり、助け手であり、律法の出所であり、赦し手であることを私たちが理解するようにと願っておられます。神は、すべての人に御自身の愛と内在する力を十二分に与え、終極的にはいつの日か御自分に似た者となる祝福を授けたいと、心



(教義と聖約121：7) という声を聞くことができるでしょう。

私たちの主、救い主イエス・キリストは平和の君と呼ばれています。そしてそのメッセージは個人に対し、また世界に対して向けられたものです。私たちに現世の生活を楽しませてくれるのも、試練に耐えさせてくれるのもその平和です。末日聖徒イエス・キリスト教会の目的のひとつは、人々の心にまた家庭の中にこの平和を確立することなのです。

そうです。回復された福音は、「人生の目的は何か」という問いに対してはっきりと答えています。つまり私たちはどこから来たのか、なぜここにいるのか、死後どこへ行くのかについて教えているのです。

ですから回復された福音の計画が示してくれる見方をもってすれば、人生の意義と目的が理解できるのです。

アリゾナに住むある改宗者はこのように語っています。「私の人生を一番変えたのは、人生の目的を知って、それまでには感じたことのなかった確かな心の平安を得たことです。」

またシアトルの改宗者は、「教会はあなたに何をしてくれましたか」と尋ねられて、こう答えました。「すべてです。今私の人生には目的があります。ところで私は主に對して何ができるでしょうか。私は主にすべてを負っているのですか。」

私個人としてはシアトルの改宗者と同じ気持ちを感じています。自分は主にすべてを負っていると思っています。

証を申し上げたいと思います。私は神が生きておられ、イエスがキリストであり、私たちの贖い主、救い主であることを知っています。

またジョセフ・スミスが主のみ手の器として福音を完全に回復し、神のみ名によって行なう権能を回復したこと、またこの地上にイエス・キリストの教会を再び設立したことを知っています。

またスペンサー・W・キンボール大管長は神の予言者であり、神の導きのもとに今日の地上における神の王国の業を果たしておられることを証致します。主がキンボール大管長を祝福し、支えて下さいますように。

私たちが人生の目的を理解し、自分の生活を永遠の福音の原則に従わせ、平和と幸福を味わい、成長して、神の最大の賜である永遠の生命を受けることができるように、心からイエス・キリストのみ名によってお祈り致します。アーメン。

から望んでおられるのです。こうした天父の愛と、それがひとりの人間あるいは全世界に及ばず影響力は、まさしく人知を越えるものであり、留まるところを知りません。神は、絶えずそして永遠に私たちを優しく見守り、愛を持って私たちの注意を喚起して下さるのです。

神は、独り子を通し、祈りを通しみたままを通し、予言者を通し、あるいは戒めを通して、私たちにみ手を差し伸べ、愛と関心を示して下さいます。そして、聞く耳を持つすべての人々に、導きと鍛練の機会を与えて下さるのです。詩篇の作者は、次のように歌っています。「地は主のいつくしみで満ちている。」(詩篇33:5)

神は、私たちを深く愛しておられるので、最も神聖な永遠の真理、すなわち、永遠の生活規範である戒めをお与えになりました。またその大切さを私たちに理解させるために、神聖な方法でその戒めを明らかにされました。十戒がどのようにして与えられたか思い出せない人はいないでしょう。これらの戒めは人の考えによって絶えず変えられてきました。しかし私たちは今ここで、世界に向けて証したいと思います。必要欠くべからざる永遠の真理である戒めがひとりの神の予言者によって再び地上に回復されたこと、そして、もし人の力によってその戒めが変えられるとしたら、その効力を失なうということ。また、これらの律法、あるいは戒め、標準と呼ばれるものは、子らに対する神の愛の最高の表われのひとつであることを心から証したいと思います。そしてまぎれもなくその戒めは、神の愛、神の道、そして神の神聖の種を私たちの内に植え付ける、絶対的な戒めなのです。それは、すべての安全の源です。内なる霊は

本能的にこのことを理解し、喜びを覚えます。

愛にあふれた神はまた、「そのひとり子」を賜わったほどに、この世を愛して下さい。(ヨハネ3:16)ました。そして、人類を贖うために独り子が命を捧げられるのをよしとされたほか、数々の祝福を私たちに授けようとされたのです。イエスは生涯をかけて、天父の愛、御計画、戒めが人々の心に平安をもたらし、今も永世にもわたって人類を高めるということを実証されたのです。

私は責任上、過去数カ月間に多くの国々を訪れましたが、今ここで心から証申し上げたいことがあります。それは、人が神の愛を知り、心に感じてその戒めに従う時に、常に同じ結果が表われるということです。すなわち、霊的に目覚めたその人の生活が一新されるのです。それ自体、まさしく神の愛が真実であることを証しています。生活が変わるのは、決して恐れからでもなければ強制されたからでもありません。天父とその子らの間に培われた愛の絆のなせる業なのです。ですから、神を仰ぎ見て生活するように勧告されるのもしごく当然のことなのです。神の愛は、人の心に深く浸み込んで、からを破り、心を開かせます。そして、真理と善を受け入れやすくし、生活を変えられるように助けます。この愛が心の中で育まれていくと、人は次第に己れを克服し、他の人々に目を向けるようになります。そして、祈りと、研究と、戒めを守ることを通して謙遜に天父を求める時に、他の人々に対する神の愛に目覚め、神の数の権能を受けることができるようになるのです。「もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにお

るのである。」(ヨハネ15:10) このみ言葉が真実であることは、多くの人々が証しています。私たちは、救い主のみ言葉に従って、「まことのぶどうの木」の枝に自らをつないで、イエスと同じ権能および力を得たいものです。そうすることによって私たちは、まことのぶどうの木の果実を取って味わうことができるようになります。(ヨハネ15:1-6 参照)

このようにするならば間違いなく奇跡が起こります。神の愛に触れ、自ら変わった人は、深い敬意を持って周囲の人々を見るようになり、各自の人となりを尊重し、永遠の天父の子供としてそれぞれがどのような可能性を持っているかを心にかけようようになります。

私は数年前に責任をいただいてオレゴン州に行った時、とても貴重な体験をしました。ステーキ部大会の後、ひとりの幼な児の祝福を頼まれたのです。私はその日、神の愛の真髄を知りました。その幼な児と一組の夫婦が部屋に通されました。彼らはその時すでに、6、7人の子供を養子にして養育していたのです。いずれも、身体的な障害を背負い、親に見捨てられて、愛と養護を必要とする子供たちでした。私は、彼らを前にして謙虚な気持ちになりました。また、その日その部屋には神の愛があふればかりに満ち満ちていたのを今でも覚えています。あの子供たちはもはや神にとって「宿り人」(エペソ2:19)ではなくなつたのです。

この神の愛を知ると、だれにでもある欠点に目くじらを立てることがなくなり、「兄弟を己が身の如くに思」(教義と聖約38:24)えるようになります。そして、いつでもどこにいても、人を高め、助けたいと思

うようになるのです。うらみもねたみも、高慢さも、虚栄も、こだわりも消え、言語の違いが人を隔てることさえもなく、神のみこころとみたまに心を開き、それと一体となった人の心は、すべての人々に向くようになります。聖典には、麗しくも明確にこのことが記されています。「全国に何ら不和がなかった。なぜなら……神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。」(IV ニューファイ15, ローマ5:5)

それでは、これらのことを悟った人は完全な者と言えるのでしょうか。いいえ、そうではありません。人は永遠に成長を繰り返し、これを克服していかなければならないからです。むしろそのような人は、完全な者となるために絶えず努力をしていると言えるべきでしょう。偉大な予言者モロナイは、この点について、次のように勧告しています。「私、私の父……を、不完全な所があるからと言って非難するな。むしろ神が私たちの不完全な所をあなたたちに知らせて、あなたたちに私たちよりもっと賢い者になる道を学ばせたもう神のめぐみに感謝せよ。」(モルモン9:31)

この賜、すなわちこの神の愛を身に受けることによって、私たちは争いや不和や人間的な裁きを回避することができるようになるのです。また、人が生まれながらに持ち合わせている力や徳を認識することができます。そして、心の中で他人を裁いたり、指導者を支持しないとといったことが、神の愛を抱いて生活しようとする者にとってどれほど矛盾する態度であるかがわかるのです。そのような感情が、神の愛とは全く相容れないものだからです。天父は、次のように言うておられます。「何人もへりくだりて愛に充ち……てこれを為さざれば

この業を助くるを得ず。」(教義と聖約12 : 8)

片足の不自由な少年を助け上げた人のように、ひたすら愛し、助けるのです。非難したり、裁いたりするようなことがあってはなりません。

この神の愛は今日、地上に、神の教会に、そして教会員の間に、どのように表わされているのでしょうか。

まず第一に、人々の模範となり導き手となるように、天父が愛する独り子を地上に送られたことに表われています。

また、地上に神の王国と教会を設立し、すべての人類を祝福するために愛と戒めを与えて下さったことにも表われています。

互いに愛し合い、両腕を広げて互いを受け入れ合い、愛を行ないで示す家族の中に表われています。

あるいは、愛にあふれた天父が現代の予言者を与えて下さったことにも表われています。天父は、み言葉を受けて神の子らを導く者として、キンボール大管長と使徒たちを召されました。

この神の愛はまた、愛にあふれ、神に對する感謝に満たされた家族、天父の示したもう最も高い標準を日々教えようと努める家族に見ることができます。

先日、ドイツで聖餐会に出席した私は、目頭が熱くなり、胸が一杯になりました。82人の幼い子供たちが、天父に対する愛の歌を歌ってくれたのです。私はその日、教会が地上に回復されたことを心から感謝しました。また、自分も、自分の子供たちも初等協会に集まって歌を学び、愛を学ぶことができたことを感謝せずにはいられません。私は、子供の頃から何千回となくそうした歌を歌ってきました。その歌詞の中

に歌い込まれている愛と大切な教えに心から感謝しています。その日の聖餐会には、改宗したばかりの御婦人が出席していました。出産を控えた彼女は、教会と、子供たちと、初等協会と、その場に満ちあふれていた天父の愛に深く心を打たれた様子でした。そして、聖餐会が終わると、声をはずませながらこう言いました。「赤ちゃんが待ち遠しくてたまりません。一日も早くあの素晴らしい初等協会で学ばせてやりたいと思います。」

愛する友人の皆さん、これは、ほんの一例にすぎません。天父は御自身の教会、すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会に数多くの大いなる祝福を与えて下さいました。主の教会は、地上における避け所であり、美しい場所です。そこでは、愛する天父によって明らかにされた標準が不変の形で堅く守られているのです。

主は、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」(ヨハネ13:34)と言われました。これこそまさしく主のみこころです。そして、あらゆる地域のあらゆる人々に向けて主が永遠に望まれる究極の課題と言えましょう。私たちは心を尽くしてすべての人々を、今日この地上に打ち立てられた神の王国にお招きしたいと思います。そして、この王国にある精神と、平安と、神の愛を享受していただきたいのです。

すべてを、イエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

☆

☆

神の子らに手を 差し伸べなさい



七十人第一定員会会員

ジャック・H・ゴズリンド・ジュニア

け さ私は皆さんに、私がイエス・キリストの福音について感じていることと、イエス・キリストの福音が相互の人間関係に与える影響についてお話したいと思います。救い主の復活の物語を読み直してみても、私は、救い主が復活して最初に言われた言葉が私たちの人間関係の基礎となるものであるという思いを強くしました。

週の初めの日の朝早く、マリヤが主を埋葬した墓に行くとき、墓から石が取りのけてありました。そこでマリヤは走ってペテロとヨハネのところへ行くと、ふたりに主が墓から取り去られたことを告げました。ペテロとヨハネは、マリヤの言ったことを確かめようと、急いで墓へ向かいました。ふたりは墓が空になっているのを見て、自分の家に帰って行きました。

しかしマグダラのマリヤは、墓の外に立って泣いていました。そして泣きながら、身をかがめて墓の中をのぞくと、白い衣を着たふたりのみ使いがいました。彼らはマリヤに、「女よ、なぜ泣いているのか」と言いました。マリヤは彼らに言いました。

「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです。」

そう言って後ろを振り向くと、そこにイエスが立っておられました。しかし、それがイエスであることに気がつきませんでした。救い主はマリヤに、「なぜ泣いているのか」と言われました。マリヤは、その人が園の番人だと思って言いました。「もしあなたが、あのかたを移したのであれば、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります。」(ヨハネ20:11-15参照)

それから救い主はマリヤの名を呼ばれました。(救い主は私たち一人一人の名前を御存じです)そこでマリヤはすぐに、その方が救い主であることがわかりました。救い主を深く愛していたマリヤは、主が生きておられるのを目のあたりに見て、思わず主を抱き締めようとします。

それに対して主は、愛と思いやりを示しながらも落ち着いた様子で、永遠に朽ちることのない言葉を話されたのです。「わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行くと、『わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であるかたのみもとへ上って行く』と、彼らに伝えなさい。」(ヨハネ20:17)

「わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神」というこのメッセージは、その時も非常に重要な意味を持つものでしたが、今日の私たちにとってもきわめて重要なものです。使徒パウロは同じ教えを、次のように明確に述べています。

「われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。あなたがたのある詩人たちも言ったように、『われわれも、確かにその子孫である』。

このように、われわれは神の子孫なのであるから、神たる者を、人間の技巧や空想で金や銀や石などに彫り付けたものと同じと、見なすべきではない。」(使徒17:28-29)

私は祈りを通して、また勉強と福音を実践することによって、私たちが皆神の子供であること、つまりひとつの大家族を構成するひとりであるということを感じるようになりました。私たちは神の息子、娘なのです。天父は真実私たちの霊の父ですから、「天父」という言葉には文字通りの意味があることになります。だとすれば私たちは人種や宗教、国籍を越えて、皆が兄弟姉妹であるということになります。それぞれが神性の片鱗を秘めているのです。

この真理は私たちの人間関係にどのような影響を与えるのでしょうか。もし神のすべての子供がこの崇高な真理が持つ力を本当に理解し実感していたとしたら、相互の理解ははるかに深まり、お互いへの思いやりや愛が見られたことでしょう。そして戦争も犯罪もあらゆる残酷な行為もなくなったでしょう。

真の兄弟愛は、私たちの幸福にとっても、世界の平和にとっても不可欠のものであると私は確信しています。私たちは互いに愛し合い、私心を捨てて自分たちの持っている才能や能力、手段を分かち合わなければなりません。ひとりのバリサイ人の律法学者が、「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」と質問した時に、救い主がお答えになった言葉には何ら

不思議はないのです。救い主はこのようにお答えになりました。「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。

これがいちばん大切な、第一のいましめである。

第二もこれと同様である。『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。

これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている。」(マタイ22:36-40)

そしてまた、間もなくこの世の生涯を終えようという時にも、この栄えある宣言をしておられます。

「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。

互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう。」(ヨハネ13:34-35)

シェイクスピアはこのように言っています。「愛情を示さぬ方は、愛さぬのと同じこと。」(「ヴェロナの二紳士」第1幕第2場31行、北川悌二訳) 私たちは愛を示す必要があります。まず家庭の中から始め、それからワード部の会員、あまり活発でない会員、そして教会員でない隣人へと私たちの愛の輪を広げていく必要があります。また、この世を去って幕の彼方へ行った人人にも愛を示す必要があります。

教会の指導者の方々ならびにすべての教会員の皆さん、福音の光を必要としている私たちの兄弟姉妹に対してこれまで以上に友情の手を差し伸べて下さい。私たちが示す愛といえは、多くは口先だけのものや、



善い行ないをただ夢みるだけのものに終わっていますが、真の愛というのは人を天父に近づける私心のない親切な行為によって表わされるものであると、私は信じています。

私は、祈りの時間に神殿に向かっていた時のペテロとヨハネが示した素晴らしい模範についてよく考えます。生まれながら足のきかないある男が、美しの門と呼ばれる神殿の門のところに置かれていました。それは神殿に来る人々に施しを請うためでした。彼は、ペテロとヨハネがやって来たのを見て、手を差し出して施しを請いました。そこでペテロは彼に、「わたしたちを見なさい」と言いました。彼は何かもらえるだろうと思って、ふたりに目をやりました。その時ペテロはこのように言っています。

「金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい。」

私たちについて見た場合、今日の世界において同胞を助ける際に一番多く見られるのが、このような態度ではないかと思えます。しかし、ペテロの場合は言葉だけには終わりませんでした。聖書には、「こう言って彼の右手を取って起してやると」があります。すると男の足とくるぶしとは、たたまち強くなって、立って歩き出しました。そして、歩き回ったり踊ったりして神を賛美しながら、神殿に入って行きました。（使徒3：1—9参照）

今日、世の人々に必要なのは金銀ではなく、愛の手であり人の心を高揚させる主のみたまの力ではないでしょうか。

ひとりの親友が、愛というものの深さがわかったと、このように話を聞かせてくれました。彼女の家族はいつも教会には大変活発で、戒めを守るように精一杯の努力をしていました。ところが、娘が教会員でない男性と婚約してしまったのです。彼らは驚き、ひどく落胆してしまいました。翌日、この母親は親しい友人に自分の気持ちを打ち明けました。母親は、娘の婚約者が立派な青年であることは承知していたのですが、怒りと苦しみ、そして裏切られたという思いで、心の中は風穴が開いたような状態でした。それで、結婚式もしてやらないし、娘の顔も見たくないとまで言ってしまったのです。彼女は、そのような状態の時に友人に話をしようという気持ちになったのは、主がそう導いて下さったからに違いないと言いました。それは友人からこのように言われたからです。

「あなたって、娘が自分の思い通りにする時しか娘を愛せないような、そんな母親なの？そんな愛は利己的で、自分中心の狭量な愛だわ。子供がいい子でいる時に愛するのはやさしい。でも、子供というのは間違をした時にこそもっとも愛を必要とするのよ。親は子供が何をしようと愛と思いやりを忘れてはならないと思うの。それは間違った行ないを見ごごしにしたり、認めたりするというのではないわ。つまり責めるのではなくて助けること、憎むのではなく愛すること、裁くのではなく赦すことなのね。悪い様に言うのじゃなくて励ましてあげるの。見捨てないで導くのよ。子供というのはどうしても愛せないと思う時にこそ愛さなければ。もしそんなことはできない、したくもないというのだったら、あなたはいい母親とは言えないわ。」

涙に頬をぬらしながら、彼女は友人にどのようにしてこのお礼をしたらよいか尋ねました。すると友人はこのように答えました。「だれかが困っている時に助けてあげなさい。私もそうしてもらったし、そのことは永遠に感謝しているわ。」

この話は母親の娘に対する愛を示したのですが、これはまだほんの始まりにすぎません。私たちは神のすべての子供に対して、このような真の愛を示す必要があります。それができるようになってこそ、私たちは本当の意味で神に似た者となれるのです。ヨハネはこのように書いています。

「愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は神から出たものなのである。すべて愛する者は、神から生れた者であって、神を知っている。

愛さない者は、神を知らない。神は愛である。」(Iヨハネ4：7—8)

私たちの完全な模範者であられるイエスキリストは、思いやりのある行ないを通して変わることなく愛を示されました。また主は愛を示す方法もよく心得ておられました。

主はヤコブの井戸でサマリヤの女に会った時、彼女に素晴らしい永遠の真理の幾つかをお教えになりました。サマリヤの女は御自身がメシヤであるという主の証を聞いて、町に行き、「この人がキリストかも知れませんが」(ヨハネ4：29)と証しました。

主は、社会から見捨てられた人々のために御自身を捧げられました。思み嫌われていたひとりのらい病人が、主にひれ伏して言いました。「主よ、みこころでしたら、きよめていただけるのですが。」聖書にはこうあります。よく注意して下さい。「イエスは手を伸ばして、彼にさわり、『そうしてあげよう、きよくなれ』と言われた。する

と、らい病は直ちにきよめられた。」(マタイ 8:2-3)

イエスが行なわれた最も感動的な奇跡のひとつは、絶えず個人に注意を払っておられたことです。イエスはラザロを死からよみがえらせようとしておられた時、マリヤが泣いているのをごらんになりました。その時の様子がこう記されています。「イエスは、……激しく感動し、また心を騒がせ……涙を流された。」(ヨハネ11:33-35) 主はこの機会を利用して、御自身の使命について神聖な証を述べられました。「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。」(ヨハネ11:25)

救い主はまたニーファイ人を訪れた時に、このような重要な訓戒を与えておられます。「汝らはいかなる人物にてあるべきか。まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず。」(III ニーファイ 27:27)

まさしく私たちは救い主のごとくになれることを証します。私たち自身にとっても、また私たちが仕える人々にとっても、永遠の恩恵をもたらす方法で愛を示すことができるのです。

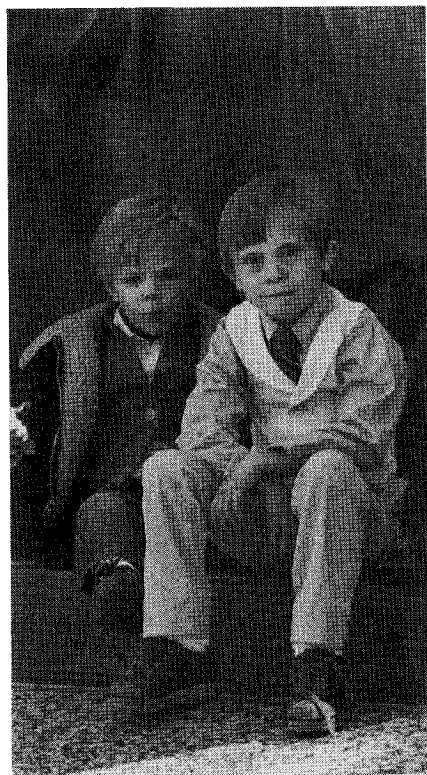
予言者が2年前に出されたチャレンジに応えようではありませんか。

「教会はすでに成長と円熟の域に入り、私たちがさらに前進を遂げるために最後の準備をする時に来ている。このような印象を私はどうしても拭い去ることができない。……しかし、私たちがひとつの民として前進を遂げるために必要な基本的決定は、教会員一人一人が行なわなければならない。教会の歩みは私たち各個人の歩みにかかっているのである。

私たちは平坦地で十分に休んだ。これか

らは、より高い地点に向かって前進しようではないか。家庭でも、ワード部でも、隣近所でも、他の人々に不承不承手を差し伸べるような態度は今後終わりにしようではないか。」(スペンサー・W・キンボール、「聖徒の道」1979年10月号, p.116)

きょう決心しようではありませんか。自分の家族に、活発でない教会員や教会員でない隣人に、さらにはすでに世を去った親族、そのほか愛を必要としている人々に愛の手を差し伸べることを。私たちは、自分を捨てて愛に生きるようになった時に、個人として、教会として、また人類として大きな祝福が与えられることを、イエス・キリストのみ名によって証致します。アーメン。



自立がもたらす祝福



十二使徒定員会会員
マーク・E・ピーターセン

私の妻の父親は船長でしたが、ある日船が沈没し、生残った乗組員たちは救命ボートに乗り移って助けを待ちました。そして何時間も海の上を漂った末やっと救助されました。その間彼らは全員で「主よ、荒海を導きたまえ」（讚美歌127番）と歌っていたということでした。

この歌と愛する教会幹部の方々の証に添えて、私の証をお伝えしたいと思います。主イエス・キリストは確かに全能の神の御子であり、世の救い主、贖い主であることを証します。このような証があることを感謝しています。間もなく復活祭ですが、主が生きてましますことを私からも証します。

末日聖徒としての私たちの最大の使命は、イエス・キリストについて証することです。世の中の艱難辛苦に直面した時に、この讚美歌にあるように「主よ、荒海を導きたまえ」と祈り続けるなら、私たちは苦難を克服して、人生を力強く歩いていくことができるでしょう。苦しみや試練が取り除かれるわけではありませんが、そこには常に聖きみたまが共にあり、私たちを安全な道へ

と導いて下さるのです。

現在、私たちが世界的な危機に直面していることは周知の事実です。しかし根本的な問題は多くの人々が考えていることとは別なものなのです。それは基本的に経済上の危機でもなければ、石油不足から起こる危機でもありません。

私たちの根本的な問題は道徳と靈性に関するものです。私たちは神に立ち返らなければなりません。

人はすべて神の子供であるため、神の戒めはすべての人に適応されます。戒めは私たちの生活の隅々にまで関係しています。ですから、この世にあって、幸福と安らぎを感じたいと心から願うなら、これらの戒めに確信を持って従わなければなりません。私たちが戒めを無視したり、破ったりする時には、その結果は深く私たちの心にまで及ぶことになるでしょう。戒めを守るか守らないかの選択には、あいまいさがまったく許されません。そしてどちらを選んでも、その選択によって私たちの生活が支配されるのです。このことから、問題をもっと現実的に捕えて、以上述べた冷厳な事実と真っ向から立ち向かうべきことは、常識的以外の何ものでもないのではないのでしょうか。

神は私たちに、自分の好きなことを行なう自由意志をお与えになり、私たちが自らの英知と才能を使って靈的にも物質的にもよい環境を作り出すことを期待しておられます。神は私たちが実りある人生を送るよう望んでおられると同時に、そうできるように助けたいと思っておられます。実際、人が現世にあるのは幸福を得るためだからです。（IIニーファイ2：25参照）

そのために、将来の計画を十分に立てる必要があり、当面のことばかりに追われた

生活や、時に流されてただ何となく日々を過ごすといった生活を避けなければなりません。

私たちは勤勉でなければなりませんし、質素でなければなりません。また、欲することと必要とするもののバランスをよく取り、霊的な土台の上に生活を築かなければなりません。

私たちは神の子供ではないでしょうか。私たちは事を行なう時に、まず神の方法を捜し求めるべきではないでしょうか。正しい方法で神に仕える時、霊的な土台を固めていることにはならないでしょうか。

人生には数々の障害が立ちはだかっています。道徳的な問題もあれば、経済的な問題もあります。どのようなものであれ、私たちにとってどれも一筋縄ではいかない問題です。

実際、私たちは困難な時代に生きています。そのような世界に置かれている私たちは、好むと好まざるとにかかわらず、危機や災い、誘惑といったものの影響を受けます。しかし、どのような影響を受けようが、私たちは世のものであってはならないのです。ここに霊性の源があります。聖歌隊と共に「主よ、荒海を導きたまえ」と歌うのはそのためなのです。

このような道徳的かつ霊的危機をもたらす原因は、多くの人々が神の定められた生活の規範を無視し、拒んでいるからです。現に大勢の人がその影響を受けて神を軽んずるようになってきました。そういった人々の行ないは邪悪に満ちているため、彼らは光明よりも暗黒を好むのです。

例をあげましょう。まず、生命の清らかさに真っ向から攻撃をしかけてくる数々の不道徳な行ないです。それに対して私たち

はどうしたらいいのでしょうか。身を任せますか。とんでもないことです！あらん限りの力で戦うのです。

私たちは徳高く、自らを清く保たなければなりませんし、子供にもそう教えます。全能なる神が私たち一人一人に投げかけておられる言葉に聞き従っているのでしょうか。「汝ら、主の器をもてるものは清くあれ。」（教義と聖約38：42）

酒類やタバコ、麻薬など、日に日に私たちを脅かすものの力は増大しています。この力に、私たちはどう対処したらいいのでしょうか。

主に忠実に従い、知恵の言葉を守ることです。この律法が今ほど重要かつ時宜を得た警告となっている時代はありません。この知恵の言葉を抜きにしては、だれひとり酒やたばこ、麻薬といったものに引きずり込まうとする激しい力に耐えることはできません。

世は私たちを、虚言や欺き、盗みへと誘わない、万引きや様々な悪行に誘います。また、他人の名声に傷をつけたり、人の夫や妻を奪ったりすることもさせるのです。これは盗みの中で最もひどいものです。こういったことに対して私たちはどうしたらいいのでしょうか。

十戒を守ることです。そしてあらゆる種類の不正直を避け、他人のものをやたらに欲しがるといふ誘惑をはねつけるのです。

また、信仰箇条第13条に従う必要があるでしょう。「われらは、正直、真実、貞潔、慈善、高德なるべきこと……を信ず。」

ほかに答えがあるのでしょうか。

うそつきや盗人、清くない人、このような人が神の王国に何とかもぐり込まうとした場合、それは可能でしょうか。いいえ、

罪の衣を着ている内は入れません。罪を犯した人が入ることを赦されるのは、心の底から完全に悔い改めた後だけです。

世はまた他の様々な面で私たちを脅かしています。特に経済面でそれが顕著に表われています。信用販売などによって収入以上の買物をするように誘うこともひとつの現象です。こうして次第に負債の中に埋もれてしまうのです。そしてセールスマンの上手なくどきや説得力のある広告、信用貸し、クレジットカードの乱用がそれを助長しています。

私たちは、このような状態にどう対処したらよいでしょうか。

何はさておき、収入の範囲内で生活しよう、よく考えた上で予算を立て、予算を越えないようにしようと決心することです。

正直に、神に対する自らの責任である自分の一を納め、それを逃れることがないように、神のみ前で決心するのです。また、支払い能力を上まわるような法外な借金を絶対にしないことです。

経済を立て直す手段として、一時的に生活習慣を制限しなければならないという場合、心から喜んでそうしようではありませんか。また、必要が生じれば当然と言える欲求をも犠牲にし、この不景気のためにもたらされた生活環境を変えようと努力しようではありませんか。

道徳に関する主の戒めはほとんど守っているながら、物質的なことに関する戒めをなおざりにしている人が大勢います。そういった人々は、非常時に対する備えをしなさいという警告を無視しています。たとえそのような事態になっても「私だけは大丈夫」と安易に考えているのです。これは他人事では済まされない問題です。経済危機に陥

れば、私たちの身に実際にふりかかることなのです。

霊的であれ物質的であれ、将来に対する備えは、神の永遠の計画の一部です。逆境や苦難から身を守ることは当然のことでしょう。

私の家の前の通りはクリ並木になっています。春には一面美しい花で覆われ、それは見事です。

夏が近くなると、小さな緑のイガの中にクリの実がだんだんと大きくなる様子がわかります。そして秋には、その実が道いっばいに落ちます。その頃にはリスがどこからともなく現われて、歩道に腰をすえてク



りのイガを破っては、中の実をすばやく取り出して集め、冬ごもりの仕度に大わらわです。

小さいのに賢い動物です。それに働き屋です。彼らは全く恐れを知りません。通行人の中にはだれひとりとしてその小さな動物の働きを妨害する者もないからです。彼らが自分たちの生活を守るためにせせせと働く様は、見ていて実に興味深いものです。

彼らはクリの実をたとえひとつでもむだにしません。収穫のない寒い冬の間、このクリの実が自分たちの生活を支えてくれるものであることを知っているからです。

リスは、自分たちの実を集めるのにほかの助けを当てにしたりはしません。自分たちの力でなっています。主はリスたちに実りを与えられましたが、その取り入れは彼ら自身の手で行なわなければならないのです。

リスは私たちに独立独歩の精神を教えています。これは自然界の生物だけでなく人間にも当てはまる大切な教えです。

では、神は様々な困難に苦しむ私たちをも助けて下さるでしょうか。もちろん助けて下さいます。神はこう言っておられます。「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。」(マタイ 6:28)「空の鳥を見るがよい。……あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか。」(マタイ、6:26)

神はもちろん私たちを助けて下さいます。ただし、そこには欠くことのできない条件があります。私たちが神の戒めを守る限りという条件です。

神は私たちに自立と勤勉を教えておられます。また、将来の計画を立てること、来

たるべき非常時の備えをすること、手に負えない負債を避けること、そして主が喜ばれるような方法で主に仕えることを教えて下さいました。

同時に、主は私たちが賢くなり、支払い能力をはっきりと認識して支出を一定の額内にとどめることを望んでおられます。

計画に当たっては、暮らしを支えるのに欠くことのできないものを優先順に書き出してはどうでしょうか。そして優先順位が誤っていないことを確認します。このようにすれば、経済的に身動きのとれなくなる状態を避けることができるでしょう。

何かを購入しようとする時は、欲しいから買うのか、それとも必要だから買うのかをよく考えてみるようにしましょう。

主は私たちに福祉プログラムを与えて下さいました。これは靈感によるプログラムで、すべての教会員に適応されます。このプログラムの最も重要なところは、私たちそれぞれが自立できるようになるということです。また、将来を見越して少しずつも蓄えをし、収入の範囲内で生活して、楽な時も苦しい時もあらゆる努力をして自らを支えるという原則を受け入れるようになることです。

私たちの福祉計画の真髄はこれではないでしょうか。

この偉大なプログラムは私たちに、副食品やぜいたく品ではなく生活必需品を1年分貯蔵するようにと教えています。ケーキの上にクリームの飾りつけがなくても、アップルパイの上にホイップクリームが載ってなくても私たちは生活していけるでしょう。

また、ケーキやパイがなくても私たちはちゃんと生きていけます。生命を維持する

ために必要な基本的な食物があれば満足が得られるはずで。

福祉倉庫は、緊急事態に陥った大勢の適切な人々に援助を与えています。そのためにあるのが監督の倉庫です。私たちの中には災難に遭い、その結果こういった援助を受けることになった人もいることでしょう。このような助けはそれを受けるにふさわしい人のために常に快く与えられています。

しかし、福祉計画全般を眺めた時に、最も大切な倉庫は私たちの家庭の中にある倉庫であるといえましょう。非常時にできる限り対応できるよう、各自家の中に家族のための倉庫を備えておかなければなりません。



ん。

監督の倉庫は実に見事に整備されていて、受けるにふさわしい忠実な聖徒を何千人と援助しています。しかしこれはあくまで緊急の援助を必要とする人に対する対策であって、450万もの教会員全員を援助するためのものではありません。

しかし、自分でできる限りの努力を尽くした後は、主こそ私たちの最大の拠り所であることを心に刻み込まなければなりません。

主は古代イスラエルの民に、主に仕え主の戒めを守るならば、干ばつを防ぎ、豊かな実りをもたらすと言われました。これと同じ約束を主は私たちにも与えておられません。

また、私たちが什分の一を正しく納めるならば、主は天の窓を開いて、有り余ほどの祝福を注いで下さるとも約束しておられます。このことから、什分の一の原則は私たちの福祉と自己保存に関する主の御計画の一部であることがおわかりでしょう。

主は今の世の聖徒たちにこう告げておられます。「……以後毎年彼らの得る全利益の什分の一を納むべし。これを以て、……彼らの守るべき永久的定法となす。」(教義と聖約119:4)

確かに、什分の一を納めることは、困難な時に私たちを守ってくれる神の御計画です。もう一度繰り返します。什分の一は苦難にあえぐ私たちを守ってくれるものなのです。なぜ私たちがそのように理解できないのでしょうか。什分の一は真っ先に納めるべきものなのに、什分の一を納める余裕がないと言う人がいるのはなぜでしょうか。

主は大いなる艱難が訪れる時のことを何と語っておられるのでしょうか。「この『什分

の一』を納めたる者は人の子の来る時火に焼かることなし。」(教義と聖約64：23)

また、主はこう述べておられます。「もしわが民にしてこの律法を守りて聖く保たず、またこの律法によりてシオンの地をわれに聖くして以てわが律令と審判とをそこに保ち、その地を最も聖きものとなさずんば、……誠にわれ汝らに告ぐ、そは汝らにとりてシオンの地にあらざるべしと。」(教義と聖約119：6)

このことから、什分の一の律法に従順に従う時に私たちがどのように守られるか、おわかりいただけることと思います。

主はほかに何とっておられるでしょうか。今すなわちきょうは「わが民の『什分の一』を捧ぐる日なり」とあります。なぜなら「人の子の来るまで今より後を『今日』と称えられる」からです。(教義と聖約64：23)

では、私たちにこのことを行なう信仰があるでしょうか。従順さがあるでしょうか。

主はさらにこう述べておられます。「すべてバビロンに留まる者一人も助くることなからん。」(教義と聖約64：24)バビロンに留まる者とは、神のみ言葉を拒み、この世の快樂にふける人のことです。

このように主は、道德面と靈的面が危機に瀕していることを再三強調しておられるのです。

そして主は、「『今日』と称えられる中に汝らの働きをせよ」(教義と聖約64：25)とっておられます。すなわち、主に従い、主に仕え、主のみ前に義しく歩み、「主の器をもてるものは潔くあれ」(教義と聖約38：42)と命じておられるのです。これが律法です。

罪や負債以外でも、何らかの形でその物

に縛られて身動きできなくなることは、神のみこころに反することです。

「また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう。」(ヨハネ8：32)主ははっきりと述べておられます。罪から離れなさい、何物にも執着することをやめなさい、負債に縛られることのないようにしなさいと。主の説かれる真理である福音は、私たちが主に従いさえすれば、自由を与えてくれるものなのです。

主を信頼しようではありませんか。主の重荷は世の重荷よりもはるかに負いやすいものです。

「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ11：28)と主は言って下さっています。

主は私たちが愛し、見守っていて下さいます。そして、厳しい時代にあっても、私たちが信仰薄い者とならない限り、私たちが栄えさせて下さいます。主は私たちが試されることはあっても、忘れ去るようなことはなさいません。

この歌を心からの思いをもって歌おうではありませんか。

主のみことばは信仰の

固き基を造りぬ

……

主われに、たよるものの靈

敵の手には渡し得ず

地獄のかれに迫るとも

われその靈を見捨てはせず

必ずわれは見捨てず

(讚美歌96番1、7)

これこそ主の約束です。主のみ言葉は真実です。私はこれらのことを主イエス・キリストの聖なるみ名によって証致します。アーメン。

だれも書き加えたり、 取り除いたりしてはいけない



十二使徒定員会会員
ハワード・W・ハンター

最近私のところに、伝道中の若い友人から、聖書の最後の節に関して彼が受けた質問と、それがモルモン経にどう適用されるかについて尋ねた手紙が届きました。私たちは、聖書の最後の書すなわち黙示録の終わりの所で、これを記したヨハネがこの書に書き加えたり、取り除いたりするすべての人に対し、警告とろい言葉を発しているのを思い出します。彼はこのように言っています。「この書の預言の言葉を聞くすべての人々に対して、わたしは警告する。もしこれに書き加える者があれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる。また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、神はその人の受くべき分を、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる。」(黙示22:18-19)

この聖句は、神の啓示は閉ざされた主張して、モルモン経に疑いを抱こうとする人々が、必ずといっていいほど引き合いに出すものです。もはやいかなるものも書き加えられたり、取り除かれたりしてはなら

ない。モルモン経は聖書の言葉に書き加えるものであるというのが彼らの言い分です。この主張は、モルモン経が初めて出版された時に始まり、それからずっと続いて今日に至っています。では、その主張を立証するものがあるのでしょうか。

この問いに対する答えは、きわめて明解です。その聖文の言葉を注意深く読んでみると、書き加えたり、取り除いたりしてはならないという警告は、聖書全体について言っているのでもなければ、新約聖書をさして言っているのでもないことがよくわかります。ヨハネの言葉を借りるなら、「この預言の書」の言葉についてのみ言っていることが明らかです。すなわち、黙示録の中に含まれている予言のことを指しているのです。このことは、ヨハネが黙示録を書いた時点で、新約聖書の他のいくつかの書はまだ書かれていなかったこと、また当時すでに書かれてあったものでも、一冊の書物として編纂されるまでには至らなかったという事実によって、立証されます。

私たちが聖書として知っている66書から成るこれらの記録は、最後の書であるヨハネの記録が記されたずっと後になってまとめられ、一冊の書物に編纂されたのです。従って、その書に書き加える人々に宣告されている恐ろしい裁きは、黙示録に限って当てはまるものであり、聖書全体や新約聖書に適用されるものではないということです。

次に、その警告は「この書の預言」または「この預言の書の言葉」という言い方をしていることに注意して下さい。このふたつの例の「書」という言葉は単数形をとっています。従って、これはヨハネによって書かれた「ヨハネの黙示録」という予言の

書だけをさしていると考えられます。この「書」という言葉は、当然単数形でなければなりません。なぜなら、この書が書かれた時、それは他のどの書とも関連がなかったからです。しかもこの書が新しい正典すなわち新約聖書として知られるようになったいくつかの記録に加えられたのは、何年も経って教会などでたびたび討議された末のことであったからです。

また一般に、パトモス島にいる間に書かれたとされている黙示録を書いた後、ヨハネ自身が聖典に書き加えているということは非常に興味深いことです。ヨハネが第一の手紙を書いたのは、パトモス島を去ってかなり経ってからのことです。啓示は閉ざされ、人は聖典につけ加えることを禁じられたとする主張を退けるのに、この事実だけで十分でしょう。これはまた、ヨハネの問題の部分が黙示録のことだけを指していたことを裏付けるものです。

旧約聖書の中にも、書かれている言葉を取り除いたり、それにつけ加えたりしてはならないという同様の力強い宣言が出ています。ひとつは、申命記の中にあります。それはモーセがイスラエルに、主の律法に従うよう説き勧めていた頃に書かれたものです。モーセの律法というのは口伝律法で、申命記の中に見られるように律法が成文化される前は、文書として書き留められていませんでした。しかしモーセは、この世を去る前にそれを書き留め、完成させたのです。モーセは次のように述べています。

「わたしがあなたがたに命じる言葉につけ加えてはならない。また減らしてはならない。わたしが命じるあなたがたの神、主の命令を守ることのできるためである。」(申命4:2)

この同じ律法の書の後の方で、モーセはこの警告の言葉を繰り返し述べています。

「あなたがたはわたしが命じるこのすべての事を守って行わなければならない。これにつけ加えてはならない。また減らしてはならない。」(申命12:32)

旧約聖書のこれらの警告は、黙示録の最後のところの警告や命令がそうであったように、一部の人々の心にモルモン経は聖典に意図的につけ加えられたものであるという疑問を起こさせています。実際、これらの聖句には、黙示録の終わりのところの警告と同じ言葉が使われているのです。もし、このふたつの聖句に対しても、黙示録の終わりの節の場合と同じ解釈や論証をあてはめるとしたら、モーセの記した書以外、聖典は存在しないということになります。そのような愚かな考え方をすると、旧約聖書の大部分と新約聖書の全書は不用のものとなってしまいます。

これらの警告をそれぞれ注意深く読んでみると、人は主の啓示に手を加えてはならないことがよくわかります。人は、神の言葉につけ加えたり、神の言葉を取り除いたりしてはならないのです。しかし、神御自身が、言葉をつけ加えたり取ったりしてはならないとか、神はそのようなことはなさないということを示唆するものは何もないのです。また、神の神聖な力を信じる理性ある人であれば、神がそのようにみこころを表わすことを制限される御方であるとは思わないでしょう。確かに、神はいつの時代にも、御自分の子供たちを導くためにさらに啓示を与え、聖文をつけ加える権利と力を持っておられます。これには疑いの余地はありません。

聖典の中の主の啓示を調べてみると、い

つの時代にも予言者や教会を導いているのは、絶えず与えられる啓示であることがわかります。この絶えず与えられる啓示がなかったら、ノアは地をおおった大洪水に対して備えをすることができなかつたでしょうし、アブラハムはハランから約束の地へbronまで導かれることがなかつたでしょう。絶えることのない啓示のおかげでイスラエルの民は束縛を逃れ、約束の地に戻ることができました。予言者を通して与えられた啓示が伝道の業を導き、ソロモン神殿の再建を指示し、イスラエルの民に広がっていった偶像崇拜を非難してきたのです。

キリストは昇天される前、残された11人の使徒たちにこのように約束されました。

「見よ、わたしは世界の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ28：20) イエスは昇天された後、使徒たちの死によってイエス・キリストの教会の大背教が起こるまでの間、啓示によって教会を導かれました。

来たるべき主の再臨に先駆けて表われる末日のしるしを、あの黙示録を書いた使徒が示現の中で見えています。彼はこのように述べています。

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣傳伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて……」(黙示14：6)

ヨハネが示現の中で、神のみ使いが失われた福音を再び明らかにするのを見たという事実は、聖書に啓示はつけ加えられてはならないという主張をくつがえすものです。

私たちは、世のすべての人々に証します。天のみ使いが私たちの時代に現われて、天からの権威をもたらし、腐敗した教えや儀

式によって失われた真理を回復してくれたことを証します。神は再び話しかけられ、今日、生ける予言者を通して御自分のすべての子供たちに、ひき続き導きを与えておられます。約束にあるように、神は常に御自分の僕たちと共にあり、世界中の御自身の教会を導いておられることを私たちは宣言します。過去にそうであったように、今も啓示によって伝道の業や神殿の建設、神権役員への召しに関する指示が与えられ、御父の子供たちの救いを阻止する社会悪に対し警告が与えられているのです。

近代の予言者ジョセフ・スミスに与えられた啓示の中で、主はこのように言われました。

「そは、われは人々を偏り見る者にあらざれば、すべての人々をしてその日の速に来るを知らしめんと思えばなり。而して地より平和が取り去られ、悪魔自らの領土を支配する時はなおいまだしといえども今や近きにあり。されど主もまたその聖徒らを支配し、その真中にありてこれを統治せん」(教義と聖約1：35-36)

救い主は、絶えることのない啓示により、今日聖徒たちのただ中であって統治しておられます。私は、救い主が今日も僕たちと共におられること、そして世の終りまで共にいて下さることを証します。

願わくは、私たちの理解力がせばまり、啓示は古代の人々にのみ与えられたなどと言うことがないように。神は慈悲深い御方であり、あらゆる時代の神の子たちを愛さされ、そしてこの時代にみこころを表わされたのです。私はこのことをイエス・キリストのみ名により厳粛に証申し上げます。アーメン。

貞節とその報い



七十人第一定員会会員
ロイデン・G・デリック

モルモン経に記録されている古代アメリカの民の歴史は、文明が道徳を基盤として成り立つものであることを教えています。すなわち、民が堅く道徳を守っている時には栄え、不道徳に陥る時には苦しみを味わっているのです。道徳なくして自由はあり得ません。また、その自由は無償で与えられるのではなく、勝ち取るものであることがわかります。

古代の歴史はまた、人は幾多の変遷を繰り返すのが常としても、神のみ言葉は不変であることを教えています。義しい行ないに関する基本原則が永久不変であることからして、それは当然の帰結と言えましょう。主は、聖典を通して私たちに導きを与えておられます。その内容は、生活に潤いをもたらすための方法や、心に平安を得るための秘訣、家族を強め、人の尊厳を高めるための方法と様々です。

「この故に、汝らわが声を聞いてわれに従え。さらば汝らは一箇の自由の民となる……るべし」(教義と聖約38:22)と、主は言っておられます。

主はまた、この世で導きと恵みの業を施しておられる時に、次のように言われました。「真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」(ヨハネ8:32)

詩篇の作者は次のように歌っています。「主をおのが神とする国はさいわいである」(詩篇33:12)

伝道の書には次のように記されています。「神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。」(伝道12:13)

救い主はまた、次のように言っておられます。「何事にても汝ら蒔くところのものをまた刈り入るべければなり」(教義と聖約6:33)

さらに、末日の聖典には、次のようにあります。「そもそも創世の以前より天に於て定められたる一つの変らざる律法ありて、あらゆる祝福はこれに基くなり。

すなわち、われら何にても神より祝福を受くる時は、この祝福の基く律法に従うによりて然るなり」(教義と聖約130:20-21)

社会の基本単位は家族です。私たちの道徳的価値観は、その家族関係の中で培われます。したがって、道徳的な原則を教える責任は、家庭にあります。しかし、すべての親が責任を持って家族に愛と守りの手を差し伸べているわけではありません。家庭が道徳的価値観を教える場となることこそ、理想的な社会の姿と言えましょう。

主は、「されど、われは汝らの小児たちを光明と真理の中に導き来れと汝らに命じたり」(教義と聖約93:40)と言っておられます。

「また両親はその子供たちに祈ることと主の前に正しく歩むことを教えざるべからず」(教義と聖約68:28)というみ言葉も

あります。

教会と学校の教師は、両親と協力して子供たちに、生涯の指針となる適切な価値観を植えつけなければなりません。家庭を学びの場にして、今まで述べた価値観やさらに細々とした事柄を日々の家族生活の中で教えるのです。こうして、教会と学校と家庭が一体となって子供の教育に励む時に、両親に課せられた責任は、完全に果たされることになるのです。

しかし不幸なことに、今日の社会では、家庭や家族をさほど重要視しない傾向が、世界の数多くの地域に見受けられます。最近発行された「U. S. ニューズ・アンド・ワールド・リポート」誌(U. S. News and World Report)に、合衆国内の家族の驚くべき崩壊ぶりを示す統計を引用した記事が掲載されていました。それによりますと、そのように深刻な事態を招いた原因は、主に道德の乱れと私欲にあるということです。互いに助け合う家族は、堅固な土台を築きます。しかし、各自が自分だけの憩いを求め、欲求を満足させようとするならば、家族だけでなく社会までがひどい悪影響を被ることになるのです。

私たちは、いろいろなことをして時を過ごします。その中には、現世だけに関わるものもあれば、来世にまで及ぶものもあります。家族を築くことは、永遠の目的のひとつです。家族の恵みは永遠に及ぶのです。

私は、数週間前にメキシコのモンテレーに向かう機内で、レーマン人の末裔と思われるひとりの素晴らしいメキシコ人と道連れになりました。そして話をしているうちに、その人が8人の子持ちであることを知りました。彼はそれをとても誇りにしている様子でした。そこで私は、お子さんたち

のことをいろいろ話してもらった後、こう尋ねました。

「そのお子さんたちといつまで一緒におられるおつもりですか。」

「私が生きている限り一緒にと考えております。」

「それからどうなさいますか。」

「死んで、土に帰りますよ。」

救い主は、十字架におかかりになる直前に、使徒たちに次のように言っておられます。聖書から読んでみましょう。「わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意して行くのだから。

そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。」(ヨハネ14:2-3)

私はそのメキシコ人に、イエスはどのようなおつもりでこのように言われたと思うかと尋ねました。彼はしばらく考えていましたが、私に解釈を求めて来ました。そこで私は、霊界と復活について説明した後次のように尋ねました。「本当にお子さん方を愛していらいっしやいますか。」「ええ、もちろんです。」力強い答えが返って来ました。

「来世でも奥さんや子供さんたちと一緒に住めるとしたらどうですか。」

「そんなことができるんですけど、ほかに何もありませんよ。」

私はそれが可能なことを説明しました。モルモン経が彼の祖先の歴史をつづった書物であること、イエス・キリストがアメリカ大陸を訪れたくだりが記されていること、

またモルモン経が永遠の家庭生活を営むための鍵を与えてくれることなどが話題に上ったことは言うまでもありません。私はカードに名前と住所を書いてもらい、スペイン語のモルモン経を彼の家に届けることを約束しました。

モンテレーに着いた私は、そのカードを早速宣教師に渡しました。そして先週私はその結果を知らせる一通の手紙を宣教師から受け取りました。そこには、このように記されていました。「大会の開かれた次の日曜日に、私たちはロベルトさんのお宅を訪れました。すると奥さんが垣根の所まで出て来られて、私たちをどこか別の教会の伝道師と見て取ったのでしょう。主人は忙しいのでとてもお会いする暇はないと思います。とおっしゃいました。そこで事情をお話してデリック長老からいただいたカードをお見せすると、待っていましたとばかりにロベルトさんが大きく両手を開けて出ていらっしやったのです。すぐさま家の中に通された私たちは、ロベルトさんの家族と共に、ひざまずいて祈りを捧げました。8人の素晴らしい子供さんたちも一緒に。そこには主のみたまがありました。

もう一度お会いして、救いの計画についてお教えしたいと言うと、ロベルトさんは気持ちよく私たちの申し出を受け入れて下さいました。そして、モルモン経を手にしたロベルトさんは、必ず全部読みます、と約束して下さいました。

愛する妻、愛する子供と共に現世だけでなく、来世までもともに住まうことができるばかりでなく、自分の両親、先祖、孫、それに続く子孫とも永遠の家族関係を築くことができるのです。家族を愛する思慮深い人が何でこのような素晴らしい賜を見過

ごすことができるでしょうか。

聖典には次のように記されています。「一切の誓約、契約、約束、義務、宣誓、誓言、履行、関係、交際または予約にして、為さんまたは結ばれるとき、……この世に於てわが聖任したる者の媒ちを通じて啓示と誠命とによりて為されず、……死にし者より復活する時もその後にも何らかの効験効能または効力あることなし。……以上の事然るは、以上の目的を以て結ばれざる一切の誓約は人の死を以て終りを告ぐればなり。」(教義と聖約132：7)

約束の聖きみたまによって今も永世にもわたって結び固める神の権能は、今、予言者スペンサー・W・キンボール大管長が有していることを、私は心から証します。そして、キンボール大管長からその権能を委任された人々によって、神の聖なる神殿では、今も永世にわたる家族の結び固めの儀式が毎日行なわれているのです。

家族は永遠に住まうことができるというこの大切な教えに、教会員でない私の友人が耳を傾けてくれるように、私は心から願わずにはいられません。主の戒めを守りさえすれば、だれにでもその道は開かれているのです。

聖典には、「而して、人間は霊と体とより成る」(教義と聖約88：15)と記されています。人が死ぬと肉体は墓へ、そして霊はしばらくの間ある場所へ行きます。その場所を私たちはパラダイスと呼んでいます。

ジョセフ・F・スミス大管長は、救い主が十字架におかかりになった後、死者の霊の世界を訪れた時の模様を示現で見る特権にあずかりました。それについて、スミス大管長は次のように記しています。

「そして、死者が、小さき者も大いなる者

も共に、群れをなしているのが見えた。おびただしい数の義人の霊がひとつ所に集まっていた。彼らは死すべき世にあった間イエスの証に忠実であった者たちであった。

これらの者はすべて、父なる神と、御父の生みたまひし独り子イエス・キリストの恵みによりもたらされる栄えある復活に確固たる望みを抱きつつ世を去った者たちであった。……

この大群衆が死の鎖から解き放たれる時を喜び、互いに語り合いながら待っていると、神の御子が現われたもうた。そして忠実であった捕らわれ人に自由を宣言された。

しかし、御子は邪悪な者たちの所へは行かれなかった。罪深い者や、肉体を得ていた時に自らを汚して悔い改めなかった者には、御子の声は発せられなかった。……

見よ。主は義人の中から軍勢を組織し、使者を任命して権威と権能とを与え、闇の中にいる者たち、さらにはすべての人の霊のもとに福音の光を携えて行くよう命じられた。このようにして死者に福音が宣べ伝えられた。

選ばれた使者は行って、主に受け入れられる日の来ることを言明し、捕らわれの身にある者すなわち罪を悔い改めて福音を受け入れるすべての者が自由を得ることを宣言した。

このようにして、真理の知識がなく罪のあるまま死んだ者、予言者を拒み罪のうちに死んだ者に対して福音が宣べ伝えられた。」(教義と聖約138：11-12, 14, 18, 20, 30-32)

今日も、霊の獄屋からの解放と回復を待っている霊がいます。

「私は、この神権時代の忠実な長老たちが、死者の霊が住む広大な世界において闇

に包まれて罪のかせにつながれている者たちの間で悔い改めの福音と神の生みたまひし独り子の犠牲を通じてもたらされた贖いの福音を、この世を去った後も引き続き宣べ伝えているのを見た。

悔い改める死者は、神の宮居の儀式を受けることによって贖われるであろう。

そして、自らの罪の代価を支払い、洗われて清くなった後に、各自の行ないに応じて報いを受けるであろう。彼らは救いを受け継ぐ者だからである。」(教義と聖約138：57-59)

今は亡きこれらの人々の身元を明らかにし、その人々に代わって必要な救いの儀式を執り行なうことは、教会に課せられた大切な使命のひとつです。なぜなら、霊界にいる人々は自分で儀式を受けることができないからです。身代わりの儀式が執り行われ、その霊が霊界において福音を受け入れるならば、その時から儀式は効力を発するのです。

主の神殿で行なわれる儀式のひとつが、夫婦と親子の結び固めの儀式で、この儀式は生者、死者を問わず行なわれ、こうして、福音の原則を喜んで受け入れそれに従う人々は、家族として永遠に結ばれるのです。

主の戒めに従って主に仕え、正しい道徳観を堅持する人々は、現世だけでなく来世においても特別な報いを受けることができます。これは人が計画したプログラムではありません。主のみ手による救いのプログラムなのです。このプログラムは、主のみ声に従い、それに従う人々にあらゆる意味で昇栄と自由をもたらします。これらのことを実現させるべく御自身の命を捧げられたイエス・キリストのみ名により証し申し上げます。アーメン。

従順—完全な従順



七十人第一定員会会員
テディー・E・ブルーアートン

タナー副管長がヨーロッパの伝道部を管理する責任を終えて帰還した時、「個人あるいは宣教師として成功する上で最も重要な特質をあげるとすれば、それは何だとお考えですか」という質問を受けました。少しの間において、このような質問の暗に意味するところを考えながら、彼はたったひとこと、「従順です」と答えました。従順でなければ、従順であろうとする力は小さくなり、善を認識する力が弱まるのです。

主は教義と聖約93章で次のように言っておられます。「然るにかの悪魔来りて、不従順により、また先祖の言伝えによりて、人の子らより光明と真理を取り去りぬ。」(教義と聖約93:39)

アリストテレスは、「悪人は恐れから従うが、善人は愛によって従う」と言いました。(Useful Quotations タイロン・エドワーズ編、ニューヨーク：グロセット・アンド・ダンラップ社、1933年、p.428)

ヘンリー・ウォード・ビーチャーは、「法は主人ではなく召使いであり、法に従う者が法を支配する」と言っています。

(Proverbs from Plymouth Pulpit ウィリアム・ドリステール編、ニューヨーク：D.アブルトン・アンド・カンパニー、1887年 p.65)

なぜ従順でなければならないのでしょうか。それは、生ける神が私たちが愛して下さり、祝福を与えたいと望んでおられるからです。

マーク・E・ピーターセン長老は次のように述べています。「私たちの宗教は、不死不滅という事実すべてをゆだねています。多くの人々が、福音の回復の業を行なうために死からよみがえりました。神御自身さえもおいでになられたのです。

初めに、天の御父と、愛する御子イエス・キリストが来られました。御二方は、ニューヨーク州バルマイラの近くの聖なる森においてジョセフ・スミスにみ姿を現わされました。御二方はジョセフと顔と顔を合わせて言葉を交わし、彼の質問にお答えになりました。モロナイもまた、何度も来て、若い予言者と話し、指示を与えました。それから、新約時代のバプテスマのヨハネが来ました。次はペテロ、ヤコブ、ヨハネでした。モーセもまた、カートランド神殿に現われました。次いで、エライジャが来しました……。

こうした方々自身が不死不滅という事実を証明していますが、しかし彼らは、死後の生活の証明以上のものをもたらしただけです。つまり不死不滅を証明するというだけにとどまらない、偉大な目的を持ってやって来ました。天父と御子はこの神権時代を開き、神の本当の属性についての知識、すなわち、神は感情、感覚、体を持ちたもう御方で、人は神にかたどってつくられたということを知らせて下さいました。

天父はジョセフにキリストを、神の生み出したもうた独り子として紹介されました。御二方は、神の真の属性についての知識を回復されたのです。

モロナイは、モルモン経のありかを知らせました。バプテスマのヨハネは、アロン神権を、ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、メルケゼデク神権をもたらしました。モーセは、ユダヤ人のパレスチナへの集合と、エフラムとマナセの集合の鍵をもたらしました。そして、エライジャ……彼は何をもたらしたのでしょうか。」

(『結び固めの力』*The Mission of Elijah* 「エライジャの使命」系団協会講演資料〔未刊〕)

結び固めの力は何のためにあるのでしょうか。それは、家族が死んでからも一緒にいられるようにするためです。家族という単位を死をもって終わらせたいと思う人がいるでしょうか。私たちの幸福と喜びは、家族という囲いの中にあります。しかし、どのようにすれば、この最大の祝福にあずかることができるのでしょうか。それは従順です。回復されたイエス・キリストの教会が求めるところに従順であることです。

ブラジルのサンパウロ南伝道部に、読み書きがあまりうまくできないままに伝道に出た、マルヒーロス長老という人がいました。彼は、人々の前で祈りを捧げることさえも少し恐れていました。しかし、この若者は、ウィルフォード・カードン伝道部長によると、最も立派な宣教師のひとりになったそうです。伝道部長は、彼の伝道が終わりに近づいた頃、「あなたは、どのようにして、このように活動的で、有能な宣教師に変わったのですか」と尋ねました。(彼らは200人以上にバプテスマを施し、52週も

続けて毎週バプテスマをしたのです) 控えめな様子で、マルヒーロス長老は答えました。「そうですね、私は伝道部長を疑ったことがないのです。伝道部長は、毎週バプテスマができるはずだとおっしゃいました。ですから私は、毎週バプテスマができることをわかっていたのです。それは決して容易なことではありませんでしたが、従おうと努力しました。」

次に、グアラティンガタ支部のサライバ支部長について話しましょう。彼が宣教師として成功したのはなぜでしょうか。彼は、ブラジルでのあるステーキ部大会において、ゴードン・B・ヒンクレー長老の話を聞きましたが、ヒンクレー長老は、その年に100人の人を教会に導くようにとチャレンジしました。サライバ兄弟はこのように考えました。「できないはずはない。十二使徒の方がおっしゃったのなら、できるはずだ。私は従おう。」最後にサライバ兄弟と話した時には、彼は250人以上の人にバプテスマを施していました。

なぜ、ブラジルのステーキ部の高等評議員であるフロリアーノ・オリベイラが宣教師として立派な働きをしているのでしょうか。それは、口を開いて福音を分かち合いなさいという主の勧告に聞き従ったからです。ある日彼は、サンパウロの交通が混雑した所を運転していました。ほんの一瞬道路から目を離したとたん、彼は、前の車につっ込んでしまいました。車から飛び降りて、急いで前の車のところへ行き、ドアを開けて言ったのです。「ぶつけてしまって本当にごめんなさい。これはまったく私の不注意です。私が全責任を負い、修理代は全額支払います。ぶつけるつもりはなかったのです。ですからどうぞ、許して下さい



デディー・E・ブルーアートン長老

い。でも、もし私がぶつけなかったら、あなたはこのメッセージを聞けなかったでしょう。このメッセージは、あなたが生まれてこの方ずっと待っていたものです。彼はその人でその人に福音の回復を説明しましたが、この人は医者で、2週間後に教会に入りました。なぜオリベライ兄弟が200人以上ものバプテスマを施すことができたのでしょうか。それは従順です。主が求めておられることに対する従順です。

アルマ書57章には、多くの戦争で勇敢に戦い、自分たちや教会を妨害する者すべてを死に至らせたヒラマンの2060人の息子たちについて書いてあります。彼らは、そのひとりさえも生命を失うことはありませんでした。なぜならば彼らは、「疑いを抱かないならば神が必ず自分らを救いたもうと」(アルマ56:47) 知っていたからです。

アルマ57:21には、彼らは「一々の号令をみな正しく守って戦った」と記されています。彼らはまったく従順でした。その故に彼らは、信じられない程の守りと成功を得たのです。

ここで少しの間、不従順の例、すなわち正しい目的を持っていたにもかかわらず従わなかった人々に目を向けてみましょう。

1つの例は、歴代志上13:7-10のウザでしょう。人々は、契約のしるしである箱にさわらないようにと警告されていました。しかし、牛がつかずいて箱が落ちそうになった時、ウザは、箱を押さえようと手を伸ばしました。そしてその途端、主によって撃たれたのです。ウザのとった行動は正しいように見えますし、今日私たちは、罰が厳しすぎると思いがちですが、デビッド・O・マッケイ大管長はこう述べています。この事件は、人生の教訓を知らせてくれます。すなわち、従順、完全な従順です。

神に選ばれたひとりの偉大な人の例をお話したいと思いますが、彼は不従順の結果大切な物をすべて失ってしまいました。サウル王です。

主はサウルに特別な指示を与えました。

「今、行ってアマレクを撃ち、そのすべての持ち物を滅ぼしつくせ。彼らをゆるすな。男も女も、幼な子も乳飲み子も、牛も羊も、らくだも、ろばも皆、殺せ。」(サムエル上15:3) サウルがアマレク人を滅ぼすのに集めたのは21万人に及ぶ強力な軍隊でした。

「しかしサウルと民はアガグをゆるし、また羊と牛の最も良いもの、肥えたものならびに小羊と、すべての良いものを残し、それらを滅ぼし尽すことを好まず、ただ値うちのない、つまらない物を滅ぼし尽した。」(サムエル上15:9)

サウルは主の命令通りにしませんでした。主はこの不従順に怒り、王を叱責するために再びサムエルをつかわしました。

「サムエルは言った。『それならば、わたしの耳にはいる、この羊の声と、わたしの

聞く牛の声は、いったい、なんですか。』

サウルは言った、『人々がアマレクびとの所から引いてきたのです。民は、あなたの神、主にささげるために、羊と牛の最も良いものを残したのです。そのほかは、われわれが減ばし尽しました。』

サムエルは言った、『主はそのみ言葉に聞き従う事を喜ばれるように、燔祭や犠牲を喜ばれるのであろうか。見よ。従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる。

あなたが主のこぼを捨てたので、主もあなたをまた捨てて、王の位から退けられた。』(サムエル上15:14-15, 22-23)

今日、キンボール大管長がこの地上での主の代弁者です。大管長が語ることはたとえそれが小さなことであるにせよ、行なうべきです。私たちはどのようにこたえているのでしょうか？ 例えば、もし大管長が、庭をきれいにしなさい、と言うなら、それを実行して下さい。へいにペンキをぬりなさい、と言うなら、それを実行して下さい。もし彼が、1年にもう1回多くエンダウメントを受けなさい、と言うならそれを実行して下さい。ひとつのワードで少なくとももうひと組の夫婦を伝道に出しなさいと言うなら、それを実行して下さい。もし大管長が、日曜日には買物を避けるようにしなさいと言うなら、それを実行して下さい。私たちは、完全に従わないために、何と多くの祝福を妨げていることでしょうか。

では、なぜ従うのでしょうか？ それは、申命記に述べられています。「あなたは、きょう、わたしが命じる主の定めと命令とを守らなければならない。そうすれば、あなたとあなたの後の子孫はさいわいを得、あなたの神、主が永久にあなたに賜わる地

において、長く命を保つことができるであろう。』(申命4:40)

そして再び教義と聖約の98章の中から読んでみましょう。「また、われ汝らに告ぐ、もし汝ら何事にまれわが命ずるところを守りて為さば、主なるわれ、すべて怒りと憤りとを汝らより去り、かくて地獄の門は汝らに打勝つことなかるべし。」(教義と聖約98:22)

主が聖徒たちを見守り、保護されたもうひとつの例を引用してみましょう。この話は「教会歴史」の中にあります。襲撃が横行していた頃の1834年6月19日、聖徒たちが野営していると、5人の男が馬に乗ってやって来て、「おまえたちは夜明けまでに地獄を見るだろう」と言ったのです。彼らは、リッチモンド、レイ、そしてクレイ郡から武装した軍隊がフィッシングリバーの浅瀬でジャクソン郡の軍隊に加わって、野営している聖徒たちを叩きつぶしてしまうだろうと告げました。

これらの5人の男がまだ野営地で呪いの言葉をはき、復讐を誓っている間に、嵐の近づいてくる徴候が現われました。男たちが野営地を去るやいなや、嵐が烈火のごとく怒り狂いました。木々の枝を切り落とす程の大きなひょうが降り、強風が木々を根もとからよじり、野営地中に枝が飛び交う有様でした。地は震え、揺れ動き、小川の流は荒れ狂った奔流と化しました。暴徒たちは散り散りになって避難場所を探しましたが、見つけることができませんでした。ひとりの暴徒は稲妻に撃たれ、他のひとりには暴れる馬に手を引き裂かれました。彼らは恐れおののきながら、「これが、神が『モルモン』の民』のために戦うやり方なのだろうか」と言いながら、彼らの本来の仕事に

戻って行ったのです。

6月21日の朝（ちょうど2日後ですが）には、スコンス大佐がふたりの同僚を伴って聖徒たちが何を考えているかを聞くために野営地を訪れました。そして、こう述べたのです。「私は、この人々を守っているのは全能者の力であることがわかる。というのは、私は、レイ郡のリッチモンドから武装した軍隊を率いてあなたがたを滅ぼそうとしたのだが、嵐に妨げられて近づくことができなかったからだ」と言いました。

予言者はその時彼らに聖徒たちの受けられている苦難について話しました。彼らは、自分たちの力で、聖徒たちに反対する人々を鎮めてやろうと申し出て、野営地を去ったのです。（教会歴史2：103—6）

この嵐の間、野営地の聖徒たちはその猛威にさらされはしませんでした。なぜ聖徒たちは守られたのでしょうか。彼ら全員が、

主に対して従順だったからです。

次のように決心しようではありませんか。「われわれの神、主があなたにお告げになることをすべてわれわれに告げて下さい。われわれは聞いて行きます」(申命5：27)

この教会について私が心から感じていることを申し上げますと、イエスが私たちの贖い主であることを、確かにはっきりと、打ち消すことのできない事実として知っているということです。イエス・キリストは、天父がそうであられるように、生きておられ、キンボール大管長は生ける神の生ける僕です。予言者に目を向けて、彼の言葉を聞き、彼に従いましょう。そうするならば私たちは決して道を踏みはずすことがないでしょう。この教会は、地上にある唯一まことのイエス・キリストの教会です。このことを私たちの贖い主のみ名により証申し上げます。アーメン。



人の救い、自分の救い



七十人第一定員会会員
F・バートン・ハワード

— 何か月間か私は各地を歩いてまいりましたが、その間に多くのことを学び、今まで気がつかなかったたくさんのことが理解できるようになりました。私は、神の王国を打ち建てるために働く時に教会員がどのような困難に直面するかをこの目で見てまいりました。莫大な時間とお金を教会のために費やしている人々が大勢いました。また、子供に心を傾ける両親の気持ちをひしひしと感じました。

この不安定な、ともすれば利己主義に陥り易い世の中において、自ら率先して見ず知らずの人々を慰め手厚く保護し、奉仕するといった人たちがそう多くはいないということがわかってきました。しかし、中には自分から進んで奉仕の業を実行している人たちも何人かいます。私は、行く先々で相手が教会員であろうとなかろうと自分の同胞を愛し、見守り、そして彼らのために祈る何人かの忠実な聖徒たちに会いました。ここで、たとえを引いて（たとえと呼んでもよいと思います）他の人々に尽くす生き方を身につけている少数の人たちと、特に

そうでない人たちについてお話してみたいと思います。

砂漠での物語です。とぼとぼと歩く一団の旅行者がいました。太陽がかんかんと照りつけ、おまけに長い長い道のりでした。彼らには、ただ同じ行く先を目指すという目的のほか互いに何の共通したところもありませんでした。それぞれ、旅に必要な食糧と水を携えて出かけました。しかし、出発して間もなく、ひどい砂嵐に見舞われたのです。空一面黒雲に覆われ、太陽の光は消え失せました。たつ巻で砂は空へと舞い上がり、たちまちのうちに低地を埋めてしまいました。さっきまで快適だった旅が突如として危険なものに変わったのです。旅行者たちは次第に、いつ目的地に着くかということよりも、本当に目的地に着けるかどうかに疑いをもち始めました。

一度疑えば、あとは混乱が残るだけです。ある人は避難する場所を求め、またある人は戻り始めました。中には嵐の中を先へ進んで行く人もいました。このようにして、その日の終わりには皆十分な食糧や水もいまま散り散りに砂漠の中へと消えていったのでした。翌朝は飢えと渇きと絶望が旅人たちを襲いました。しかも、嵐は勢いを増すばかりです。今や希望の灯は消えました。道標は吹き飛ばされ、天候に恵まれている時でさえ細くてわかりにくい砂漠の道が、砂に埋れて全くわからなくなってしまったのです。どうやって道を探したらよいものか、だれもわかりませんでした。人々はそのうちに、それぞれに勝手な方向を指して自分の道が正しいと主張しました。そして、結局意見がまとまらず、旅行者たちは水や落ち着ける場所を求めて一人一人違った方角に歩き出したのでした。

翌日も暮れようとする頃、砂ぼこりで目もろくにあかす疲れ果てた体を引きずりながら、ふたりの旅行者が偶然にも宿屋にたどり着きました。やっと屋根と壁のある場所に落ちていたふたりは、ほっと安堵の息をつき、幸運を喜び合ったのでした。彼らはそこで食糧を補充し、旅を続ける準備をしました。天候は未だ定まらず風が吹き荒れています。はっきりとしない道がくねくねと曲がりながらはるかかなた、深い砂に覆われた丘まで続いています。そこは、盗賊が出没しては旅人を悩ますことでその名を知られている丘でした。

ふたりの旅人のうちのひとは、どうしても目的地にたどり着く覚悟でいました。町に大切な仕事が残っているため、彼は食糧と水を補充し、支払いを済ませると、翌朝早く宿屋を出、日暮れまでに丘を越えてしまおうと急ぎ足で旅立ちました。けれども砂嵐で行く手をさえぎられ、やむなく穴を掘ってそこに身を隠しました。やがて日が暮れ、彼は疲れと孤独感でぐったりとしてしまいました。彼が眠りに落ちると、盗賊が彼を見つけ、食糧と水を奪い、彼を見捨てて去って行きました。

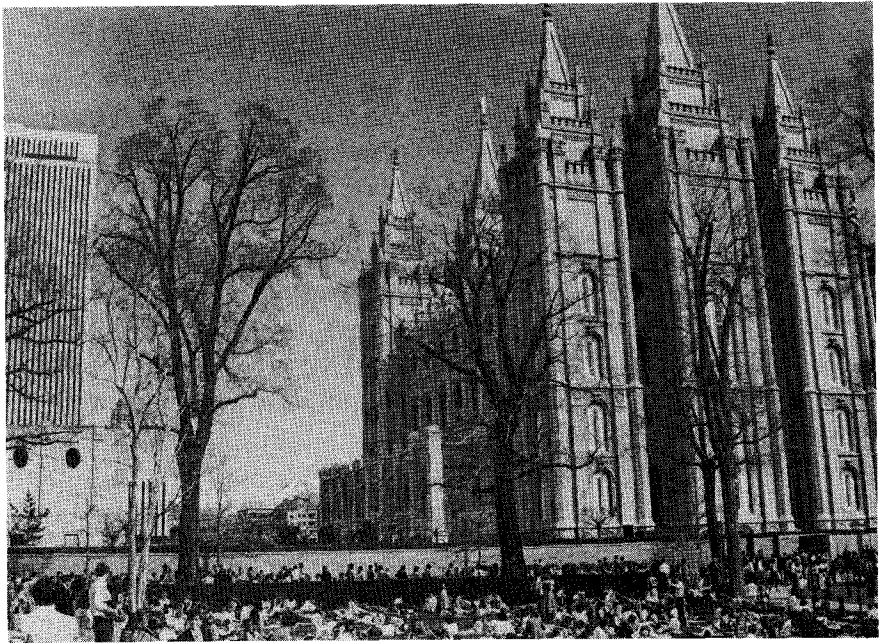
もうひとりの旅人も目的地を目指したい気持ちはありましたが、後方にいるほかの旅人たちがどんな目に遭っているかを忘れていませんでした。道に迷い、水も希望もなく砂に埋もれているに違いありません。この旅人だけが、彼らがどんな場所にいる、どんな状況に置かれ、何を必要としているかを知っているのです。彼も支払いを済ませると、朝早く宿屋を立ちました。行く手に希望の待つ丘を一べつすると、踵を返し、戻って行きました。空はわずかながら明るくなってきました。道標もいくつか見つけ

ることができます。一行が立往生している場所がほぼつかめてきました。彼は一行の人々の名前を知っていましたので、大声で名前を呼びました。そして、何時間もの間捜し回り、多くの人々を見つけ出すことができました。彼は自分の水筒から水を分け与え、安全な道を彼らに教えました。こうして人々は彼に率いられて宿屋に到着し、休息をとり体力を回復しました。食糧を補充し、水筒に水をつめ、目的地への方角を聞いて、再び嵐に向かって旅立ったのでした。

困難な旅が変化したわけではありません。相変わらず強風が吹き荒れ、太陽は深く雲に閉ざされていました。道は曲がりくねり、深い砂で覆われた箇所もあちこちにあり、また丘では盗賊が出発していました。しかし今度は旅人はひとりでなく、大勢でした。砂で行く手が阻まれると、何人かで協力して砂を除く作業にあたり、力尽きた人には肩を貸し、日が暮れると見張りが立ちました。こうして何日かが過ぎ、ふたり目の旅人と一行は無事に目的地へ着きました。

さて、救助され水を与えられて目的地に着いた一行は、恩人である旅行者を囲んで次のように言いました。「あなたがいらっしやらなければ私たちはここに来ることができませんでした。私たちを捜し求め、見つけ出して、水やパンを分けて下さったご恩は決して忘れません。あなたが旅を中断して、私たちを捜すために敢て荒れ狂う砂漠に身を投じて下さったことをよく知っています。私たちはどうやってご恩をお返ししたらよいでしょう。」

すると旅人は答えて言いました。「恩を感じていただくには及びません。私自身の力で宿屋を捜し出したのではありませんから。



水にしても、もし皆さんと分かち合わなかったら、私の口に苦いものがあったに違いありません。また皆さんと一緒にでなかったら、この町に来ることもとうてい不可能でした。皆さんの励ましと力づけのおかげで旅を続けることができたのです。また皆さんがいたからこそ、盗賊から襲われることもなかったのです。自分の命を守るためにはどうしても皆さんを救わなければならなかったことが、私にもよくわかってきたのです。私たちが目的地に着けるかどうかは、どれほど急いで旅をするかでなく、旅の途中で何をやるかにかかっているということが、今の私にはよくわかります。私に恩を感じることはありません。実際には、私が皆さんをここにお連れしたのではなく、私たちがお互いを連れてきたのです。」

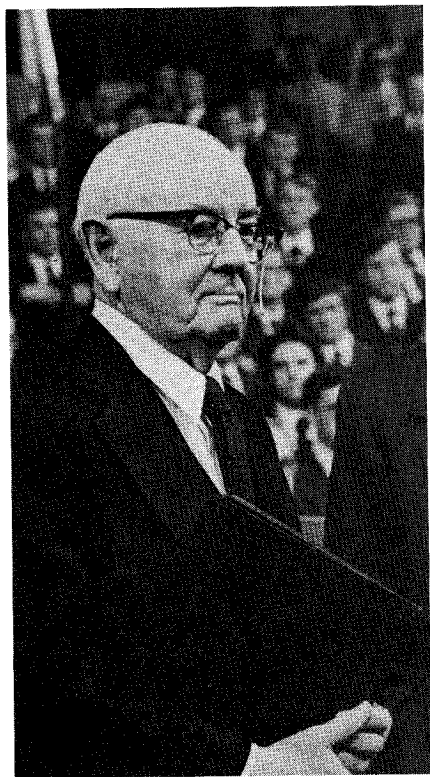
私たちについてもこれと同じことが言え

ます。私たちのだれひとりとして、自力でこの偉大な大会に出席し、話に耳を傾ける状態をもたらした人はいません。私たちの証、今受けているこの上もない祝福の数々、キリストの教会の会員として活動できること、これらすべては、時として私たちの記憶に残っていない人々、名もない人々が、私たちが砂漠で道を見いだそうともがいている時に、時間と忍耐と愛を与えてくれたおかげなのです。彼らは私たちに、あるいは私たちの親に、あるいは私たちの親の親に、生命の水を分けてくれた人々です。私たちが気づいていようといまいと、好んでいようといまいと、また感謝していようといまいと、私たちが現在あるのはほかの人人のおかげなのです。私たちは次のような言葉を口に出すことはできません。いや、決して口に出してはならないのです。「大

変な旅でしたが、到着しました。ほかの人
も全力を尽くして歩いたらよいのです。今
の私には時間がありませんから、道に迷っ
た人たちに水を持って行くことなどできま
ません。砂漠にいる人たちとは何の関係もな
いことですし。」

主は私たちが携わっているみ業を指揮し
ておられます。主は私たちが故郷に帰る特
権にあずかるための条件を定められました。

時には暗雲が太陽をさえぎり、道が見え
なくなることを主は御存じです。主は故郷
に帰ることがどれほど困難なことかを御存
じのはずです。主は私たちに、道を見失っ
たほかの人々も一緒に連れて来るように望
んではおられないでしょうか。



答えははっきりしています。「何事でも
人々からしてほしいと望むことは、人々
にもそのとおりにせよ。」(マタイ7:12)主は
ほかならぬこのことを言われたのです。主
は失われた羊や命の水について語られた時、
人々に対する私たちの義務を心に描いてお
られたに違いありません。良きサマリア人
のたとえ話を現実にあてはめてみるとする
ならば、それは福音を手に行っている人が、
福音がないために困っている人に接するこ
とにほかなりません。しかし、主はいささ
かの疑問の余地も残さず、末日聖徒に対し
てはっきりとした言葉で指示しておられま
す。教義と聖約にそれが記されています。

「……この福音をいまだ受けざりしすべ
ての人々に及ぼすべきなり。されど、誠にわ
れ、わが王国を与えられたるすべての者た
ちに言う。……汝らより彼らに向いて宣べ
ざるべからず。」(教義と聖約84:75-76)

主は、私たちが目的地に到着できるよう
に、どのような指示を与えておられるでし
ょうか。再び主は、近代の予言者を通じて
次のように明快に述べられました。「さて
見よ、われ今汝に告ぐ、すなわち汝にとり
て最も価値あることは、汝今の代の人々に
悔改めを宣べて人々をわれに導き、以て彼
らと共に父の御国に休まんことなり。」(教
義と聖約15:6)したがって、主が古えの
弟子たちに向かって言われたことを行なお
うではありませんか。「わたしがあなたがた
を愛したように、あなたがたも互に愛し合
いなさい。」(ヨハネ13:34)

兄弟姉妹の皆さん、私たちが主の弟子で
あるがゆえにその身に引き受けている義務
をより一層理解できますように、へりくだ
り主イエス・キリストのみ名により、お祈
りいたします。アーメン。

心を向ける



七十人第一委員会会員

ハートマン・レクター・ジュニア

「うして皆さんにお会いできてとても光栄に存じます。思うに、今日主が最大の関心に向けておられるのは地上における家庭ではないでしょうか。」

家庭は社会の基本単位ですが、それ以上に大切なのは、昇栄の基本単位であるということです。主にとって、家庭ほど大事なものはないとと言っても過言ではないでしょう。主はその子らが最大の祝福を、家庭を通して授かるように計画されました。そして、家族を永遠のものとするために神殿をお建てになりました。

家庭が今日のように激しい攻撃を加えられている時代は、天地創造以来なかったのではないかと思います。ノアの時代だけは例外と言えるかもしれませんが、ノアの時代もひどいものだったろうと思います。ひょっとして、今日の方がまだいいのかもしれませんが。モーセは創世記の中にこう記しています。「主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた。」(創世6：5)「いつも悪い事ばかり」思うと言わ

れるほどひどい人々を、私は知りません。

また主は、当時すべての人が墮落していたため、洪水を起こしてノアとその家族を除いたすべての人を滅ぼしたと述べておられます。したがって、私たちは皆義人ノアの子孫になるわけです。それなのに、今や世界的に家庭の概念が根底から覆されかねない状況にあります。

主はシナイ山でこう言われました。「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである。」(出エジプト20：12)

私たちは今日、かつてノアが直面したと同じような状態にあるのではないのでしょうか。主は、洪水の時代と同じようにのろいをもって地を撃つと告げておられます。もし私たちが「父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる」(マラキ4：6)ことができなければ、必ずのろいが下ることになるでしょう。

互いに心に向けさせるというこの務めを、エライジャに課せられた仕事だと勘違いしている人がいますが、教義と聖約98：16を読むと、主はこの責任を私たちに与えられたことがわかります。「汝ら……子らの心にその先祖を思わせ、先祖の心に子らを思わせんことを熱心に求むべし。」

エライジャは地上を訪れて、鍵を授けただけです。実際の働きは私たちが行なうようにと主は望んでおられます。主は現代の啓示を通して、マラキ書の言葉を少しわかりやすく説明されました。

「見よ、主の大きいなるおそるべき日の来る前に、予言者エライジャの手によりて、われ神権を汝に顕さん。

彼は先祖になされし約束を子らの心に植え、子らの心にその先祖を思わせしめん。

もし然らずば、主の来る時、全地はことごとく荒れ廃れん。」(教義と聖約2:1-3)

ですから、私たちはとても重大な務めを負っていることとなります。主が訪れられた時に、地を荒れ廃れさせるか、救うかが私たちにかかっているからです。地球は、父なる神がその子らに骨肉の体を与えて、彼らを成長させる地として創造されたものです。したがって、私たちが主から送られてくる子らを拒むなら、その時地は荒れ廃れ、洪水の時代のように、主は地上のものをすべて滅ぼされるに違いありません。

では、私たちはどうしなければならぬのでしょうか。生ける予言者に従い、そこを私たちの安全の拠り所とすることです。生ける予言者は次のような勧告を与えています。

1. 4代家族の記録を手始めに、できる限り系図を調べなさい。
2. 個人と家族の記録をつけなさい。
3. できる限り神殿に参入し、妥当な数の儀式を受けなさい。

私の個人的な考えですが、個人の記録と家族の記録をつけることは、私たちができる他のどのようなことにも増して、子の心を父に向け、父の心を子に向ける上で大きな助けとなるのではないのでしょうか。子供の心を自分たちにもっと向けさせたいと思うなら、皆さんが日記や個人の記録をつけて、子供にもっと心を開けることです。何と言っても子供というものは結局のところ、あなた方親の成功や失敗、特性といったものを見いだしたいと思うものです。それらの記録はまた、子供たちに彼ら自身のことについても多くを語ってくれることでしょう。そして、子供たちが親にとっていかに



大きな祝福をもたらす存在であったかを知った時、子供たちはそれぞれ自分の家庭を立派に営んでいきたいと思うようになるでしょう。

また、先祖も含めた家族の記録をつけることほど、皆さんの心を先祖に向けさせるものがあるだろうかと考えています。家族の記録を書くには、まず彼らについてよく知らなければなりません。それを機会に、彼らに一層の関心を開けるようになるでしょう。そうすることによって、彼らに対する愛がますます深くなることをお約束いたします。彼らは気高い人々です。多大な犠牲をはらって、今皆さんが手にしているものを皆さんのために残してくれました。ですから、彼らは皆さんが与え得る最大の報いを受けるに値する人々なのです。その最大の報いとは、この教会すなわち神の王国の一員となることであり、愛する人々と結び固められることです。

今私たちに書くようにと命じられていられるこれらの記録は、先祖の救いのためだけでなく、私たち自身の救いのためにも欠くことのできない重要なものです。と言うのも、

黙示 20:12 に記されているように、ヨハネは開かれた数々の書物によって私たちが裁かれるのを見ているからです。

「また、死んでいた者が、大いなる者も小き者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた。」

予言者ジョセフ・スミスは黙示録のこの聖句を引用した後、次のように述べています。

「汝ここに引用せる一節に於て、数々の書開かれまた他に一つの書開かるを見出せど、その書はすなわち生命の書なり。されど死にたる者は、数々の書に録せるその行為に随いて審かれたるを見出さん。従つて、ここに言う数々の書とは、人々の行為を録せる書に相違なく、またこの世に於て録さるる記録を言うに相違なし。……」

そもそもこの儀式の本質たるや、元より神権の権能に存するものにしてイエス・キリストの啓示によるなり。而してこの啓示に於ては、何にても汝の地に於て結ぶところは天に於ても結ばれ、何にても地に於て解くところは天に於ても解かるることを許されたり。すなわち、別の見地より翻訳して他の言によりて言えば、何にても汝らの地に於て記録するところは天に於ても記録され、何にても汝らの地に於て記録せざるところは天に於ても記録されず、それは、汝らの死者はその行為に随い数々の書に照して審かる。」(教義と聖約128:7-8)

時折、私たちは時間がなくて日記が書けないと感じることがありますが、本当にそうなのでしょくか。キンボール大管長は昨年8月に開かれた世界記録会議で次のよう

に述べています。「これまでに私の日記は厚手の本で78冊にもなりました。私個人の記録です。一日の終わりになると疲れて、ペンを持つのもつらいことが幾度がありました。それでも、記録に残すべき大切な事柄が、私からも私の子孫からも忘れ去れなかったことに、深く感謝しています。」(Ensign「エンサイン」1980年10月号, p.72)

「神が私たちに課せられたこの世における最も大いなる責任は、私たちの死者を探し出すことである。すでに世を去った肉身のためのこの業をおろそかにする者は、自らの救いを危うくしていることになる。」(Teachings of Prophet Joseph Smith「予言者ジョセフ・スミスの教え」pp.356, 193)

シオン山の救い手となるには、神殿の儀式を受けることだけでなく、それ以上のことを行なわなければなりません。4代家族の記録を手始めとする先祖の探求や記録抄出プログラムを行なうことや個人と家族の記録をつけることが必要になってくるのです。

もちろん、これらのどれをとっても、それを行なうための聖き宮居がなければ無意味なものになってしまいます。その点で、神殿建設は、この神権時代において最も重要な働きと言えるでしょう。この時代に生を受け、世界中の民の中に主の宮居を建てる業の一端を担えることは、何と素晴らしいことでしょう。このような神殿での働きを通して、地上のすべての人々が救いの儀式と家族の永遠の結び固めを受けることができるのです。私たちは確かに、これまで生を受けた人々の中で最も祝福された民と言えるでしょう。これらのことを主イエス・キリストのみ名によって証します。アーメン。

「この岩の上に」



十二使徒定員会会長
ブルース・R・マッコンキー

私には、多くの祝福の時を共にしたひとりの友人がいます。彼からはたくさんのことを学びました。その点で他に比肩し得る人はいません。私は彼に対して畏敬の念を抱えています。では、みたまの導くままに、彼が教えてくれた偉大な真理の幾つかを紹介致しましょう。

彼は、人間の口を通してなされたものの中で最も偉大な説教を、自分の町であるカペナウムで行ないました。もうだいぶ前のことです。

何千人にも及ぶ彼のユダヤ人の友人たちに語ったその驚くべき言葉は、天の輝きをもって彼らの心を照らし、全身を証の炎で包みました。今まで、彼のように語った人はいません。現在でさえ、彼の口を通して語られた言葉を読み、それを心に深く思い巡らす時、私たちの心は内に燃えるのです。

彼は山上の垂訓と呼ばれる説教のクライマックスのところで、次のように勧告の言葉を述べています。「それで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者を、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができ

よう。

雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはない。岩を土台としているからである。

また、わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。

雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである。」(マタイ 7：24-27)

この世に生を受けた人は、ひとり残らず思い思いの家を建て、それを自分が選んだ土台の上に据えます。またこの世で建てられたどの家も、嵐や人生の諸問題の挑戦を受けます。そうした雨や風や洪水が押し寄せせるのは、神が定めたこの試しの生涯の目的を達成するためなのです。

私たちは罪の嵐の渦巻く中で生活しています。邪悪の雨と偽りの教義の風と肉欲の洪水が、私たちの建てた家を打ち叩きます。

しかし私たちには、信仰の家、正義の家、救いの家を建てる力があります。

望むならば、神の家である至聖所、生ける神の宮居をも建てることのできるのです。事実、忠実なすべての末日聖徒は、「神の御霊」が宿る「神の宮」を自らの力で建ててきています。パウロが語るように、「もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである。」(Iコリント 3：16-17)

もしも私たちの家が岩の上に、しかも良き行ないというれんがとモルタルを用いて建てられるならば、その家は嵐や人生の荒波にも賢く立ち、私たちが永遠の受け継ぎ

を得ることができるように守ってくれるでしょう。しかし、もしも悪という砂の上に、しかも肉欲という錆びた釘と腐った材木を使って建てるならば、その家は雨や風や洪水が押し寄せた時に壊れてしまうでしょう。

そこで皆さん、この地上の生涯にあってどこに、またどのようにして家を建てるべきか、私たちの偉大な友人の教えに耳を傾けようではありませんか。

では、ガリラヤの海の北、ヘルモン山の近くのピリポ・カイザリヤで展開されたほんの小さな、しかし人の心の琴線に触れる出来事に目を向けてみることにしましょう。そこでは、今まで彼を取り巻いていた群集は姿を消していました。彼らは私の友人を王にしようとしましたが、命のパンを求めよとの説教にこの世のパンへの叫びを打ち砕かれて、彼に背を向けてしまったのです。

私たちが今眺めている残された忠実で雄雄しい信者たちには、霊的な力づけが必要です。彼らはまず祈ります。次いで私の友であるイエスが、この世で肉体を受けている間に何度もしたように、自分が神の子であることを証します。

彼は弟子たちに、人々が人の子である彼を何と言っているか尋ねます。(マタイ16:13参照)しかし、この問いそのものが彼の神性を証するものなのです。なぜなら、神の子の父の名が「聖なる人」であり、したがってその独り子の名が「聖なる人の子」と呼ばれることを、彼も、弟子たちも承知していたからです。

彼らの答えは、背教した人々の幻想と曲解を如実に示すものです。まず、自分が殺したバプテスマのヨハネが生き返ったのだとするアンテパスの説を受け入れる人がいます。

またある人々は、万物を回復するエライヤスであると言い、大いなる恐るべき日の前に来るエリヤだと言い、また彼らの愚かな言い伝えにより、契約の箱をネボの山のほら穴に隠し、来るべき時にその箱とウリムとトリムを至聖所に返してメシヤの道の備えをするエレミヤだと言う人もいます。

そして、救いを得ようとする人であればだれもが正しく答えなければならない質問が次に来ます。「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか。」あなた方主イエス・キリストの使徒たちよ、あなた方いと高き聖徒たちよ、救いを求める忠実な人々よ、あなた方はどうお考えになるか。救いはキリストにあるのか。それとも他に求める必要があるのか。一人一人自分で答えてもらいたいです。

この時、まずシモン・ペテロが、次いで他のすべての人たちがこう言いました。「あなたこそ、生ける神の子キリストです。」(マタイ16:16)あなたこそ約束のメシヤ、神の肉における独り子、神はあなたの父なのです、と

何と驚くべき、畏れ多いことなのでしょう。パウロはこう述べています。「確かに偉大なのは、この信心の奥義である、『キリストは肉において現れ、霊において義とせられ、御使たちに見られ、諸国民の間に伝えられ、世界の中で信じられ、栄光のうちに天に上げられた。』」(Iテモテ3:16)

こうして神である父の「人の子」である彼は、間もなく変貌を遂げるその山のふもとで、友人たちの厳粛な証を受け入れるのです。

イエスはペテロにこう言いました。「バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。」(マタイ16:17)イエスは何と細やかに、しか

も何と適切に自分と他のすべての人とを区別していることでしょう。彼は神の子、ペテロはヨナの子。そしてイエスの父は不死不滅の聖なる人であるのに対し、ペテロの父は死すべき人間なのです。

しかし、なぜペテロがかくも祝福されているのでしょうか。それは彼が、聖霊の力によってイエスが主であることを知っているからです。聖きみたまがペテロの体内の霊に語り、この使徒の長に、ガリラヤのナザレのイエスが神の御子であることを告げたのです。

「バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である。」(マタイ16:17)

こうして再びイエスは自分とペテロの父が異なることに言及し、次のように語って祝福の言葉と教義の説明を続けます。「そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。」(マタイ16:18)

これと異なった考えがはたして可能でしょうか。主が建てる王国である教会の土台となるものはほかにありません。神につける事柄はみたまの力によってしか知ることはできませんし、だれも聖霊によらないで、イエスが主であることを知ることはできないのです。

啓示。混じりけのない完全な、主から直接下される啓示。これが岩です。

イエスがキリストであるとの啓示。天の神から地上の人間に下される平明でしかも驚くべき言葉、私たちの主が神の御子であることを言明する言葉。これが岩です。

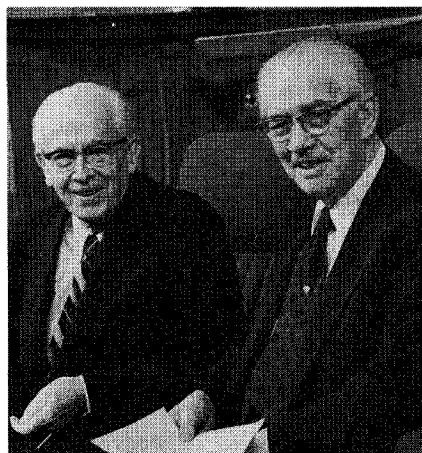
主の証。「預言の霊」である主の証。(黙示19:10)これが岩です。

以上のすべてに加えてまだあります。キリストが岩です。キリストは歳月に苔むした岩であり、イスラエルの巖、確かな土台です。

パウロがまたこう語っています。「なぜなら、すでにすえられている土台以外のものもすえることは、だれにもできない。」(Iコリント3:11)またこうも述べています。「またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。」(エペソ2:20)

これらのことを思い巡らし、その意味を理解し始めると、かの古代の使徒の勧告の言葉が新たな生気を帯びてよみがえってくるのです。「あなたがたは、はたして信仰があるかどうか、自分を反省し、自分を吟味するがよい。」(IIコリント13:5)そして私たちはこうも尋ねます。「黄泉の力は私たちに打ち勝つでしょうか。」

救いの家を個人の証という岩の上に、イエスが主であるとの啓示された真理に、そして永遠の岩であるキリストの上に建てるならば、その家は永遠に倒れることはない



でしょう。

この地上の人生にあって靈感のみたまに導かれるならば、私たちはどんな洪水や嵐が押し寄せてもたじろぐことはないでしょう。

もしも私たちが岩の上に基を置かならば、私たちは御子のみ名と聖霊の力によって御父を礼拝するでしょう。

もしも私たちが岩の上に基を置かならば、救いが福音を信じて戒めを守る人に、神の恵みによってもたらされることを知るでしょう。

もしも私たちが岩の上に基を置かならば、私たちは世のものを捨て、肉欲を避け、高潔で正直な生活を送るでしょう。

もしも私たちが岩の上に基を置かならば、「黄泉の力も……打ち勝つことはない」でしょう。信仰の家にとどまる限り、たとえ邪悪の雨と偽りの教義の風と肉欲の洪水が私たちを打ち叩いても、私たちは守られるのです。

私たちが末日聖徒として、岩の上に基を置いていることを神に感謝します。それであるからこそ、私たちの中の忠実な者たちは、静かながらも確信に満ちた声がこう語るのを聞くのです。「これを以て、汝らわが福音とわが磐との基の上に教会を築かば、地獄の門も汝らに打ち勝つこと能わざらん。

……見よ、わが福音、わが磐、わが救いは汝らの前にあり。」(教義と聖約18:5,17)

そこで私たちは、ペテロや私たちが知り得る他の古代の人々と共に、それらの、血肉では決して明らかにすることができないことを、彼らが証したように証します。私たちは聖霊の力により、イエス・キリストが生ける神の子であることを、また、世の罪のために十字架におかかりになったこと

を知っています。

神よ、願わくは私たちが、その名によって救いが来る方に忠実でありますように。その方は私たちの友であり、主であり、王であり、神であり、岩なのです。

私は主イエス・キリストの使徒として、私たちが述べ、また古代の人々が述べてきた証に加えて、私自身と十二使徒会の兄弟たちを代表し、こうつけ加えたいと思います。神はこの末日に、信じて従うこの地上のすべての人の救いのため、永遠の完き福音を回復されました。そしてジョセフ・スミス(二代目)を末日の予言者としてお立てになり、時満ちたる神権時代の最初の使徒の頭とされました。そして彼に、ペテロや使徒たちや古代の予言者たちが保持していた神権と権能のすべての鍵をお与えになったのです。またこれらの鍵と聖なる使徒職は、以下のように継承されてきました。ジョセフ・スミス、ブリガム・ヤング、ジョン・テイラー、ウィルフォード・ウッドラフ、ロレンゾ・スノー、ジョセフ・F・スミス、ヒーバー・J・グラント、ジョージ・アルバート・スミス、デビッド・O・マッケイ、ジョセフ・フィールディング・スミス、ハロルド・B・リー、スペンサー・W・キンボール。そしてこの聖なる使徒職と神権の鍵は、イエス・キリストが天の霊に乗っておいでになり、この世を統治される時まで、使徒から使徒へと受け継がれていきます。私は主の代理人として、私の名によってではなく主のみ名によって、主がここにおられればそう語られるであろうように、以上のことを申し上げるのです。主のみ名を除いては、救いをもたらす名はありません。私たちが主の僕です。イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

主の用向を有てる者



大管長
スベンサー・W・キンボール

愛する兄弟姉妹の皆さん、まことに栄えある大会でした。この大会のために責任を果たして下さいました一人一人の方々に感謝します。教会幹部の兄弟たちの説教や美しい音楽を聴く時に、私の心は感謝に震え、喜びに満たされました。そして、主のみたまを感じました。

新たに七十人第一定員会の会員として、アンゲル・アブレア長老をお迎えできてうれしく思います。アブレア長老は今のところ、アルゼンチンのロザリオに戻って、伝道部長の責任を引き続き果たされる予定です。新しい教会幹部として、教会の指導に大きく貢献して下さいましょう。

この6カ月間に、私はキンボール姉妹と一緒に世界各地を回りました。各地のステーク部、ワード部、伝道部で、力強く着実に発展する教会と、無私の心で奉仕し、献身的に働く教会員の姿を目にして、私たちは深い満足を覚え、励まされる思いでした。

今大会では、必要な物資を蓄え、私たち主の民の経済的な負担を軽くするようにという勧告が出されましたが、ここでもう一

度強調しておきたいと思います。家庭菜園を行ない、必要な時に備えて1年分の食糧と衣料品を貯蔵して下さい。

すべての末日聖徒は、よき隣人となり、立派な市民となって、国旗や国家に対して忠誠を表わす必要があるでしょう。「われらは、王、大統領、統治者、長官に従うべきを信じ、また法律を守り、敬い、支うべきを信ず。」(信仰箇条第12条) 合衆国民をはじめ世界中の人々が先週起こった恐ろしい事件に衝撃を受け、悲しみに沈んだこととします。合衆国大統領が狙撃され、大統領と側近の3名の人が重傷を負ったのです。皆さんも私と共に熱心に祈り、レーガン大統領や傷ついた側近の方々が一日も早く健康を回復して、それぞれの職務に戻れるように、主に嘆願していただきたいと思えます。私たちは、世界のいかなる場所で起ころうとも、このような暴虐行為に対して遺憾の意を表わすものです。

このたびの大会では、教会の基本的な使命に焦点が当てられ、発展を続ける教会を「賢く秩序正しく」(モーサヤ4：27) 管理するように勧告されました。戒めを守り、義務を果たし、完全な什分の一と惜しみない断食献金とを納めて、福音のあらゆる儀式と祝福を受けるにふさわしい者となるように自らを整えて下さい。

私たちは総大会の間この歴史的なタバナクルに会して、永遠の事柄について考えてきました。物事が急速に移り行く世の中にあって、あたかもこの場の時間だけが止まっているかのように感じられました。

新たに9つの神殿が建設されるという発表がありました。実に喜ばしいことです。合衆国、ラテンアメリカ、アジア、アフリカ、ヨーロッパの各地に、2年間で9つの

神殿が建設され、献堂される予定です。これが完成すれば、神殿の数は全部で37になります。これで神殿参入が今までよりずっと容易になるでしょう。現在多くの聖徒たちは、最も近い神殿に入るのにも、多額の費用と時間をかけて遠方まで出かけなければならぬからです。

昨日最後のセッションが終わった後で、思いがけず、韓国から大勢で大会訪問をしている聖徒たちに会いました。彼らは、韓国に神殿を建設するという発表を聞いて、歓喜に満たされたと話してくれました。また彼らは、1500万人の死者の名前を携えて来ていました。

しかし、これらの神殿は始まりにすぎません。このみ業が進展するにつれて、世界中にさらに多くの神殿が建設されるでしょう。

兄弟姉妹の皆さん、皆さんも十分承知していると思いますが、世の中はますます混乱してきています。私たちはこれから個人として、また教会として、試練を受けて試されるでしょう。私たちの前途には、今までにない苦難が待ち受けています。しかし、落胆したり、動揺したりしてはなりません。忘れないで下さい。この業が主のみ業でなければ、サタンは私たちなど全く相手にしないでしょう。この教会が人の教義を教える人の教会にすぎなければ、批判や迫害を受けることはまずないでしょう。しかし、この教会はイエス・キリストのみ名で呼ばれる主御自身の教会です。したがって批判を受け、苦難に直面したとしても、何ら驚くにはあたりません。信仰と徳高き行ないによって、真理は地に広がって行くでしょう。これは主のみ業です。これに匹敵するものはほかにありません。さあ、歩

みを速め、この素晴らしい機会と祝福を享受しながら前進しようではありませんか。

この大会を閉じるにあたり、兄弟姉妹の皆さんにお伝えしたいと思います。私たちは皆さんを心から愛しています。皆さんのあらゆる働きに感謝しています。しかし、いつもながらなすべきことはまだまだたくさんあります。畑は早白くして刈り入れを待っています。しかし刈り入れの時は短く、働き人はわずかしかいません。ですから私たちは、世界中のありとあらゆる場所で、まだ福音を知らない大勢の天父の子供たちと福音を分かち合う業に励まなければならないのです。

皆さんが神から力を授かることができすように、そして皆さんの持っている知識を求めている隣人にその知識を伝えることができますように、またかつてなくこの大いなる祝福を必要としている世界中の様々な地域にまで福音をもたらすことができすように、心から願っています。

愛する兄弟姉妹の皆さん、これが主のみ業であり、真実なものであることを証します。私たちは「主の用向を有てる者」です。この教会は主の教会です。主御自身がその頭であり、隅の頭石であられます。神は生きておられます。イエスはキリストであり、神の独り子、この世の救い主、贖い主であられます。これらの証を、皆さんへの愛と祝福と共に、イエス・キリストのみ名を通して申し上げます。アーメン。

☆

☆

基本に従う



大管長
スペンサー・W・キンボール

愛する兄弟姉妹の皆さん、今日私たちが直面している社会や経済の状態について深く考える時、私の思いは開拓者時代にさかのぼります。私たちの先祖は信仰を試されるような多くの艱難を受けてきました。これは教会が設立された当初から何ら変わっていません。

1846—47年にかけての冬、聖徒たちはウインタークォーターズで、長い厳しい大陸横断の旅に出る準備をしていました。そのような人々の中に、21年間ブリガム・ヤングの副管長として働いた私の祖父ヒーパー・C・キンボールがいました。その冬、主は啓示によってブリガム・ヤングにこう宣言しました。「わが民は、すべてのことは試練を受けざるべからず。かくして彼らはわが与えんとして持てる光栄、すなわちシオンの光栄を受くるために準備せらる。而して、およそ懲らしめを堪え忍ばざる者はわが王国に適しからず。」(教義と聖約 136 : 31)

聖徒たちはだれも足を踏み入れようとしなかった砂漠を安住の地とし、その砂漠に

バラを咲かせたのです。末日聖徒の歴史でこれに勝る奇跡があったでしょうか。末日聖徒が減びずに繁栄を築いたのは信仰と家族の一致でした。その開拓者を特徴づけるものは熱心に働くこと、犠牲を捧げること、助け合うこと、主を信頼することでした。

私は少年時代をアリゾナで過ごしましたが、今でもその時のことをよく覚えています。生活の糧と言えば、土から生じる産物だけでした。全くの無一文の状態でした。無一文で過ごし、何とかやりくりするのが私たちの生活だったのです。私たちは何でも分かち合いました。仕事、喜び、悲しみ、食物やお金まで分かち合いました。互いに心から思いやるようにしました。私たちが捧げる日々の祈りは主に対する私たちの信頼を表わすものでした。私たちは祈り、そして日々の糧を得るために懸命に働いたのです。

このような開拓者の体験の中から、堅固な家族の絆が生まれました。現在、私たちの資源は再び厳しい状態に置かれています。しかしこの開拓者時代から受け継がれてきた厳しい修練によって必ずやこの苦境を乗り切る力を与えてくれるでしょう。

これまで何年もの間、私たちはこのような福祉部会を開いてきましたが、きょうの福祉部会ほど重要なものはありません。人々が経済的に必要としている基本的な事柄に目を向ける時、私たちはまず基本原則に立ち返る必要があります。私は、かつて開拓者たちが示してくれた教訓、すなわち聖徒たちは霊的に豊かであったけれども、この世の物資に事欠く状態の中で懸命に生き抜いてきたということに心から感謝しています。

主のみ業の中で働く人々は、労働が経済

的な必要を満たすだけでなく、靈的な必要を満たすものであることを知らなければなりません。私たちの先祖の開拓者たちはこのことを熟知していました。

開拓者の人々が自分たちの持ち物を貧しい人々と分かち合ったと同じように、私たちは単に2食分に相当するお金だけでなく、もっと多額の断食献金を惜しみなく納めることが必要です。

開拓者時代の先祖たちは家族の世話を政府に求めたりしませんでした。家族は自分たちの宝であり、責任であることを自覚していたからです。

たとえ豊かな生活をするために必要だと思われる物がなくても、幸せな生活が送れるように計画し、努力して下さい。自分の収入の範囲内で生活し、決して借金をすることのないようにして下さい。土地があれば、たとえ狭くても家庭菜園を造るように

して下さい。土に親しむことは人間にとって有益なことです。最低限必要な物資を賢明によく調べて購入するようにして下さい。そして収入の一部を貯蓄に回すようにしましょう。基本的に必要な物と欲しい物との区別を誤らないようにして下さい。

これらの基本原則を家族評議会で子供たちに教えるようにしましょう。開拓者の先祖は犠牲がいかに天の祝福をもたらすかを教えるために、『たたえよ、主の召したまいし』（讚美歌144番）をよく歌いました。兄弟姉妹の皆さん、これは今日とて同じことです。逆境を通してもたらされる恵みを忘れないようにしましょう。

私たちは残念ながら罪と暴力が蔓延する現代の世に住んでいますが、それでも穏やかに愛を持って生活しようではありませんか。人を愛し、善き隣人となれとの主の大きい戒めを覚え、守ろうではありませんか。意見の相違や誤解があっても、親切と兄弟愛と心からの関心によって解決し、そのような誤解を取り去ろうではありませんか。

大声で叫ぶのではなく、穏やかな勧告の言葉によって語ろうではありませんか。基本に立ち帰り、基本に従うようにしましょう。そうすれば、このような嵐の時にあっても生活の中で靈の活力を取り戻すことができるようになるでしょう。

この部会で受けた福祉に関する指導に心から感謝しています。それは、私たちの関心そして行動のどの面から見ても、時宜を得た価値あるものです。願わくは主の祝福があって私たちがそれを活用し、主とその指導者が開いてくれた道に人々を導くことができるよう、へりくだりイエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。



自分の家族を 扶養する責任



管理監督会第一副監督

H・パーク・ピーターソン

け さ私が話すように依頼されているのは、私たちに与えられている、自分の家族を扶養するという義務についてです。この勧告は身近な家族だけではなく、親族に対しても適用される事柄です。この責任のあらましを述べた聖典の中の教えも明快なものです。

本論に入る前に、家族に与えられたこの神聖な責任について語るための、前提となる事柄について話してみたいと思います。人はそれぞれの人生を歩んでいく中で、様々な事柄、活動に心を引かれるようになります。しかし、それらの重要度の決定にはまま問題があります。私が懸念しているのは、私たちの行動の中に、永遠という観点から見て、何の価値もないことが幾つかあるということです。事実私たちは、ある特定の事柄に関心を寄せているために、本来ならば達成できるものも失ってしまうことになりかねません。人生には、昇栄に至るための準備段階として基本となる事柄が幾つかあります。私たちの周囲には、私たちが忙しくさせているものがたくさんありま

すが、この基本となる事柄は、そうしたもののよりもはるかに多くの成果をもたらすものです。私たちの中にはこの「大切なこと」に忙しく立ち働いている人がいます。主が10人のおとめのたとえ話をもって教えられたのは、この種の人々のことであるということには何の疑いの余地もありません。

そこに述べられているのは、信仰を持った10人の教会員です。彼女たちは一個の集団として、自分たちは花婿に会うことになっているのだと信じ切っていました。その描写からして、彼女たちが悪質な人々でないことは明らかです。私が思うに、彼女たちは「教会の活動」という点においては、その水準までのことをして生活していたのです。しかし、このたとえ話にあるように、その中の5人は他の5人がしていたよりも重要なことをしていました。半数は日々の生活の中で、重要な、しかも最も大切なことを行ない、ランプの油を用意していたのです。

愚かなおとめたちについて、たとえ話の中にはこう記されています。「彼らが買いに出ているうちに花婿が着いた。そこで、用意のできていた女たちは、花婿と一緒に婚宴のへやにはいり、そして戸がしめられた。」(マタイ25:10)

これを、もっと大切な事柄をしているようにという、ひとつの警告、また主のみ言葉と考えて、モルモン経中の偉大な予言者、宣教師のひとり、アルマの教えに注意を喚起したいと思います。

主の真の弟子になるということがどういうことかを述べた、最も重要な宣言の中で、アルマはバプテスマの水をくぐった人々が交わした誓約とその責任を簡潔明瞭に説明しています。私たちが皆、その水の中に

入り、誓約をしました。モーサヤ書第18章の中で、アルマは、心から救い主に従う人、真の弟子の行ないを述べています。こう書かれています。「あなたたちは神の羊の群に入って神の民と言われること、互いに苦難を軽くするために喜んで助け合うこと。

悲しむ者を思いやって共に悲しむこと、慰めが要る者を慰めること、また神に贖われ第一の復活にあずかる者の数に入って永遠の生命を得るよう、いついかなる時でも、どのような所に居ても、どんなことについても、死に至るまでも神の証し人になりたいと心から思っている。」(モーサヤ 18：8-9)

彼の言葉は簡潔です。救い主の弟子となり、救い主のようになるには、互いに仕え、苦しみを助け合うという責任を引き受け、苦難の人生を支え合っていかなければなりません。

この世的にどれほど偉大で立派な業績を残し、監督、書記、組織の長、教師、親として、どれほど多くのことを成し遂げたとしても、人に愛を示すようにならなければ、私たちは無に等しいのです。(I コリント 13：1-3 参照) 良き行ないをしても、愛がなければ、一切が無益なものとなるでしょう。

愛を計る幾つかの方法があります。人の心を探り、そこに潜む真の願いと動機を知ることができる御方はただひとりということを中心に、他人の行動に対する裁きを慎む人、愛はそのような人の中に、至高の形をとって表われると言ってよいでしょう。人の一生の歩みの結果を裁く権利を持っている御方はただひとりです。不当な裁き、偏見によって、心からの憐れみや困っている人を助けようという積極的な思いを表わ

せない人がたくさんいます。家庭という輪の中においてもそういうことが見受けられるのです。ベンジャミン王はこう警告を発しています。

「またお前たちは、お前たちの助けが要る者を自分たちで助け、貧しい者に自分の持物を施し、物もらいがお前たちに乞いねがうのを拒んだり、これを追いはらって死なせるようなことをしないで。

おそらくお前たちは『この者は自分自身でこのみじめな有様を招いたのであるから、私はかれを助けるのを止め、その苦しみを救うために私の食物を与えず、また私の持物も分けてやらない。その苦しみは当然の罰であるからである』と言うだろうが、

私はお前たちに告げる。このようなことをする者は誰でも大いに悔い改める必要がある。もしもその行いを悔い改めないならば、お前たちはとこしえに亡びて神の王国の民となることはできない。」(モーサヤ 4：16-18)

私たちの家族が、何ひとつこの勧告に述べられている思いやりを受けずにいるというようなことはないでしょうか。人に対して愛を示すのは、その人が自分の意にかなったことをした時、というようなことがあまりにも多過ぎます。その人の行ないを見てから、愛を示すかどうかを決めるようなことがあってはなりません。それは、人は何者であるかという観点からすべきことであって、どのような行ないをしているかということで決めるべきではありません。

さて、以上のことを心にとめて、真の弟子の行ないを述べたアルマの言葉をもう一度思い起こしてみよう。真の弟子とは、互いに苦難を軽くするために喜んで助け合い、悲しむ者を思いやって共に悲しみ、慰

めが要る者を慰める、そういう人です。

兄弟姉妹、愛の行ないを輝かせ、自分の弱さを克服し、弟子たることを示すべきところとして、家庭に過ぐる重要な場はありません。どこを見ても、親密になるという点において、これ以上の場はありません。しかし、外の人には愛を示しておきながら、自分の家族は後回しというような人が、あまりにも多過ぎます。

さて、今私が話したことから、皆さんは、家族が互いに足りないところを補い合うということについて、私たちが深く憂慮しているということに気づかれたと思います。これまで、家族に対する扶養義務について、この説教壇から多くのことが語られてきました。話そのものはわかりやすいものです。私たちが恐れているのは、この原則に対する理解とそれに伴う行動が、主が定められ

たほどの水準に達していないという点です。

ブリガム・ヤング大管長がかつて、このように話したことがあります。「私はこの教会に入って以来、自分の身寄りの者の扶養を教会の手に委ねるようなことは、一度たりともしたことがない。しかし、中には自分の子供や、親族の世話を教会に任せている人々もいる。年老いて自活する力のない姉妹や両親がいると、教会に厄介払いをし、その面倒を見てもらうという風である。いやしくもこの世に生を受けていながら、親族や家族の中の貧しい者の世話をせず、生活の見通しを立ててやろうともしないなどということは、人として恥ずべきことなのである。」(Journal of Discourses 「説教集」 8 : 145)

ほんの一部であれ、私たちがこの道徳の基本原則から逸脱してきたことも考えられ



るので、福祉の手引きから言葉を引いてみたいと思います。この手引きは、人によっては20年以上前に監督として用いたことのあるものです。

「親族による扶助」

「扶養能力のある親族がいる場合、国〔あるいは教会〕に援助を求めるべきでないことは言を待たない。親族関係、正義と公平、公共福祉、さらには人としての情といったあらゆる面から考えても当然である。」そのほかに、こうも書かれています。

「経済的に親族を扶養する力を持ちながら、それをしようとしなない教会員については、その旨を、居住するワード部の監督に報告しなければならない。」(Welfare Plan of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints 「末日聖徒イエス・キリスト教会の福祉計画」1969年版、p.4)

そしてこの手引きは、使徒パウロがテモテに与えた教えを繰り返しています。「もしある人が、その親族を、ことに自分の家族をかえりみない場合には、その信仰を捨てたことになるのであって、不信者以上にわるい。」(I テモテ5：8)

家族をかえりみるということがどういうことかを、明確にする必要があるかも知れません。実際にどのようにしたらよいのでしょうか。お金や物を与えるというだけのことなのでしょうか。お金では買うことのできないもので、まだ満たされてないというものはないのでしょうか。

家族の援助ということについて語る時、私たちの考えはややもすると、物質的な福利に偏り勝ちなところがあります。衣食住のことに心を奪われている感じがします。結婚したばかりの子供に、最初の1年間、

限られた収入の中でやりくりできるように助けを与えている両親がたくさんいますが、これは素晴らしいことです。同様に兄弟姉妹の中で互いに助け合っている例もよくありますし、年老いた両親、祖父母に多くの物を随分与えている子供たちもいます。それはそれで当然のことであり、そのようにして自分の家族を扶養する人々には祝福が与えられることでしょう。

しかし、家族に必要なのは物だけとは限りません。信仰、赦し、励まし、慰めを与え、また話に耳を傾け、教え、精神的な支えとなり、愛と思いやりを実際の行動で示したりすること、ほかにも様々な行ないを通して、愛する人が苦難を乗り越える力になることができるのです。そしてそういう苦難は、人生に絶えずつきまとうものです。家族と共に過ごす時間は、あらゆる面で、思いもよらぬ大きな喜びをもたらしてくれます。

年をとって外に出ることのできないひとりの祖母とその家族の話があります。その家族は年に一度、新しい毛布を持って祖母の所を訪問するようにしていました。ある時、その訪問を終えて家に帰って来た時、まだ幼い息子のひとりが父親に聞きました。「お父さん毎年おばあちゃんの所へ行くのはどういうわけなの。」

「それは、みんながおばあちゃんのこと愛してるっていうことを、おばあちゃんに知ってもらうためなんだ」と父親が答えました。

するとその子はもうひとつ質問しました。「いつも新しい毛布を持って行くのはどうしてなの。」

「それは、うちの者がみんなここにいるということと、おばあちゃんのことを忘れ

てはないことを覚えておいてもらいたいからなんだ。」

それからちょっと間をおくと、今度はこう問いかけてきました。「お父さん、もしぼくがお父さんのとこへ行くようになったとしたら、どんな色の毛布が欲しい。」

この戒めを避けて通るのを、正当化する、法はありません。「あなたの父と母を敬え。」
(出エジプト20:12)

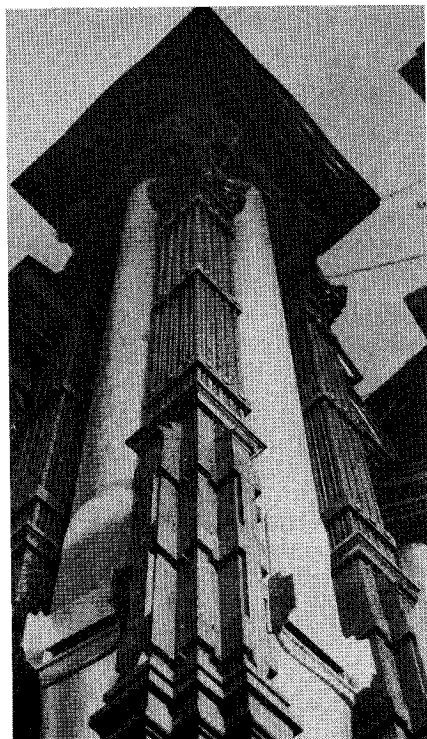
家族のつながりを永遠のものにしたいと思うなら、祖父母、兄弟姉妹、またほかの身寄りをのけ者にするようなことは許されません。神は、年が幾つであれ、家族の者を重荷として考えるようなことを固く戒めておられます。困っている人を助ける計画を立てるために、家族がひとつになって話し合いをするというのは、考えただけでも素晴らしいことではないでしょうか。

家族がひとつになって断食し、祈るなら、奇跡を起こすことができるということを、私は幾つかの個人的な体験を通して、強く信じています。しかし、それが起きるまでには、私たちがこれで十分と考えているよりも、多くの時を要するようです。

全員が末日聖徒ではない家庭に育っている人々に思い起こしていただきたいことがあります。それは、私たちは皆、文字通り兄弟姉妹であるということです。この原則はすべての人に当てはまります。忠実な人はその従順さのゆえに祝福を受けることでしよう

いにしえの時代にも、家族に対する責任を負うべきであるという戒めに従わず、それを正当化する手段を考え出した人々がいました。それに対して主は次のように言われました。

「偽善者たちよ、イザヤがあなたがたにつ



いて、こういう適切な預言をしている、

『この民は、口さきではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。

人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる』(マタイ15:7-9)

けさ、私たちは皆さんに主のみ言葉を伝えています。従うか従わないかは、自由意志によります。しかし、もし不従順なら、私たちはその報いを受けなければなりません。

これらの教えが真実であること、またそれを定められた御方が実在することを証します。イエス・キリストのみ名によって、アーメン。

星を見上げる



中央扶助協会会長
バーバラ・B・スミス

キンボール大管長、タナー副管長、ロムニー副管長、敬愛する教会幹部の皆様そして兄弟姉妹の皆様。今の世にあって経済的な圧迫を被っていない人は皆無であると言ってもいいのではないのでしょうか。経済がもたらす緊張は単にテレビや雑誌、新聞紙上で取りざたされているだけでなく、私たちが何を買うにもついてまわり、痛感させられる事柄です。

土曜日の午後になると、私はよく夫と一緒にスーパーマーケットへ出かけます。一週間分の食物と貯蔵用の食糧を買うのです。先日、ショッピングカートにいろいろ買い込み、レジの前で順番を待っていました。その間、前に並んでいる人たちの金額の合計をずっと見ていましたが、どれも驚くほど大きな額でした。限られた収入の中から大家族を養うためにあてる食費、わずかな年金で暮らす老人、定まった収入の道もない片親の家庭。私たちはつくづく考えさせられ、それについて話し合いました。そしてこのような考えに至りました。どの家庭でも、現在の必要を満たすために金銭をも

っと上手に管理しなければならない。

現在の経済状態は深刻です。このようなチャレンジに対処し、満足のいく結果を得るには、私たち女性がもっとやりくり上手にならなければなりません。

ある若い花嫁が、夫に付いて砂漠のはずれにある陸軍基地に行くことになりました。借家は少なく、あっても値段が高いため、彼らはインディアン村の近くにある小さな小屋に住むのがやっとでした。そこは、日中の気温が45℃にもなり、やりきれない暑さです。それに始終風が吹いており、舞い上がったほこりや砂があたりかまわず入り込んできます。長く、さみしい毎日の繰り返しです。夫が演習のため2週間家を空けた時には、彼女の忍耐も限度を越え、彼女は、もうこのような状態で生活することには耐えられない。家に帰りたいと母親に手紙を書きました。そして折り返し届いた母親の手紙に、このような言葉が書いてあったのです。

「拘留所の鉄格子からふたりの囚人が外を眺めていた。

ひとりりは地面を見、もうひとりりは星を見上げていた。」

彼女はこの言葉を何度も読み返しました。そして、星を見上げることにしたのです。

彼女は近くに住むインディアンと友達になろうと心に決めました。また、インディアンの作る美しい織物や陶器に引かれた彼女は、その作り方を教えて欲しいと頼んだのです。彼女の熱心さに打たれたインディアンたちは、すぐに喜んで教えてくれました。こうして彼女はインディアンの文化や歴史だけでなく、彼らのありとあらゆることに興味を覚えるようになりました。彼女にとって、砂漠はわびしい不気味な所から、

驚くほどの美しさを秘めた世界へと変わったのでした。

変わったのは何でしょうか。砂漠でも、彼女を取り巻く環境でもありません。彼女の心の持ち方が、みじめな生活を実に豊かな生活へと変えたのです。(Bits and Pieces Vol.C No.5, pp.22—23)

女性が星を、導きとなる星を見上げることができるよう、扶助協会はどのような力になることができるでしょうか。つらい環境でも楽しく胸躍るものに変えられるよう、また、家庭に正しい経済の原則を取り入れて金銭や資産を有効に活用できるよう、扶助協会はどのような援助ができるでしょうか。

このようなチャレンジに立ち向かえるよう女性たちを援助するために、ユニットごとに次のような扶助協会小クラスを設けてはどうでしょうか。

まず、家庭管理と金銭管理。この知識を身につけていると、収入の範囲内で諸経費を割り出すことができるようになります。収入よりも幾分少なめの支出とは昔からよく言われてきたことです。私たちはもはやこの原則をないがしろにすることはできません。

収入よりも幾分少なめに支出を抑えるには、まず予算を立てることです。最低限必要なものを第一に計画し、次に、その他の必要を満たすようにします。

私たちは、すべての女性が支出の計画を立て、それに従うことによってもたらされる心の平安を味わうことができるようお力になりたいと思っています。支出が収入の範囲内にとどまっている時、生活に安らぎを感じるようになるでしょう。

女性は予算を立てるようにしなくてはな

りませんし、そのことを子供にも教える必要があります。女性も子供も、その品物がいかに大切であり価値あるものであろうと、それを買う余裕がないのに買い求めた場合、それは賢明な支出ではないということを心に留めておくべきでしょう。このような支出の仕方が借金をもたらし、無分別な借金が家計をメチャメチャにし、家庭不和の原因となっていることが多いのです。もし皆さんが次のマービン・J・アシュトン長老の助言に従えば、子供たちにもよく理解させることができると思います。「親が子供にただ『貯金をしなさい』と言ってもそれは無意味なことである。しかし、『伝道に出るために、また自転車や洋服や、ズボンを買うために貯金しなさい』と言えば、子供は貯金する理由がよくわかる。」(『家庭における財政管理』「聖徒の道」1976年7月号, p.303)

予算に従って生活することはそれほど難しいことではありませんし、またやって損になることでもありません。予算を立てることは、ひとつの大きな学習体験です。

最近結婚した友人の娘さんが、母親に手紙を書いてきたそうです。そこには、わずかな収入の中で貯金をするために、どのような金銭管理をしているかが書いてありました。彼女は興奮ぎみにこう説明しています。「何でもお店で買ってきて食べるのでは高くついて、やっていけそうにありません。そこで、私はほとんどのものを自分で作るようにしています。先日扶助協会で、貯蔵品の粉ミルクからバターミルクやコンデンスミルク、コテージチーズ、ヨーグルト、クリームチーズなどを作る方法を教えてもらいました。何でも自分で作ると、ずいぶん節約ができるものですね。楽しみで



す。」

私たちは女性の皆さんに、もっと現実的になって金銭管理に当たるよう、そして、どんな時にも落ち込まない楽天的な心をもったやりくり上手な女性になるようお願いしたいと思います。

次に、資源の管理に関する小クラスを開くことをお勧めします。姉妹たちの間でエネルギーを節約する方法を交換し合うのです。たとえば、誘い合わせて車に乗る、なるべく歩く、寒い時には厚手の衣服を着て暖房費を節約する、カーテンを開けて日差しを入れ、夕方早めに閉める、外出する時には冷暖房器具のスイッチを切る、余分な明かりを消す、ある程度洗濯物をためてから洗濯機を回すなど。

資源の管理には、所有物の正しい管理や使い古した品物の再利用も含まれます。あるステーキ部扶助協会の会長の報告によれば、ホームメイキングのクラスで洋裁の上手な姉妹の助けを得て、リフォームのための型紙を作っているということです。これには被服費の節約だけでなく、見違えるような素敵な洋服が着られるという楽しみも

あります。

資源の管理のその他の小クラスでは、衣類の上手な手入れに関連した繕いの仕方や汚れの落とし方、再生法などを教えることもできます。また、洗濯の秘訣を教えることによって、姉妹たちは衣類を長持ちさせる方法を身につけることができるでしょう。さらに衣服のコーディネートや手持ちの衣服を上手に着こなす方法を教えることによって、そろいの衣服を買うことを最小限にとどめることができるようになります。こういった様々な方面から、扶助協会は姉妹たちが各自の所持品をさらによく管理できるように教えることができます。その結果、物を長持ちさせ、同時に満足と喜びを味わうことができるでしょう。

私たちが手持ちの物を十分に活用するならば、必要なものがない状態で我慢しなければならないということもなくなるはずですよ。こうして、私たちはお金をかけずに家族一人一人の生活を豊かなものにすることができます。

3番目に提案したい小クラスは健康な毎日を送るためのものです。姉妹たちが可能な限りの健康を維持することによって節約することができるようにクラスの内容を計画して下さい。扶助協会で健康増進のためのトレーニング方法を教えて、医療費を最小限に抑えるようにします。そうすれば薬代もかかりません。病気になるようにすれば余分な出費をしないですみます。健康は節約につながるのです。健康を維持するために、女性は栄養のある食物を準備することが必要です。多くの方は食事の量を今より少なめにしても健康を維持することはできますが、毎日規則正しく、バランスのとれた食事を取るよう心がける必要

があります。扶助協会では、姉妹たちが基本となる栄養素について理解し、それを実際の献立に生かせるよう教えています。私たちは栄養もあり見た目も美しく、しかもあまり高くつかない食事を食卓に並べられるようにならなければなりません。また、私たちは、教会が打ち出した経費削減に協力する意味で、次のことを提案したいと思います。ホームメイキングの集会はこれまで通り毎月1回行ないますが、集会後の昼食会は姉妹たちの都合で特に要望がない限り年6回とするようにして下さい。扶助協会会長は、この昼食会が菓子や飲み物といった平凡なりフレッシュメントの時間に終わることなく、将来を見越した生活をするよう勧める特別なひとときとし、各人が家庭で簡単に作ることでできる経済的で栄養価の高い食物を出すよう強調していただきたいと思います。

教会の福祉の基本概念は、入念な計画を



立てて非常時に対する備えをするということです。扶助協会では、各家庭が現在の必要と非常時の必要に応えられるような備えある家庭づくりに励むことによって、福祉の基本概念を推し進めるよう姉妹たちを援助したいと思っています。

私は、ノアの箱舟ができあがった時に必要だった緊急時の備えについてこれまで考えていました。主の言われることに忠実に従って箱舟を完成したノアは、人類史上最も効果的に福祉計画を進めた人ではないでしょうか。ノアの妻も息子たちも、主の祝福を得ようとノアと一緒にひたすら働き、計画を立てました。箱舟に入れられた動物たちの1年分の食糧を準備することを考えてみて下さい。ノアとその家族は楽しみながらこの仕事（各種類の動物の中から雄と雌を選ぶこと）の計画を立て、進めていったことでしょう。また舟の中でも胸の躍るような体験をし（毎週くらいに動物の赤ちゃんが生まれたと考えられます）、空に壮大な虹がかかり、主の約束が成就された時には、言いようのない喜びを感じたことでしょう。

今日の私たちに、このような勤勉な努力ができるでしょうか。女性として私たちは、責任ある行動がとれるでしょうか。主が与えて下さったものを賢明な方法で管理することによって、この経済的困難の大チャレンジに答えることができるでしょうか。

予言者と使徒の指示に従って生活する中で、私たちが星を見上げる者となり、満足と喜びを見いだすことができますように。予言者も使徒も、主がこの時代の導き手として選ばれた方です。これらのことを、イエス・キリストのみ名により、へりくだりお祈りします。アーメン。

上手な家計管理の 3つの鍵



七十人第一委員会会長
M・ラッセル・バラード

兄 弟姉妹、私はこの会で家計管理について話をするように言われました。

ますます深刻化するインフレーション、そしてだれにでも簡単に借金のできる社会。こうした環境の中で、気づいてみたら自分の収入ではどうにもならない負債を背負ってしまっていたと嘆く人が跡を絶ちません。その筋の権威の推定によれば、アメリカ合衆国の実に3分の1の家庭が、支払い能力の点から言って限度を超えた借金をしているとのこと。事実昨年例を取ってみても、数万にも上る世帯が支払い不能に陥っています。

さて、最近教会福祉部がある調査を行ないましたが、そこから次のことが明らかになっています。すなわち、1年分の財政面での貯えのある家庭は調査の対象となった全家庭の半分以下で、89パーセントが増税とインフレーションによる圧迫を感じています。また調査対象となった末日聖徒の女性の34パーセントが家庭外に仕事を持っており、その中の57パーセントは、夫の収入だけでは暮らせないので働いているとのこ

とです。さらに、全家庭の31パーセントがやむなく生活を切りつめており、39パーセントの家庭は基本的な必要を満たすに足る収入を得ていません。

以上の結果から明らかなことは、指導者である私たちが、教会員に対して、時間と財力を上手に管理していくにはどうするかを教えなければならないということです。

きょうの話始めるにあたり、まず今日の私たちが指針とすべき原則について述べたいと思います。予言者アルマは息子ヒラマンにこう教えました。「見よ、わが子よ。またこればかりではない。お前がもし神の命令に従うなら地に於て必ず栄えることと、もし神の命令に従わないならば神の前から追い払われることを私は知っている。お前もまたこれらのことをよく知っていなくてはならない。これは神が仰せになった通りのことだからである。」(アルマ36:30)これが原則です。

自分自身のビジネス体験からわかったことですが、ある人々は日常の生活の中で、人生を生き抜いていこうとする勇気や将来の生活設計、はたまた物事に自分から進んで取り組んでいこうとする気力まで押さえつけてしまうような習慣を、次次第に身につけてしまっています。

私たちの最も偉大な教師は聖書の中で、人生を送る上でのひとつの秘訣を何度となく教えて下さっています。「もしできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる。」(マルコ9:23)

兄弟姉妹、では家計を改善するために何ができるでしょうか。私はここで3つの大切な鍵についてお話したいと思います。その鍵とは、姿勢、計画、自制です。

第一の鍵は、自分自身に対して積極的な

姿勢を持つことです。実りある人生を築くための土台として、私たちの姿勢や態度といったものは重要な位置を占めてきます。次のように自問して、現在の自分の態度を評価してみましょう。「私は最善の人格を身につけるように努力しているだろうか。価値のある、しかも達成可能な目標を立てているだろうか。生活の中で積極的な面を見るようにしているだろうか。質量共にさらにすぐれた奉仕ができるように、その機会をとらえているだろうか。求められる以上のことをしているだろうか。」

記憶していただきたいのは、良い姿勢は良い結果を、まあまあの姿勢はまあまあの結果を、悪い姿勢は悪い結果を生むということです。私たちは一人一人独自の人生を形造っていきますが、それは多くの場合、人生に取り組むその人の姿勢で決まっています。ジョージ・バーナード・ショウはこう書いています。「人々はいつも、今の自分を環境のせいにする。でも私は環境なんて信じない。この世でうまくやっている人は、一念発起して自分が望む環境を探した人だ。探せない時には自分でこしらえたのだ。」(『ウォレン夫人の職業』 *Plays by George Bernard Shaw* 「ジョージ・バーナード・ショウ戯曲集」 p.82)

我が国(合衆国)では今日、あまりにも多くの人々が、自分たちの生活は政府が責任を持って見るものだという姿勢を取り始めています。政府もいろいろな点でこうした考えを助長してきたというきらいはありますが、末日聖徒イエス・キリスト教会はもっと良い方法を知っています。

大恐慌とそれに続く時期を経験してきた人は、政府が国民に給付金を付与した時に、国民の間に自分たちの暮らしは世界中の人

人の手で何とかしてもらわなければならないという感情が芽生えてきたのを記憶していることでしょう。1936年、大管長はそうした状況の中で次のように宣言しています。「教会の目的は、人々の自立を助けることにある。勤労が再び教会員の生活を貫く原則にならなければならない。」(*Conference Report* 「大会報告」1936年10月, p.3)

働くことを愛する姿勢は、教会員として育んでいかなければならない大切なものです。私たちは、言ってみれば大いなる繁栄の時代を過ごしてきました。しかしこの繁栄の時代も、歴史が記される頃には、人々の姿勢に対して与えた影響という点で、あの大恐慌の時と同じ荒廃の時代として描かれることになるかも知れません。ハロルド・B・リー大管長はこう語っています。「今日、私たちは『黄金の試し』とも言える普通とは異なった試しを受けている。すなわち豊かさ、潤沢、安楽という試しであって、少なくともこの教会においては、若人に限らずどの年代の人も時代を問わず経験してきたものである。」(『悪魔の甘美な誘い』 *Brigham Young University Speeches of the Year* 「ブリガム・ヤング大学年度講話」1962年2月7日, p.3)

私たちは勤労への愛を、もう一度人生の王位に就けなければなりません。この永遠の原則が一人一人の人生に深く根をおろしていくように、各家庭でよく計画する必要があります。

姿勢の大切さということについて、私自身の生活からひとつの例を紹介しましょう。最初の伝道を終えて家に帰った私は、セールスマンとして父の仕事を手伝うようになりました。ユタ大学に通うかたわら、アルバイトとしてその仕事をしていました。

ところが大変に調子の悪い時があって、その時は2週間分の収入が10ドルにも達しませんでした。ところが父はその小切手をセールスマーケティングの席で、しかも全セールスマンが注目する中で私に手渡したのです。

その時私は、父はひどいことをする人だと思いました。しかし後になってから、それが自分自身を見つめ直すようにとの配慮から、父が私のためを思ってしてくれたことなのだということがわかったのです。私はそれまで順調で、セールスという仕事の何たるかなどまるで気にかけていませんでした。しかしその時を機に、決して最下位にはなるまいと決心したのです。収入が増え出したのはそれからです。

さて、何が起こったのでしょうか。私は同じ店から出る同じ品物を同じ時期に販売しました。何が変わったのでしょうか。そうです。私の仕事に取り組む姿勢がすべてを変えたのです。ウィリアム・ジェームズ(米国の心理学者、哲学者、1842-1910)は、人間はその心の持ち方を変えることによって人生を変えることができる、と語っています。(Vital Quotations「重要引用集」p.19参照)

兄弟姉妹、では第二の鍵である計画について話しましょう。計画とは、人生の目標をどのように達成するかを前もって考えることです。私たちは、職を求める時点で今よりももっとつぶしのきく人間にならなければならないように、何か計画していますか。具体的な目標を時間を取って書き出したことがあるでしょうか。また、もっと有能で力のある人物に成長するために、自分自身の行動計画を作ったことがあるでしょうか。

近頃聞いた話ですが、マリオット社経営

のホテルやレストランの支配人の75パーセントは、ボーイや皿洗い、レジ係からたたき上げた人たちだそうです。自己改善をし、技術を磨いた彼らは、支配人のポストに空きができた時にはもう備えができていたのです。

収入を増やす方法として考慮しなければならないものに、教育があげられます。入念な計画のもとに、夜学や職業訓練校に通ったり、通信教育を受けたりするのもよいでしょう。教育を受けることによって技術が向上し、それが私たちの仕事の価値を高めることがしばしばあるからです。

次に子供に対してですが、安定した経済的な基盤というものが幸福な家庭に欠くことのできないものであることを、なるべく早い時期に教える必要があります。また若人に対しては、満足できる、しかも報いのある職業に就けるよう、いろいろと働きかけることができます。今から怠らなくよく勉強をし、機会をとらえて将来の安定した生活の基礎を作れるように励ましてあげましょう。

子供たちは、中学生になったら自分の将来の職業についていろいろと研究し始めるようにしなければなりません。そうすれば大学に入った時には、将来の基本的な必要を満たすに十分な報酬のある仕事に向けて本格的な準備ができるようになります。

さて、今の仕事は収入の面でもう限界もので、これ以上は望めないと考えている人はいないでしょうか。もしもそういう状態であれば、どのような行動を取るかきちんと計画し、断食と祈りによって確信を得、それから計画を行動に移して仕事を変えるようにします。

自営業に切り換えることにより増収をは

かることも可能です。しかしよく頭を使ってあらゆる要素を分析し、弁護士や会計士、銀行関係、そして特に現在自分で会社を営営して成功している人に相談してみることが大切です。計画ができれば、主の導きを求めて祈ります。こうして心の中に確信が得られたところで行動を開始するのです。次の主の勧告の言葉をよく心に留めましょう。「あなたがたのうちで、だれかが邸宅を建てようと思うなら、それを仕上げるに足りるだけの金を持っているかどうかを見るため、まず、すわってその費用を計算しないだろうか。」(ルカ14:28)

第三の鍵は自制を働かせることで、これは仕事をする場合も家計の出費を減らすという点にもあてはまります。後者について教会の指導者は、ステーキ部やワード部からの献金の要請を最小限に抑えることにより、模範を示さなければなりません。教会員の立場からは以下のことを行なうべきです。

1. 数多くの少額のローンの返済のために、法外な手数料を必要とする別のローンを組むことはしない。負債は利子や支払い期間から言っても妥当な、銀行もしくはクレジットユニオンのローンに統合する。クレジットカードの利用をやめることも検討する。

2. 新たな負債を作ることを避けるために「とても返済しきれない」と自分自身に言い聞かせる。

夫婦が言い争いをしていました。一方が他方の浪費をたしなめてこう言いました。「お金が手に入らないうちから物を買うのは悪いことだって、何度言ったら気がすむの。」

すると相手はこう言いました。「本当にそうかなあ。金を払ってなくても物を先取

りできるんだから得だと思うけど。」

債権者の奴隷になってしまうことのないように、忍耐力を働かせ、注意して出費を抑えるようにしましょう。

3. 予算を立て、その範囲内で生活する。

4. 必要なものと欲しいものを区別して、出費を抑えるようにする。物を大切にすると共に、金のかかるサービスは利用しない。資源を節約する。

5. 家事に関する技術の向上をはかる。車や家の内外の修理は家族のだれかができるようにする。

6. 賢明な投資を行なう。投機買いや一攫千金をねらったような計画は避ける。

兄弟姉妹、私たちはひとり残らず暮らしをもっと楽にできる力を持っています。もし自分の能力を高めて、今携わっている仕事の中でもっと貢献度を上げていけるのであれば、副業を持ったり妻を働かせたりするよりもずっとよいでしょう。

失敗したらどうしようではなく、やればできるという気持ちで努力しましょう。そうすれば物事に取り組む姿勢が違ってきます。「成功ほど続いて起こるものはない」という言葉があります。

積極的な姿勢、入念な計画、そして常に自制心を働かせること、これが私たちの環境を改善していく上で大きな力となるのです。この鍵を日々の仕事に応用すれば収入が増え、暮らしに応用すれば出費が減っていくでしょう。また神の戒めを守ることと組み合わせることで考えれば、与えられた時間と財力を上手に管理できるようになり家計も安定してきます。

この目標を達成する上で主が私たちすべてを祝福して下さいますよう、イエス・キリストのみ名によりへりくだり祈ります。アーメン。

個人と家族の備えに ついて教える



十二使徒定員会会員
L・トム・ベリ－

マタイによる福音書の第25章には、備えに関する主の教えが記されています。それは婚宴を待つ10人のおとめにとえられています。5人は思慮深く、油を用意していましたが、残りの5人は思慮が浅く、用意を怠っていました。やがて花婿が到着すると、思慮深いおとめは婚宴の部屋へ入りましたが、思慮の浅いおとめは油を買に行っていて、その場にいませんでした。戻ってみるとすでに戸が閉められていました。主人に戸を開けてくれるように願い求めると、中から答えが返ってきました。

「わたしはあなたがたを知らない。」(マタイ25:12)

神権が教会の基盤であるように、私がかれからお話することは、福祉活動の基盤とも言えることです。私はきょうこの場で、神権指導者と扶助協会の指導者の方々の注意をさらに喚起し、個人と家族の備えに関する基本的な訓練を、計画にそって定期的に行なうよう訴えたいと思います。

私たちに個人と家族の備えの諸原則を教えるという責任がありますが、この責任

をどの程度果たしているでしょうか。少し時間をいただいて、指導者からの報告を検討してみましょう。

1970年から1978年にかけて断食献金による援助総額は、毎年平均15パーセント増加してきました。ところが、経済的に少々混乱が見られた昨年は、一気に32.5パーセントも増加しています。

必要物質の援助についてはもっと悪い結果が出ています。1970年から78年にかけての必要物資の援助は毎年平均11.3パーセントの増加でしたが、昨年になって53.5パーセントというとても数字が出てきました。わずかな不景気によって、ランプの油を備えていない教会員が大勢いることが明るみに出たのです。十分な備えができていなかった会員は、教会の援助に頼るしかなかったようです。

この結果からおわかりのように、自立という基本原則にのっとって過去何年にもわたり行なわれてきた家族への訓練は、しかるべき成果をあげていないのです。

このような驚くべき実態を踏まえて、私たちははっきりと自覚する必要があります。教会の福祉制度が意図し目的とするのは、財政管理や備えをおろそかにしたために困窮している一般の教会員を助けることではないのです。むしろ地震や洪水など大きな災害に見舞われた教会員が立ち直れるように支援し、病人や怪我人、身障者が社会復帰して生産活動に携われるように援助することにあります。あまりにも多くの教会員が、自分の備えた物資を使ってしかるべき立場にありながら、その備えがないために、教会に頼らざるを得ないのです。

今こそ自分自身に問いかけてみる必要があります。福祉における必要を満たすため

に、教会にこれほどの重荷を負わせている原因は、いったいどこにあるのでしょうか。問題を分析した結果、私はこう信じるに至りました。私たち指導者は、困窮者の救済のためにあまりにも多くの時間を使ってきましたが、その予防のため、つまり家族の備えをさせて各自の必要を満たせるように助けるためには、あまりにもわずかな時間しか使ってこなかったのです。基本をもう一度教える時に来ています。個人と家族の備えを福祉の中で最優先させる時に来ています。今私たちは備えなければなりません。そうすれば生活に困窮しても、多くの教会員は自分の備えた物資を使えるので、教会に援助を求める必要はなくなるでしょう。

1800年代にニューハンプシャーに住んでいた老人の話を紹介しましょう。この老人は自立ということをとっても大事にし、あらゆる面で自給自足の生活を送っていました。自分の面倒は自分で見て、ほかの人々を助けるのが真のクリスチャンだと考えていたので、人から援助を受ける方がよいという意見には激しく反対しました。やがて年老いた妻が亡くなると、自分で妻を埋葬し、それから自分のために墓穴を掘って、その中に手製の棺桶を置き、蓋は開けておきました。「その時が来たならこの中に入って、胸の上で両手を組みさえすればいい。だれの手もわずらわせはしない。ただ蓋に釘を打ちつけて、上から土をかけてもらうだけさ。」マリオン・G・ロムニー副管長は、よく次のように言われます。「自尊心のある会員ならば、自らを扶養するという責任を他人に転嫁するようなことはないだろう。私たちの責任は自分自身を養うだけにとどまらない。私たちは家族をも養うのである。」

家庭を福祉プログラムの真髄としなければ

ばなりません。家族を組織することに焦点をあてて、個人と家族の備えについて訓練する必要があります。また、父親と母親が家庭を導く役員会を構成し、十分な時間を取って家族のために必要な計画を立てるように教えなければなりません。片親の家族や独り暮らしの人も、時間を見つけて、それぞれの必要を満たすために目標を設定すべきです。

今の状態から出発しましょう。家族によって必要とすることは違います。我が家でも、子供たちが結婚してからは家庭の中が変わりました。今では父親と母親のふたりだけの生活です。家族一人一人の必要とするものが変わったのです。上の娘は自分たちの家を持ち、ひとつの家族として暮らしていますし、息子も結婚して、学生用の借家に住んでいます。また最近結婚した娘は、夫と共に大学に通っています。それぞれの必要は異なっており、毎年変わっていくのです。

個人と家族の備えについて計画を立てるには、まず家族の役員会を開かなければなりません。計画は家族の実状に合ったものとし、財政管理、教育、健康、家庭における生産と貯蔵、情緒の安定と霊性の強化、雇用条件の改善、これらの各分野で家族が特に必要とすることについて考えて下さい。

家族ごとに、家族全員で構成される家族評議会を設けるようにします。この会では、家族の基本的な責任を子供たちに教えます。そして、様々な決定を下す方法と、その決定に基づいて行動する方法を教えます。こういった責任に対して十分な備えができないまま、結婚適齢期を迎えてしまう子供が、あまりにも多すぎます。労働の倫理や自己の備えを最も効果的に教えることができるのが、この家族評議会なのです。「働くばかりで遊ぶことをしなければ、頭の鈍い少

年になる」という古い格言がありますが、J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長はこれを次のように言い換えました。「遊ぶばかりで働くことをしなければ、役立たずの少年になる。」(ハロルド・B・リーによる引用、*Administering True Charity* 『真の愛を实践する』福祉農場大会における説教、1968年10月5日)

私は菜園の技術を忍耐強く教えてくれた父に、どんなに感謝していることでしょうか。さぞかし期待を裏切ったことも多かったと思います。草取りの責任を与えられた私は、雑草をきれいに残して、ニンジンの苗ばかりを引き抜いてしまったことがありました。私の家庭では、かん詰やびん詰を棚に積み上げて順番に使う方法だけでなく、空かんや空びんを利用して野菜や果実の苗を育てて植え替える方法も教わりました。

教会の組織の中で最前線に立って家族を支援するのは、神権ホームティーチングと扶助協会家庭訪問です。これはふたつの面で重要な働きをします。第1に、教会員の健康、情緒、霊性、物質的な状態について、監督や定員会指導者、扶助協会会長に十分な情報を提供すること。第2に、教会員が自給自足の備えができるように教え、必要な援助を提供することです。

メルケゼデク神権定員会の指導者は、福祉の原則を教えることによって家長を助けます。どうしたら愛を示し、奉仕し、管理の職について理解し、自分の家族や他の人々のために正直かつ熱心に働き、神の王国を建設するために自分の時間と才能を捧げることができるのか、そのために必要な原則を教えるのです。また定員会の指導者は、担当家族と親しくなる方法や、彼らの必要を敏感に察知する方法について、ホームテ

ィーチャーを訓練します。特別な援助を必要とする会員がいたら、会長は監督や定員会の会員と協力して、秘密の内に愛ある態度で援助します。

定員会の集会は、各会員の必要を満たして初めて、その目的を達成し始めたと言えるのです。この集会では、個人と家族の備えのあらゆる分野にわたって技術を伸ばす方法を教えることができます。

扶助協会の会長も、同じようにワード部の姉妹たちを励まし、援助を与えます。そのために訪問教師が思いやりのある奉仕ができるように訓練し、訪問を通して必要な援助が秘密の内に愛とまごころをもって与えられるようにします。

一般に姉妹たちの方が効果的に福音の原則を教えています。かん詰や乾燥食品をはじめとする保存食品の作り方や、裁縫の技術を学んで実践しています。また、栄養や健康管理について学んでいますし、読み書きの能力や文化芸術の技術を高めることを強調しています。愛と献身と、そして惜しみなく働く精神がすみずみまで行きわたり、福音に従った生活と家庭管理に必要な技術が特に重視されているのが扶助協会です。

そこで、神権定員会と扶助協会が協力して会員に働きかけ、個人と家族の備えが福音の実践であることを理解させるのです。

昨年の「エンサイン」にヒバート家の話が掲載されていました。(Ensign 1980年6月号、pp. 41—42参照) 皆さんもお読みになったことでしょうか。大家族の父親が末期の癌に冒されているという診断を受けました。精神的な打撃と恐怖に悩まされたのはもちろんです。しかしヒバート夫妻はよく話し合い、家族の喜びと心の平安のために今できる最善のことは、来るべき日のため

に自分自身と家族を備えることだ、という結論に達しました。

彼らは家族で一緒に過ごして様々な思い出をつくり、家族の歴史を完成させました。また一年分の食糧を貯蔵し、やがて来るであろう経済的な窮地に備えて必要なものを蓄えることにしました。遺言状を作成し、すべての保険証と法律関係の証書を整理しました。子供たちには、互いに助け合うことと、家庭内の責任を分担することを教えました。

ヒバート兄弟が亡くなる数週間前に、火災で家が焼けてしまいました。貯蔵食品もほとんど灰になりました。しかし、家族は固く結ばれていました。互いに協力し合い、計画を立てて将来に備え、困難に立ち向かっていくことを学んでいたからです。ヒバート兄弟が亡くなると家族は悲嘆に暮れました。しかし、いつまでも嘆いてはいませんでした。様々な技術を伸ばしていたので、家族は睦しく互いに愛し合っていました。彼らには備えができていたのです。

神権定員会と扶助協会に課せられている重大な責任からもわかるように、これらの組織の役員は十分な訓練を受けなければなりません。これは監督が管理するワード部の組織で行ないます。

監督はワード部福祉活動委員会の委員長であり、ワード部内のすべての福祉活動を管理します。監督は、困っている人や悩んでいる人を捜し出します。また、福祉活動の基本となる福音の原則やプログラムが教えるところを相互調整し、断食の律法を教えるために力を結集します。監督は特別な援助を必要とする会員が、彼らにとって大切な愛と尊厳の中で助けを受けられるようにします。そして、援助を受けている人の秘密が漏れないように配慮します。さらに

必要とあれば、有能な福祉援助スペシャリストを招きます。

このような責任を負っている監督を支援するのは、ステーキ部の組織です。監督はステーキ部長に援助を求めて、福祉活動の指導について訓練を受け、ふさわしい能力を身につけることができます。ステーキ部長は、高等評議員会とステーキ部扶助協会の組織に依頼して、監督から要請のあった訓練を提供します。

個人と家族の備えに関して主の組織が持つ大きな力に注目していただきたいと思います。教会全体に課せられた大きな負担が、組織を通して、効果的に処理できる段階まで分散されていくのです。ステーキ部レベルではステーキ部長が受け持つ家族は平均1,180家族ですが、これが監督のレベルでは108、定員会レベルでは60、そしてホームティーチャーのレベルでは平均3家族という具合になるのです。

教会福祉プログラムの基本は、個人と家族の備えにあります。教会員がこの基本的な責任を果たせるように、組織的な力を結集して彼らを訓練し備えるのです。神権指導者と扶助協会指導者に求められていることは、この個人と家族の備えという大切なプログラムに対して適切な優先順位を与えることです。

ニューハンプシャーのあの老人は、個人と家族の備えを実践して、少々やりすぎかもしれませんが自分の墓穴までも掘りました。しかし私が目にしたいと思うのは、彼のような自立と備えの精神をもって私たち主の民が行動する姿です。私たちのワード部とステーキ部で為すべきことを主が教えて下さるように、イエス・キリストのみ名によりへりくだって祈ります。アーメン。

教会福祉の基本原則



第二副管長
マリオン・G・ロムニー

愛する兄弟姉妹の皆さん、私はけさ話された事柄を興味深く聞かせていただきました。私はこの40年間、毎年2回この建物に足を運んでは、先程から言われている教会福祉活動に関する指示を受けてきました。もともとこのプログラムは、「教会保全計画」と呼ばれていました。この計画は、このような呼び名で始められたのです。当時のその言葉の意味を、今日私たちはもっとよく理解する必要があるでしょう。保全すなわち安全の確保は、福音の原則を実践してこそ実現されるものであり、安心感や義しい生活をしてこそもたらされるものなのです。

モルモン経の中には、千年以上にもわたる人々の歴史が記されていますが、それは善と悪がもたらすそれぞれの結末を如実に物語っています。主の戒めを守っている間はその地で栄え、不従順になると悪に染まって戦いが始まり、飢饉や敵の支配に苦しめられたのです。主の戒めを守り、主と契約を交わして主のみたまの祝福を受けた家族、種族、国民の話が何度も出てきます

が、彼らが霊的にも物質的にも栄えたのは、義しい生活をしたからです。一方、主の戒めを守らなかった時、彼らは物質的にも霊的にも墮落していきました。

モルモン経には、大切な原則がいくつも示されています。そうした原則に従いさえすれば、悪や恐れ、その他多くの経済的な問題が充満するこの世の中であって、真の安心感を得ることができるのです。だれでも真の安心感を得たいと思っているはずです。それなのに、多くの人がその安心感へと続く道に従っていないのです。個人も国も浪費癖が生じることは無視して、経済的な繁栄をもたらそうとしているのが現代のようです。浪費に浪費を重ね、財産を抵当に入れることを繰り返しながら、人々は借金や返済義務を蓄積しています。その結果、彼らは安定性を欠き、安心感や自立心を失っていくのです。

私はここで、忘れられがちな大切なことを強調したいと思います。それは、主は私たちが生活のすみずみにまで関心を持っておられるということです。家族のこと、仕事のこと、そして私たち個人の進歩に関心を持っておられるのです。主はこのような面で私たちを導くために、永遠の真理を与えて下さいました。さらに、私たちがそれらの原則を応用できるように、主のみたまも与えて下さっています。私たちが主に従う時に必ずや安心感が得られるでしょう。

最近私は、教会のいわゆる保全計画が初めて発表された時の教会幹部の話を読み返してみました。そして幹部たちの考えの力強さと真剣さに、心打たれました。ここに引用するのは、1936年10月の大会で話されたJ・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長の言葉です。その日の大会で、ヒーパー・

J・グラント大管長は、教会保全計画の進展の様子を述べた大管長会の手紙を発表しました。クラーク副管長が話の中で、この保全計画が、まさに福音の中のキリストの教えを具体化したものであることを調強している点に注目して下さい。このように述べています。

「私たちは世の人々に向かって宣言してきました。私たちの知っていることを宣言してきました。すなわち、私たちには福音の計画が与えられており、この計画は私たちの霊的必要だけでなく、物質的必要にも応えてくれるということをも叫んできました。……それは私たちに、組織を持ってひとつのグループとして生活する方法を教えてくれる。また、兄弟姉妹として共に生活し、平等の精神を守る限りあらゆる点で平等になれるというひとつの原則を教えてくれる。

私たちはそれに対して責任がある。なぜなら、私たちに与えられたこの計画は、キリスト教の規範を地上の国々にゆきわたらせることのできる、いや必ずゆきわたらせなければならない計画だからである。」(J・ルーベン・クラーク・ジュニア *Conference Report* 「大会報告」1936年10月, pp. 113—114)

1943年4月4日、この壇上から、教会の保全計画すなわち福祉計画が、3つの基本要素から成り立っていることが発表されました。

「第一に、すべての人は自立することを真剣に考えなければならない。そのためには自活して精一杯努力しなければならない。これは主が、『あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る』(創世3:19)という厳しい戒めを与えて、エデンの園から私たちの最初の両親を追われた時から私たちに課せられているものである。

第二に、本人の次に個人を助ける責任があるのは、その家族である。両親は子供たちに対して、子供たちは両親に対して責任があるのである。助ける能力がありながら、両親が他の人々の世話を受けなくてもいいように進んで助けを与えようとしない子供は感心できない。

最後に、個人個人が自分自身を支えるために精一杯の努力をし、家族もその人を助けるためにできる限り力を尽くした後に、初めて教会が動き出すのである。教会はこの福祉計画に基づいて、この計画を受け入れその中で能力の限り働こうとする会員一人一人が、『その家族数と財政状態と乏しきと必要とに応じて』(教義と聖約51:3)配慮されるよう、ただちに検討を始める。」(マリオン・G・ロムニー *Conference Report* 「大会報告」1943年4月, pp. 27—28)

年輩の方々には、この教義が教会幹部によりたびたび繰り返されるのを聞いてこられたことと思います。しかし、若い人々、若い監督、若いステーク部長たちは、この意味がしっかり把握するだけの十分な時間をかけているでしょうか。もっと大事なのは、ひとつの民、国家、世界の構成員として、私たちは、他のあらゆることの前提条件と言える「自立」ということを、本当に理解しているのだろうかということです。

この自立の原則は、教会の基本的な教義である自由意志からきています。エロヒムは、人間を創造し、この地上に置くに当たって、人間に自らの思い通りに行動する自由意志を与えられました。

「そは、わが生きる者の為にと造りて備えたるこの世の幸福を掌どる者として、すべての人をしてその責に任せしむるは主なるわれ必要とするところなればなり……地

は物に満ち足りて余りあり。然り、われよ
ろずの物を備えて人の子らにこれを与え、
人各々を自由意志によりて動く者となす。」
(教義と聖約104：13, 17)

人はそれぞれ、霊的な事柄に関する選択
や行ないに対して責任があるように、物質
的な事柄に関しても責任があります。私た
ちがこの世で自立していくには、自分自身
で努力し決断していかなければならないの
です。主は私たちを目に見えないようなま
たははっきりとした力で強めて下さいます
が、私たちが自分で足を踏み出して初めて
主はその歩みを導いて下さるのです。結
局、私たち自身の行動が祝福の有無を決
めるといふわけです。これは、自由意志を
行使した場合でも、与えられた責任を果
たす場合でも伴う直接的な結果です。

自立の原則はまた、もっと大きな関係
すなわち教会の基本単位である家庭にも
あてはまります。

教会では、家族を扶養し家族の一人一人
が互いに力となって助け合い、進歩する
ということ(すなわち家族の自立)が、個人
の自立の基礎となっています。家族は、
教会の根本的となる組織単位です。い
かなる機関や施設もこれにとって代わ
ることはできませんし、代わるべきも
のでもありません。神聖な誓約と永遠
の神権政体によって、永遠の家族単
位が確立されています。両親に、自
分の子供たちの世話をする義務を負
わしているその誓約は、同様に子供
たちにも、必要があれば自分の両親
の世話をするという責任を与えて
いるのです。「あなたの父と母を
敬え」(出エジプト20：12)とい
うこの戒めは、現代のイスラエルの
民にも適用されるものであり、忠
実なすべての教会員に求められて
いることです。



家族の自立の原則から考えて、私たちは、
個人の物質的な問題や必要を解決するのに、
家族ができる限りのことをするまでは、決
して教会の資金に援助を求めてはならない
ということを認識する必要があるでしょう。
これが主の定められた教義です。主はこの
ように言われた。

「丁年に達したるのちその両親相続物と
して彼らに与うるもの無き時は、教会すな
わち言い換えれば主の倉庫に向いて要求す
る権利を有す。」(教義と聖約83：5)

最後に、教会の自立ということが考えら
れると思います。まず私たちは個人個人で
また家族で、できる限りのことをしなければ
なりません。その後、私たちが教会とい

うひとつの家族としてどのように助け合ったらよいかを主は教えて下さっています。しかし、援助の程度や条件もまた根本的な原則にのっとったものでなければなりません。1898年4月の総大会で、ジョセフ・F・スミス大管長が述べた慈善に関する非常に見識ある考えをここに紹介しましょう。（もちろん、これは今私たちが理解しているような福祉プログラムが行なわれる以前に述べられたものである）

「人々は、苦しみから逃れるためにやむを得ない時を除いて進んで慈善を受けてはならない。すべての男女は、独立独歩の精神を持って、窮した時にも、『あなたが私に下さるものに対して、私は代わりに喜んで働きましょう』と言えるようであればならない。だれも受けるだけで満足し、そのために何もしないことがあってはならない。」（*Conference Report*「大会報告」1898年4月，p. 48）

監督に援助を求めるすべての人々が、それぞれの力の限りこの慈善の規則に従うならば、与える人、受ける人の双方に真の祝福がもたらされるでしょう。困っている人人がこのような精神で援助を求めてやって来るならば、だれもが教会福祉計画に進んで協力したいと思うようになるに違いありません。援助を受けた人もこのようにして動機づけを与えられて、速やかにもとのように自立したいと思うようになるでしょう。そして独り立ちできた時には、そのプログラムにできる限り寄与したいと思うようになるのです。

兄弟姉妹の皆さん、私がきょうここでお願いしたいのは、福祉の基本原則にもう一度心を向けていただきたいということです。繰り返し申し上げますが、福祉活動は単な

るプログラムではなく、福音の実践です。そしてその原則は福音の原則であり、物質的な事柄に関してキリストが教えられた規則です。私たちは、聖典や生ける予言者の言葉から多くを学び取りたいものです。また自らを支え、家族を養い、謙遜さと寛大さをもって、自分よりも恵まれない人々に援助の手を差し伸べるために、本分を尽くしたいものです。

ここで、ベンジャミン王の言葉を引用して私の話を終えたいと思います。先程も彼について述べたがベンジャミン王は、ニーファイ人の中にあつて偉大な指導者でした。ベンジャミン王は、この世での業を終えるに当たって、彼の愛に満ちた霊的な指導を受けて長い間生活してきた教会員たちに、次のような思慮深い忠告を残しています。

「もしもお前たちの行いがこのようであるならば、お前たちはいつも喜び、神の愛に浴し、いつも罪の赦しを保つ……ねがわくは、私がお前たちに話をしたように日々自分の罪の赦しを保ち、罪無しに神の前を歩くことができるように、お前たちが一人一人みなその財産の多い少いに応じてそれを貧しい人々に分け与えることを望む。それはたとえば、腹のすいている者に食物を与え、はだかである者に着物を着せ、病んでいる者を見舞い、各々の必要に従って肉体についても霊についても救助を施すことである。お前たちは注意してすべてこれらのことが賢く秩序正しく行われるようにせよ。」（モーサヤ4：12，26-27）

私たちが知恵と規律を身につけ、これらの偉大な原則を実践することができるように、救い主イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン。

ヒンクレー長老 副管長に召される



(ゴードン・B・ヒンクレー長老)

7月22日、大管長会は、1961年10月から十二使徒定員会で働いてきたゴードン・B・ヒンクレー長老(71)が副管長の一員に任命されたことを発表した。

また、それによって1976年から七十人第一定員会会長会の責任にあったニール・A・マックスウェル長老(55)が十二使徒定員会の空席を埋めることになった。マックスウェル長老の代わりにだれが七十人第一定員会会長会へ入るかはまだ発表されていない。

ヒンクレー長老は、長年教会に対して献

身的な奉仕を捧げてきた。長老は、1930年代に何年間かイギリスで伝道し、帰還後も日曜学校中央管理会や現在の広報部の前身である、ラジオ、広報、伝道パンフレット作成委員会で働いた。特に、教会の視聴覚教材の導入に関しては草分け的存在であり、ラジオプログラム、世界的展示会、そのほかこれに類似した活動を行ってきた。

1951年、ヒンクレー長老は伝道管理部長に召され、続いて1958年、十二使徒定員会補助に支持された。さらに、アジア地域における教会の諸事を管理する責任につき、フィリピン、タイなどの国々における伝道の門戸を開いた。

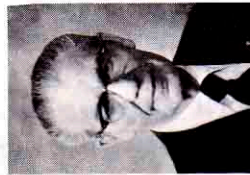
その後南アメリカおよびヨーロッパで同様の責任を果たし、次いで再びアジアの教会の諸事を管理するためアジアへと赴いた。

ヒンクレー長老は、教会、仕事、社会において数多くの貢献をしており、副ステークス部長、ステークス部長をはじめ、教会関係の組織の中で管理役員を何度も務めている。長老と44年間生活を共にしてきた夫人の間には、5人の子供と21人の孫がいる。

末日聖徒イエス・キリスト教会

教会幹部

大管長会



第一副管長
N・エルドン・タナー



大管長
スペンサー・W・キンボール



第二副管長
マリオン・G・ロムニー

十二使徒定員会



エズラ・タフト・ベンソン



マーケ・E・ピーターセン



リチャード・L・エヴァンス



ハワード・W・カンナー



ゴードン・B・ヒンクレー



トーマス・S・モンソン



ボイド・K・パッカー



マービン・J・アシュトン



ブルース・R・マックコンキニー



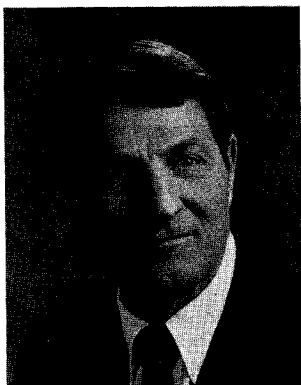
L・トム・ペリー



ジェフリー・B・ハント



ジェームズ・E・ファースト



(ニール・A・マックスウェル長老)

マックスウェル長老は、1974年に十二使徒定員会補助に召され、後1976年に七十人第一定員会が組織されると同時に同神権組織の会長会の一員として任命された。

マックスウェル長老は、教会幹部に召される以前はソルトレーク・シティーのユタ大学において、副学長をはじめ数々の管理・教授の地位を歴任した。また教会内においては、監督、青少年の組織の中央管理役員、成人分野コーディネーション委員会会員そして十二使徒会地区代表などを経験している。専任宣教師としての伝道はカナダ。夫人との間に4人の子供がいる。

大管長会は、ヒンクレイ長老とマックスウェル長老の任命を発表した時点において、その理由は明らかにしていない。従来は副管長は2名ずつ召されてきたが、今回は異

例の召しである。このように、2名を越えて召された副管長は、この神権時代に入ってヒンクレイ長老で12人目となる。

近年の例を調べてみると、1960年代の後半、デビッド・O・マッケイ大管長の時代に5人の副管長が召されたことがある。当時、ヒュー・B・ブラウン長老が第一副管長、N・エルドン・タナー長老が第二副管長であったが、1965年に当時十二使徒定員会会長であったジョセフ・フィールディング・スミス長老が副管長として召され、同時に十二使徒定員会補助のソープ・B・アイザックソン長老も副管長に召されたのであった。さらに、1967年、十二使徒定員会補助のアルビン・R・ダイヤー長老が使徒に聖任され、1968年に副管長の召しを受けて大管長会に加わった。しかし1970年にマッケイ大管長が亡くなり、ジョセフ・フィールディング・スミスが大管長となったことによって、ダイヤー長老とアイザックソン長老は十二使徒定員会補助としての各自の責任に戻った。ダイヤー長老は使徒職を授かったが、以後十二使徒定員会の召しを受けることはなかった。また、アイザックソン長老は、1970年に逝去している。ダイヤー長老は、1976年に七十人第一定員会会員に支持され、1977年にこの世を去るまでその責任を務めた。

教会幹部に新たに アルゼンチン人

—アンゲル・アブレア長老—

4月4日、スペンサー・W・キンボール大管長はアルゼンチン、ブエノスアイレスのアンゲル・アブレア長老が末日聖徒イエス・キリスト教会七十人第一定員会の会員に任命されたことを発表した。

この発表は、ソルトレーク・シティー、テンプルスクウェアのモルモンタバナクルで開催された第151回年次総大会の最初の一般部会で、開会の時に行なわれた。

アブレア長老は現在47歳で、アルゼンチンに5つある伝道部のひとつ、アルゼンチンロザリオ伝道部の伝道部長としてまもなくその任期を終えようとしている。アルゼンチン人では初めての教会幹部である。

七十人第一定員会は教会を管理する3つの組織のひとつであり、大管長会、十二使徒定員会を補佐して教会の確立にあたり、さらに教会の教義に則して全世界の教会の

諸事を調整するものである。

アブレア長老は7月に伝道部長を解任になるが、その後は、まもなく完成を迎えるブエノスアイレス神殿の神殿長として責任



(アンゲル・アブレア長老ご夫妻)

を果たすことになる。キンボール大管長は3月31日、すでに同長老を神殿長として任命している。

アブレア長老一家は、今後もアルゼンチンに在住の予定である。

アブレア長老が七十人第一定員会会員に召されて、会員数は全部で41人となった。そのほか、8人の定員会名誉会員がいる。

アブレア長老は、同じくブエノスアイレス生まれの妻、マリア・ヴィクトリア・シャッパリーノ姉妹（結婚前の名前）を同伴してソルトレーク・シティに到着した。

1978年に伝道部長の召しを受けるまで、アブレア長老はブエノスアイレスの「デロイッテ・ハスキンス・アンド・セルズ」で公認会計士として働いていた。また、長老はブエノスアイレス大学を卒業している。

アブレア長老と姉妹は、1957年7月4日に結婚、後1966年にソルトレーク神殿において結び固めを受けた。ロザリオ伝道部には、3人の娘、パトリシア・ビビアナ、クラウディア・アレジャンドラ、シンシア・ガブリエラの各姉妹も同行している。

アブレア長老は、地区代表（1971-76）、ブエノスアイレスステーク部長（1966-71）、ブエノスアイレス西ステーク部長（1976-78）を歴任し、初期においては、地方部長、支部長および副伝道部長を務めたこともある。

また地域社会においては、サン・ミグエル市サルミエント地区の財務委員長を務めるなど、大きな貢献をしている。

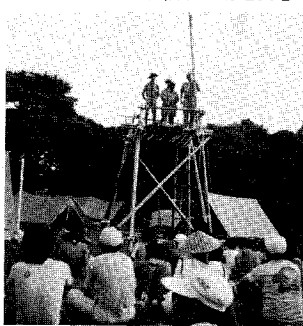
一方アブレア姉妹は、ステーク部、伝道部の扶助協会会長を含めて教会の補助組織のあらゆる責任を果たしてきた。その中には、早朝セミナーの教師として数年間働いた経験もある。

教会の管理評議会に初めてアルゼンチン人が加わったことは、教会の国際的發展を新たに特徴づけるものである。

教会幹部で合衆国以外の出身者は、第一副管長のマリオン・G・ロムニー長老がメキシコの生まれであるのをはじめ、七十人第一定員会会員では、ベルギー、イクセルのチャールズ・A・ディディエ長老、オランダ、ハーグのジェイコブ・ディエガー長老、西ドイツ、ドルトムントのエンツィオ・ブッシュェ長老、日本の菊地良彦長老、イギリス、ノッチングムのデレク・カスバート長老、カナダ、アルバータ州レイモンドのテディー・E・ブルーアートン長老、などがいる。また、ジョージ・パトリック・リー長老はナバホインディアンであり、アドニー・Y・小松長老は、ハワイ生まれの日本人である。また、管理監督のビクター・L・ブラウン監督もカナダ、アルバータ州カードストーン出身である。



やぐらの上から説教する菊地長老

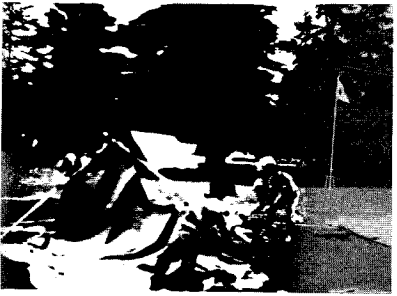


全日本LDSジャンボリー
 (カブ、ボーイスカウト)
 大会が7月31日から8月3
 日までの4日間、東京の国
 立オリンピック記念青少年
 総合センターと、神奈川県
 の相模原米軍キャンプ地の
 両会場にてそれぞれ催され
 た。双方合わせて350余名
 の参加者は、会期中、さん
 さんと照りつける太陽のも
 と、思う存分その催し物を
 楽しんだ。参加者の中には
 遠く旭川や名古屋などから
 はるばる来た兄弟たちもい
 る。

催し物は、日本伝道80周
 年記念プログラムと、アロ
 ン神権の歴史的行事を盛り
 込んだ内容であった。

LDS ジャンボリー 大会開かる 7/31—8/3

手



大会中



閉会の入場行進



隊旗をもつての集合



大会の成功を祈る子供たち



カブの活動



神殿結婚の祝福にあずかって

横浜第2ワード部
田辺 智徳

全米イタリキリスト教会

今年の3月7日、私たちは東京神殿において永遠の結婚の儀式を挙げる事が出来ました。この日は、私たちのためにろうあの兄弟姉妹たちもお祝いかけつけて下さいました。

神殿に入って、儀式を受けるまではいろいろ不安な気持ちでしたが、次第に心も落ちついて来て、みたまに包まれたような気持ちになりました。

私と姉妹と一緒にエンダウメントを受け、引き続き、結び固めの儀式を受けました。その間、神殿長会や神殿職員の方々が、私たち夫婦を親切に導き、助けて下さった事を心から感謝致します。神殿で働く方々の着ている純白の衣装を見ていると、彼らがまるで、神の国の天使たちのように思えてなりませんでした。

手話通訳者の助けにより、すべての儀式を十分理解することができました。私は4年前、新潟に住む両親と共に祝福師の渡部正雄兄弟から祝福を受けました。この日も、渡部兄弟を通して結び固められました。私の聴力は、平常、駅のプラットフォームでのアナウンスとか、教会での大会のマイクによる音声がかすかに聞こえる程度です。しかし、この時ばかりは、渡部兄弟の生の声をはっきり聞こえてきたので本当に驚きました。神様が渡部兄弟を通して、私たちにお話になったような思いにかられました。

私は感謝の気持ちでいっぱいになり、涙をおさえることが出来ませんでした。この事は決して忘れません。

「みよ、わが胸は汝らに対する憐みにて



溢るるばかりなり。汝らの中に今病める者あるか。その者たちをここに連れ来れ。汝らの中に足なえ、めくら、びっこ、かたわ、らい病人、なえたる者、つんば、またいかなる病にてもあれ悩める者は、その者たちをここに連れ来れ、われは汝らを憐み、汝らに対する慈悲の心にて溢るるばかりなれば、これらの者を医さんとす。」(Ⅲニ一フ

ァイ17:6-7)「すると大ぜいの郡衆が、足なえ、不具者、盲人、おし、そのほか多くの人々を連れて来て、イエスの足もとに置いたので、彼らをおいやすになった。群衆はおしが物を言い、不具者が直り、足なえが歩き、盲人が見えるようになったのを見て驚き、そしてイスラエルの神をほめたたえた。」(マタイ15:30-31)

イエスさまは、障害のある人々を愛して下さっています。私も姉妹と良い家庭を築き、神様のみ業のために奉仕したいと願っています。そして、神の宮居である神殿にこれからも定期的に参入したいと決心しています。神殿での儀式は、聖なる神権の儀式であり、私たちの昇栄にとって最も大切な儀式です。

今年は国際障害者年でもあります。全国の障害者の兄弟姉妹たちの皆様も、ぜひ私たちと同じ祝福にあずかることができるよう努力して下さい。戒めを守って生活して下さい。神様はあふれるばかりの祝福を与えて下さるはずで。

この証をイエス・キリストさまのみ名によって、申し上げます。アーメン。



末日聖徒イエスキリスト教会

海利ワード部

付属図書館

